

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業  
用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6)

岩 田 古 墳 群

他 野山第2・5号墳・三藏畠遺跡

1976年3月

岡山県山陽町教育委員会

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業  
用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6)

岩 田 古 墳 群

他 野山第2・5号墳・三藏畠遺跡

1976年3月

岡山県山陽町教育委員会

## 序

美しくゆるやかな緑の山々に囲まれ、肥沃な土地に恵まれた山陽町は、古代吉備王國の一中心地として栄え、数多くの文化財を残しています。绳文晚期の南方前池遺跡をはじめ、国指定史跡両宮山古墳、備前国分寺址、また、ここに報告する古墳時代後期の岩田古墳群を含む東高月遺跡群等、これらの文化財は古い歴史の歩みのなかで、われわれの祖先が作り現在に伝えてきた、かけがえのない文化遺産であります。

しかし、最近の著しい地域開発の波は、わが町の山河を急激に変貌させし、これに伴って多くの貴重な文化財も消滅しつつあります。このような状況のなかで、文化財の保存をどのように図っていくかは、当面する最も重要な課題であります。

当町における、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともなう、用地内埋蔵文化財の発掘調査は昭和44年10月以来5か年余にわたりましたが、昭和49年12月にようやく発掘作業を終了いたしました。

用地内の発掘調査報告書は、先に第2集便木山遺跡他、第3集四辻土塚墓遺跡・四辻古墳群他、第1集用木古墳群他を刊行しましたが、ここに第6集岩田古墳群他を刊行する運びになりました。

限られた期間と、きわめて不十分な態勢のもとでの調査で、満足できるものではありませんが、現在ではその姿を再び見ることのできないこれらの遺跡を、この報告書によって、学術の研究や本町歴史の解明、また、文化財保護等に活用していただければ幸いです。

なお、本報告書に統いて、第4集用木山遺跡・惣園遺跡他第5集さくら山遺跡・愛宕山遺跡他を刊行する予定であります。

このたびの調査にあたり、終始ご理解とご協力をいただいた県当局、その他関係機関の方々、ご指導を賜った研究者各位に深く感謝するとともに、直接この調査を担当された調査団の皆様に厚く御礼申しあげます。

昭和51年3月

山陽町教育委員会教育長

平井富士雄

## 例　　言

1. 本書は、山陽町教育委員会が岡山県の委託を受けて実施した、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともなう、山陽住宅団地開発用地内の埋蔵文化財発掘調査報告書第6集である。
2. 山陽住宅団地用地内所在の遺跡数は90遺跡におよび、そのうち54遺跡が発掘調査の対象とされ、昭和44年10月1日から昭和49年12月末日までの、5か年余を要して実施された。したがって調査資料も甚大な量となり、発掘調査報告書は本書18頁の発掘調査報告書作成予定一覧表に示したように、6分冊に分割して報告することとした。
3. 今回本書に集録した遺跡は、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群9基を中心としたが、最終冊でもあるため山陽団地埋蔵文化財発掘調査委託契約の年次にはこだわらないで、岩田土壇墓群、野山第2・5号墳、三藏畠遺跡など、古墳時代以降の遺跡を集めて編纂した。
4. 発掘調査報告書の作成は、本来巻次を追って順次刊行すべきであるが、出土遺物の整理等の都合で、第4集および第5集に先行して本書が先に刊行する運びとなった。この点御了承賜りたい。
5. 調査の組織は、山陽町、山陽町教育委員会、山陽町文化財保護委員会を主体として山陽団地埋蔵文化財発掘調査委員会を組織した。また直接発掘調査を担当する山陽団地埋蔵文化財発掘調査事務所は、山陽町教育委員会が開設した。
6. 発掘調査の諮問機関として、当時は山陽町長委嘱の山陽団地埋蔵文化財保護専門委員会を設置して諮問を仰いだが、昭和47年度に、岡山県教育長委嘱の山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会が設置されたので、以後は専門委員会を解散して、対策委員会に統合し諮問機関とした。
7. 発掘調査ならびに報告書作成に要する諸経費は、すべて岡山県の負担によるものである。
8. 本書の執筆および編集は、調査員則武忠直、太田耕一、国安敏樹、神原英朗の討議をもとに神原が担当した。
9. 三藏畠遺跡土師窯址の地磁気測定については、福井大学広岡公夫助教授と同大学生山本芳夫君の協力を受け、玉稿をいただいた。記して謝意を表したい。
10. 各遺構の測量および実測とその浄書は、太田、国安が中心となって担当した。
11. 出土遺物の整理・復元作業は、則武、井上節美、神原清子が中心となって行ない、その実測および浄書は国安と太田が担当したが、出土遺物の実測にあたっては、岡山大学学生石橋正樹近藤耕一の両君ならびに仏教大学学生森下大輔君の協力を得た。各分担についても記名したとおりである。
12. 記録写真的撮影は遺跡現地は神原、遺物写真は国安、則武が中心となって担当し、編集は神原が行なった。撮影者は図版目次に記名したとおりである。
13. 本書各実測図に示した方位はすべて磁北である。またレベルの数値は海拔高である。
14. 本書21頁に使用した山陽町遺跡地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭50総複、第1344号。

## 目 次

山陽団地埋蔵文化財調査概要	1
1. 序 説	1
2. 調査の契機	2
3. 調査の組織	5
4. 調査の概要	8
5. 地理的歴史的環境	19
6. 用地内の埋蔵文化財	23
 岩田古墳群	27
1. 岩田古墳群	27
2. 岩田古墳群第1号墳	33
3. 岩田古墳群第6号墳	80
4. 岩田古墳群第7号墳	88
5. 岩田古墳群第8号墳	92
6. 岩田古墳群第9・11・12・13号墳	132
7. 岩田古墳群第14号墳	158
8. 岩田古墳群総括	251
 岩田土墳墓群	257
野山古墳群第2・5号墳	285
 三藏畠遺跡	297
付、三藏畠遺跡土師器窯の考古地磁気測定	329

## 挿 図 目 次

### (発掘調査経過の概要)

第1図 山陽町位置図（作成神原・製図太田）	3
第2図 山陽町遺跡地図（作成則武、神原・製図太田）	21
第3図 山陽団地遺跡分布図（作成則武、神原・製図太田）	24

### (岩田古墳群)

第4図 岩田古墳群周辺地形図（原岡岡山県土木部・製図太田）	29
-------------------------------	----

(岩田第1号墳)

第 5 図 岩田第1号墳発掘調査区段図（作成神原・製図太田）	34
第 6 図 岩田第1号墳周辺地形図（測量国安・太田）	37
第 7 図 岩田第1号墳周辺合造跡配置図（測量国安・製図国安）	39
第 8 図 岩田第1号墳発掘調査前外形測量図（測量国安・製図太田）	40
第 9 図 岩田第1号墳発掘調査後外形測量図（測量国安・製図太田）	41
第 10 図 岩田第1号墳埴丘断面図（実測国安・製図太田）	42
第 11 図 岩田第1号墳周溝底遺物等出土状況（実測神原・製図太田）	43
第 12 図 岩田第1号墳円筒埴輪基底部出土状況（実測国安・製図太田）	45
第 13 図 岩田第1号墳形象埴輪実測図（実測太田・製図太田）	47
第 14 図 岩田第1号墳円筒埴輪実測図（実測太田・製図太田）	49
第 15 図 岩田第1号墳第1主体実測図（実測国安・製図太田）	51
第 16 図 岩田第1号墳出土陶棺片実測図（実測太田・製図太田）	52
第 17 図 岩田第1号墳第2主体実測図（実測太田・製図太田）	53
第 18 図 岩田第1号墳第3主体実測図（実測神原・製図太田）	54
第 19 図 岩田第1号墳第4主体実測図（実測国安・製図太田）	55
第 20 図 岩田第1号墳第5主体実測図（実測国安・製図太田）	56
第 21 図 岩田第1号墳第2主体出土土器（実測太田・製図太田）	58
第 22 図 岩田第1号墳埴丘内出土土器（実測太田・製図太田）	59
第 23 図 岩田第1号墳周溝底出土土器①（実測森下・太田・製図太田）	60
第 24 図 岩田第1号墳周溝底出土土器②（実測森下・太田・製図太田）	64
第 25 図 岩田第1号墳周溝底出土土器③（実測森下・製図太田）	66
第 26 図 岩田第1号墳出土大形須恵器（実測太田・製図太田）	67
第 27 図 岩田第1号墳出土装饰付須恵器（実測太田・製図太田）	68
第 28 図 岩田第1号墳周溝出土銅鏡（実測国安・製図国安）	69
第 29 図 岩田第1号墳周溝出土装身具類（実測国安・製図国安）	70
第 30 図 岩田第1号墳出土ガラス小玉計測値分布図（作製神原・製図太田）	72
第 31 図 岩田第1号墳出土土製練玉計測値分布図（作製神原・製図太田）	73
第 32 図 岩田第1号墳第5主体出土玉類（実測国安・製図国安）	74
第 33 図 岩田第1号墳第4主体出土鉄器類（実測国安・製図国安）	75
第 34 図 岩田第1号墳出土鉄器類（実測国安・製図国安）	76
第 35 図 岩田第1号墳周溝出土馬具（実測国安・製図国安）	77

(岩田第6号墳)

第 36 図 岩田第6号墳周辺造跡配置図（測量神原・製図太田）	81
第 37 図 岩田第6号墳造跡出土状況（実測神原・製図国安）	83

第 38 図 岩田第6号墳出土皮袋状提瓶（撮影神原）	84
第 39 図 岩田第6号墳出土土器（実測太田・製図太田）	84
第 40 図 岩田第6号墳出土裝身具類（実測国安・製図国安）	85
第 41 図 岩田第6号墳出土鐵器（実測国安・製図国安）	87

(岩田第7号墳)

第 42 図 岩田第7号墳周辺地形図（測量神原・製図太田）	88
第 43 図 岩田第7号墳立地丘陵断面図（実測則武・製図太田）	89
第 44 図 岩田第7号墳石室造構実測図（実測神原・製図太田）	90
第 45 図 岩田第7号墳出土遺物実測図（実測太田・国安・製図太田・国安）	91

(岩田第8号墳)

第 46 図 岩田第8号墳周辺地形図（原岡山県土木部・製図太田）	95
第 47 図 岩田第8号墳外形図（測量神原・製図太田）	96
第 48 図 岩田第8号墳墳丘断面図（実測神原・則武・製図太田）	98
第 49 図 岩田第8号墳石室握り方平面図（実測神原・製図国安）	99
第 50 図 岩田第8号墳石室実測図（実測太田・国安・神原・製図国安）	101
第 51 図 岩田第8号墳陶棺出土状況（実測神原・製図太田）	105
第 52 図 岩田第8号墳羨道部木棺出土状況（実測神原・製図太田）	106
第 53 図 岩田第8号墳石室内遺物出土状況（実測神原・製図太田）	107
第 54 図 岩田第8号墳埴輪主体配置推定図（作成神原・製図太田）	108
第 55 図 岩田第8号墳出土陶棺実測図（実測国安・製図国安）	111
第 56 図 岩田第8号墳出土須恵器実測図(1)（実測石橋・太田・製図太田）	114
第 57 図 岩田第8号墳出土須恵器実測図(2)（実測石橋・太田・製図太田）	118
第 58 図 岩田第8号墳出土装身具類実測図（実測近藤・製図国安）	122
第 59 図 岩田第8号墳出土鐵器類実測図（実測国安・製図国安）	125
第 60 図 岩田第8号墳羨道部木棺釘実測図（実測国安・製図国安）	127
第 61 図 岩田第8号墳出土釘・劍実測図（実測国安・製図国安）	128

(岩田第9・11・12・13号墳)

第 62 図 岩田第9・11・12・13号墳周辺地形図（原岡山県土木部・製図太田）	133
第 63 図 岩田第9・11・12・13号墳周辺の遺構出土状況図（測量・国安・太田・製図太田）	135
第 64 図 岩田第9号墳出土状況図（測量太田・製図太田）	137
第 65 図 岩田第9号墳石室実測図(1)（実測太田・製図太田）	138
第 66 図 岩田第9号墳石室実測図(2)（実測太田・製図太田）	139
第 67 図 岩田第9号墳出土須恵器実測図（実測太田・製図太田）	140
第 68 図 岩田第9号墳出土金環実測図（実測近藤・製図国安）	140

第 69 図	岩田第9号墳出土鉄器実測図（実測國安・製圖太田）	.....	141
第 70 図	岩田第11号墳出土状況図（測量太田・製圖太田）	.....	142
第 71 図	岩田第11号墳石室実測図（実測太田・製圖太田）	.....	143
第 72 図	岩田第11号墳出土土器実測図(1)（実測太田・製圖太田）	.....	144
第 73 図	岩田第11号墳出土土器実測図(2)（実測太田・製圖太田）	.....	145
第 74 図	岩田第11号墳出土鉄器実測図（実測國安・製圖國安）	.....	146
第 75 図	岩田第12号墳出土状況図（測量國安・製圖國安）	.....	147
第 76 図	岩田第12号墳と住居址関連図（測量太田・製圖太）	.....	148
第 77 図	岩田第12号墳石室実測図（実測神原・國安・製圖太田）	.....	149
第 78 図	岩田第12号墳出土土器実測図（実測石橋・太田・製圖太田）	.....	150
第 79 図	岩田第12号墳出土金環実測図（実測近藤・製圖國安）	.....	151
第 80 図	岩田第12号墳出土鉄器実測図（実測國安・製圖國安）	.....	151
第 81 図	岩田第12号墳出土鉄釘実測図（実測國安・製圖國安）	.....	152
第 82 図	岩田第13号墳出土状況図（実測國安・製圖國安）	.....	154
第 83 図	岩田第13号墳出土ガラス小玉実測図（実測近藤・製圖國安）	.....	155
第 84 図	岩田第13号墳出土鉄釘実測図（実測國安・製圖國安）	.....	155

#### (岩田第14号墳)

第 85 図	岩田第14号墳周辺地形図（原図鶴山県土木部、作成神原・製圖太田）	.....	163
第 86 図	岩田第14号墳調査後地形図（測量國安・製圖國安）	.....	164
第 87 図	岩田第14号墳周溝と掘り方関係図（測量國安・製圖太田）	.....	166
第 88 図	岩田第14号墳石室実測図（実測太田・國安・神原・製圖國安）	.....	167
第 89 図	岩田第14号墳石室床面遺物出土状況図（実測國安・太田・神原・製圖太田）	.....	171
第 90 図	岩田第14号墳木棺出土配置図（実測國安・太田・製圖太田）	.....	174
第 91 図	岩田第14号墳木棺部床面断面図（実測國安・製圖國安）	.....	175
第 92 図	岩田第14号墳第1号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	178
第 93 図	岩田第14号墳第2号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	179
第 94 図	岩田第14号墳第3号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	179
第 95 図	岩田第14号墳第4号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	180
第 96 図	岩田第14号墳第5号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	181
第 97 図	岩田第14号墳第6号棺実測図（実測太田・製圖太田）	.....	182
第 98 図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(1)（実測石橋・製圖太田）	.....	195
第 99 図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(2)（実測石橋・製圖太田）	.....	196
第100図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(3)（実測石橋・製圖太田）	.....	197
第101図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(4)（実測石橋・製圖太田）	.....	201
第102図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(5)（実測石橋・製圖太田）	.....	203

第103図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(6)（実測石橋・製図太田）	206
第104図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(7)（実測石橋・製図太田）	207
第105図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(8)（実測石橋・製図太田）	211
第106図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(9)（実測石橋・製図太田）	212
第107図	岩田第14号墳出土須恵器実測図(10)（実測太田・製図太田）	212
第108図	岩田第14号墳出土土師器実測図（実測近藤・太田・製図太田）	215
第109図	岩田第14号墳出土紡錘車・金環実測図（実測近藤・國安・製図國安）	219
第110図	岩田第14号墳出土玉類実測図（実測近藤・國安・製図國安）	221
第111図	岩田第14号墳出土刀劍実測図（実測國安・製図國安）	224
第112図	岩田第14号墳出土環頭太刀実測図（実測國安・製図國安）	226
第113図	岩田第14号墳出土鉄製利器実測図（実測國安・製図國安）	229
第114図	岩田第14号墳出土鉄鎌実測図(1)（実測國安・製図國安）	231
第115図	岩田第14号墳出土鉄鎌実測図(2)（実測國安・製図國安）	232
第116図	岩田第14号墳出土鉄鎌実測図(3)（実測國安・製図國安）	234
第117図	岩田第14号墳出土帶実測図（実測國安・製図國安）	237
第118図	岩田第14号墳出土杏葉実測図（実測國安・製図國安）	238
第119図	岩田第14号墳出土杏葉・雲珠実測図（実測國安・製図國安）	239
第120図	岩田第14号墳出土辻金具・留金具等実測図（実測國安・製図國安）	241
第121図	岩田第14号墳出土鉗鎖・鉗具等実測図（実測國安・製図國安）	243
第122図	岩田第14号墳出土第1号棺鉄釘実測図（実測國安・製図國安）	244
第123図	岩田第14号墳出土第2号棺鉄釘実測図（実測國安・製図國安）	244
第124図	岩田第14号墳出土第5号棺鉄釘等実測図（実測國安・製図國安）	245
第125図	岩田第14号墳出土第6号棺鉄釘実測図（実測國安・製図國安）	245
第126図	岩田第14号墳出土第3号棺鉄釘等実測図（実測國安・製図國安）	246
第127図	岩田第14号墳出土逆難鉄釘実測図（実測國安・製図國安）	246
第128図	岩田第14号墳出土鍔実測図（実測國安・製図國安）	247

### ( 岩 田 土 墓 群 )

第129図	岩田土塼墓群周辺地形図および分布状況図（原図岡山県土木部・作成製図太田）	258
第130図	岩田第1土塼墓実測図（実測太田・製図太田）	261
第131図	岩田第1土塼墓出土土器（実測石橋・製図太田）	262
第132図	岩田第2土塼墓実測図（実測太田・製図太田）	262
第133図	岩田第3土塼墓実測図（実測太田・製図太田）	263
第134図	岩田第4土塼墓実測図（実測太田・製図太田）	264
第135図	岩田第4土塼墓出土土器（実測石橋・製図太田）	265
第136図	岩田第5土塼墓実測図（実測太田・製図太田）	266

第137図	岩田第6土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	267
第138図	岩田第6土壤墓出土土器（実測石橋・太田・製図太田）	267
第139図	岩田第7土壤墓出土土器（実測石橋・太田・製図太田）	268
第140図	岩田第8・9土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	269
第141図	岩田第10土壤墓出土土器（実測石橋・製図太田）	270
第142図	用木山尾根出土の藏骨器（実測森下・製図太田）	270
第143図	藏骨器出土状況（撮影神原）	271
第144図	岩田第11土壤墓出土土器（実測石橋・製図太田）	271
第145図	岩田第11土壤墓石材出土状況図（実測神原・太田・製図太田）	272
第146図	岩田第11土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	273
第147図	岩田第12土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	274
第148図	岩田第13土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	275
第149図	岩田第13土壤墓出土土器（実測太田・製図太田）	275
第150図	岩田第14土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	276
第151図	岩田第14土壤墓出土遺物（実測太田・製図太田）	277
第152図	合せ口土器棺出土状況（撮影神原）	278
第153図	岩田第15土壤墓出土土器棺（実測太田・製図太田）	278
第154図	岩田第16土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	279
第155図	岩田第16土壤墓出土土器（実測石橋・製図太田）	279
第156図	岩田第17土壤墓実測図（実測太田・製図太田）	280
第157図	岩田第17土壤墓出土遺物（実測太田・国安・製図太田）	281
第158図	岩田土壤墓群周辺部遊離土器（実測石橋・太田・製図太田）	281
第159図	愛宕山出土藏骨器（実測太田・製図太田）	283

### (野山古墳群第2・5号墳)

第160図	野山古墳群周辺地形図（原岡岡山県土木部・作成製図太田）	286
第161図	野山第2・5号墳外形現況図（測量太田・製図太田）	288
第162図	野山第2号墳第1号館実測図（実測国安・神原・製図国安）	290
第163図	野山第2号墳第2号館実測図（実測国安・神原・製図国安）	291
第164図	野山第5号墳第1号館実測図（実測国安・神原・製図国安）	293
第165図	野山第5号墳第2号館実測図（実測国安・神原・製図国安）	294
第166図	野山古墳群第2・5号墳出土遺物（実測国安・製図国安）	295

### (三藏畠遺跡)

第167図	三藏畠遺跡周辺地形図（原岡岡山県土木部・作成神原・製図太田）	298
第168図	三藏畠遺跡調査前地形図（測量国安・製図太田）	300
第169図	三藏畠遺跡遺構配置図（測量国安・製図太田）	301

第170図	三藏畠遺跡円形ピット実測図（実測太田・製図太田）	302
第171図	三藏畠遺跡埴物址実測図（実測太田・製図太田）	304
第172図	三藏畠遺跡第2ピット実測図（実測太田・製図太田）	306
第173図	三藏畠遺跡窯および灰原出土状況（実測太田・岡安・製図太田）	307
第174図	三藏畠遺跡窯実測図（実測岡安・製図太田）	308
第175図	三藏畠遺跡第3ピット実測図（実測岡安・製図太田）	310
第176図	三藏畠遺跡地形断面図（実測太田・製図太田）	311
第177図	三藏畠遺跡灰原出土土師器(1)（実測森下・製図太田）	316
第178図	三藏畠遺跡灰原出土土師器(2)（実測森下・製図太田）	317
第179図	三藏畠遺跡灰原出土土師器(3)（実測森下・製図太田）	318
第180図	三藏畠遺跡出土綠釉・青磁・瓦器実測図（実測森下・製図森下）	322
第181図	三藏畠遺跡出土土師器実測図(4)（実測森下・製図森下・太田）	325
第182図	三藏畠遺跡出土須恵器実測図（実測森下・製図太田）	326
第183図	三藏畠遺跡出土鉄器実測図（実測太田・製図太田）	327
第184図	三藏畠遺跡土師窯址試料採取図（作製広岡公夫）	329
第185図	西南日本における地磁気変化図（作製広岡公夫）	331

## 付 表 目 次

表 1	山陽団地用地内の遺跡数発見の推移	9
表 2	発掘調査委託契約一覧	10
表 3	発掘調査契約期間一覧	11
表 4	実質発掘調査期間一覧	11
表 5	発掘調査委託契約の遺跡内容一覧	12
表 6	山陽団地埋蔵文化財発掘調査出土遺物一覧	17
表 7	発掘調査報告書作成予定一覧	18
表 8	山陽団地用地内埋蔵文化財遺跡一覧	25
表 9	岩田第1号墳出土の円筒埴輪計測値	48
表 10	岩田第1号墳内部主体一覧	50
表 11	岩田第1号墳各区分出土遺物個体数一覧	57
表 12	岩田第1号墳第2主体出土の土器	58
表 13	岩田第1号墳墳丘内出土の須恵器	58
表 14	岩田第1号墳周溝底出土の环蓋	61
表 15	岩田第1号墳周溝底出土の环身	63
表 16	岩田第1号墳周溝底出土の高坏	65
表 17	岩田第1号墳周溝底の塙	65
表 18	岩田第1号墳周溝底出土の磧	65
表 19	岩田第1号墳周溝底出土の提瓶	65

表 20	岩田第1号墳周溝底出土の大盃	65
表 21	岩田第1号墳周溝底出土の斐跡付須恵器	65
表 22	岩田第1号墳周溝底出土小玉計測値	71
表 23	岩田第1号墳周溝底出土土製練玉計測値	73
表 24	岩田第1号墳第5主体出土土製練玉計測値	74
表 25	岩田第6号墳出土遺物一覧	84
表 26	岩田第6号墳出土金環計測値一覧	85
表 27	岩田第6号墳出土玉類計測値一覧	86
表 28	岩田第8号墳出土遺物一覧	109
表 29	岩田第8号墳出土の土器一覧	113
表 30	岩田第8号墳出土須恵器坏蓋	115
表 31	岩田第8号墳出土須恵器坏身	117
表 32	岩田第8号墳出土須恵器合付有蓋坏	119
表 33	岩田第8号墳出土須恵器高坏	119
表 34	岩田第8号墳出土須恵器平瓶	119
表 35	岩田第8号墳出土須恵器提瓶	119
表 36	岩田第8号墳出土須恵器壺	119
表 37	岩田第8号墳出土金環計測一覧	121
表 38	岩田第8号墳出土玉類計測値一覧	123
表 39	岩田第8号墳出土鉄釘計測値一覧	129
表 40	岩田第14号墳現存木棺一覧	177
表 41	岩田第14号墳出土遺物一覧	184
表 42	岩田第14号墳出土須恵器出土地点別一覧	186
表 43	岩田第14号墳出土須恵器坏身	188
表 44	岩田第14号墳出土坏計測値別分布表	190
表 45	岩田第14号墳壞蓋と身のセット関係一覧	191
表 46	岩田第14号墳出土須恵器坏蓋	192
表 47	岩田第14号墳出土須恵器合付有蓋坏	199
表 48	岩田第14号墳出土須恵器高坏	200
表 49	岩田第14号墳出土須恵器壺	204
表 50	岩田第14号墳出土須恵器平瓶	205
表 51	岩田第14号墳出土須恵器提瓶	205
表 52	岩田第14号墳出土須恵器横瓶	208
表 53	岩田第14号墳出土須恵器蓋	209
表 54	岩田第14号墳出土須恵器堆	209
表 55	岩田第14号墳出土須恵器合付直口壺	210

表 56	岩田第14号墳出土須志器有蓋短頸壺	213
表 57	岩田第14号墳出土須志器壺	213
表 58	岩田第14号墳出土土師質土器出土地点別一覧	214
表 59	岩田第14号墳出土土師器皿形土器	214
表 60	岩田第14号墳出土土師器壺・鉢・椀形土器	216
表 61	岩田第14号墳出土土師器合付壺・高环形土器	217
表 62	岩田第14号墳出土滑石製紡錘車	218
表 63	岩田第14号墳出土金環計測値一覧	220
表 64	岩田第14号墳出土玉類計測値一覧	222
表 65	岩田第14号墳出土直刀計測値一覧	225
表 66	岩田第14号墳出土環頭太刀計測値一覧	227
表 67	岩田第14号墳出土刀子計測値一覧	228
表 68	岩田第14号墳出土鉢状鐵器計測値一覧	230
表 69	岩田第14号墳出土尖根式鐵鎌計測値一覧	233
表 70	岩田第14号墳出土平根式鐵鎌計測値一覧	235
表 71	岩田第14号墳出土馬具巒計測値一覧	236
表 72	岩田第14号墳出土鍔形杏葉計測値一覧	239
表 73	岩田古墳群現存節計測値一覧	252
表 74	岩田古墳群出土遺物一覧	253
表 75	岩田土塗墓群土壤一覧	260
表 76	三藏畠遺跡出土土師器土鏡類の形式分類	314
表 77	三藏畠遺跡出土土師器片器形別出土地点別推定個体数一覧	323
表 78	三藏畠遺跡出土土師器片一覧	324
表 79	三藏畠遺跡土師窯址試料測定値一覧	330
表 80	三藏畠遺跡土師窯址地磁気測定値	331

## 図 版 目 次

(本文対照頁)

図版 1	1. 岩田第1号墳所在丘陵遠景（撮影神原）	36
	2. 岩田第1号墳調査前外観（撮影神原）	38
図版 2	1. 岩田第1号墳調査後外観（撮影神原）	41
	2. 岩田第1号墳調査後外観（撮影神原）	41
図版 3	1. 岩田第1号墳調査後全景（撮影神原）	41
	2. 岩田第1号墳調査後全景（撮影神原）	41
図版 4	1. 岩田第1号墳周辺および埴輪出土状況（撮影神原）	42
	2. 岩田第1号墳円筒埴輪出土状況（撮影神原）	44

図版	5	1. 岩田第1号墳円筒埴輪列出土状況（撮影神原）	44
		2. 岩田第1号墳第3埴輪出土状況（撮影神原）	44
図版	6	1. 岩田第1号墳周溝底遺物出土状況（撮影神原）	57
		2. 岩田第1号墳周溝底円筒埴輪片出土状況（撮影神原）	44
図版	7	1. 岩田第1号墳周溝底金環出土状況（撮影神原）	70
		2. 岩田第1号墳周溝底鏡片出土状況（撮影神原）	69
		3. 岩田第1号墳装飾須恵器片出土状況（撮影神原）	68
		4. 岩田第1号墳第4主体刀出土状況（撮影神原）	54・75
図版	8	1. 岩田第1号墳第1主体出土状況（撮影神原）	51
		2. 岩田第1号墳第2主体出土状況（撮影神原）	52
図版	9	1. 岩田第1号墳第3主体出土状況（撮影神原）	53
		2. 岩田第1号墳第4主体出土状況（撮影神原）	54
図版	10	1. 岩田第1号墳埴丘断面および第5主体出土状況（撮影神原）	42・56
		2. 岩田第1号墳第5主体出土状況（撮影神原）	56
図版	11	1. 岩田第1号墳第2主体出土土器（撮影国安、則武）	58
		2. 岩田第1号墳第4主体出土土器（撮影国安、則武）	59
		3. 岩田第1号墳周溝出土須恵器高坏（撮影国安、則武）	63
図版	12	岩田第1号墳周溝出土須恵器（撮影国安、則武）	66
図版	13	岩田第1号墳周溝出土須恵器坏（撮影国安、則武）	59
図版	14	1. 岩田第1号墳周溝内出土装輪付須恵器（撮影国安、則武）	68
		2. 岩田第1号墳埴丘内出土大壺（撮影国安、則武）	67
		3. 岩田第1号墳第3主体大壺（撮影国安、則武）	67
図版	15	1. 岩田第1号墳周溝出土人物埴輪（撮影国安、則武）	46
		2. 岩田第1号墳周溝出土動物埴輪（撮影国安、則武）	46
		3. 岩田第1号墳出土円筒埴輪（撮影国安、則武）	48
図版	16	1. 岩田第1号墳出土装身具類（撮影国安、則武）	69
		2. 岩田第1号墳第4主体鉄器（撮影国安、則武）	75
		3. 岩田第1号墳周溝出土銅鏡（撮影国安、則武）	69
図版	17	1. 岩田第1号墳周溝出土馬具類（撮影国安、則武）	78
		2. 岩田第1号墳周溝出土上鉄器類（撮影国安、則武）	76
図版	18	1. 岩田第6号墳石室出土状況（撮影神原）	82
		2. 岩田第6号墳遺物出土状況（撮影神原）	83
図版	19	1. 岩田第6号墳出土須恵器（撮影国安、則武）	84
		2. 岩田第6号墳出土装身具類（撮影国安、則武）	85
		3. 岩田第6号墳出土鉄器類（撮影国安、則武）	86
図版	20	1. 岩田第7号墳石室出土状況（撮影神原）	89

図版	20	2.	岩田第7号墳遺物出土状況（撮影神原）	.....	90
		3.	岩田第7号墳出土遺物（撮影国安、則武）	.....	91
図版	21	1.	岩田第8号墳所在丘陵遺景（撮影神原）	.....	94
		2.	岩田第8号墳近景（撮影神原）	.....	94・97
図版	22	1.	岩田第8号墳石室外觀（撮影神原）	.....	100
		2.	岩田第8号墳石室調査後全景（撮影神原）	.....	100
図版	23	1.	岩田第8号墳石室（撮影神原）	.....	100
		2.	岩田第8号墳石室（撮影神原）	.....	100
図版	24	1.	岩田第8号墳石室内遺物出土状況（撮影神原）	.....	104
		2.	岩田第8号墳調査後石室床面（撮影神原）	.....	104
図版	25	1.	岩田第8号墳玄室内遺物出土状況（撮影神原）	.....	104
		2.	岩田第8号墳玄室内遺物取り上げ後床面（撮影神原）	.....	100
図版	26	1.	岩田第8号墳陶棺出土状況（撮影神原）	.....	108
		2.	岩田第8号墳陶棺出土状況（撮影神原）	.....	108
図版	27	1.	岩田第8号墳奥壁部床面遺物出土状況（撮影神原）	.....	104
		2.	岩田第8号墳陶棺側須恵器出土状況（撮影神原）	.....	104
図版	28	1.	岩田第8号墳第3号棺下遺物出土状況（撮影神原）	.....	104
		2.	岩田第8号墳陶棺内須恵器出土状況（撮影神原）	.....	105
		3.	岩田第8号墳陶棺側須恵器出土状況（撮影神原）	.....	104
図版	29	1.	岩田第8号墳狭道部木棺出土状況（撮影神原）	.....	106
		2.	岩田第8号墳狭道部木棺出土状況（撮影神原）	.....	106
図版	30	1.	岩田第8号墳墳丘断面検出状況（撮影神原）	.....	98
		2.	岩田第8号墳墳丘と石室関連写真（撮影神原）	.....	98
図版	31	1.	岩田第8号墳出土土装身具類（撮影国安、則武）	.....	120
		2.	岩田第8号墳出土須恵器（撮影国安、則武）	.....	118
図版	32		岩田第8号墳出土須恵器环蓋（撮影国安、則武）	.....	113
図版	33		岩田第8号墳出土須恵器环身（撮影国安、則武）	.....	116
図版	34	1.	岩田第8号墳出土土陶棺（撮影国安、則武）	.....	109
		2.	岩田第8号墳出土釦・鍵（撮影国安、則武）	.....	126
図版	35	1.	岩田第8号墳出土铁器類（撮影国安、則武）	.....	124
		2.	岩田第8号墳出土铁器類（撮影国安、則武）	.....	124
図版	36	1.	岩田第9号墳石室出土状況（撮影神原）	.....	136
		2.	岩田第9号墳石室および木棺床出土状況（撮影神原）	.....	136
図版	37	1.	岩田第9号墳木棺床および遺物出土状況（撮影神原）	.....	136
		2.	岩田第9号墳木棺床および遺物出土状況（撮影神原）	.....	136
図版	38	1.	岩田第11号墳石室出土状況（撮影神原）	.....	142

図版	38	2. 岩田第11号墳石室出土状況（撮影神原）	142
図版	39	1. 岩田第11号墳石室内遺物出土状況（撮影神原）	143
		2. 岩田第11号墳遺物とりあげ後石室床面（撮影神原）	143
図版	40	1. 岩田第11号墳石室床面遺物出土状況（撮影神原）	143
		2. 岩田第11号墳奥壁部床面出土状況（撮影神原）	143
図版	41	1. 岩田第12号墳石室出土状況（撮影神原）	147
		2. 岩田第12号墳石室と弥生集落址の関係（撮影神原）	148
図版	42	1. 岩田第12号墳石室床面出土状況（撮影神原）	148
		2. 岩田第12号墳石室床面遺物出土状況（撮影神原）	149
図版	43	1. 岩田第13号墳石室出土状況（撮影神原）	154
		2. 岩田第13号墳石室および遺物出土状況（撮影神原）	154
図版	44	1. 岩田第9号墳出土鉄器（撮影国安、則武）	141
		2. 岩田第11号墳出土鉄器（撮影国安、則武）	145
図版	45	1. 岩田第12号墳出土鉄器（撮影国安、則武）	153
		2. 岩田第13号墳出土鉄器（撮影国安、則武）	156
図版	46	1. 岩田第9号墳出土金環（撮影国安、則武）	140
		2. 岩田第11号墳出土平瓶（撮影国安、則武）	144
		3. 岩田第11号墳出土土師器盤（撮影国安、則武）	145
		4. 岩田第12号墳出土須恵器（撮影国安、則武）	150
図版	47	1. 岩田第14号墳所在丘陵近景（撮影神原）	161
		2. 岩田第14号墳所在丘陵航空写真（撮影国安）	161
図版	48	1. 岩田第14号墳調査後石室全景（撮影神原）	166
		2. 岩田第14号墳石室出土状況（撮影神原）	166
図版	49	1. 岩田第14号墳石室（撮影神原）	170
		2. 岩田第14号墳石室（撮影神原）	170
図版	50	1. 岩田第14号墳石室全景（撮影神原）	166
		2. 岩田第14号墳遺物取りあげ後石室全景（撮影神原）	166
図版	51	1. 岩田第14号墳玄室床面出土状況（撮影神原）	170
		2. 岩田第14号墳玄室床面出土状況（撮影神原）	170
図版	52	1. 岩田第14号墳奥壁部一括遺物出土状況（撮影神原）	171・174
		2. 岩田第14号墳奥壁部一括土器出土状況近影（撮影神原）	171・174
図版	53	1. 岩田第14号墳1・2号棺出土状況（撮影神原）	177
		2. 岩田第14号墳3号棺直刀出土状況（撮影神原）	180
図版	54	1. 岩田第14号墳4・5号棺出土状況（撮影神原）	181
		2. 岩田第14号墳6号棺出土状況（撮影神原）	182
図版	55	1. 岩田第14号墳1号棺下土器出土状況（撮影神原）	178

図版	55	2. 岩田第14号墳1号棺小口部棺釘出土状況（撮影神原）	178
	3.	岩田第14号墳6号棺小口部棺釘出土状況（撮影神原）	182
図版	56	1. 岩田第14号墳1号棺環頭太刀出土状況（撮影神原）	178
	2.	岩田第14号墳環頭太刀出土状況近影（撮影神原）	178
	3.	岩田第14号墳1号棺下造物出土状況（撮影神原）	178
図版	57	1. 岩田第14号墳筋錐車出土状況（撮影神原）	176・217
	2.	岩田第14号墳筋錐車出土状況（撮影神原）	176・217
	3.	岩田第14号墳金環出土状況（撮影神原）	218
	4.	岩田第14号墳金環・玉類出土状況（撮影神原）	218
	5.	岩田第14号墳彩色玉出土状況（撮影神原）	223
	6.	岩田第14号墳刀飾り金具出土状況（撮影神原）	225
図版	58	1. 岩田第14号墳杏葉出土状況（撮影神原）	176・236
	2.	岩田第14号墳杏葉出土状況（撮影神原）	176・236
	3.	岩田第14号墳雲珠出土状況（撮影神原）	240
	4.	岩田第14号墳雲珠出土状況（撮影神原）	240
	5.	岩田第14号墳馬具帶出土状況（撮影神原）	236
図版	59	1. 岩田第14号墳羨道入口須恵器出土状況（撮影神原）	174
	2.	岩田第14号墳羨道部須恵器出土状況（撮影神原）	174
図版	60	岩田第14号墳出土須恵器壺蓋（撮影国安、則武）	190
図版	61	岩田第14号墳出土須恵器壺身（撮影国安、則武）	185
図版	62	岩田第14号墳出土須恵器台付坏（撮影国安、則武）	198
図版	63	岩田第14号墳出土須恵器高坏（撮影国安、則武）	199
図版	64	岩田第14号墳出土須恵器罐（撮影国安、則武）	202
図版	65	岩田第14号墳出土須恵器合付直口壺（撮影国安、則武）	210
図版	66	岩田第14号墳出土須恵器提瓶（撮影国安、則武）	205
図版	67	岩田第14号墳出土須恵器提瓶・平瓶（撮影国安、則武）	204・205
図版	68	岩田第14号墳出土須恵器壺（撮影国安、則武）	213
図版	69	岩田第14号墳出土須恵器蓋・壺（撮影国安、則武）	209・212
図版	70	岩田第14号墳出土土師器類（撮影国安、則武）	213
図版	71	岩田第14号墳出土土師器坑（撮影国安、則武）	216
図版	72	1. 岩田第14号墳出土筋錐車（撮影国安、則武）	217
	2.	岩田第14号墳出土彩色玉（撮影国安、則武）	220
	3.	岩田第14号墳出土玉類（撮影国安、則武）	221
	4.	岩田第14号墳出土金環（撮影国安、則武）	218
図版	73	岩田第14号墳出土環頭太刀（撮影神原、国安、則武）	225
図版	74	1. 岩田第14号墳出土平根式鉄鎌（撮影国安、則武）	233

図版	74	2.	岩田第14号墳出土尖根式鉄釦（撮影国安、則武）	232
図版	75	1.	岩田第14号墳出土刀類（撮影国安、則武）	223
		2.	岩田第14号墳出土鉄製利器類（撮影国安、則武）	236
図版	76		岩田第14号墳出土馬具（撮影国安、則武）	240
図版	77		岩田第14号墳出土馬具（撮影国安、則武）	236・242
図版	78	1.	岩田第14号墳出土馬具（撮影国安、則武）	242
		2.	岩田第14号墳出土馬具（撮影国安、則武）	240・242
図版	79	1.	岩田第14号墳出土木棺釘（撮影国安、則武）	244
		2.	岩田第14号墳出土鐵釘・鍵類（撮影国安、則武）	244
図版	80	1.	岩田土壙墓群所在丘陵景観（撮影神原）	259
	2.	岩田第1・第2土壙墓検出状況（撮影神原）	261	
	3.	岩田第1土壙墓出土状況（撮影神原）	261	
図版	81	1.	岩田第2土壙墓出土状況（撮影神原）	262
	2.	岩田第4土壙墓出土状況（撮影神原）	264	
	3.	岩田第5土壙墓出土状況（撮影神原）	266	
図版	82	1.	岩田第7土壙墓須恵器出土状況（撮影神原）	268
	2.	岩田第10土壙墓須恵器出土状況（撮影神原）	269	
	3.	岩田第8・第9土壙墓出土状況（撮影神原）	268	
図版	83	1.	岩田第6土壙墓出土状況（撮影神原）	266
	2.	岩田第11主体検出状況（撮影神原）	271	
	3.	岩田第11主体調査後出土状況（撮影神原）	271	
図版	84	1.	岩田第12土壙墓出土状況（撮影神原）	273
	2.	岩田第13土壙墓出土状況（撮影神原）	275	
	3.	用木山遺跡第1地点発見骨蔵器出土状況（撮影神原）	271	
図版	85	1.	岩田第14土壙墓出土状況（撮影神原）	276
	2.	岩田第14土壙墓出土遺物（撮影国安、則武）	277	
図版	86	1.	岩田第17土壙墓出土状況（撮影神原）	279
	2.	岩田第17土壙墓遺物出土状況（撮影神原）	280	
	3.	岩田第17土壙墓出土遺物（撮影国安、則武）	281	
図版	87	1.	岩田第11土壙墓出土須恵器坏（撮影国安、則武）	271
	2.	用木山遺跡第3地点遊離須恵器坏（撮影国安、則武）	270	
	3.	岩田第13土壙墓出土須恵器坏（撮影国安、則武）	275	
	4.	岩田第16土壙墓出土須恵器平瓶（撮影国安、則武）	279	
	5.	用木山遺跡第2地点遊離白磁（撮影国安、則武）	277	
図版	88	1.	岩田第4土壙墓出土須恵器類（撮影国安、則武）	265
	2.	岩田第10土壙墓出土須恵器坏（撮影国安、則武）	270	

図版 88	3. 岩田第6土墳墓出土須恵器坏（撮影国安、則武）	267
	4. 岩田第7土墳墓出土土師器坏（撮影国安、則武）	268
図版 89	1. 野山古墳群所在丘陵近景（撮影神原）	285
	2. 野山第5号墳内部主体露呈状況（撮影神原）	292
	3. 野山第5号墳内部主体出土状況（撮影神原）	292
図版 90	1. 野山第5号墳内部主体出土状況（撮影神原）	292
	2. 野山第5号墳内部主体調査後出土状況（撮影神原）	292
	3. 野山第5号墳1号棺枕石（撮影神原）	293
	4. 野山第2号墳2号棺玉類出土状況（撮影神原）	292
図版 91	1. 野山第2号墳内部主体出土状況（撮影神原）	289
	2. 野山第2号墳1号棺人骨出土状況（撮影神原）	289
	3. 野山第5号墳棺内出土遺物（撮影神原）	295
図版 92	1. 三蔵畠遺跡調査前全景（撮影神原）	299
	2. 三蔵畠遺跡調査後全景（撮影神原）	299
図版 93	1. 窯および灰原出土状況（撮影神原）	306
	2. 窯壁の石材出土状況（撮影神原）	306
図版 94	1. 窯本体出土状況（撮影神原）	308
	2. 窯本体および灰原出土状況（撮影神原）	306
図版 95	1. 挖立柱建物および水槽出土状況（撮影神原）	301・303
	2. 水槽および掘立柱建物出土状況（撮影神原）	301・303
図版 96	1. 水槽状ピット出土状況（撮影神原）	301
	2. 水槽状ピット排水施設出土状況（撮影神原）	303
図版 97	1. 焼土面をもつピット出土状況（撮影神原）	305
	2. ピット2出土状況（撮影神原）	305
	3. 土器片の堆積する柱穴出土状況（撮影神原）	303
図版 98	1. 窯床面出土の土師器（撮影国安、則武）	306
	2. 三蔵畠遺跡灰原出土土師器片（撮影国安、則武）	313
図版 99	1. 三蔵畠遺跡灰原出土土師器片（撮影国安、則武）	313
	2. 三蔵畠遺跡灰原出土土師器片（撮影国安、則武）	313
図版 100	1. 三蔵畠遺跡灰原出土カマド片（撮影国安、則武）	321
	2. 三蔵畠遺跡灰原および建物内出土ナベ脚片（撮影国安、則武）	320
図版 101	1. 三蔵畠遺跡出土磁器・綠釉片（撮影国安、則武）	321
	2. 三蔵畠遺跡出土瓦器片（撮影国安、則武）	322
図版 102	1. 三蔵畠遺跡出土鉄器片（撮影国安、則武）	327
	2. 三蔵畠遺跡出土須恵器片（撮影国安、則武）	325

# 山陽団地埋蔵文化財調査概要

1. 序 説.....	1
2. 調査の契機.....	2
3. 調査の組織.....	5
4. 調査の概要.....	8
5. 地理的歴史的環境.....	19
6. 用地内の埋蔵文化財.....	23

# 山陽団地埋蔵文化財調査概要

## 1. 序説

岡山県赤磐郡山陽町において施工中の、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともなう用地内の埋蔵文化財は、その量と質共に当初の予想をはるかに上まわり、最終的には90遺跡にもおよび、そのうち61遺跡が発掘調査の対象となる結果となった。したがって当該地内の埋蔵文化財の発掘調査も大規模なものとなり、岡山県教育委員会文化課直営の発掘調査団と、岡山県の委託と指導を受け編成した山陽町教育委員会の発掘調査団の、2組の発掘調査団が、遺跡を分担して併行実施した。

山陽町教育委員会は、昭和44年10月1日に山陽団地埋蔵文化財調査委員会を発足させ、諸準備期間をおいて、同年12月1日に用木古墳群第3号墳から発掘調査を開始、以来5か年余の歳月を要して、昭和49年12月末日の三歳烟遺跡の掘りあげをもって、遺跡現場における発掘調査を一応終了した。その間に山陽町教育委員会が発掘調査を実施した遺跡は、集落址・生産址7遺跡、土塗墓・合状墓6遺跡、古墳47基の計59遺跡、延べ発掘調査面積は65,000m<sup>2</sup>におよぶ。そして現在は発掘調査事務所も用地外に移転して、これら発掘調査遺跡の、膨大な量にのぼる諸記録類や出土遺物の整理作業と、発掘調査報告書の作成に取り組んでいるのである。

発掘調査報告書の作成については、発掘調査が長期におよび、しかも発掘調査遺跡が59遺跡となって、資料も膨大であるため、表7の発掘調査報告書作成予定一覧に表示したように、6分冊に分けて作成することとした。本書はその第6集である。

本書は、当岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともなう、用地内の埋蔵文化財発掘調査概報最終冊として編集したこともある、発掘調査の委託契約年次にこだわらず、用木山遺跡、さくら山遺跡、愛宕山遺跡等の弥生時代集落遺跡の発掘調査中に、これらの遺跡と同一立地に複合して発見調査した、岩田古墳群9基をはじめ、散在検出の木棺直葬墓、三歳烟古窯址など、古墳時代後期以降の遺跡を中心に、現状保存古墳であるにもかかわらず工事中に一部損傷された野山古墳群第2・5号墳の応急復旧調査を加えて収録した。また本来ならば、報告書作成計画に従って、毎次を追って順に報告すべきであるが、第4集用木山遺跡他および第5集さくら山遺跡が、共に集落遺跡で出土遺物の量も膨大で、それらの整理作業に手間どり、本書を先行して報告せざるを得なかった。不手際の点を御了承賜わりたい。

なお、今次発掘調査にともなう、調査の経過ならびに埋蔵文化財保護行政上の諸問題、また周辺地域の地理的歴史的環境等については、先に報告した発掘調査概報第1集用木古墳群において、総括して詳述しているので、ここでは、本書のスペースの関係や重複を避ける意味で、その概要を記すことにとどめ、発掘調査遺跡の記録に重点を置くこととする。

今回の発掘調査にあたっては、岡山県教育委員会文化課をはじめ、関係各機関から終始指導と協力をいただいた。特に事業主体者である岡山県土木部からは、調査期限や調査経費をはじめ、多大

の理解と協力をいただいた。また直接の発掘調査の推進にあたっては、山陽団地埋蔵文化財調査委員会に、その計画から作業員の確保にいたるまで、暖かい支援と便宜を賜わった。はじめに記して厚く感謝の意を表したい。

当該地内の埋蔵文化財の保存問題ならびに発掘調査の専門的な諮問機関として、前半を山陽団地埋蔵文化財調査委員会参与、後半を山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生がたにお願いし、終始適切なる指導と叱咤激励をいただいた。さらに多くの研究者や友人からも、折にふれて暖かい教示と励ましをいただいた。なかでも恩師岡山大学教授近藤義郎先生には、常に助言と鞭撻を賜わった。深く感謝の意を表したい。

出土遺物の整理および実測にあたっては、岡山大学学生石橋正樹、近藤耕一、安川豈史の3君と、仏教大学学生森下大輔君の真摯な助力と協力を得た。さらに三蔵畠遺跡の古窯址および周辺遺跡の焼土面の地磁気測定に関して、福井大学助教授広岡公夫氏にお願いしたところ、快諾を得たばかりでなく玉稿をいただいた。共に厚く御礼を申しあげたい。

しかしそれにも増して、今次の発掘調査が遂行できたのは、山陽町教育委員会の同僚と発掘調査団作業員一同の一體となった暖かい協力と励ましにあふるところが大きい。なかでも生業を犠牲にしてまでも、献身的な協力をいただいた調査員則武忠直氏と作業長阿部政信氏には、筆舌に尽せないほどの支えとなっていた。またこれまで考古学とは無縁であったにもかかわらず、研鑽と努力を重ね、測量や実測断面図をはじめ、諸事にわたって黙々と縁の下の支えとなってくれた、太田耕一、国安敏樹の若い調査員両君、こうした仲間達に助けられて、はじめてこの調査は成り立つのである。ここに明記して深く感謝の意を添げたい。

## 2. 調査の契機

昭和42年、岡山県は岡山県南地区の旺盛な宅地需要に対応するため、低廉でしかも環境の良好な住宅地を、大量かつまた早急に供給する目的をもって、岡山県営の大規模住宅団地の建設事業を立案した。立案当初は都窪郡早島町や総社市福井・西山地区等が候補地としてあがったが、用地買収の難行や埋蔵文化財の保存問題等で流産した。その後候補地は二転三転して、当山陽町の東高月丘陵地に決定されたのである。昭和38年制定の新市街地開発法に基づいて、昭和44年6月11日、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業として都市計画決定され、事業面積105.4ヘクタール、戸数約3,000戸、人口約12,000人の新しい住宅団地開発事業が、総事業費70億円、5か年計画でスタートしたのである。

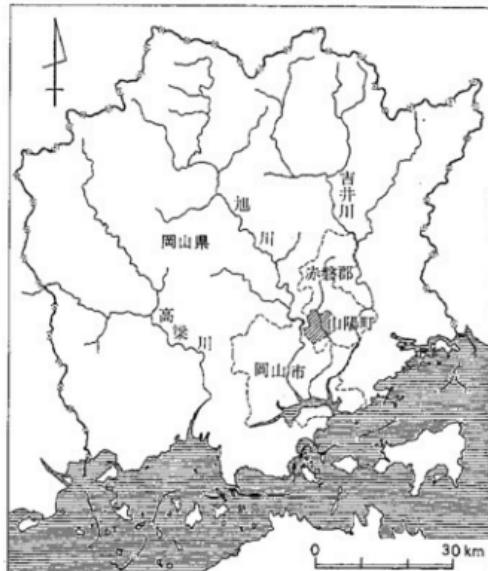
住宅団地開発事業地となった岡山県赤磐郡山陽町は、岡山市の北東部に隣接している。そこは吉備高原の南縁から岡山平野への漸移地帯にあたり、また旭川および吉井川に挟まれた中間に位置している。したがって当地は、町内のほぼ中央を北から南へ貫流する砂川と呼ばれる小河川の流域に拓けた、約20歳の埋積平地を中心にして、まわりを低い山々で取り囲まれた盆地となっており、一つのまとまりをもった単位地域を構成している。住宅団地は、この埋積平地の一角に西から東へ大きく張り出した形の、東西約900m、南北約1,200mの低丘陵群がその対象地と決定された。ここは俗

に東高月丘陵群と呼ばれ、下市、河本、岩田、和田、鳴前、熊崎の6部落にまたがる地域である。丘陵群は多くの支谷によって複雑に開析されてはいるが、全体としてはなだらかな低丘陵を形成し、地形的には住宅団地造成用地として格好の立地条件を備えたところである。

その一方において当地は、国指定史跡両宮山古墳や備前國分寺跡の後背地にあたり、その実態の詳細は明確ではないまでも、東高月遺跡群として、多くの人々から注目されていた地域でもあった。しかし、住宅団地開発事業が立案された時点では、こうした開発行為のよりどころとなる、昭和40年岡山県教育委員会発行の「岡山県遺跡地図」には、当該地域内には僅か9基の古墳の所在が記載されていたのみであった。事業主体者である岡山県土木部では、その内4基の古墳を事業用地から除外して、残る5基の古墳ぐらいなら、すべてを公園緑地などに取りいれても、現状保存は可能であるとの見地から用地買収を先行した。

昭和43年度になって、事業の基本計画がまとめられ、同年秋からその試案に基づいて、文化財の保存に関する協議が、岡山県教育委員会と岡山県土木部の当時者間で開始された。早速用地内の埋蔵文化財の分布調査が実施されたが、当時は現地も立木が繁り、見通しもきかず、分布調査としては条件に恵まれなかったにもかかわらず、集落遺跡2遺跡、古墳37基の計39遺跡の存在が明らかになった。県教育委員会は、樹木の伐採や造成工事着工等の際に、さらに多くの遺跡が発見される可能性が強く、当該地における開発事業の中止を強く申し入れた。しかし開発サイドの県土木部では、すでに土地買収等資本投下がなされ、計画も実行に移す段階であり、他に適地を詰め得ないこともあって、当該地での住宅団地開発を強く主張した。そして数次にわたる関係機関の協議の結果大小7回にわたる設計変更等の努力が重ねられ、技術的に現状保存困難な遺跡については、発掘調査による「記録保存」の処置がとられることになり、確認された39遺跡は、現状保存21遺跡、発掘調査18遺跡と決定されたのである。

用地内の埋蔵文化財の取扱いについては、岡山県教育長と岡山県土木部長間で取り交わされた昭和44年5月24日付の「山陽町地の文化財取扱いに関する確認事項」（資料1）と昭和45年5月1日付の「山陽町地の文化財取扱いに関する確認事項細目協議書」（資料2）に基づいて施行されることになった。そして発掘調査は原則として、集落遺跡の調査を県教委調査団、古墳等墓地遺跡を山



第1図 山陽町の位置関係図

陽町教委調査団が分担して実施することに取り決められたのである。

岡山県教委の指定と指導を受けて、岡山県の委託事業として、団地内の埋蔵文化財の発掘調査を担当することになった山陽町は、その受け入れ体制として、昭和44年10月1日、山陽団地埋蔵文化財調査委員会と、山陽団地埋蔵文化財発掘調査団を組織した。そして昭和44年11月1日付をもって山陽団地埋蔵文化財発掘調査第1次委託契約を締結し、同年12月1日用木古墳群第3号墳から発掘調査に着手したのである。

#### (資料1)

#### 山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項

岡山県教育委員会教育長（以下「甲」という。）および岡山県土木部長（以下「乙」という。）は、乙の計画する山陽新住宅市街地開発事業（以下「事業」という。）施行に伴う、埋蔵文化財の取扱いについて、次のとおり決める。

##### （総則）

第1条 乙は事業の施行にあたり文化財保護の趣旨を尊重し、甲は事業施行が円滑に行なえるよう協力するものとする。

##### （事業施行前の協議）

第2条 甲および乙は事業施行前において次の各号に掲げる項目について、別添図示を目安として、可及的すみやかに協議を終了するものとする。

1. 事業区域から除外するもの。
2. 事業区域に含めるが、公園、緑地に取り込むなどにより、保存を図るもの。
3. 発掘調査を行なって記録保存するもの

##### （事業施行中に埋蔵文化財を発見した場合の協議）

第3条 乙は事業施行中に埋蔵文化財の包蔵地を発見した場合、その取扱いについては、甲と協議のうえ措置するものとする。

##### （発掘調査）

第4条 1. 前2条の協議の結果、埋蔵文化財の発掘調査は、甲または甲が指定するものに委託して実施する。

2. 前項の発掘調査に要する経費については、甲、乙協議のうえ負担区分に応じて負担するものとする。

##### （協議の決定）

第5条 この確認事項に定めない事項または疑義の生じた事項については、甲、乙協議のうえ決定するものとする。

昭和44年5月24日

甲 岡山県教育委員会教育長 棚 井 孝 夫 國  
乙 岡山県土木部長 高 橋 光 國

(資料2)

山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項細目協議書

岡山県教育委員会教育長（以下「甲」という。）と岡山県土木部長（以下「乙」という。）は、昭和44年5月24日付で甲と乙との間で取り決めた山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項（以下「確認事項」という。）の実施細目について次のとおり決める。

第1. 発掘調査の実施者（確認事項第4条第1項）

山陽団地の埋蔵文化財の発掘調査については、原則として古墳の発掘調査は山陽町に委託して実施することとし、門前池付近弥生遺跡の発掘調査は、甲が直接実施するものとする。

第2. 発掘調査に要する経費の負担区分（確認事項第4条第2項）

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査費は、乙において負担するものとする。ただし山陽町に委託して実施する発掘調査の一般指導旅費は、甲において負担する。

第3. 発掘調査実施計画書の作成

山陽団地内の埋蔵文化財の発掘調査を行なう場合、発掘調査実施計画を作成し、甲、乙協議して発掘調査に必要な事項を定めるものとする。

昭和45年5月1日

甲 岡山県教育委員会教育長 棚 井 孝 夫 國  
乙 岡山県土木部長 佐 藤 昇 國

### 3. 調査の組織

山陽団地用地内の、埋蔵文化財の発掘調査を担当することになった山陽町は、町教委と町文化財保護委員会を中心に、関係機関の代表をもって、昭和44年10月1日山陽団地埋蔵文化財調査委員会を組織して、発掘調査を推進することとした。また直接発掘調査を担当する調査団は、県教委から派遣された専従調査員を中心に、町内在住者で山陽団地埋蔵文化財発掘調査団（昭和47年度以降は山陽団地埋蔵文化財発掘調査事務所）を編成した。

埋蔵文化財発掘調査委託契約、開発事業の工事工程と調査遺跡の選定や調整、県調査団との連携等、関係者間の事務的接渉や連絡機関として、県土木部住宅課、県教委文化課、山陽町教委の担当職員をもって三者協議会を設置した。埋蔵文化財の発掘調査に関する専門的な諮問機関として、当初山陽町は、県内研究者のなかから9名の諸先生に、山陽団地埋蔵文化財調査委員会参与を委嘱

し、指導と助言をいただいた。昭和47年度になって、岡山県教育長委嘱の山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会が発足したため、町長委嘱の調査委員会参与の会は解散して、保護対策委員会に統一して諮詢を仰ぐことになった。

各調査組織の構成員は下記のとおりである。調査期間が長期におよんだため、調査委員会および調査団では構成員にかなりの変動があった。ここでは、本告集録の遺跡調査に関係した在職者を中心記名した。全期間にわたっての構成員については、先に報告した第1集に全員を明示しているので参照願いたい。こうしたみなさんの協力によって、今次発掘調査は実施できたのである。記して厚くお礼を申しあげたい。

#### 山陽団地埋蔵文化財調査委員会参与

##### ・山陽町長委嘱

##### ・昭和45年1月5日～昭和47年5月1日

今井　堯	(津市教育委員会主事)
岡本　明郎	(岡山県立西大寺高校教諭)
鎌木　義昌	(岡山理科大学教授)
角田　茂	(瀬戸中学校教諭)
長光　徳和	(岡山県文化センター主任)
西川　宏	(山陽学園教諭)
春成　秀爾	(岡山大学助手)
間壁　忠彦	(倉敷考古館副館長)
三杉　兼行	(甲浦郵便局長)

(アイウエオ順、職名は昭和45年1月委嘱当时)

#### 山陽団地埋蔵文化財保護対策委員

##### ・岡山県教育長

##### ・委嘱　昭和47年5月設置

鎌木　義昌	(岡山理科大学教授)
近藤　義郎	(岡山大学教授)
角田　茂	(瀬戸中学校教諭)
土井　秋夫	(瀬戸町文化財保護委員)
西川　宏	(山陽学園教諭)
春成　秀爾	(岡山大学講師)
間壁　忠彦	(倉敷考古館長)

三 杉 兼 行 (甲浦郵便局長)  
(アイウエオ順職名は昭和47年5月委嘱当時)

#### 山陽団地埋蔵文化財調査委員会

- ・山陽町長委嘱
- ・昭和44年10月1日設置（昭和49年10月1日現在）
  - 。調査委員長 山陽町教育委員長
  - 。調査副委員長 山陽町文化財保護委員長
- 河 田 弘 (町教育委員長)
- 平 井 富士雄 (町教育長)
- 則 武 忠 直 (町文化財保護委員長)
- 阿 部 政 信 (町文化財保護副委員長)
- 花 房 長 男 (町文化財保護委員)
- 本 鄂 迅 (町文化財保護委員)
- 岩 本 翼 (町文化財保護委員)
- 青 井 武 (町議会議長)
- 石 原 徳 夫 (町議会文教副委員長)
- 岩 本 新 一 (町助役)
- 社 鮎三郎 (和田区長)
- 阿 部 清 次 (岩田区長)
- 山 本 寛 (河本代表)
- 藤 原 和 太 (下市区長)
- 岡 野 清 人 (熊崎区長)
- 坂 内 紀 八 (鴨前区長)
- ・事務局 花 房 消 志 (町教委事務局長)  
神 原 英 朗 (町教委指導主事)

#### 山陽団地埋蔵文化財調査事務所

- ・山陽町教育委員会設置
- ・昭和44年10月1日設置（昭和49年10月1日現在）
  - 調査事務所長 神 原 英 朗 (山陽町教委指導主事)
  - 調査員 則 武 忠 直 (山陽町文化財保護委員長)
  - 〃 太 田 耕 一 (山陽町教委主事)

ノ 国 安 敏 樹 (山陽町教委主事)  
 作 業 長 阿 部 政 信 (山陽町文化財保護副委員長)  
 作業長補佐 植 田 臣 山 本 寛  
 事 務 員 神 原 清 子 井 上 節 美  
 作 業 員  
 阿 部 良 作 井 上 三 夫 井 上 政 男 井 上 律 太 石 原 与 六  
 入 江 忠 一 岩 本 竹 志 岩 本 達 水 植 田 順 大 森 駒  
 尾 上 弘 治 山 吹 三 一 山 本 高 男 阿 部 茂 子 阿 部 春 恵  
 阿 部 美 枝 子 阿 部 芳 恵 石 原 竹 子 井 上 初 岩 本 富 子  
 遠 篠 操 小 倉 寿 美 子 小 倉 昌 江 岸 本 雪 野 小 板 光 子  
 小 坂 弘 江 武 内 千 代 子 釣 井 節 子 平 田 時 子 社 寿 子  
 社 百 枝 社 芳 江 山 木 荣 山 本 富 美 江 橋 田 可 奈 子  
 横 田 正 子

#### 4. 調査経過の概要

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内の埋蔵文化財取り扱いについて、関係機関による事前協議の結果、「記録保存」と定められた18遺跡のうち、古墳16基の発掘調査を分担することになった山陽町、町教委を中心に、昭和44年10月1日、山陽町地埋蔵文化財発掘調査団を発足した。そして昭和44年11月1日、岡山県と山陽町地埋蔵文化財発掘調査第1次委託契約を締結し、同年12月1日、用木古墳群第3号墳から発掘調査を開始した。

住宅団地造成の本格的な工事着手は昭和45年10月からの予定で、当初はまだ期間的にもかなりの余裕もあり、古墳16基の発掘調査ということで、発掘調査団の組織も小規模なため、発掘調査の委託契約も、古墳支群単位で数次に分割して結ぶこととし、約3か年計画で終了する予定であった。したがって委託契約は、発掘調査、整理検討作業、発掘調査報告書作成を1セットとする一期完結型とし、報告書作成を終えてから、次の契約を結ぶという了解事項をとりつけていた。

しかし、用地内の埋蔵文化財は、当初から心配されていたとおり、工事着工に先立つ樹木の伐採によって丘陵地が裸になった時点、開発事業の進行や遺跡の発掘調査中など、造成工事と発掘調査が進むにつれて、遺跡の量と範囲が著しく増大し、最終的には生活址7、土壙墓・合状墓6、古墳77の総計90遺跡にものぼる遺跡密集地域となったのである(表1)。こうした新発見遺跡の多くは、当然のことながらすでに開発予定地区に決定された地域内が多く、現状保存への設計変更等はきわめて困難である。したがって発掘調査対象遺跡は増大し、結果的には61遺跡が「記録保存」となって、当該地における埋蔵文化財の保存率を、ますます低下させることとなった。事前の精密な分布調査と公表の重要性を痛感させられる例示である。

用地内の遺跡の増大は、それだけ発掘調査の負担を増大する。昭和45年度後半からは住宅団地造成工事も本格的に開始され、それとの競合も激しくなる。さらには、当初集落址の発掘調査を担当

する予定であった県教委発掘調査団は、山陽新幹線および中国縦貫自動車道建設事業にともなう、埋蔵文化財の発掘調査に手を取られ、全期間にわたっては当該地の発掘調査に拘されなかつた。結果的には集落址 1 遺跡と古墳 1 基の調査に終つたのである。そのため、発掘調査対象の 61 遺跡のうち、59 遺跡、約 65000m<sup>2</sup> の発掘調査を、山陽町教委発掘調査団が担当実施せざるを得なかつた。

開発事業が進行するに従つて工事区も狭められ、発掘調査との競合の度合は厳しいものとなる。予想をはるかにこえる遺跡数の増大と追跡範囲の拡大は、工期と調査期限の制約から、調査中の遺跡発掘を中断して、工期の急ぐ調査区へ、委託契約に先行しての緊急発掘におもむいたり、遺跡現場の振りあげを待ち兼ねるようにして、整理作業や報告書作成を犠牲にしての重複契約など、作業員を大量に動員した発掘発掘に明け暮れる毎日となつた。そしてまた庶務的事務量も増大し、作業員の掌握も大きな負担となる。一方では造成工事に追われ、一方では作業員に追われるという、皮肉な結果となるのである。

遺跡密集地域における大規模開発事業と、埋蔵文化財と競合しての発掘調査は、計画のとおりにはなかなか進まない。今次調査においても、前半の追跡群単位の委託契約は、重複契約や未契約遺跡への緊急先行調査などの不合理を生み、それを是正するための昭和47年度からの年間委託契約でも、調査遺跡の追加変更契約となって、その実態は改まらない。当該地域内の遺跡内容の重要性もさることながら、文化財保護行政上の立場からも多くの問題を提起するものである。これらの諸問題に関しては、反省も含めて、本調査概報第 1 集に、「調査経過の総括」として一括記述しているので参照願いたい。

山陽町教育委員会が担当した、用地内の埋蔵文化財発掘調査は、昭和49年12月末日、三蔵畠遺跡振りあげをもって、遺跡現場における発掘調査を一応終了した。この間に 5 年余の歳月と、延べ 35,000 人の労力、約 14,500 万円の経費を要し、発掘調査実施遺跡数は 59 遺跡、延べ発掘面積は 65,000m<sup>2</sup> におよぶ。当初の計画からみれば、数倍の事業量となり、期間も 2 年間遅れたことにな

表 1 山陽町用地内の遺跡数発見の推移

確認年月日	現状保存遺跡 (含協議中)			発掘調査遺跡 (含事前破壊消滅)			総遺跡数			備考			
	集生	土群	古墳	集生	土群	古墳	集生	土群	古墳				
	落葉	落葉	等	落葉	落葉	等	等	等	等				
昭和43. 4. 1	-	-	-	-	-	-	0	0	9	「岡山県遺跡地図」記載による内 熊崎古墳群 4 基を用地外へ除外			
〃 44. 5. 1	2	0	19	21	0	0	18	18	2	0	37	39	集落址については保存協議中
〃 44.12.24	2	0	22	24	0	0	22	22	2	0	44	46	
〃 45. 3. 1	1	0	22	23	4	0	29	33	5	0	51	56	門前池北遺跡を用地外へ除外
〃 46. 1.30	1	0	27	28	4	2	34	40	5	2	61	68	
〃 48. 3.31	2	1	22	30	7	5	35	47	9	6	62	77	門前池西方遺跡一部保存
〃 49.10. 1	2	1	27	30	7	5	39	51	9	6	66	81	
〃 50. 3. 1	1.5	1	30	32.5	6.5	5	47	57.5	7	6	77	90	最終確定トータル 集落址の一部を統合整理

表2. 発掘調査の委託契約一覧

契約年月日	調査期間	遺跡名	契約金額	契約面積	実質面積
1 44.11.1 変更 45.9.28	44.11.1~45.9.30	①用木古墳群のうち 1~5号墳の5基	640万円	2000m <sup>2</sup>	7000m <sup>2</sup>
	44.11.1~46.3.15				
2 45.5.1	45.3.1~46.1.31	③用木古墳群のうち 8~12号墳の5基	290万円	2000m <sup>2</sup>	2200m <sup>2</sup>
3 45.9.1	45.9.1~45.11.30	④ヤケ池遺跡予備調査	221.2万円	6000m <sup>2</sup>	3675m <sup>2</sup>
4 45.10.1	45.10.1~46.7.31	①便木山10号墓 ②岩田3.5.6.7.号墳 (調査事務所移転)	450万円	2000m <sup>2</sup>	4450m <sup>2</sup>
5 46.2.1	46.2.1~46.3.20	④四辻古墳群のうち 1~3号墳の3基	200万円	1000m <sup>2</sup>	900m <sup>2</sup>
6 46.4.21	46.4.20~46.10.31	①四辻古墳群のうち 5~9号墳の5基	468.5万円	2000m <sup>2</sup>	2900m <sup>2</sup>
7 46.7.6	46.7.6~46.10.31	①物置遺跡第2地点	474万円	4000m <sup>2</sup>	4000m <sup>2</sup>
8 46.10.1 変更 47.7.14	46.10.1~47.3.31	①便木山12号墓 ②大久保遺跡	452万円	3300m <sup>2</sup>	4000m <sup>2</sup>
		③便木山12号墓 ④大久保遺跡 ⑤宮山4号墳 ⑥用木山遺跡第1地点		3100m <sup>2</sup>	
9 47.4.1 変更 48.1.5	47.4.1~48.3.31	⑦用木山遺跡第1地点 ⑧中池遺跡	2,300万円	5585m <sup>2</sup>	10,100m <sup>2</sup>
		⑨用木山遺跡第1地点 ⑩中池遺跡 ⑪用木山遺跡第2.3地点 ⑫さくら山遺跡第1地点 (調査事務所移転)	2,700万円	6185m <sup>2</sup>	
10 48.4.1 変更 49.1.4	49.4.1~49.3.31	⑬愛宕山遺跡第1地点 ⑭さくら山遺跡第2地点 ⑮岩田1号墳	1,875万円	6300m <sup>2</sup>	15,800m <sup>2</sup>
		⑯愛宕山遺跡第2地点 ⑰さくら山遺跡第2地点 ⑱岩田1号墳 ⑲東山遺跡	2,500万円		
11 49.4.1 変更 50.1.4	49.4.1~50.3.31	⑳愛宕山遺跡第2地点 ㉑用木7.15.16号墳	1,500万円	4,000m <sup>2</sup>	10,300m <sup>2</sup>
		㉒愛宕山遺跡第2.3地点 ㉓用木7.15.16号墳 ㉔新宅山遺跡 ㉕三藏畠遺跡 ㉖現状保存古墳測量 ㉗報告書第1分冊作成 (調査事務所移転)	3,310万円	5700m <sup>2</sup> (他に古墳29基測量と報告書)	
12 50.4.1	50.4.1~51.3.31	㉘出土遺物等資料整理 ㉙報告書第4~6集作成	2,800万円		
計			14,506.7万円	40,295m <sup>2</sup>	65,525m <sup>2</sup>

表3 発掘調査契約期間一覧

#### ◎內斂來註釋的本義

表4 実質発掘調査期間一覧

The Gantt chart illustrates the timeline for Project Alpha across 12 weeks. Task A1 starts at week 1 and ends at week 2. Task A2 follows A1 at week 2 and ends at week 3. Task A3 begins at week 3 and ends at week 4. Task A4 starts at week 4 and ends at week 5. Task A5 and A12 begin at week 5 and end at week 6. Task A6 and A11 start at week 6 and end at week 7. Task A7 and A10 begin at week 7 and end at week 8. Task A8 and A9 start at week 8 and end at week 9. Task A10 and A11 begin at week 9 and end at week 10. Task A11 and A12 begin at week 10 and end at week 11. Task A12 ends at week 11 and task A13 begins at week 12. Task A13 ends at week 13.

-----復興中華民族精神-----

表5 発掘調査委託契約の遺跡内容一覧

契約次	契約 遺跡	契約時の 遺跡概要	発掘調査の結果概要
1	①用木古墳群 第1号墳(A1) 第2号墳(A2) 第3号墳(A3) 第4号墳(A4) 第5号墳(A5) (古墳5基)	A1. 径30m, 高さ約3mの円墳 A2. 径25m, 高さ約2mの円墳 A3. 径26m, 高さ約3mの円墳 A4. 径25m, 高さ約3mの円墳 A5. 径12m, 高さ約1mの円墳 ※いずれも内部主体1~2の円墳5基  (調査予定面積2000m <sup>2</sup> )	A1. 径31m, 高さ約5mの円墳, 青石あり, 割り竹形木棺の中央主体。他に墳丘下およびその周辺より, 弥生住居址と土器墓2を検出。用木山遺跡の発見動機となる。 A2. 墳形定形化せず。封土もなく自然地形を利用。箱形土壙の中央主体の他, 土器群3を含む計8土器墓検出。遺跡範囲は30m×50m。 A3. 全長42mの前方後方墳。墳端部にのみ葺石をもつ。中央主体は粘土層, 他に造り出し部に2土壙。 A4. 墳形定形化せず封土なし。墳頂部に3主体, 墳端尾根部テラスに2グループ11主体計14主体。中には, 1. 土壙内に4体と3体の多数埋葬例あり。 A5. 長辺15m, 高さ1.2mの方墳。尾根を切る墳端にのみ葺石木棺直葬の内部主体3を検出。 他に, 丘陵尾根接線串2m, 総延長約300mのトレンチ調査。A7, A8, A9, A10, A11, A12, A13, A14の計8基を発見 (実質調査面積2000m <sup>2</sup> )
2	①用木古墳群 第8号墳(A8) 第9号墳(A9) 第10号墳(A10) 第11号墳(A11) 第12号墳(A12) (古墳5基)	A8. 径14m, 高さ約1.2mの円墳 A9. 封土流失, 木棺直葬か? A10. 同上 A11. 径14m, 高さ約1.5mの円墳 墳輪輪片散見。 A12. 10×16mの方墳, 葦石有り。  (調査予定面積2000m <sup>2</sup> )	A8. 径22m, 高さ2.5mの円墳。中央主体は粘土床, 他に墳外周辺に1土壙。 A9. 封土完全喪失。もと径10m程度の小円墳か, 木棺直葬の土壙2主体。 A10. A9と同凹大, 土礫墓1主体。 A11. 10×13m, 高さ約1.5mの方墳。葺石, 墳輪周溝あり。箱形木棺直葬1主体。 A12. 10×16m, 高さ1.2mの方墳。周溝, 葦石あり。墳中央に大型土壙多数埋葬。 A13. 封土流失, 不定形な小土壙1のみ検出。 A14. 封土なし, 土壙3。 ※新発見2を含む計7基を発掘調査。 (実質調査面積2200m <sup>2</sup> )
3	①ヤケ池遺跡(Y3) (予備調査)	ヤケ池およびその周辺に土器片散見。集落址の可能性があるため, その遺跡状況と遺跡範囲を確認するための予備調査を行う。  (調査予定面積 6000m <sup>2</sup> )	Y3-1区, 中1m, 総延長400mのトレーナー調査 Y3-2区, 中2m, 総延長200mのトレーナー調査 4×4mグリット計110区の平面調査 Y3-3区, 3×3mのグリット計35区の平面調査 遺跡範囲約4000m <sup>2</sup> にわたって弥生時代土器包含層。部分的には竪穴住居址, ピット, 土器溝等を検出。保存協議の要望を出して調査は中断。後典教教文化課直管による発掘調査。 (実質調査面積 3875m <sup>2</sup> )
4	①便木山10号墳(G10) ②岩田古墳群 第3号墳(E3) 第5号墳(E5) 第6号墳(E6) 第7号墳(E7) 第8号墳(E8) (古墳6基)	G10. 径約12m, 高さ約1mの低平な小円墳。 E3, E5, E6, E7, E8. いずれも, 径10~15m, 高さ1~1.5mの小円墳 4基は未標記と推定される。  (調査予定面積2000m <sup>2</sup> )	G10. 古墳ではなく, 酒律併行期の土器墓遺跡。40m×40mの遺跡範囲に41土壙, 6土器棺, 4溝状遺構検出。 E3. 20m×18m, 高さ2.5mの方墳, 葦石, 墳輪あり。内部主体は小窓式石室2。 E5. 10m×12m, 高さ1.5mの方墳。列石あり, 墳中央に小窓式石室 E6. E7.(Y7L) 調査の結果, 古墳ではなく, 弥生中期の集落址とわかる。物忌遺跡第1地点(Y7L)とする。丘陵尾根部30m×80mの遺跡範囲に竪穴住居址24戸, ピット2を検出。 (実質調査面積 4450m <sup>2</sup> )

契約次	契 約 遺 跡	契 約 時 の 遺 跡 概 要	発 挖 調 査 の 結 果 概 要
5	④四辻古墳群 第1号墳(F1) 第2号墳(F2) 第3号墳(F3) (古墳3基)	F1. 径16m、高さ約2mの円墳 墳中央に小盗掘跡あるも主 体に達していないもよう。  F2. 径10m高さ1mほどの中平 な小円墳中破されている。  F3. 径13m高さ1.5mの円墳 頂部は盗掘され、箱式石棺 露呈。 (調査予定面積 1000m <sup>2</sup> )	F1. 径16m、高さ2mの円墳と、16m× 18mの方形台状器の複合遺跡、古墳 は周濠、葺石あり、内部主体は粘土 被覆1、台状器は7土塁で構成されて いた。墳丘外4m×4mグリッド24 区調査、遺跡の広がりなし。  F2. 封土、内部主体とともにすでに破壊も と、径9m、高さ1m程度の円墳と 推定、鉄鏃、鐵劍片を散見。封土中 に弥生包含層検出  F3. 径9m、高さ2mの円墳、内部主体は 箱式石棺1、封土中に弥生包含層 検出 (実質調査面積 900m <sup>2</sup> )
6	①四辻古墳群 第5号墳(F5) 第6号墳(F6) 第7号墳(F7) 第8号墳(F8) 第9号墳(F9) (古墳5基)	F 5～F 9 径8.5m～15m、高さ0.8m～1.5 mの小円墳5基とそれと関 係する墳外周辺部について 発掘調査する。	F 5～F 7、丘陵頂に直列状に並ぶ古墳 3基とみられていてが、調査の結果、 古墳はF 5が1基のみで、他は、それ と複合する土塁墓群であった。古 墳は径14m、高さ1.5mの円墳、木 棺直葬と粘土床の内部主体2、葺石、 埴輪あり。 土塁墓遺跡 1辺14mの方形台状墓を中心 に20m×80mの一帯に広がる土塁墓 群、弥生中期の72土塁、3土器棺で 構成される。 F 6、(F 8) 封土流失、粘土床1、ビッ ト6を検出、もと、徑15m程度の円 墳と、弥生の遺構か？ F 7、(F 9) 開溝をもつて徑15.4mの円墳 と、墳頂に3主体周辺に2主体の計5 主体 弥生住居址 F 7の馬込尾根上にて、竪穴 住居址2戸を検出、すでに工事によ り、まわりを削平されており、跡 範囲の追求不能 (実質調査面積 2900m <sup>2</sup> )
7	①惣図遺跡第2地点 (Y72)	Y72. 造成工事中にY71IC構接 する丘陵斜面から、弥生土 器片を含む包含層が検出され 、弥生集落址の可能性があ るため、調査対象とな る。開発工事進行上、急を要 するため、緊急調査とな る。 (調査予定面積 4000m <sup>2</sup> )	Y72. 丘陵頂から斜面にかけて広がる弥生 中期の集落址である40m×10mの の遺跡範囲に計30戸の堅穴式住居址と ビット3、土器窯4を検出 E 6. 同上調査中に発見された横穴式石室 残骸1基である。 (実質調査面積 4000m <sup>2</sup> )
8	①便木山方形台状墓 (G12) ②大久保遺跡(Y 6) ③富山4号墳(B 4) ④用木山遺跡 第1地点(Y81)	G12. 工事により土塁を切断発 見 G10に続く土塁墓遺跡の可 能性があるため、調査を行 う (300m <sup>2</sup> )  Y 6 丘陵一帯に弥生および土 器片散見、さらに丘陵端 部に16m×19mの方形台状 墓らしい高まりがある。集 落址および墓地遺跡の可 能性が大である。 (1200m <sup>2</sup> )  B 4 径15m、高さ1.5mの円 墳流土および土取りで一部 を損壊内部主体不明 (300m <sup>2</sup> )  Y81 文化課が調査契約をして いた集落址であるが、その 剥奪り調査とりあえず工事 を魚ぐ山頂部 300m <sup>2</sup> を本年 度調査対象とする。 (300m <sup>2</sup> )	G12 10m×10m、高さ約1.2mの方形台 状墓、L字状の構造と列石および 土塁墓1を検出。保存状態の結果、 その時点までの調査で埋め戻し保存 となる。またG12周辺に複数の結果 土塁2、6世紀土器窯6、諫倉期土 器1、弥生中期堅穴式住居址1を検出 、遺跡範囲は20m×40mの800m <sup>2</sup> 4m×4mグリッド12、2m巾トレ ンチを縦延長120mを発掘、始瓦石 斧および土器片を探査するも、遺構 は検出できず。E 2号墳の横穴式石 室残骸1を発見調査する。 (実質調査面積 1,200m <sup>2</sup> )  B 4 13.5m×19mの方墳、尾根を切る房 溝、葺石、埴輪あり、内部主体はす ぐに削除。B 4直下に弥生後期の方 形台状墓が複合7土塁より構成、 さらに当該地は、弥生中期の集落址 とも重なる。 (実質調査面積 500m <sup>2</sup> )  Y81 丘陵尾根および斜面 50m×300mの の範囲における弥生集落址、今回は工 事上魚がれる山頂部 1,500m <sup>2</sup> のみを 調査、堅穴式住居址 3を発見 (実質調査面積 1500m <sup>2</sup> )

契約次	契 約 遺 跡	契 約 時 の 遺 跡 概 要	発 掘 調 査 の 結 果 概 要
9	①用木山遺跡 第1地点(Y81)  ⑥中池遺跡 (Y4)  ⑩用木山遺跡 第2、3地点(Y82) (Y83)  ④さくら山遺跡 第1地点(Y91)  (調査事務所移転)	<p>Y81～Y83 丘陵頂から丘陵尾根および、傾斜面一帯に広がる弥生集落址。遺跡範囲は95m×350m、面積約20,000m<sup>2</sup>のうち、本年度約4000m<sup>2</sup>の調査を行なう。</p> <p>Y4 中池を含む谷にのぞむ小谷口に広がる弥生散布地の調査約1000m<sup>2</sup></p> <p>Y91 径12m、高さ約1m程度の円墳。(さくら山1号墳J1)および、丘陵頂部に集落址が存在する可能性がある。 約1185m<sup>2</sup></p> <p>他に調査事務所を第7工区門前池南西に移転する。</p> <p>(調査予定面積 6185m<sup>2</sup>)</p>	<p>E 8 Y81調査区内において発見された横穴式石室、天井は持ち去られているが、床面部はほぼ完存、5体以上の埋葬が確認され、出土遺物も多い。 (実質調査面積 4000m<sup>2</sup>)</p> <p>Y81 用木山上部を前年に引き続いて調査。弥生住居址20戸、後期古墳(E8)1基古墳時代土塙墓3基、奈良時代散骨器1等の複合遺跡となる (S年間 1500m<sup>2</sup>)</p> <p>Y82 2m巾、総延長 260mのトレーナーと5m×5mグリッド162区画設置発掘。工事の都合でしばしば中断調査区移動のため本年度未完、40グリッドとトレーナー調査のみ (1520m<sup>2</sup>)</p> <p>Y83 丘陵尾根50m×120mが遺跡範囲。弥生集落址である。5m×5mグリッド 196区画を設置全面発掘。堅穴住居址30戸、横穴式石室残骸3基(E9、E11、E12)古墳時代土塙墓5基平安時代物址1を発見調査 (4900m<sup>2</sup>)</p> <p>Y91 さくら山山頂の遺跡、方形台状墓(J1)1基と、弥生住居址10戸、ピット7、土器刷り2を検出調査 (1500m<sup>2</sup>)</p> <p>Y4 巾2m総延長 180mのトレーナーと、5m×5mグリッド20区画を設置発掘調査。流土による埋蔵著しく、若干の弥生土器および須恵器片を採集するも遺跡検出できず (680m<sup>2</sup>) (実質調査面積 10,100m<sup>2</sup>)</p>
10	①愛宕山遺跡 第1地点(Y84)  ②愛宕山古墳群 第1号墳(D1) 第2号墳(D2) 第3号墳(D3)  ③さくら山遺跡 第2地点(Y92)  ④東山遺跡 (Y5)  ⑤用木山遺跡 第2地点(Y82)	<p>Y84 愛宕山山頂部から南面する傾斜面一帯に弥生集落址の広がる可能性があるため調査を行なう。 本年約3000m<sup>2</sup>を調査対象とする。</p> <p>D1～D3 丘陵尾根に直列状に連なる低平な小円墳3基、いずれも径12～20m</p> <p>Y92 緩やかに下降する丘陵尾根に広がる弥生集落址。約7500m<sup>2</sup>の遺跡範囲のうち3300m<sup>2</sup>を発掘調査の予定。当該地には、径15m高さ2mの円墳、岩田1号墳(E1)が存在する。すでに盗掘され内部主体は完全破壊されているが古墳も調査対象に含まれる。</p> <p>Y5 工事による削平で、堅穴住居址断面が露呈、緊急を要するため契約変更をして調査する。 2000m<sup>2</sup></p> <p>Y82 第9次契約であるが、本年度繰り越しとなつたもの。</p> <p>(調査予定面積 6300m<sup>2</sup>)</p>	<p>Y82 前年度よりの繰り越し調査 5m×5mグリッド 152区画全面発掘。急斜面を階段状に造成し、各平坦部に直列状に4～6戸単位の堅穴住居址があり、その単位集団11グループが集まって村を構成する(考古学年報24報告)11グループ約60戸の住居址とピット4柱穴群2、古墳時代土塙墓5基、横穴式石室残骸(E13)1基を発見 (3800m<sup>2</sup>)</p> <p>Y84 5m×5mグリッド 360区画を設置全面発掘。弥生住居址30戸、ピット6、古墳時代土塙墓1、縦穴副土塙墓4その他、別記岩田14号古墳を発見調査する。 (9750m<sup>2</sup>)</p> <p>E14 天井石はすべて持ち去られていたが、大型横穴式石室発見。傾斜面に溝を掘って構築した石室で、床面理敷設は完存。木棺9の他土器約200点等、副葬遺物が豊富である。</p> <p>Y5 弥生集落址、工事により大半を削平残存部1500m<sup>2</sup>調査。堅穴住居址6、土塙墓2 土器刷り3を検出調査する。</p> <p>D1～D3 古墳と思ったが台状墓2および弥生中期の大土塙墓群、230土塙を検出したが本年度未完</p> <p>Y92 E1号墳を含む約10000m<sup>2</sup>の集落址 5m×5mグリッド 240区画を設置するもY84調査のため中断し未完本年30区画750m<sup>2</sup>のみ発掘 (実質調査面積 15800m<sup>2</sup>)</p>

契約次	契 約 遺 跡	契 約 時 の 遺 跡 概 要	発 報 調 査 の 結 果 概 要
11	①愛宕山遺跡 第2地点(Y85) 第3地点(Y86)  ②用木古墳群 第7号墳(A7) 第15号墳(A15) 第16号墳(A16)  ③新宅山遺跡 (Y10)  ④三蔵畠遺跡 (Y11)  ⑤現状保存古墳 29基の外形測量  ⑥調査事務所の 用地外移転  ⑦出土遺物等資料 整理と報告書 第1分冊作成	Y85 丘陵頂から尾根支脈一帯に広がる弥生中期末の土墳墓群 (1000m <sup>2</sup> )  Y86 地形的にみて、愛宕山から北にのびる尾根およびその東斜面に弥生集落址の広がる可能性があるため、調査対象となる (3000m <sup>2</sup> )  A 7.15.16. A 7は全長25mの前方後円墳、または台状墓、A15、A16は径10m前後の低平な円墳。いずれも未撲墳と思われる (500m <sup>2</sup> )  Y10 用木7、16号墳の立地する丘陵で弥生土器片散見。集落址の可能性あるため調査対象となる。 (500m <sup>2</sup> )  Y11 Y10調査中に谷に向かっておろしたトレンチ調査によつて発見された平安期造橋、土師生産址の可能性があるため、追加契約となる (700m <sup>2</sup> )  ⑥～⑦については略	Y92 前年度に引き続く調査、5m×5mグリッド 210区画、6250m <sup>2</sup> の調査範囲から弥生中期末住居址11ヶループ49戸、ピット13、土塁1、古墳時代土墳墓3、岩田1号墳(E1)等を検出調査 E 1号墳は、径17mの円墳、内部主体は完全破壊、土師質陶器を埋納する壙穴式石室と推定、周溝をもち、葺石、埴輪あり。墳丘下、墳外周辺に3土墳墓と、1土器箱検出され注目された。  Y86 前年に引き続く調査。丘陵頂に検出された230土墳の他に、さらに北にのびる丘陵尾根に60土墳を発見。計約300基にのぼる弥生中期末の大土墳墓群となった。  D 1～D 7、Y84、Y86の調査の際に新たに発見されたものも含めて、計7基の方形台状墓。いずれも一辺10m内外によって区画されており、内部主体は木棺直葬、1～2をもつ。古式土築を併存する。  Y86 北にのびる丘陵の東斜面に広がる弥生集落址。約2000m <sup>2</sup> の遺跡である。壙穴住居址14、ピット約20、土墳墓7、および平安期八腰鏡を埋納する土墳墓1を発見した。  A 7. 12m×16m、高さ1.2mの方墳、内部主体は木棺直葬、蓋石をもつ。墳外周辺に6土墳墓検出。  A15 径10mの小円墳。外部施設なし。内部主体木棺直葬。  A16 封土流失、蓋掘され、蓋石を持ち去られた箱式石棺を発見。  Y10、A7、A15号墳周辺の丘陵尾根で発見された弥生集落、壙穴住居址4、ピット2を検出調査  Y11、小さな谷斜面の一画に平坦部を作った、平安期の土師器を製作した窯址。窯本体の他、灰原、粘土搅拌槽、作業小屋らしい住穴址等を検出調査した。  *保存古墳の外形測量 用地内に現状保存される古墳29基の外形測量を行なった。 *報告書第1分冊作成と出土遺物整理作業 *調査事務所を用地外へ移転(旧西山小学校跡地へ) (実質調査面積 10,300m <sup>2</sup> )
12	*出土遺物整理 *報告書作成第4～6集	*出土遺物及諸記録類整理作業	

岡山県教育委員会発掘調査団の調査			
調査時	契約遺跡	契約時の追跡概要	発掘調査の結果概要
1.	門前池西方遺跡	<p>門前池西方遺跡のうち、山陽國地中央幹線道路予定地に弥生土器および須恵器片の散布する小谷の谷奥部（第1地点）、谷口部（第2地点）、谷端部（第3地点）の発掘調査を行ない、遺構の検出ならびに記録を作成する。</p> <p>※調査予定期面積約3000m<sup>2</sup></p> <p>※調査期間 S 46.6.1～S 47.1.31.</p>	<p>第1地点 谷頭部1500m<sup>2</sup>の遺跡範囲に弥生後期および古墳時代（5C）の堅穴住居址21、土器窯2を検出。</p> <p>第2地点 丘陵裾から狭い谷部にかけて、約3,200m<sup>2</sup>の遺跡範囲。弥生時代堅穴住居址39、土壙16、耕作2、および平安時代巨大建物址5を検出。</p> <p>第3地点 門前池堤防下の谷頭部、1300m<sup>2</sup>発掘。弥生時代堅穴住居址2、奈良時代と思われる瓦窯1、北に隣接する丘陵平垣部に寺院並の立地する可能性あり。 (S950m<sup>2</sup>)</p>
2.	<p>・門前池西方遺跡</p> <p>・便木山第7号墳</p>	<p>・門前池西方遺跡 門前池西方遺跡（元ヤケ池遺跡、門前池遺跡）約60,000m<sup>2</sup>のうち、谷水田部はトレンチによる試掘によって遺構存否の確認調査。 舌状台地部約6000m<sup>2</sup>については全面発掘による記録保存調査を行なう。</p> <p>・便木山第7号墳 全面発掘を行なう。舌状台地に複数する小古墳である。すでに盗掘にあい大破しているが、埴輪の置換が知られている。</p> <p>※今回調査予定期面積2000m<sup>2</sup></p> <p>※調査期間 S 48.8.1～S 49.12月末日</p>	<p>門前池西方遺跡 ・第1～3地点 谷水田部トレンチ調査による遺構確認調査。第2地点に弥生時代溝遺構3、第3地点に弥生住居址2、平安時代溝遺構2、他に杭列1を検出した。トレンチ発掘面積は1,000m<sup>2</sup>である。</p> <p>・第4地点 舌状台地部6,400m<sup>2</sup>を全面発掘の結果、弥生時代堅穴住居址27、土壙12、歴史時代建物2の他、鐵冶炉1を発見した。</p> <p>・便木山第7号墳 盗掘およびその後の開墾等で大破され、封土の大半は削平されており、内部主体もすでに消失していた。地山に割られた周溝が遺存し、もと本古墳は推長20.5m程度の帆立貝式の前方後円墳であったことが判明した。須恵器埴輪を有し、墳丘基底部で、小組合せ式石棺1を検出した。 (7,420m<sup>2</sup>)</p>

\* 県調査団発掘調査による、門前池西方遺跡の調査報告はS50年3月県教委刊行。

表6. 山陽団地埋蔵文化財発掘調査出土遺物一覧

(町教委調査分)

弥生時代出土遺物				古代出土遺物		
石器		土器・土製品				
石 槌	10点	甕	12点	火葬骨器	5	
石 包 丁	74个	壺	10个	備前焼土器	1	
始刃石斧	86个	高 坏	4个	鐵 鋸	1	
扁平片刃石斧	12个	鉢	4个	古 銭	68	
柱状石斧	10个	器 台	4个	瑞花八稜鏡	1	
環状石斧	4个	手づくね土器	8个	白 磁	2	
石 鋸	7个	分類型土製品	53个	灯 明 皿	3	
石 鋸	1545个	水鳥形土製品	1个	鐵 帶	1	
石 鋸	10个	紡 輪 車	6个	土 器 片	整理箱 20箱 岩 干	
石 鋸	13个	土 玉・土 錐	10个	鐵 器 類		
石 棒	1个	土 器 片	整理箱 1027箱			
砾 石	28个	その他 の 遺 物				
その他石器類	12个	炭化植物(桃等)	整理箱 2箱			
石器片、サヌカ イト網片	整理箱 21箱	炭化木材	整理箱 7箱			
古墳時代出土遺物						
金属器		装身具		須恵器		
銅 鏽	9点	金 環	32点	壺	32点	
銅 鏈	45个	勾 玉	24个	坏	190个	
銅 鈴	1个	管 玉	55个	高 坏	15个	
環頭太刀	2个	その他玉類	1812个	台 付 坏	6个	
鐵 刀	12个	梯	1个	盤	2个	
鐵 剣	14个	土 師 器		裝飾子持土器	2个	
鐵 槍	6个	壺	10点	環	7个	
鐵 斧	10个	鉢	2个	提 扇	14个	
鐵 鐵	32个	高 坏	3个	横 扇	2个	
鐵 鐵	5个	盤	15个	平 扇	8个	
鉈	12个	坏	6个	須恵器片	整理箱 6箱	
鐵のみ	1个	円筒埴輪	6个	そ の 他		
刀 子	7个	人物埴輪(頭部)	1个	陶 棚	3	
鐵製紡錘車	1个	家型埴輪	1个	紡錘車	2	
馬 具	2个	埴輪片	整理箱 14箱	鐵 さ い	整理箱 3箱	
鐵 鉗	約 200本	土 師 器 片	整理箱 5箱	諸サンプル	整理箱 9箱	

(整理箱は63×40×15cm, セキスイコンテナを使用)

表7 発掘調査報告書作成予定一覧

分冊	集録遺跡名	作成年次
第1集	・調査経過の総括 ・山陽町の地理的、歴史的環境 ・用木古墳群15基 ・現状保存遺跡の概要	既刊 昭和50年3月
第2集	・便木山遺跡 ・惣岡遺跡第1地点 ・岩田古墳群第3・5号墳2基	既刊 昭和47年7月
第3集	・四辻土塗墓遺跡 ・四辻古墳群7基 ・四辻方形合状墓 ・便木山方形合状墓 ・さくら山方形合状墓 ・宮山第4号墳・合状墓	既刊 昭和48年3月
第4集	・用木山遺跡 ・惣岡遺跡第2地点 ・中池遺跡 ・大久保遺跡 ・新宅山遺跡	昭和51年度
第5集	・さくら山遺跡 ・愛宕山遺跡・愛宕山土塗墓遺跡 ・愛宕山古墳群9基	昭和51年度 (昭和51年8月)
第6集	・岩田古墳群9基 ・野山古墳群2基 ・三蔵塙遺跡 ・古墳時代・平安時代土塗墓	昭和50年度 (昭和51年3月)
県教育委員会 報告書	・門前池西方遺跡 ・便木山古墳群第7号墳	既刊 昭和50年3月

( ) 内年月は刊行予定年月である。

る。そして岡山県との間にとりかわされた発掘調査委託契約は、現在の整理および報告書作成も入って、前後12回にわたり締結したことになる。委託契約状況及び発掘調査遺跡の概要、出土遺物や発掘調査報告書の作成計画等については、表7に一覧表としてまとめ集録しているので参照されたい。

## 5. 地理的歴史的環境

山陽町は、砂川流域に拓けた約20haの埋積平地を中心に、まわりを低い山々で取り囲まれた、小じんまりとした盆地である。この地に入るには、狭隘な谷か峠道をたどって山越えを余儀なくされ、一つのまとまりをもった単位地域を構成している。

まわりを取り囲む山々は、複雑に開析されて巾狭な馬の背尾根となっているが、その稜線はなだらかで、山頂近くまで開拓されて果樹園や放牧場となっている。しかし谷に向う斜面は山麓まで概して急傾斜で松林が多い。少ない雨量と地形的な制約からか、浸蝕谷の入口をふさいだ農業用貯水池の分布が目立つ。当地は気候も温暖で、風害も少なく、盆地内には4か所にのぼる条里制の跡が残ることが物語るように、肥沃な耕地に恵まれ、古くより綠豊かな農村であった。

山陽町は埋蔵文化財の分布密度が高い。昭和50年3月末現在での確認遺跡数は225遺跡におよぶ。南方前池遺跡(図2-219)をはじめ、吉原1号～3号古墳(145～147)、唐臼古墳(165)、大坂古墳(130)など、かって研究者によって発掘調査されている。また国指定史跡で周濠に水を満たし、均整のとれた全長192mの前方後円墳宮山古墳(16)を中心とした、森山、廻り山、茶臼山、小山、朱千駄の100m級の巨大古墳群は、近くにある備前國分寺(19)同國分尼寺(18)瀬戸町般音寺丸山古墳(B)岡山市牟佐大塚古墳(A)などと共に、多くの研究者や一般の人たちも見学に訪れる著名である。町内の遺跡の大部分は、弥生時代中期から古墳時代にかけての所産に集中するが、縄文時代晚期の南方前池遺跡、時代を降って備前國分寺跡や条里制遺跡なども存在する。砂川水系に拓けた一盆地の単位地域において、縄文時代晚期から律令国家成立にいたるまでの各時代の遺跡資料を、順を追って見ることのできる地区である。

町内所在の遺跡分布については、本調査概報第1集の地理的歴史的環境の稿で詳述し、2万5千分の1地形図に通し番号を付した遺跡地図と、個々の遺跡の概要を記した遺跡一覧を掲載しているので参照願うこととして、ここでは、その遺跡地図の再録と、遺跡についてのその概要を記すにとどめたい。

当町内最古の遺跡は、埋積平地南縁の山側に所在する縄文晚期の南方前池遺跡(図2-219)である。前池と呼ばれる池底で発見された、縄文時代晚期から弥生時代にかけての遺跡であるが、なかでも縄文時代晚期の食物貯蔵穴が多数発見され著名である。また埋積平地のほぼ中央部、砂川自然堤防の東にあたる山陽小学校敷地に、遺賀川式土器とともに弥生時代前期の集落址(190)が存在する。

埋積平地を取り囲む丘陵の斜面から、山麓台地一帯にかけての広い範囲にわたって、弥生時代中期から奈良・平安期にかけての土器片の散布や集落址が発見されている。これらの遺跡は概して、

弥生時代中期中葉から後期初頭へかけてのものが、谷頭に面した丘陵尾根や斜面の高所に集中し、弥生時代後期以降は山麓部などの平地との接する部分に集中する。こうした谷口や山麓部の較高地の集落址は広い範囲にわたるものが多く、大きいものでは遺跡範囲が60,000m<sup>2</sup>におよぶものがある。なかでも、岩田大池遺跡(107)、門前池遺跡(113)、熊崎遺跡(117)などは顕著である。

古墳をはじめ墳墓の分布も密度が高い。平地の一角と、まわりを取り囲む山々の麓や、そこからのびる小丘陵の上に大小多数の古墳が分布する。

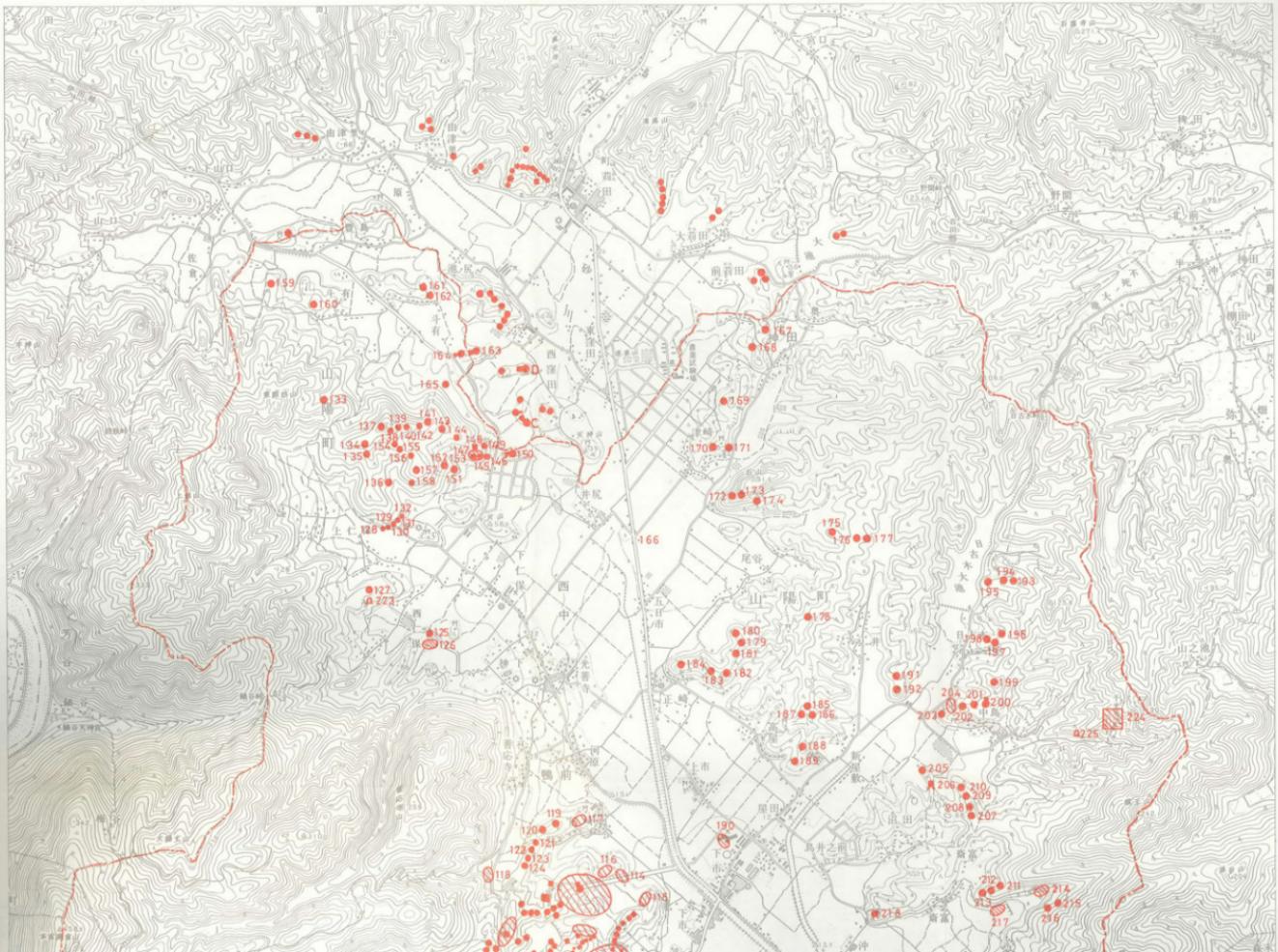
平地の南西部には、両宮山古墳(16)を中心とする大型の前方後円墳5基が、水田中や山麓に所在する。両宮山古墳の後背地でもあり、今次住宅団地開発事業が行なわれている東高月丘陵群には、四辻土壙墓遺跡(100)をはじめ、宮山方形台状墓(103)、さくら山方形台状墓(104)など、弥生時代後半期を中心とした土壙墓・台状墓6遺跡と、それに引き続ぐ用木古墳群(38~53)等8支群77基の古墳が所在する。これらの古墳は、当地域における初現的なものから、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群に至るまで、古墳時代全期間を通して、順を追って見ることのできる古墳群である。

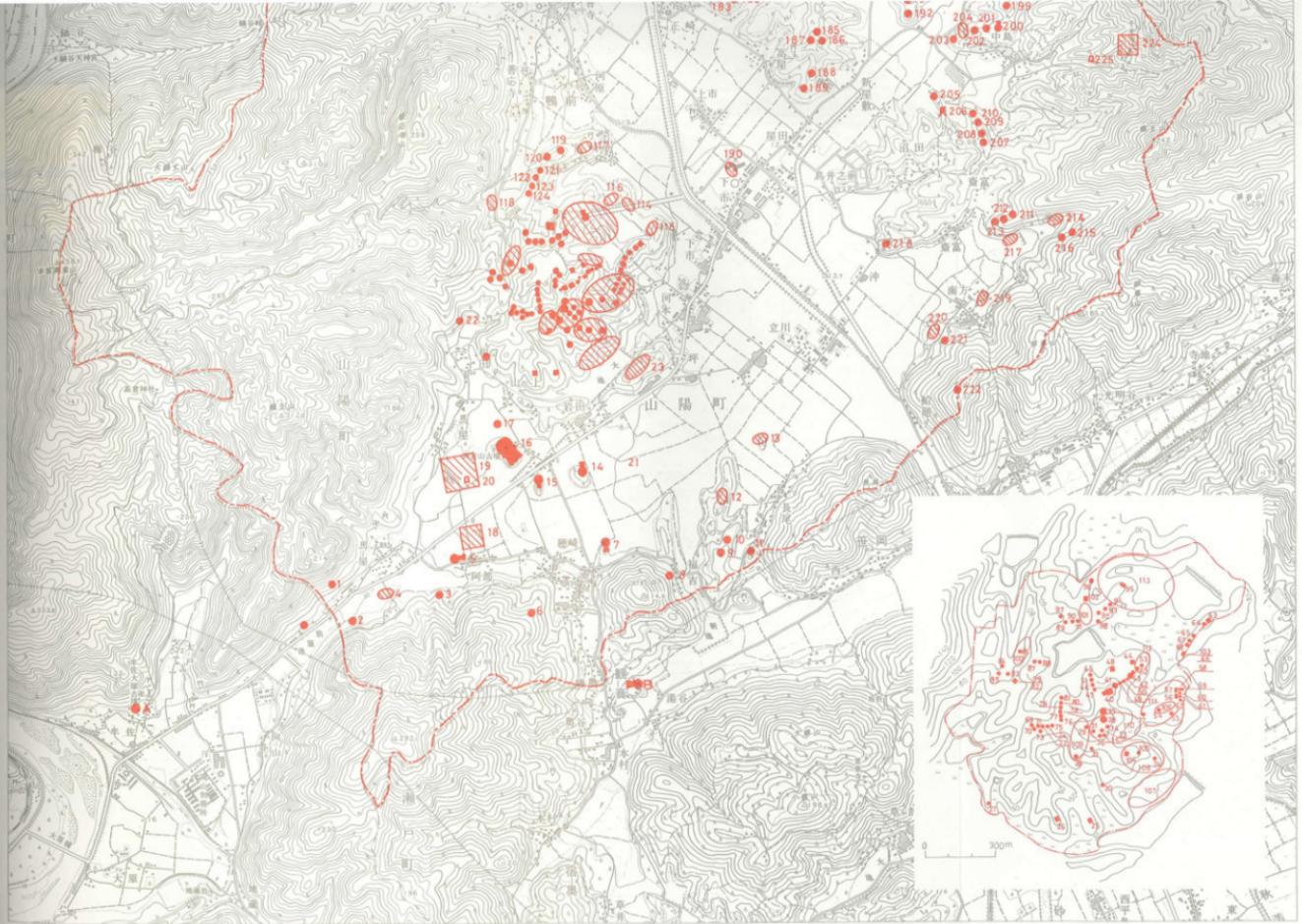
町内北西部西山地区を中心とした地域は、一部勝町の赤坂町にまたがるが、前方後円墳5基を含む方墳・円墳約40基からなる西山古墳群を構成している。内部主体も土壙、粘土構、土器棺、箱式石棺、横穴式石室。また陶棺も土師質、須恵質とバラエティに富んでいる。中でも吉原6号墳(150)は近年盗掘被害を受けた前方後円墳であるが、青銅鏡2面を出土、また鳥取上高塚(C)は、前方後円墳で巨大な横穴式石室を有し、両宮山古墳の西方約3kmに所在する牟佐大塚(A)の横穴石室(全長18m)との対比の上で興味深い。

砂川東岸の東部地区には、約40基の小形古墳が存在するが、前2区に比べて、大形首長の系列が見られない。全体としてまとまりをもたず、小谷単位の数基程度の支群を構成しながら分散している。なおこの地区には、6世紀中葉を限って須恵器生産がなされたと思われる別所窯跡(206)が存在する。

この地域は、旧山陽道の通過地にもあたり、埋積平地の西端部岡山市に通じる谷あいに、高月馬屋の地名が残る。両宮山古墳の西に接するようにして備前国分寺跡(19)がある。今春保存を目的とした寺域確認のための発掘調査が行なわれ、方600尺の寺域と南北中軸線上に直列する南門、中門、金堂、講堂、それに中門の東に塔址などの主要伽藍と、僧房などの配置や規模構造をほぼ確認できた。現在は国指定史跡となり、もとの水田面下に現状保存されている。国分寺跡の南約200mの仁王堂池に、かつて備前国分尼寺(18)が建立されていたと伝えられ、今も池底に礎石が残り、瓦片が散見される。またこの埋積平地のはば全域にわたって条里(21・166)が敷かれ、現在も整然とした地割のようすをよくとどめている。山陽団地内の発掘調査においても、門前池西方遺跡(113)で、平安期の巨大建物群、谷口で奈良期の瓦が発見され、官衙址および寺院址の存在が問題となつた。また三歳畠遺跡(112)では、鎌倉期の土師器を製作した古窯址を含む工房が発見されたが、いずれも開発事業によって削平埋没したのは惜しまれる。

砂川流域にひらけた埋積平地を中心として成立する山陽町は、以上のように、縄文時代晚期から古代国家成立期までの、各時代の資料を一か所で順を追って見ることのできる地域である。弥生時





代の多くの遺跡や用木古墳群などを母体として、両宮山古墳や備前国分寺に代表される、東吉備の国における政治的、経済的な中心地であったと考えられる。

## 6. 用地内の埋蔵文化財

住宅団地開発事業用地内の埋蔵文化財の質と量は、当初の予想をはるかに上まわる密度であったことは、すでに繰り返し述べてきた。そして最終的には用地内遺跡分布図および用地内遺跡一覧表に示すごとく、集落遺跡7、土壙墓・台状墓6、古墳77の総数90遺跡となったのである。

用木山遺跡(110)や惣園遺跡(109)のように、標高60mから90mの高所の丘陵尾根や斜面などに所在する集落址は、弥生時代中期中葉から後期初頭までの、比較的短期間の時期を限ってのものである。これに対して岩田大池遺跡(107)や門前池西方遺跡(113)のように、丘陵裾や谷口の坦積平地と接する集落址は、主として弥生時代後期から始まり、後の古墳・奈良・平安時代へと引き続いて営なまれ、遺跡範囲も大規模なものが多い。

土壙墓を中心とした墳墓遺跡は、71土壙・3土器棺で構成される弥生時代中期中葉から後期初頭の四辻土壙墓遺跡(100)をはじめ、約300土壙墓で構成される弥生時代中期末を中心とする愛宕山土壙墓遺跡(106)、弥生時代後期初頭の宮山方形台状墓(103)、弥生時代後期末の便木山方形台状墓(102)、41土壙、6土器棺で構成される画津式併行期の便木山遺跡(101)、王治6層併行期と思われる愛宕山方形台状墓群(55~62)等、各時期にわたる遺跡が存在し、定形化直前の初現的な古墳、用木古墳群への橋渡しとなるものである。

古墳の分布は、門前池および中池を含む谷水田を抱きかかえるようにのびる、丘陵尾根稜線にその大部分は集中する。門前池東方の宮山古墳群6基、愛宕山古墳群9基、用木古墳群16基、野山古墳群13基、四辻古墳群7基、便木山古墳群10基がそれである。この他用木山南斜面の横穴式石室墳9基を含む岩田古墳群14基、さくら山古墳群2基の計77基が所在する。これらの古墳は用木古墳群に代表されるように、前期古墳の特徴をもつものが圧倒的で、かつ未掘墳が多く保存度も良好であったことが特筆される。

そのほか、集落遺跡の発掘調査中など、丘陵表土を広範囲に剝離調査を行なった関係から、古墳時代から鎌倉期にかけての土壙墓や土器棺(瓶骨器)、平安時代の巨大建物群、鎌倉時代の土師器・古窯址などが検出され注目された。



○印は 現状保存古墳

●印は 発掘調査古墳

第3図 山陽団地用地内遺跡分布図

表8 山陽団地用地内埋蔵文化財一覧

昭和50年3月31日現在

古墳群	古 墳	遺跡地 番号	墳 形	径(m)	高(m)	保存度	取扱区分		マスター・ブランとの関係	消滅年月日
							保存	調査		
用木古墳群	A-1	38	円 墳	31.0	5.0	○		○	中心施設	48. 1. 23
	2	39	"	(22.0)	(3.0)	○		○	小学校	48. 8. 27
	3	40	前方後方墳	43.0	4.0	○		○	"	"
	4	41	万 方 墳?	(25.0)	(4.0)	○		○	"	"
	5	42	万 方 墳?	12.0	0.8	○		○	児童公園	50. 2. 15
	6	43	前方後円墳	37.0	4.0	○	○	○	学 校	47. 3. 31
	7	44	方 墳 墳	14.0	1.2	△	○	○	学 校	48. 8. 27
	8	45	内 墳	(6.0)	?	△	○	○	公 路 板	47. 3. 31
	9	46	?	(6.0)	?	△	○	○	"	"
	10	47	方 墳	12.0	1.5	△	○	○	"	"
	11	48	方 墳	16.0	1.5	△	○	○	"	"
	12	49	?	?	?	△	○	○	公 社 建 立	47. 3. 31
	13	50	?	?	?	△	○	○	"	50. 2. 15
	14	51	?	?	?	△	○	○	"	"
	15	52	円 墳	11.5	2.0	○		○	公 社 建 立	48. 8. 27
	16	53	?	?	?	X			"	"
宮山古墳群	B-1	63	方 円 墳	16.0	3.1	○		○	綠 地	—
	2	64	"	17.0	1.7	○		○	道 路	—
	3	65	方 円 墳	17.0	1.2	○		○	"	47. 3. 10
	4	66	"	15.0	1.5	△	×	○	"	"
	5	67	方 円 墳	12.0	0.5	×	×	○	"	"
	6	68	"	12.0	?	○			"	"
野山古墳群	C-1	69	円 墳	10.0	1.2	○		○	近隣公園	—
	2	70	"	14.0	1.2	○		○	"	—
	3	71	"	16.0	1.6	○		○	"	—
	4	72	"	12.0	1.5	○		○	"	—
	5	73	"	10.0	?	○		○	"	—
	6	74	"	10.0	0.9	○		○	"	—
	7	75	"	11.0	1.0	○		○	"	—
	8	76	"	15.0	1.0	○		○	"	—
	9	77	"	14.0	2.0	○		○	"	—
	10	78	"	17.0	1.8	○		○	"	—
	11	79	"	14.0	1.8	○		○	"	—
	12	80	"	15.0	2.0	○		○	"	—
	13	81	"	15.0	1.1	○		○	"	—
愛宕山古墳群	D-1	84	円 墳	(10.0)	(1.0)	○		○	公 社 建 立	49. 3. 18
	2	85	方形台状	20.0	1.2	○		○	"	50. 1. 26
	3	86	"	14.8	1.2	○		○	"	"
	4	87	"	12.0	0.8	○		○	"	"
	5	88	"	11.6	1.0	○		○	"	"
	6	89	"	10.0	(1.0)	○		○	"	"
	7	90	"	(10.0)	?	○		○	"	"
	8	91	"	(10.0)	?	○		○	"	"
	9	92	"	(10.0)	?	○		○	"	"
岩田古墳群	E-1	24	円 方 墳	17.0	2.0	×	×	○	當 住 公 宅	49. 5. 4
	2	25	"	20.0	1.7	△	○	○	宅 地	46. 1. 20
	3	26	"	18.0	1.5	○		○	地 路 地	46. 8. 8
	4	27	"	15.0	2.1	○		○	道 場	46. 7. 15
	5	28	"	13.0	1.5	○		○	線 路 分	47. 4. 29
	6	29	"	?	?	○		○	分	48. 12. 26
	7	30	"	?	?	○		○	"	44. 10 以 前
	8	31	"	?	?	○		○	"	48. 1. 23
	9	32	"	?	?	○		○	"	"
	10	33	"	?	?	○		○	"	48. 12. 26
	11	34	"	?	?	○		○	"	48. 1. 23
	12	35	"	?	?	○		○	"	"
	13	36	"	?	?	○		○	見童公園	48. 12. 26
	14	37	"	?	?	△	○	○	"	"

古墳群	古 墳	遺跡地 図番号	墳 形	径(m)	高(m)	保存度	取扱区分		マスター・プランとの関係	消滅年月日
							保存	調査		
四 辻 古 墳 群	F-1	82	円 墳	18.0	2.0	○	○	○	公営住宅	47. 5. 24
	2	83	"	9.0	1.0	×	○	○	"	47. 3. 26
	3	84	"	9.0	2.0	△	○	○	公社建売	45. 12. 4
	4	85	"	9.0	1.0	×	○	○	"	47. 3. 4
	5	86	"	15.0	1.5	○	○	○	"	47. 3. 27
	6	87	"	15.0	1.2	△	○	○	"	47. 3. 27
	7	88	"	15.0	1.2	○	○	○	"	47. 3. 27
便 木 山 古 墳 群	G-1	89	円 墳	12.0	1.0	○	○	○	児童公園	—
	2	90	"	13.0	1.5	○	○	○	"	—
	3	91	"	18.0	2.0	○	○	○	"	—
	4	92	"	8.0	1.0	○	○	○	"	—
	5	93	"	12.0	1.0	○	○	○	"	—
	6	94	"	10.0	0.8	○	○	○	"	—
	7	95	前方後円 台状基?	(20.5)	2.0	△	○	○	"	—
	8	96	合状基?	16.5	1.0	○	○	○	"	—
	9	97	"	10.0	0.8	○	○	○	"	—
	11	98	円 墳	?	?	×	○	○	分譲宅地	44. 10以前
	J-1	104	方形台状	9.5	0.8	△	○	○	分譲宅地	47. 9. 10
	2	105	"	?	?	△	○	○	"	49. 5. 4
さくら 山群										

	遺 跡			取扱区分	マスター・プランとの関係	消滅年月日
	遺 跡 名	遺跡記号	地図番号			
土 方 墳 墓 合 遺 状 跡 墓	四辻土塚墓遺跡	F-8	100	○	公社建売	47. 3. 4
	四辻岬方形合状墓	F-1	99	○	公営住宅	47. 5. 24
	愛宕山土塚墓遺跡	Y-85	106	○	"	50. 2. 15
	便木山遺跡	G-10	101	○	幹線道路	46. 11. 30
	便木山方形合状墓	G-12	102	○—○	児童公園	—
	宮山方形台状墓	B-4	103	○	修景綠地	47. 3. 10
集 落 址	岩田大池遺跡	Y-1	107	○	修景綠地	—
	門前池西方遺跡	Y-2・3	113	△—△	公園・分譲地	—
	用木山遺跡	Y-8	110	○	分譲宅地	48. 8. 27
	惣園遺跡	Y-7	109	○	中心施設	46. 10. 12
	さくら山遺跡	Y-9・5	108	○	公営住宅	49. 5. 4他
	愛宕山遺跡	Y-85・86	111	○	公社建売	50. 1. 26他
	三藏畠遺跡 (中池遺跡)	Y-10・11	112	○	公社建売	50. 2. 15
	(大久保遺跡)	Y-4	—	○	小学校	48. 1. 23
		Y-6	—	○	社宅他	46. 8. 8

( ) 内数値は推定値を示す。

# 岩田古墳群

I 岩田古墳群.....	27
II 岩田古墳群第1号墳.....	33
III 岩田古墳群第6号墳.....	80
IV 岩田古墳群第7号墳.....	88
V 岩田古墳群第8号墳.....	92
VI 岩田古墳群第9・11・12・13号墳.....	136
VII 岩田古墳群第14号墳.....	158
VIII 岩田古墳群総括.....	261

# I 岩田古墳群

## 第1章 序 説

岩田古墳群は事前の分布調査の結果、第1号墳から第5号墳までの5基の古墳が確認されていたのみであった。その後、用木山遺跡をはじめ、当該丘陵一帯に広がる弥生時代の集落遺跡が発見されて、発掘調査の対象となり、それらの調査の過程で同一立地に複合所在する、すでに破壊されて地下に埋没した横穴式石室の残骸が次々に発見された。また、住宅団地造成事業にともなう工事用取付道敷設によっても、第10号墳が工事担当者の気付かぬままに破壊され、調査不能となる事態もあった。こうして岩田古墳群は、最終的には少くとも14基の古墳で構成される古墳群となった。しかしこれら14基の古墳は、その多くがすでに「記録保存」と決定している集落遺跡の調査中に、偶然に発見されたこともある、現状保存の処置は困難であった。結局当初の保存協議の際に現状保存と定められていた第2号墳と第4号墳の2基のほかは、すべて住宅団地開発事業の犠牲となって発掘調査の対象とされ、集落遺跡の調査と合せて実施せざるを得なかつたのである。

発掘調査を実施した岩田古墳群11基のうち、第3号墳と第5号墳の2基については、開発事業の工事工程等の関係から発掘調査が急がれ、昭和45年度に締結された山陽団地埋蔵文化財発掘調査第4次委託契約にもとづいて、先に発掘調査が行なわれ、その調査結果は昭和46年7月刊行の本発掘調査概報第2集において報告済である。したがって本書では、その後発掘調査を実施した、第1号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳、第9号墳、第11号墳、第12号墳、第13号墳、第14号墳の9基について調査結果を収録した（図4）。

今回ここに報告する古墳は、事前にその存在が知られていた第1号墳のほかは、すべて集落遺跡の発掘調査によって、はじめて検出されたものである。すなわち、惣園遺跡（略記号Y72）の発掘調査中に第6号墳、大久保遺跡（Y6）の発掘調査中に第7号墳、用木山遺跡（Y8）の発掘調査中に第8・9・11・12・13号墳、愛宕山遺跡（Y84）の発掘調査中に第14号墳が発見された。この間の発掘調査委託契約は、第7次から第11次にわたる4契約、実質調査期間は、昭和46年7月から昭和49年12月にいたる約3か年半におよぶのである。これらの集落遺跡の発掘調査中に発見された各古墳については、改めての遺跡発見届や発掘調査届の提出、また発掘調査委託契約等は締結していない。集落遺跡と同一地域に複合して存在することもあって、それぞれの集落遺跡の発掘調査委託契約に、包括されるものとして取り扱かれたのである。その意味においては、惣園遺跡等の各集落遺跡の発掘調査区ごとに、これらの古墳も合せて報告すべきであるかも知れないが、用木山の南面した丘陵支脈の尾根上あるいは斜面に立地し、横穴式石室を内部主体とするという共通点をもち、同一古墳群としての性格も強いので、集落遺跡とは切り離して、ここに一括契約してまとめることにした。

さらに前記集落遺跡の発掘調査に際して、今までふれなかったが、本古墳群と同様に集落遺跡の中に掘り込まれた、須恵器数個が供獻された土壙墓が散在していた。これらの土壙墓について

も、次稿にとりまとめて集録しているので、合せて参照願いたい。

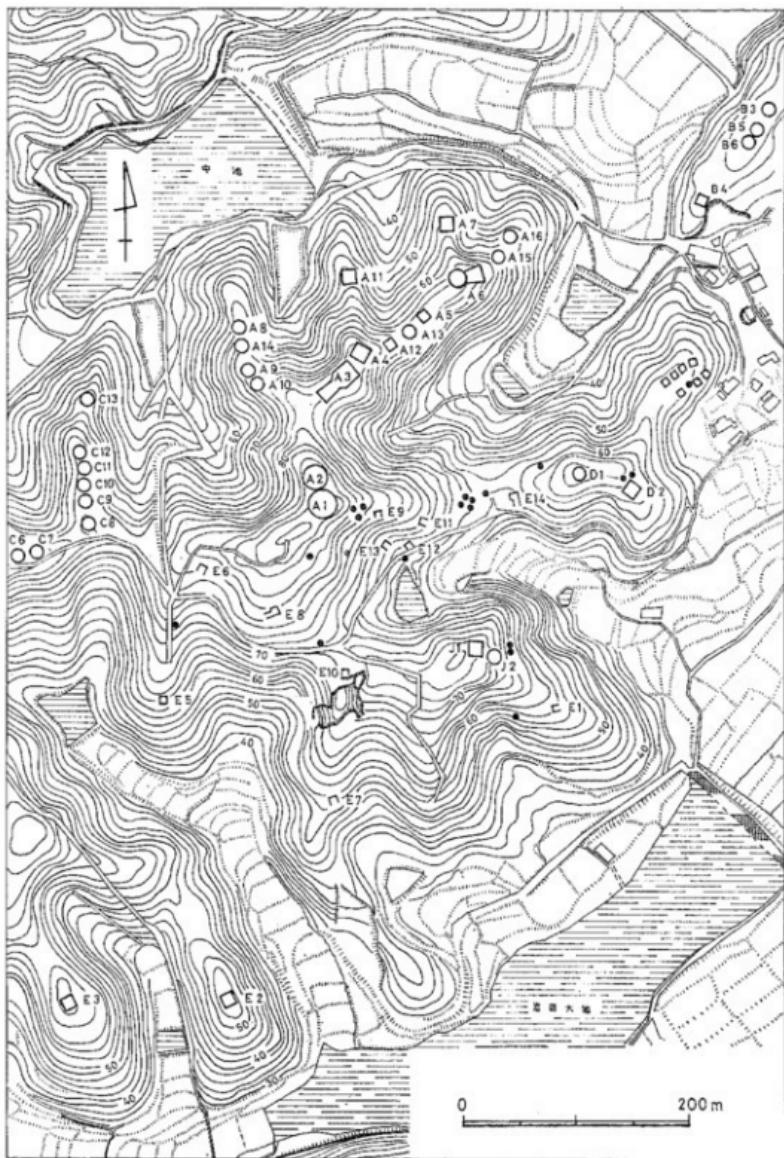
なお今次の発掘調査において、岩田8号墳は石材採取の目的で天井石のすべてと、一部側壁を持ち去られていたものの、石室構造を比較的によく遺存し、陶棺および木棺の追葬過程をとどめていることや、当該丘陵内に横穴式石室墳が1基も保存できない可能性が強いことから、保存協議の対象となった。しかし当該地が住宅団地造成技術上、現在地での保存が困難のため、次善の策として近隣自然公園に予定されている野山地区へ解体移築が計画され、一応第8号墳石材は、それに備えて搬出されていた。ところが、その後の岩田14号墳の発掘調査の結果、14号墳の方が8号墳にくらべて保存度も良好で、しかも検討の結果現地保存が可能ということになった。山陽地理文化財保護対策委員会への諮詢をはじめ、関係者間における数次にわたる協議の結果、住宅団地造成計画を一部設計変更をしていただき、児童公園内に取り入れた形で、天井石および埴輪などを一部復元補強を行ない歴史教材施設として活用することになった。さらに先に移築の計画で搬出していた第8号墳の石材は、山陽団地開発事業とともに発掘調査された61遺跡の慰靈碑として活用し、野山自然公園内に建立された。関係機関各位の理解ある協力と努力に対して感謝の意を捧げるとともに、文化財保護の一つの成果として評価したい。

## 第2章 岩田古墳群の立地

岩田古墳群は、岡山県赤磐郡山陽町大字河本から和田にかけての丘陵上に所在する、14基の古墳で構成される古墳群である。

木占墳群が立地し、また住宅団地開発事業が施行されているこの丘陵は、砂川流域にひらけた約20畝の埋積平地の一角に、それを見おろすように西から東へ大きく張りだした丘陵群である。すなわち、平地の西方に高くそびえる標高458.5mの高倉山塊の東面急斜面は、山麓近くの標高85m付近で鞍部をつくり、そこから眼前の埋積平地に向けて、緩やかな起伏をみせながら、扇状に広がる低丘陵群を形成しているのである。この丘陵群の広がりは、東西約900m、南北約1,200mにおよび、4本の谷水田とその支谷によって複雑に開折され、枝状に多くの支脈を分岐しながら広がっている。したがって各丘陵支脈は尾根巾の狭い馬の背形ながら、その陵線は比較的に緩やかな起伏をもって、なだらかに長くのびているが、尾根突端部およびその両側斜面は浸蝕されて、おおむね急傾斜となっている。

この丘陵地一帯は、東高月遺跡群と総称され、本古墳群をはじめとする数多くの古墳と、弥生時代集落址および土塙墓・方形台状墓を中心とした、総計90遺跡におよぶ埋蔵文化財が密集している。なかでも古墳は、一部用地外の熊崎古墳群を含めて、9支群83基と分布密度が高い。古墳の大部分は丘陵群北東部の門前池を谷口として、中池のある丘陵中心部に向かって入り込んだ谷水田を抱きかかるように取り囲む、丘陵尾根稜線上に集中して立地している。すなわち、東谷口の宮山から、西谷口の便木山にかけて右まわりに、宮山古墳群6基、愛宕山古墳群9基、用木古墳群16基、野山古墳群13基、四辻古墳群7基、便木山古墳群10基がそれである(図3)。これらの古墳は各支群ごとにまとまりを持ちながらも、谷筋約200mの谷水田をはさんだ丘陵尾根の稜線上に、直列



第4図 岩田古墳群周辺地形図

岩田古墳はE番号

状に連続して群在し、しかもそのほとんどが、前期古墳的な様相を示す小規模墳である。

上記の群在する古墳群にくらべて、岩田古墳群は同一丘陵地内にありながら、その分布状態や立地、古墳築成の年代や構造を異にする。岩田古墳群はもともと分布状況は密ではなく、丘陵群のはば中央に東西に連なる尾根線を構成する標高92mの用木山と、標高86.3mの野山を分岐点として、そこから南へ向けてのびる尾根支脈や丘陵斜面に点在する古墳を便宜的に総括したものであるが、発掘調査の結果、第1号墳から第5号墳までの5基と、第6号墳から第14号墳までの9基の2群に分けられる。

第1号墳から第5号墳までの5基の古墳は、用木山および野山をそれぞれ起点として、いくつかの尾根支脈を分出しながら、東南または南へ扇状に、緩やかな起伏をみせて下降してのびているが、谷水田を臨む端部か、それに近い尾根稜線上に、一尾根一基の単基での点在を示している。したがって第2号墳と第3号墳のように、小谷水田一つを隔てた約100mの距離に、同様立地で指呼の間に対応するものもあるが、その他の場合はお互の間に直接的なつながりを認め難い。古墳の内容も、第1号墳は内部主体の詳細は不明ながら、形象埴輪を含む円筒埴輪を有する円墳、第2号墳、第3号墳は小窓式石室を内部主体とする方墳、第4号墳は低平な小円墳、第5号墳は箱形に組んだ竪穴式石室を内部主体とする方墳で、割り石を一列に整然と立て並べた列石を有する。

これに対して第6号墳以降の各古墳は、いずれも横穴式石室を内部主体とし、用木山を中心とした南面する丘陵斜面または、尾根支脈稜線上に、ほぼ集中的にまとまりをもって群在しているのである。これら古墳9基間の分布の広がりの範囲は、約200m×300mである（図4）。

### 第3章 調査の経過

岩田古墳群の発掘調査は、前述もしたように、その多くが用木山遺跡などの弥生時代集落遺跡の発掘調査中に、それと複合する形で発見されたこともあって、集落遺跡の調査との併行調査となつた。そのため、同一古墳群としての系列的な一貫性のある発掘調査とはならなかつた。また古墳番号についても、第6号墳以降は新発見の都度、その順序に従つて通し番号を付したため、配列的にもばらつきを生じて不均整となつた。見苦しい点は御了承いたまわりたい。今回報告する岩田古墳群と関連のある、発掘調査の委託契約次と遺跡名を下記に表示した。直接當岩田古墳群と関連する遺跡は太字で示し、その右に古墳名を（）内に記しているので参照いただきたい。

#### ・第4次委託契約

- ・契約年月日 昭和45年10月1日
- ・調査期間 昭和45年10月1日～昭和46年7月31日
- ・調査遺跡 ①用木山遺跡
- ②岩田古墳群第3・5号墳
- ③忽園遺跡第I地点

#### ・第7次委託契約

- ・契約年月日 昭和46年7月6日

- ・調査期間 昭和46年7月6日～昭和46年10月1日
- ・調査遺跡 ①惣岡遺跡第II地点（岩田第6号墳）
- ・第8次委託契約
  - ・契約年月日 昭和46年10月1日
  - （変更契約） 昭和47年7月14日
  - ・調査期間 昭和46年10月1日～昭和47年3月31日
  - ・調査遺跡 ①便木山方形台状墓
    - ③官山第4号墳
  - ③大久保遺跡（岩田第7号墳）
  - ④用木山遺跡第I地点（岩田第8号墳）
- ・第9次委託契約
  - ・契約年月日 昭和47年4月1日
  - （変更契約） 昭和48年1月5日
  - ・調査期間 昭和47年4月1日～昭和48年3月31日
  - ・調査遺跡 ①用木山遺跡第I地点
    - ②用木山遺跡第III地点（岩田第9・11・12号墳）
    - ③中池遺跡
  - ④さくら山遺跡第I地点
- ・第10次委託契約
  - ・契約年月日 昭和48年4月1日
  - （変更契約） 昭和49年1月4日
  - ・調査期間 昭和48年4月1日～昭和49年3月31日
  - ・調査遺跡 ①愛宕山遺跡第I地点（岩田第14号墳）
    - ②愛宕山土壙墓遺跡
    - ③さくら山遺跡第II地点
    - ④東山遺跡
  - ⑤用木山遺跡第II地点（岩田第13号墳）
- ・第11次委託契約
  - ・契約年月日 昭和49年4月1日
  - （変更契約） 昭和50年1月4日
  - ・調査期間 昭和49年4月1日～昭和50年3月31日
  - ・調査遺跡 ①愛宕山遺跡第II地点
    - ②用木第7・15・16号墳
    - ③新宅山遺跡
    - ④三藏畠遺跡
  - ⑤さくら山遺跡第II地点（岩田第1号墳）

しかし、実際の発掘調査は、発掘調査委託契約や発掘調査実施計画書とのおりにはなかなか進まない。まして住宅団地開発工事との競合調査であってみればなおさらのことである。工事工程の期間的な都合によっては、現在調査中の遺跡発掘を中断して、緊急を要する遺跡調査を先行させたり、遺跡の掘りあげを待ちかねるようにして、次の委託契約を重複して締結し、整理作業や報告書作成の犠牲を強いられることもしばしばである。まして、すぐ近くでの造成工事との併行調査は、発破作業時の一部避難や、整岩機の聲音と石塵の飛沫、ブルドーザやスクレーバーの地響や煙埃など、写真撮影や測量等に直接的な影響も大きい。これらの実態については本書P10～P16にかけて表示し、また問題点や反省については本調査概報第1集に調査経過の総括として詳述しているので参照願いたい。ここでは、当岩田古墳群の発掘調査と直接に関係のある遺跡について、実際に調査に要した期日を対比して下記にまとめてみた。しかし現実には、個々の古墳の発掘調査に集中はできず、それぞれが複合する集落遺跡などとの、流れ作業的な併行調査であるため、当該古墳の発掘調査にその期間をかかりきっているわけではなく、作業の進行状況によっては、何日間も空白の日が続くこともある。したがって各古墳の調査期間が、実際の調査所要期間とはかなり長期間となっている点を御了承いただきたい。

- 。さくら山遺跡第Ⅲ地点
  - ・ { 昭和48年8月6日～昭和48年9月17日  
昭和49年2月14日～昭和49年6月17日 }
- (岩田第1号墳)
- 。惣園遺跡第Ⅱ地点
  - ・ 昭和46年7月13日～昭和46年10月9日
- (岩田第6号墳)
- 。大久保遺跡
  - ・ 昭和46年7月20日～昭和46年7月26日
- (岩田第7号墳)
- 。用木山遺跡第Ⅰ地点
  - ・ { 昭和47年1月7日～昭和47年3月24日  
昭和47年4月11日～昭和47年4月25日 }
- (岩田第8号墳)
- 。用木山遺跡第Ⅲ地点
  - ・ 昭和47年7月25日～昭和47年11月4日
- (岩田第9号墳)
- (岩田第11号墳)
- (岩田第12号墳)
- 。用木山遺跡第Ⅱ地点
  - ・ { 昭和47年4月27日～昭和47年4月28日  
昭和47年8月30日～昭和47年10月2日 }
- (岩田第13号墳)
- 。愛宕山遺跡第Ⅰ地点
  - ・ 昭和48年9月11日～昭和48年3月18日
- (岩田第14号墳)
- ・ { 昭和48年1月29日～昭和48年2月1日  
昭和48年3月16日～昭和48年3月29日 }
- ・ 昭和48年10月16日～昭和48年11月22日

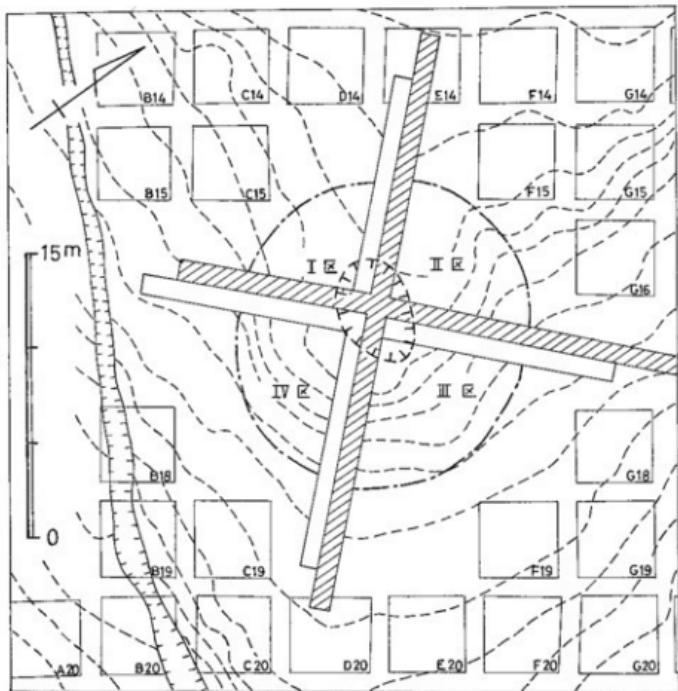
# I 岩田古墳群第1号墳

## 第1章 発掘調査経過の概要

岩田古墳群第1号墳（略記号E 1）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字大久保 120番地に所在する小円墳である。そこは埋積平地に向けて張り出した形のなだらかな低丘陵で、第1号墳はその尾根稜線上に立地しているが、すでに盜掘され内部主体の構造もわからぬまでに、墳丘も含めて大きく破壊されていた。当該地が岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともない、同丘陵上一帯に広がる弥生時代集落跡のさくら山遺跡第2地点（Y92）とともに、事前の発掘調査遺跡の対象となり、山陽町教育委員会が岡山県の委託事業として発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和49年4月1日付で締結された山陽園地埋蔵文化財発掘調査第11次委託契約にもとづいて、前記さくら山遺跡との併行調査となつたが、本古墳の発掘調査は昭和49年4月10日から同年6月5日までをかけて実施した。古墳規模にくらべて調査期間が長期におよんだのは、前述もしたとおり同一立地に複合して広がる集落遺跡の調査を同時に併行して流れ作業式に進めたことと調査員の不足から実測等の記録作業がおくれがちとなり、本古墳調査に集中できなかつたためである。したがつて実質の所要日数はかなり下まわる。本古墳の発掘調査概要は下記のとおりである。

- 昭和49年2月13日、さくら山遺跡第2地点（略記号Y92）の発掘調査準備、作業小屋設営、愛宕山遺跡第1地点から調査器材搬入等。
- 3月14日、Y92発掘調査開始、5m×5mグリット210区画、5,250m<sup>2</sup>の全面発掘調査予定、本日より立木伐採清掃にかかるが、岩田第1号墳（E 1号墳）の清掃も合せて行なう。
- 3月20日、E 1号墳発掘調査前の現状地形測量  $\frac{1}{100}$ 、25cmセンター
- 3月23日、同上完、発掘調査区設営、墳中央で十字形に直交する巾1mのベルトを残し、扇形調査区4区を設け、全面平面削りおろす方法を採用する（図5）。
- 4月10日、Y92C14区～F14区の各グリット発掘、E 1号墳の周溝外縁部にかかり、E 1号墳の発掘調査が開始されることになる。
- 4月11日、同上、各グリットにおいて、E 1号墳周溝の外縁がほぼ明瞭となる。
- 4月12日、本日よりE 1号墳の本格的発掘調査を開始、主体部盜掘溝のある第3区全面表土削土作業。
- 4月13日、第3区発掘、石室石材と思われる数個検出、攪乱され内部主体原形とどめず、須恵器2、土師質陶棺片、管玉1、馬具を含む小鉄器片遺物発見。
- 4月14日、日曜日、発掘調査全休
- 4月15日、1区周溝内発掘、2区表土削ぎ作業、2区周溝内縁近くに原位置を保つ円筒埴輪基底部2本を発見。
- 4月16日、雨天内業



第5図 岩田第1号墳発掘調査区設営図

- 4月17日、2区平面掘りさげ、円筒埴輪1木検出計3本となる。2区周辺外縁部に須恵器大壺に石で蓋をした土器棺発見、第3主体と名付ける。出土状況実測(図)写真撮影の後遊離片のみ取りあげ。
- 4月18日、1区および2区周辺内発掘、崩落した葺石間に須恵器、埴輪片多し。1区葺石間に銅鏡片発見、原位置を保つ埴輪基底部3木発見計6本分となる。
- 4月19日、1区および2区周辺内発掘、両区共、須恵器、埴輪片多し、また小鉄器片も検出されはじめる。2区周辺底から外縁部に一部切り込んだ形で土塗基を検出、須恵器2と土師器1の供献あり、第2主体と名付ける。
- 4月20日、1区墳丘部発掘、1区から2区へかけて、横穴式石室の側壁と思われる基部の石材4個が、ほぼ原位置を保って検出されるも、片面のみで東壁残存なし。第1主体とする。3区墳斜面表土側ぎ作業。
- 4月21日、日曜日全体
- 4月22日、3区墳斜面及びその外方Y92E17～F17区を発掘。土器片等の遺物の残存は認められない。

- 4月23日，4区墳頂部発掘にかかる。墳頂肩部に土壙基検出，第4主体と名付ける。
- 4月24日，4区外表調査ならびに土壙内発掘調査。
- 4月25日，4区外表および墳斜面からその外縁部表土剥離調査。3区と同様残留遺物なし。
- 4月26日，1区および2区の周辺底精査。須恵器完形環7を含む小破片多数，玉類約30，馬具を含む鉄器片発見，4区外表調査。
- 4月27日，同上，周辺底遺物の一部を盗難のおそれもあるため，写真撮影の後取りあげる。
- 4月28日，日曜日全休
- 4月29日，祝日全休
- 4月30日，1区および2区周辺底発掘。人物埴輪頭部，装飾付須恵器片多数検出。
- 5月1日，墳丘断面実測図 $\frac{1}{20}$ ，写真撮影。
- 5月2日，墳丘に設営した十文字堤取りはずし作業。
- 5月3日，同上，周辺底発掘清掃写真撮影造構配置関連図測量 $\frac{1}{50}$ 。
- 5月4日～5月15日，この間，E1号墳調査中断。Y92集落址調査に全員投入。
- 5月16日，発掘調査後地形測量 $\frac{1}{100}$ ，25cmセンター，周辺内崩落葺石・土器片等出土状況実測準備。
- 5月17日，中心主体石材実測 $\frac{1}{10}$ ，第3，第4主体実測 $\frac{1}{10}$ ，周辺内実測 $\frac{1}{10}$ 。
- 5月18日，周辺底実測，円筒埴輪列実測写真撮影の後とりあげ，4区地山層まで掘りさげ作業開始。
- 5月19日，日曜日現地作業全休，調査員内業。
- 5月20日，雨天のため現地作業全休，全員内業。
- 5月21日，同上。
- 5月22日，4区封土掘りさげ，有機土層中に一部に石材を用いた土壤検出。第5主体と名付ける。また破碎した須恵器大壺1個体分発見，土器棺の可能性あり。
- 5月23日，4区墳丘掘りさげと同時に十字ベルトに沿う巾1mのトレーナーを設営，地山層まで掘りおろしにかかる。封土中に弥生式土器片散見。周辺底実測。
- 5月24日，十文字トレーナー発掘。古墳直下にそれと複合する弥生墳穴式住居址検出。本日でトレーナー完掘。周辺底出土状況実測。
- 5月25日，周辺底出土状況実測完了。出土遺物とりあげ，第5主体内発掘，墳丘断面図実測 $\frac{1}{20}$ 。
- 5月26日，雨天のため全員内業。
- 5月28日，同上。
- 6月1日，第2主体土器棺実測 $\frac{1}{5}$ ，同取りあげ。
- 6月5日，第5主体内発掘，土製練り玉約100，木製玉2を発見，第5主体実測 $\frac{1}{10}$ 。
- 6月6日，第5主体実測 $\frac{1}{10}$ ，写真撮影，本日をもってE1号墳発掘作業終了。
- 6月8日，E1号墳の下に複合する住居址調査のため，本日より封土掘り取り作業にかかる，6月13日までを要す。
- 6月14日，17日までをかけて竪穴住居址調査，Y92発掘調査をほぼ終る。

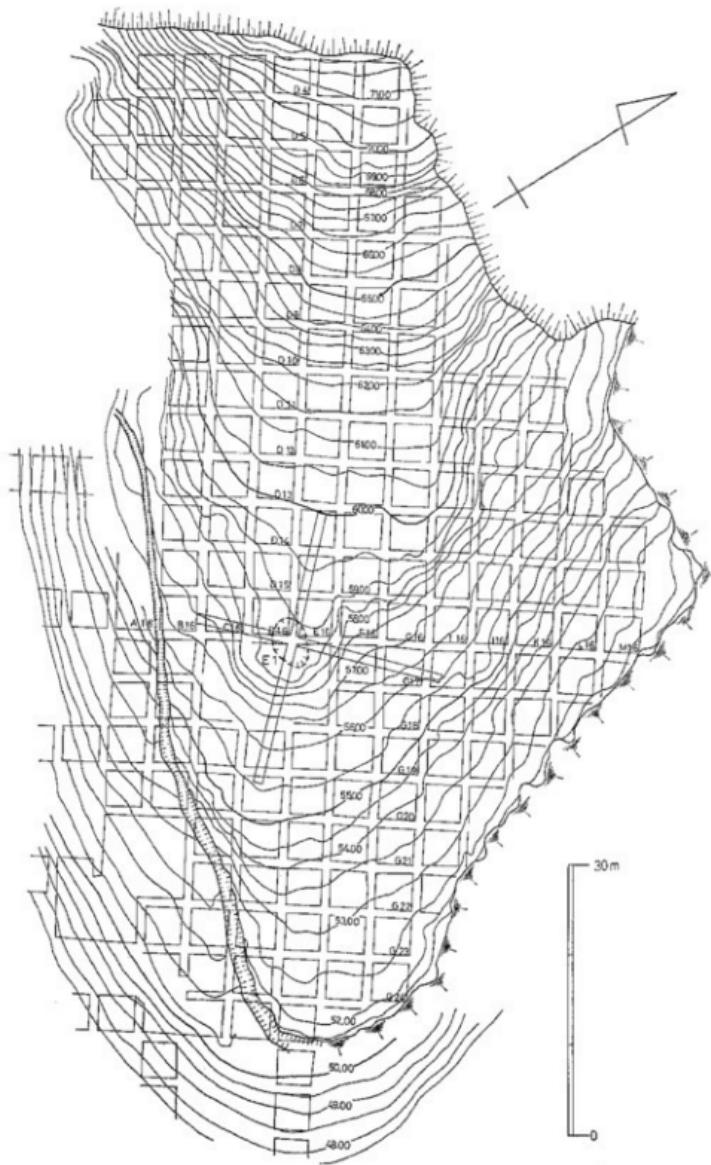
。6月17日、用木古墳群第7号墳へ調査器材を搬入、明日より一部測量班を残して本隊は、用木古墳発掘調査へかかることとする。

以上が岩田第1号墳の発掘調査経過の概要である。本古墳と併行調査を実施したさくら山遺跡第2地点は、5,250 m<sup>2</sup>の調査範囲から、弥生時代中期終末を中心とする竪穴式住居址11グループ49棟、ピット13、土壙1、古墳時代土壙墓3が検出された。当遺跡に先立って発掘調査された隣接の同遺跡第1・3地点と合せると、発掘調査面積約8,000 m<sup>2</sup>に、竪穴式住居址65棟、ピット22、土壙1などの大規模な集落遺跡であった。また本古墳の北西方約80mにあたる標高81mのさくら山の頂上にはさくら山方形台状墓2基が立地し、昭和47年度および昭和48年度にそれぞれ発掘調査が実施され、共に当住宅団地造成事業の犠牲となって削平消滅した。岩田第1号墳は発掘調査終了後、古墳直下に複合する集落址の発掘調査のため、私たち自身の手によって掘り崩し壊滅させたのである。さらに本古墳所在地を含めて、さくら山一帯の丘陵は、住宅団地造成工事によって、昭和49年5月に一部引き渡し、同年7月には丘陵もろとも削平されてその姿を消した。現在は住宅団地に整地され、公営住宅街として5階建てのアパート群が建ち並んでいるのである。

## 第2章 立 地

住宅団地開発事業用地内のはば中央部に、当東高月丘陵群中で最高位を占め、用木古墳群第1号墳の立地する標高92mの用木山がある。この用木山を起点として東南方向に、なだらかに下降してのびる丘陵尾根支脈が分岐しているが、標高約71m付近で下降傾斜を止めて鞍部をつくり、方向を大きく東へ振りながら再び高まりをみせ、さくら山と呼ばれる標高81mの丘陵頂平坦部を形成している。岩田古墳群第1号墳は、このさくら山から東眼下の岩田大池を含む谷水田に向て、緩やかに下降しながら広がる長さ約200mの扁平な舌状丘陵のはば中間部、すなわち、標高約58mの尾根稜線上に、単基の独立墳として築成されている。そこは眼下の谷水田との比高約25mとさして高くはないが、埋積平地に対して一際張り出した形となっているため、眺望視野はきわめて広い。南北方面の高月平地から対岸の山裾にかけて群在する、両宮山古墳を中心とする大形前方後円墳5基をはじめ、高月地区から高賀地区へかけての埋積平地に拓けた耕地、当盆地から外部へ通じる高月峠、船廻り谷など交通の要衝を一望できる立地を占めている（図4、6、図版1）。

本古墳周辺には数多くの遺跡が所在する。当丘陵支脈の北側に石井谷と呼ばれる小谷をはさんで、先の用木山から東方に分岐した愛宕山丘陵支脈が、当丘陵支脈と平行してのびているが、その南面した傾斜面や尾根稜線上に、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群第6号墳～第14号墳9基が群在する。なかでも第14号墳は、本古墳から北北西へ石井谷を隔てて指呼の間に立地して、その水平距離は約190mである。さらに愛宕山丘陵頂から北東にのびる丘陵尾根支脈上に愛宕山古墳群9基、用木山から北東にのびる丘陵尾根支脈上に用木古墳群16基、本古墳の西方約80mにあたる当丘陵支脈頂にはさくら山方形台状墓2基など、当地方における初現的な古墳から前期古墳にかけての遺跡が群在している。



第6図 岩田第1号墳周辺地形図

また一方において、本古墳の所在するこの丘陵支脈一帯は、さくら山遺跡と名付けられた弥生時代中期後半を中心とした集落遺跡であるが、先の石井谷を抱きかかえるようにして取り囲む、周辺丘陵支脈の尾根および傾斜面の全域が、同時代の大集落遺跡である。懸図遺跡、用木山遺跡、愛宕山遺跡などがあり、当さくら山遺跡を加えて、連続的に集落群を形成していた。私たちが発掘調査を実施した総計約38,000m<sup>2</sup>の全面発掘区からだけでも、堅穴式住居址約260棟、ピット約40等が発見され、特に愛宕山丘陵の頂きからは、約300土壙墓で構成される墓地遺跡が検出され注目された。さらに、本古墳の南眼下の岩田大池縁辺の丘陵裾部には、弥生時代後期から奈良、平安時代にいたる集落址、岩田大池遺跡が所在している。そこから当丘陵群と埋積平地の接線となる、丘陵群一帯の水田や畠においても、いたるところで弥生式土器片をはじめ、土師器片や須恵器片を散見することができる。

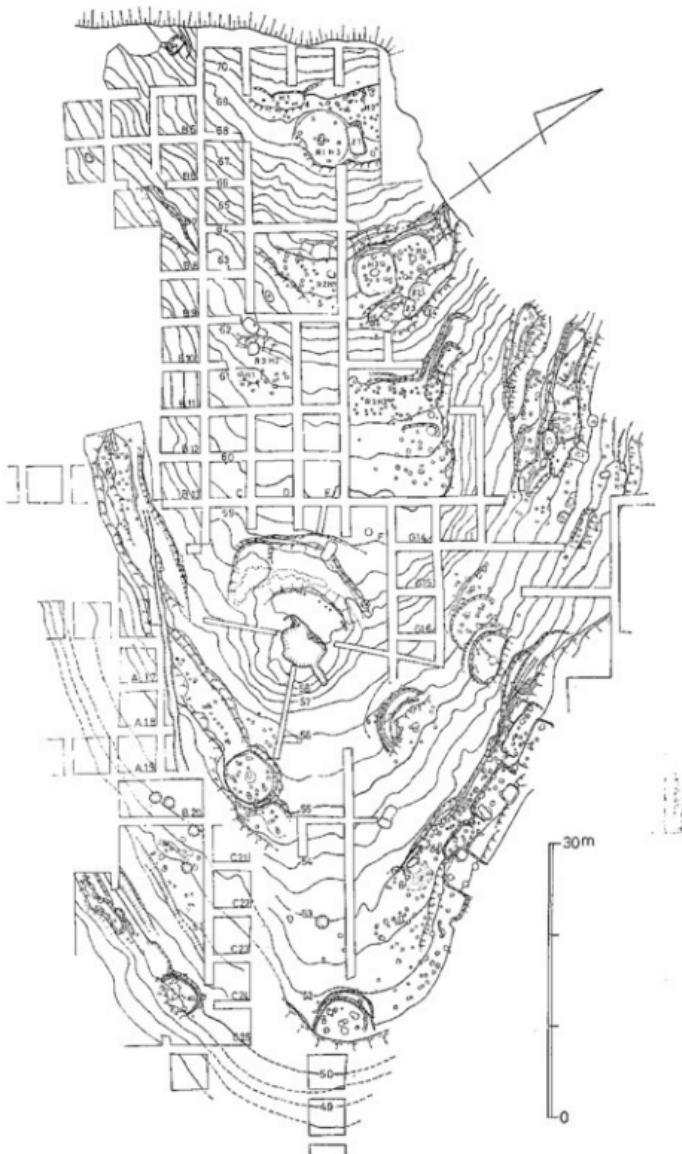
このように、当地域を局部的に限ってみても、弥生時代から古墳時代にかけての、遺跡や遺構が密集している地域である。

### 第3章 調査前の古墳の概況

岩田第1号墳は、当初の分布調査の際からその存在は確認され、径約16m程度の円墳と推定したが、すでに盗掘にあい墳丘の原形は大きく損なわれていた（図版1）。

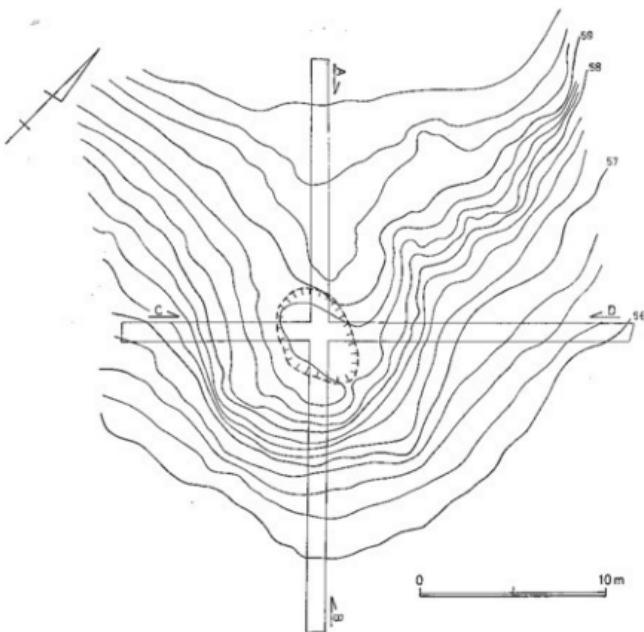
本古墳の立地する丘陵尾根支脈は、当住宅団地開発事業が着手するまでは、本古墳を含む周辺部は自生の松林で、一抱えほどの松樹がそびえていたほか、灌木および雑草が密生して、ほぼ自然地形の原況を保っていたが、丘陵頂および丘陵裾部は、後世の人為的な作為が加えられていた。すなわち、本古墳の西方約80mに位置する丘陵頂部は、かってさくら様と呼ばれる社が祀られていたと伝えられ20m×80mぐらいの範囲で削平された整地面の痕跡をとどめている。また本古墳から南面する丘陵裾部にいたる傾斜面は、開墾されて果樹園となり、ぶどうが栽培されていたが、その上限の畠地境界溝は、第6図にも示したように、本古墳の墳端に一部切り込んでいるほどである。さらに本古墳の北東部にあたる丘陵斜面は、眼下の岩田大池築堤工事の際にその土取り場となり、標高51mの等高線近くまで大きく掘り崩されて、崖状の急傾斜面を呈していた。

当該地の立木の伐採および清掃後における本古墳の外形測量時の外表観察は次のとおりである。本古墳の盗掘はかなり大がかりで、尾根主軸に斜交した地形の低い北東方向から、墳丘を縦断するような形で、約3分の2位の深さに達するほど掘り込まれている。盗掘後かなりの年月を経過して、盗掘溝のほとんどは埋没しているが、現状で巾約3.5m、奥行約6m、深さ最深部約1.2mを測り、その堆土は後方に搔き出された状況で扇状に堆積していた。いわゆる横穴式石室墳の採石目的の盗掘痕とよく似た形態を示し、内部主体の完全破壊を想起させるに充分なほどであった。先述の岩田大池築堤工事に際して、本古墳の石材を採石して利用したとの云い伝えはあるものの、何分古い話で實際にはそれを証明し得る人は存在しない。したがって、本古墳の墳丘は大きく損なわれ、墳丘の高まりはもとより、原形をとどめないほどで、外形測量の等高線も大きな乱れをみせている（図8）。



第7図 岩田第1号墳周辺複合遺跡遺構配置図

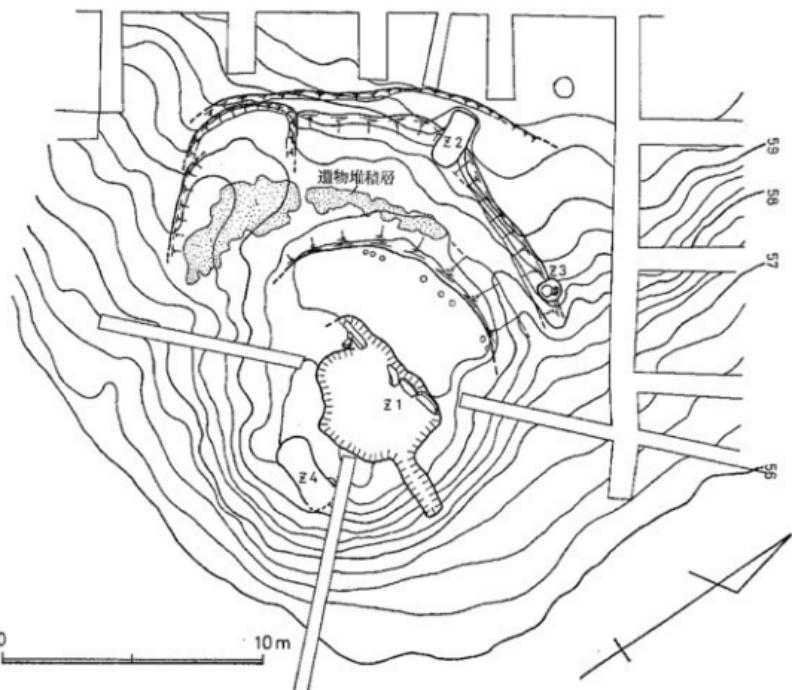
しかし、墳丘部の損傷が著しいのにくらべ、墳端部およびその周辺部は比較的によく原形を保っていた。地形の高い側の北西墳端部には、今は流土による埋没で判然とはしないまでも、巾約5m程度の半円形に回る周溝の痕跡をとどめ、本古墳の外形を円墳と定める有力な手がかりとなつた。また地形の低い側



第8図 岩田第1号墳発掘調査前外形測量図

の南東側は、その外辺を削平してテラス状となり、墳端部を画する施工の跡がうかがわれた。そしてまた、本古墳の外部施設としての葺石や埴輪およびその他の遺物などは、発掘調査以前においては、全く見いだすことはできなかつた。

以上が本古墳の発掘調査前の概況である。その時点における本古墳の計測値は、丘陵尾根稜線に沿った長軸径17m、それと直交する短径で15.5mを測り、橢円形プランを呈している。墳丘の高さは盜掘によって原形が損なわれているうえに、なだらかとはいえ下降傾斜をみせる巾狭な尾根稜線上に立地することもあって、見る方角によってその形状も數値もかなりの差異がある。地形の高い側の北西尾根稜線からは、流土による埋積もあってほとんど高まりをみせず、むしろ現墳頂部の方が、現周溝低地表面よりも50cm低位あって、一見丘陵尾根平坦部を形成しているように見える。逆に地形の低い南東墳端部からは、3.2mの高まりをみせ、比較的均整のとれた円墳の形状を示し、両側面はほぼ中央部からの比高は、約2mを測る。したがつて本古墳の見せかけの方位を南東とすればもとは約3.5mないし4mの高さをほこる径17m級の円墳であったろうと推定されるのである。



第9図 岩田第1号墳発掘調査後外形測量図

## 第4章 墳丘と外部施設

### 第1節 外形と外部施設

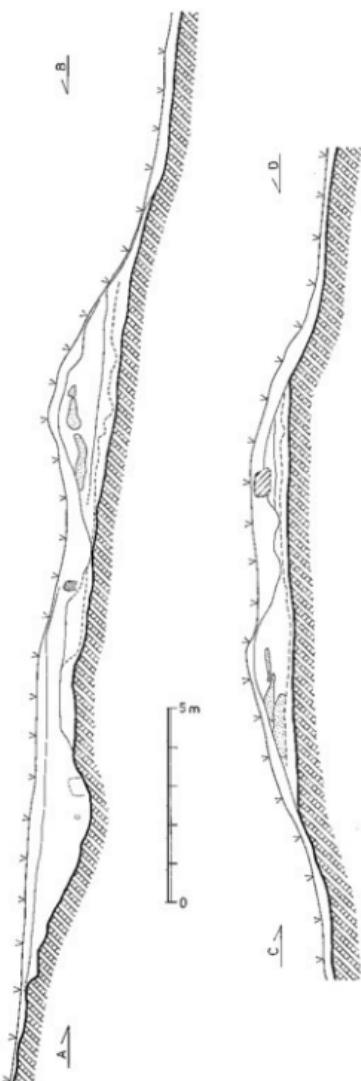
本古墳の外形は、発掘調査開始前の外面観察のとおり、地形の高い側の墳端部にのみ円弧状の周溝をもつ円墳である。墳丘は中心主体も含めて著しく損壊され、墳丘構造の詳細については不明であるが、墳丘を十文字に切断するトレンチと、古墳の全面刷土および周溝の完全発掘調査等によつて、その大要を知ることができた。その結果、本古墳は外部施設として埴輪を圍繞していることが明らかとなり、また葺石を施していた可能性も確率はきわめて低いながら持っているのである。

周溝は発掘調査を開始する時点では、自然流土の埋積によって埋没し、僅かにその痕跡をとどめる程度であった（図8・10）が、発掘調査の結果、その遺存状況は良好で、本古墳の外形と規模を類推できるばかりではなく、周溝内に堆積する多量の埴輪片のはか、須恵器や鉄器などの遺物や石材などから、本古墳の埋葬の内容や年代等の大要を知る手がかりを得ることができた。

周溝は、本古墳築造に先だって丘陵尾根を、直径12.3mの円形な水平面に削平整地した肩部外縁

に沿って、地形の高い側の北西部尾根稜線を直交して切るように、円弧状に掘り込まれている。したがって、丘陵尾根稜線上等に築かれるこの種の古墳の周溝の多くがそうであるように、本古墳の周溝も地形の最も高くなる尾根稜線部をより深く掘りさげ、地形の低くなる左右の側斜面になるにつれて、周溝底もやや下傾を示すものの、その掘り込みの深さは漸次浅くなり、やがて周溝底と墳丘端部の比高がなくなる部分で消滅する形態を示している(図9、図版4)。周溝の掘り込み線は、墳丘側にあたる内縁部は前記削平整地面の肩に沿って、円弧状に整然としているが、外周部は尾根走向線に直交して直線的に尾根を切る掘り方と、墳形に従って円弧状にめぐる掘り込みの二重の掘り込み線を示し、その曲線は内縁部ほどには整然としていない。また周溝の巾や深さも地形的な制約もあってか一定でない。周溝のはば中央部にもあたる尾根稜線部での計測値は、掘り込み上端の確認できる外縁部の現存地山生き土上面と、内縁部となる墳丘削平整地面肩との巾6.3m、深さは中心部で0.8mを測り、その横断面形はカーブの緩い上向きの抛物線を呈する。古墳築成後の地山面の風化流失等を考慮に入れれば、原況の周溝の巾と深さは今少し大きなものであったと思われる。さらに発掘調査時において周溝底の確認できる長さは18mを測り、その両端と墳丘中心を結ぶ扇形の中心角は118度となり、本古墳の周溝は地形の高い側の丘陵尾根部にあたる墳端外方の約3分の1の部分に、円弧状の周溝を設け墳域を画するとともに、墳丘幅員とみせかけの高まりを増大させたものと考えられる。また周溝底の円弧カーブから、本古墳の規模を推定すると直径約17mとなる。

周溝内の墳丘側に面した傾斜面に、崩落遊離した状態ながら、約10mの長さにわたって帶状に埴輪片ほか多数の遺物と、付近の山塊に産出する花崗岩割り石が堆積している。その出土範囲は第9回発掘調査後地形測量図に網目で、また出土状況は第11回周溝底遺物等出土状況実測図および図版3に示したとおりである。これらの遺物および石材は遊離散

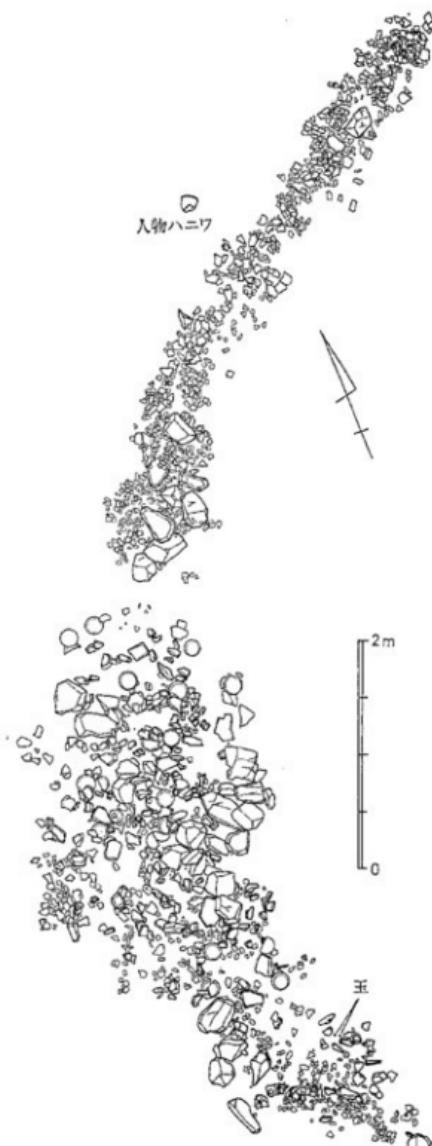


第10図 岩田第1号墳墳丘断面図

在しているとはいえる。周溝内傾斜面の現存地山生き土面の上方約4cm～15cmの有機土中に集中し、未だ周溝が流土等によって埋没する以前の、本古墳築造後さして期間を経過していない時期の、ある一定の短期間のうちに堆積したことを物語っている。そして周溝内に埋積する遺物は、その種類によって出土範囲が限定されていた。円筒埴輪片はほぼ全域にわたって平均して分布するが、装飾付須恵器片および須恵器大壺破片は、尾根稜線上に近い北半部に集中して検出され、その他の坏等の須恵器片や鉄器片、銅鏡や装身具の類は、周溝内の南西端に近い南半部の、それも掘り込みの浅いところに集中する。石材は掌大から人頭大位の大きさの花崗岩割石約70個であるが、前述の坏等の遺物とほぼ同じ範囲の、周溝内南半に集中している。

埴輪片の中には通常の円筒埴輪の他に、人物埴輪の頭部を含む若干の形象埴輪片が検出され、また埴丘裾部にあたる削平整地面脇部に、8本の原位置を保つと考えられる基底部があって、埴輪列の回旋が明確である。また須恵質の子持台付壺は、尾根稜線上の周溝部に一括破碎片となって検出されたことから推察して、上記埴輪とともに墳外表面に供獻されていた可能性が強い。

周溝内検出の花崗岩石材は、一見して埴斜面もしくは埴縁部に葺石の崩落を想起させるが、それにしても、崩落石材を埋積させ得る同条件をもった周溝でありながら、北半部には遺存しないで南半部にのみ片寄って検出されるのである。また本古墳の埴丘表土を全面剥土調査したにもかかわらず、その他の埴丘斜面や埴縁部はもちろん、その外辺部においても同種の石材を見



第11図 岩田第1号墳周溝底遺物等出土状況図

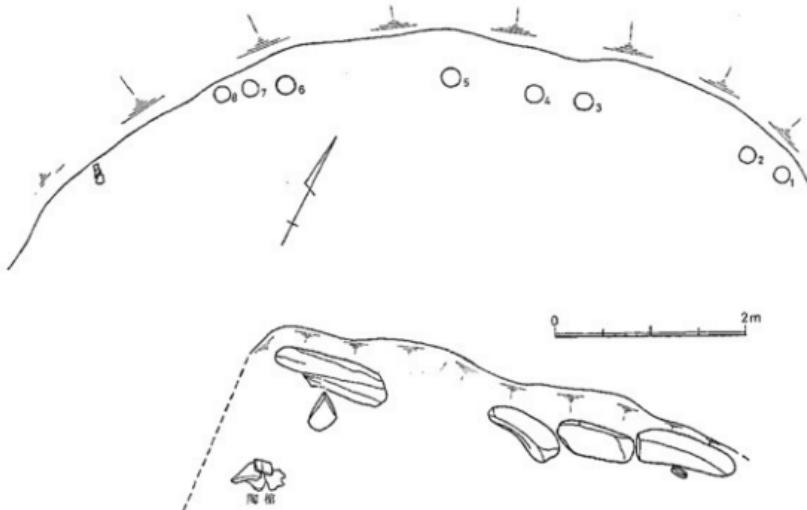
出すことはできなかった。したがって、この石材は葺石としての可能性を全く無視することはできないとしても、そのほかの目的をもって本古墳の葬送祭祀に用いられた石材としての可能性を考えた方が妥当のようである。周溝内で石材と混在して、ほぼ同一範囲に散在する壺等の須恵器などの遺物は、埴輪片を除いてはすべてが、本来石室内に副葬されるべき器材器種である。したがって石材もこれらの遺物との関連が深いと考えられるのである。

本古墳の中心主体がすでに完全破壊され、主体構造も含めてその詳細は不明であるが、盜掘溝が北東方向から大きく掘り込まれ、後述の石室石材と思われる残存石材4個の配列や方位から推察して、本古墳の内部主体は横穴式石室であった可能性が強い。澳門部がどちらの方向に開口していたのかは、現況では明確ではないが、盜掘溝が奥壁部の方向から行なわれていたとすれば、石材や遺物が集中するこの周溝部分は、横穴式石室澳門部にさわめて近い存在となり、また遺物や石材の堆積の状況は、後世の盜掘等による際の仕業でないことは明らかである。ここで大胆な推論が許されるならば、これらの石材は、元来横穴式石室の封鎖設備もしくは棺台等に用いられていたものを、追葬の過程で取りはずしたり片付けられて、前者の葬送に供献されていた副葬品とともに、石室外に持ち出されてこの周溝底に廃棄されたものとの考え方もあり立つのである。またあるいは、葬送に際して境外儀礼が行われ、その時に用いられた台とか供獻物の使用後の投棄であったのかも知れない。いずれにしても、本古墳の葬送の過程で、周溝が埋没しないある時期に、祭祀に用いられたと考える方が、葺石石材の崩落と考えるよりも可能性が大きいと思われる。

北西部の周溝に対して、地形の低い南東尾根稜線にあたる墳端部では、丘陵尾根部を墳丘斜面の傾斜に合せて、さらに約0.8mの深さに掘りおろし、その外方もそれに合せて削平して、長さ約5mにおよぶ舌状平坦面を造りだしている。この南東尾根部の墳端は、地形の高い北西尾根周溝底との比高1.9mと低いにもかかわらず、尾根稜線を切り込んで削平整形を施していることは、本古墳の見せかけの均衡を整えることのほかに、古墳の幅員と高さを誇示するため、前記周溝を掘るのと同様の思考が働いているものと考えられるのである。

外部施設としての埴輪の樹立は、今まで何回も繰り返し述べてきたとおり、本古墳の墳丘が大きく損なわれているため、その詳細はわからないが、幸いにして墳丘削平整地面上の肩部に計8個体分の円筒埴輪基底部が、原位置を保って遺存しており、その樹立のようすの一部を知ることができた（図9・12、図版5）。

埴輪基底部が遺存していたのは、地形の高い北西尾根稜線を中心として、その南西約6mの範囲である。墳丘築成前の丘陵尾根部の削平整地面上に基底部を置き、周溝掘り込みの肩部に一列に圓錐する形で検出された。周溝掘り込み線肩から、墳丘中央へ約0.2mないし0.5mにその中心を置いている。検出された各埴輪間の中心距離は、東から0.5m、1.8m、0.5m、1.8m、0.4m、0.3mと一定でない。おそらく崩落による欠落と考えられるが、その痕跡や埴輪樹立のための施設については何も検出することができなかった。周溝内に堆積する埴輪片の総数が約3,200片、重量約80Kgからすれば、完形に復元できた埴輪重量4.8Kgから推して、その樹立の密度はかなり高かったものと考えられる。また周溝底に転落した埴輪片中に、人物埴輪の頭部片および手づくねの小動物等、量的には僅少であるが形象埴輪が検出され、円筒埴輪のほかに、その立てられた場所と形態は不明な



第12図 岩田第1号墳円筒埴輪基底部出土状況

がら、形象埴輪をもつことが確実である。

以上のことから総合して本古墳の外形と外部施設をまとめると、本古墳の規模は丘陵尾根走向に沿った長径17m、それと直交する短径15.5mのやや楕円形のプランをもち、地形の高い側の墳端部に円弧状の周濠と、それに対応する地形の低い側の墳端部の削平整形とその外方に削平整形面を有する円墳である。また外部施設として、少くとも墳裾部を囲繞する円筒埴輪と、人物埴輪を含む形象埴輪および装飾付子持ち須恵器を樹立している古墳である。しかし、円筒埴輪囲繞部に段を有していたかどうかは明らかでない。古墳の高さについては墳丘が大きく損なわれて明確ではないが、古墳築成前の整地面上方に内部主体を構築していることから考えると、かなりの高さをもった古墳であったと推察されるのである。

## 第2節 墳　　輪

本古墳出土の埴輪は原位置を保つ円筒埴輪8個体のほか、大部分が周濠内に崩落埋積したかたちで発見された。周濠以外の墳丘斜面や墳外丘陵上についても、複合立地する集落址・さくら山遺跡の調査と合せて、全面網土調査をして検出に努めたが、すでに転落散逸しているのか遊離片少量を発見したのみである。発見の埴輪は完形品は皆無ですが破片である。発見総数約3,200片のほとんどは円筒埴輪片だが、なかに少數の人物埴輪と小動物埴輪片を含む。また周濠内には埴輪片のほかに土器片や鉄器片などの多種多様の遺物が混在し、その中でも装飾付須恵器は出土位置や状況から、埴輪とともに墳外供獻の可能性が強いが、本節では埴輪についてのみ記述し、その他の遺物に

については、後述の出土遺物の項で一括して取り扱うこととする。

### 1. 人物埴輪（図13、図版15）

第1調査区周辺内発見の、人物埴輪頭部と体位部小片約20片である。頭部片は周辺の中央部、丘陵稜線の直ぐ西に近接する周辺底から約20cm上方の埋積土中に、遊離転落した状態で顔面を下に向けて単独出土したが、その他の小破片は発掘調査時にはその存在に気付かず、後の整理作業によって識別した。周辺斜面に堆積していた円筒埴輪片と混在していたものと思われるが、その出土状況の詳細は不明である。周辺の調査が、本古墳内部主体や周辺住居址の調査と併行実施され、充分の注意や配慮が欠けていた点を深く反省する次第である。

頭部片は、頭髪部と左右の耳を剥脱しているが、首から上位はほぼ原形を保ち、現存高13.5cm、頭側巾11.5cm、同前後長10.9cm、首部径5.5cmを測る。胎土に0.3cm大位までの石英砂粒を含むが焼成は普通。器表の剥脱面を除いて目や口の貫孔部内壁にまで丹が認められ原形は器表全面に丹塗りが施されていたことを物語る。器表整形の顔面筋に沿うように指圧によるなで調整がていねいに施され、偶然かも知れないが指痕が顔の小皺を表現した形となって、立体感のある写実的なつくりである。器壁の厚さは部位によって一定でないが、平均して0.9cm～1.1cmを測る。

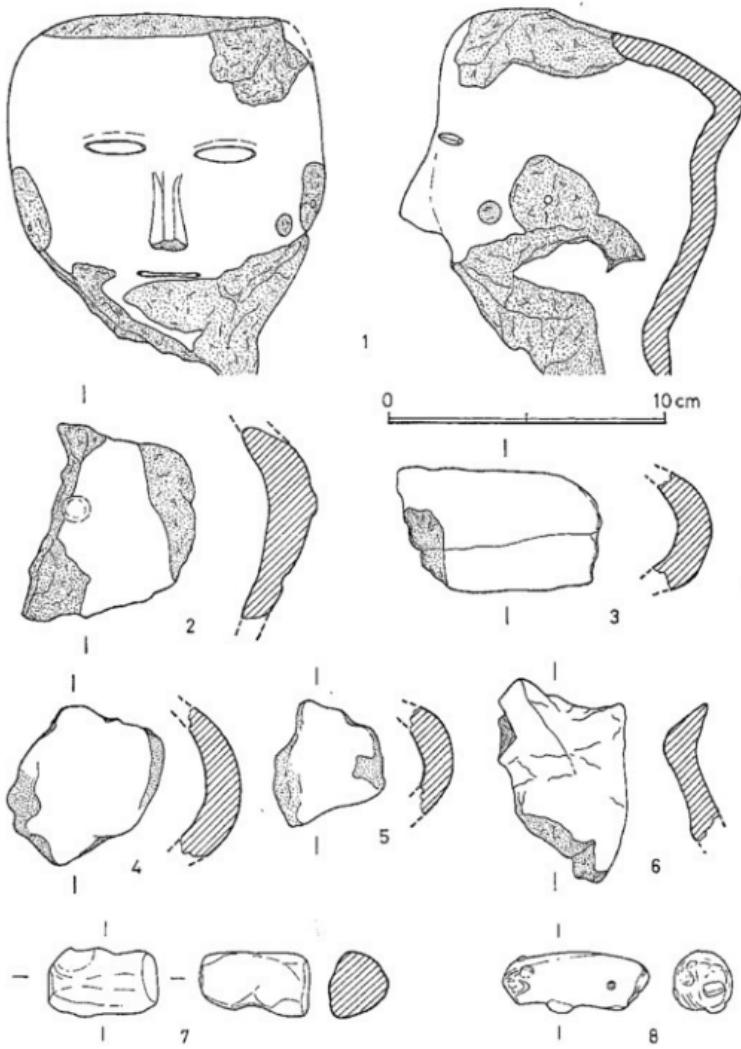
男女の性別はつかないが、鼻筋のとおった均整のとれたりしい顔立ちである。目は長楕円形に鋭く貫孔され、瞼も指圧横などによってくぼみをつくり表現している。右目は水平に切られているが、左目は目尻がややさがる。右眼の長径2.36cm、短径0.55cm、左目の長径2.3cm、短径0.53cm、目瞼巾1.8cmを測る。鼻は顔面中央に高くとおり、鼻穴は縦に平行な2条の刺突孔で表現している。鼻長3.9cm、鼻下端巾2.0cm、鼻高1.82cm、鼻孔長0.6cm、同巾0.1cm～0.2cm、鼻孔間隔0.4cm～0.6cmを測る。鼻孔は下向面部にあたるため、正面からでは全体は見えない。口は鼻下1.05cmに真横一文字に細く切り込み貫孔しているが、両端部が強調されてやや申広となっている。口横巾2.32cm、切込み巾0.15cm～0.18cmを測る。

耳は体側中間部にあるが、左右共に径3.6cmの円形剥脱面となり、その中央に径0.5cmの小貫孔がある。元はこの部位に別ごしらえの耳が貼り付けられていたと推定される。頭部は全体が平坦な剥脱面となっているが、前頭部にくらべ後頭部が1.5cm低く下傾し、中央部は径約3cmの不整円孔となっている。元は頭髪または冠物がここに貼り付けられていたと思われるが、今は存在せず知ることができない。

その他、人物埴輪の肩や腕部等と思われる小破片約20片を検出したが、いずれも小片で各部位も明らかでなく、また同一個体かどうかも不明である。一応図示できるものについては第13図に示したので参照願いたい。器表等の磨耗も著しく調整も判然としないが、ほとんどのものが丹塗りが施され、胎土や焼成等前記頭部片と類似している。

### 2. 小動物埴輪（図13、図版15）

第1調査区出土の埴輪片を水洗整理中にその中から検出した。具体的な出土状況は不明だが、周辺内堆積の埴輪片と混在していたものと思われる。全長5.3cm、直径2.05cmの小品で、粘土をまる



第13図 岩田第1号墳形象埴輪実測図

めて円筒形をつくり、その一方に刺突文による目と口、貼り付けによる一対の耳を表現し、胸部下方にもイボ状に大豆粒大の粘土を貼りつけ脚をつけた簡単なものである。一見してイノシシを連想するがその実際は不明である。小屋または櫛内飼育の家畜かも知れないと考え、それらの器材埴輪

の検出に努めたが確証できなかった。

### 3. 円筒埴輪(図14、図版15)

本古墳出土の円筒埴輪片すべてについて整理検討した結果、本古墳の円筒埴輪はすべて同一形式のものである。器壁は基底から口縁に向けて外傾しながら直線的に立ちあがり、器胴に3条のタガと相対する2段4円孔を有する器種で、個体によっては多少の計測値のばらつきと、細部についての製法上の差異はあっても、ほぼ同巧同大の小形円筒埴輪である。当東高月丘陵内に所在し埴輪を伴出する岩田第3号墳、用木第11号墳、四辻第5号墳、宮山第4号墳等の小形古墳が、朝顔型やB型円筒埴輪等、数種の円筒埴輪を出土するとの対照的である。したがってここでは、基底部が原位置を保つ8個体と、ほぼ完形に復元できた周産内出土の2個体を中心に、計測値と実測図を示し、その概要を補説したい。

器高の計測可能のものは3個体のみで、平均高は43.25cmであるが、検体が少ないため大体の目安となる程度である。器壁は外傾して直線的に立ちあがるが、かなりの歪みをみせるものが多く、口縁部付近でやや外反して広がる特徴を示す。口縁端は指先で押えて巾約0.9cm程度の平坦面となるが、おおむね内側に高く外方に下傾しておさまっている。口縁径はそのカーブ等から推測したものとすると、24.2cm～27.0cmを測るが平均値は25.6cmとなる。底部径は14cm～18.5cmの分布範囲を示すが、15.3cm～16.2cmの密度が高い。器壁は基底部がやや厚く、口縁端が薄いものが普通であるが、全体的にみた器壁厚はほぼ一定していて、1.1cm～1.4cmを測る。

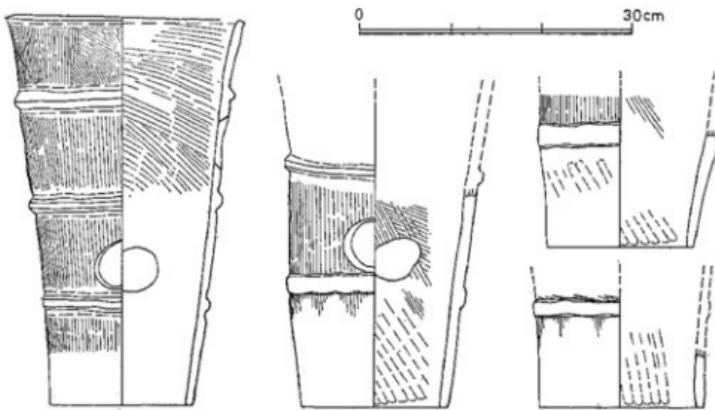
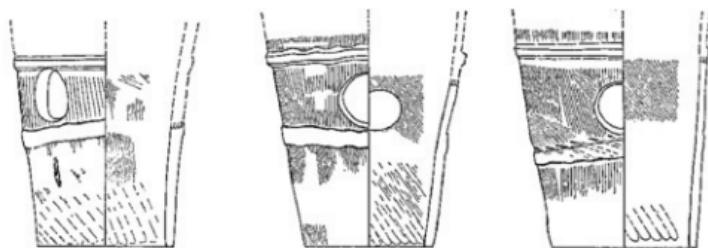
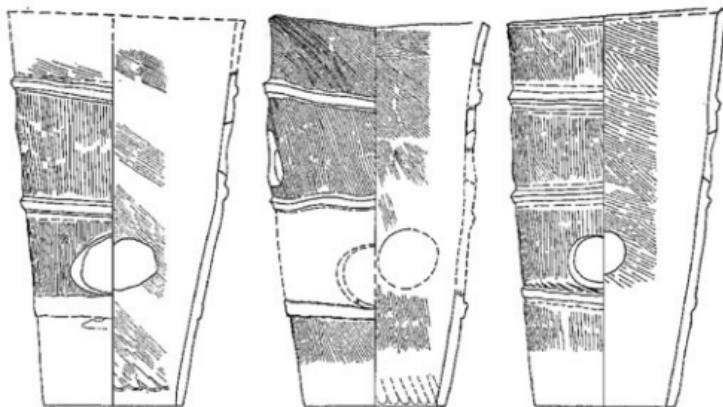
タガは3条続らされているが、最下段の貼り付けは概して雑である。器壁への貼りつけ部も平行線とはならず蛇行し、断面形は稜をもたず扁平な弓弧状を呈する。上位2条のタガは、3方向からの指圧によって断面形が低い台形を示すものと、2方向からのみの指圧で三角形を示すものとがある。走向および稜線共にシャープさに欠け、器壁への貼り付けも形式的なものとなっている。タガの貼り付け部巾1.2cm～2.5cm、高さ0.3cm～1.2cmを測る。器胴に通常見られる貫孔は、すべて円孔である。タガによって区画された第2段および第3段に、相対する2孔が上下に直交する形で貫孔されているが、整然とした円形孔は少なく、歪みをもった不整円形や橢円形のものが目立つ。したがって円孔の径は個体差よりも同一円孔でも直徑を計る向によって一定せず、5.2cm～7.4cmとまちまちであるが、平均的には5.5cm～6.5cm大である。

器表の仕上げ調整は原則的にはきめの荒い板目調整であるが、段位によって板目走向などに差異がある。最上段は板目が斜向するものが多く、口縁部は

表9 第1号墳出土の円筒埴輪計測値  
(単位:cm)

番号	器高	基底部径	口縁部径
1	(26.5)	15.6	(43.4)
2	24.3	15.4	43.4
3	24.4	15.4	43.3
4	—	15.4	—
5	—	14.0	—
6	—	15.9	—
7	—	16.2	43.0
8	—	16.1	—
9	—	16.2	—
10	—	18.2	—

( ) 内数字は推定値を示す。



第14図 岩田第1号填円筒埴輪実測図

板目調整の後指圧による横なで調整、2・3段は原則的には縦方向への板目であるが、個体によってはかなりの乱れをみせる。最下段基底部は、上半部のみに板目の痕跡をとどめるものもあるが、ヘラ削り後のなでのによる調整のものが多く、指圧痕を遺存するものも認められる。そしてタガに接する上下部分は、横方向へのなでのため板目が消されているものが多い。また個体によっては図14-7に示したように、鋭いへら状の工具によって器表に×印を線刻して、窓印的な印象を与えるものを数例検出した。この×印は長いものでは10cm前後を測る。内壁部は、基底部近くは概して指圧調整、上半部は不定走向の板目調整が施されている。

胎土は精選された粘土を用いているが、石英や長石の砂粒を多量に含む。焼成はおおむね良好で、ほとんどのものが器壁内部まで酸化しているが、個体によってはかなりの焼きむらを生じ、黄灰色から赤褐色のものまでまちまちである。なかには須恵質状に硬く焼きあがったものも2~3検出された。

こうした須恵質状の焼成、窓印、目の荒い板目調整等の特徴をもつ小形円筒埴輪は、当丘陵内所在の便木山第7号墳、高月平地所在の森山古墳（帆立貝式前方後円墳）からも検出され、共に当地域における円筒埴輪の下限を示すと考えられるものである。

## 第5章 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、すでに全壇していた中心主体（第1主体）のほか、墳丘内2主体周辺およびその外縁部各1主体の計5主体である。当丘陵尾根支脈上には本古墳のほかにも、時期的には併行する須恵器少數を供獻する封土をもたない土壙墓など数基が単独で散在しているため、墳外土壙については、本古墳鄰接と直接的な関係は明確ではない。しかし、本古墳周辺またはその外縁の一部を切って営なまれていることから、便宜上本項で一括して取り扱った。なお主体番号は調査の過程で検出順に記名したため、順不動となつて適切さに欠ける面もあるが、了承願いたい。

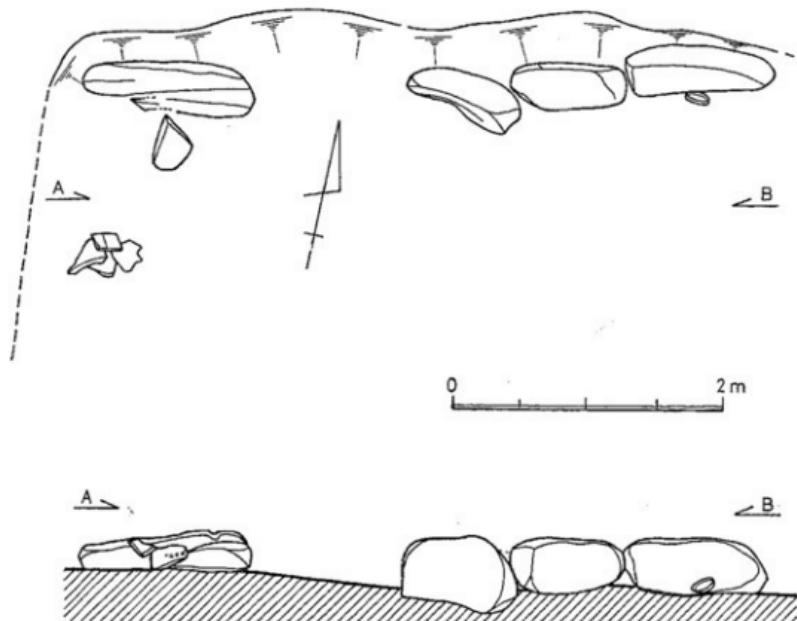
### 1. 中心主体（図15、図版8）

表10 第1号墳内部主体一覧

（単位cm）

主体番号	主体主別	立地	平面形	墓塚上端計測値		床面計測値		掘りこみの深さ
				長さ	巾	長さ	巾	
1	石室	墳丘中央	長方形？	？	？	？	？	—
2	土壙	周辺内	長方形	220	110	200	95	62
3	土器棺	周辺外縁	楕円形	76	62	—	—	26
4	土壙	墳丘内	長方形	(298)	116	(265)	100	42
5	石棺(?)	墳丘内	長方形	？	？	174	49	？

・計測値はすべて現存部での数値（）内は推定値である。

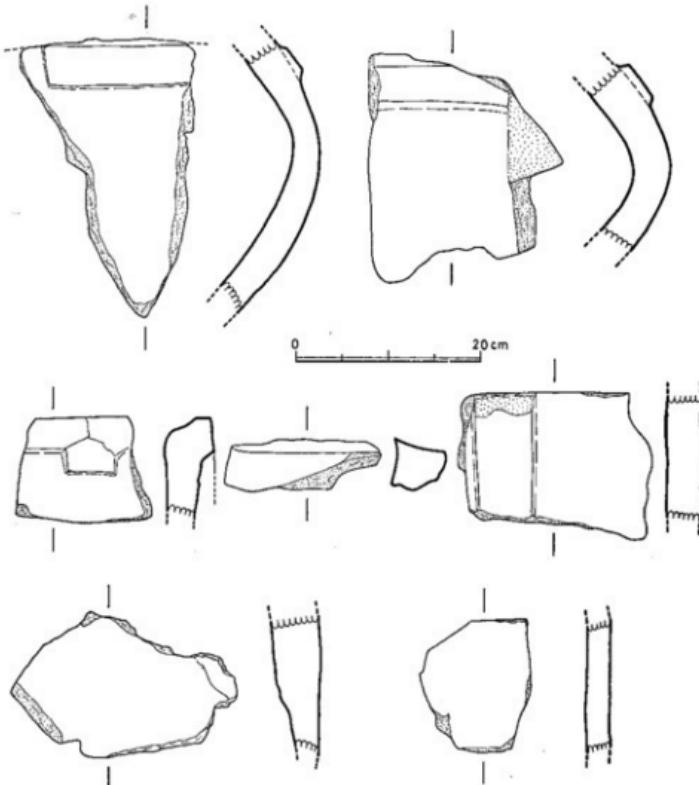


第15図 岩田第1号墳第1主体実測図

本古墳が立地する丘陵尾根支脈の走向に斜行して、東方から墳丘中央部に向かって、大きく掘り込まれた盗掘溝の北壁に沿った溝底に、直列状に並ぶ石材4個を検出した。この石材はいずれも当丘陵地に産出する花崗岩の自然転石である。 $1m \times 0.35m \times 0.5m$ 程度の石材を選び、墳丘盛土築成前の削平整地面を基部として、石面を南に揃えて一石分の欠落があるものの、 $5.1m$ の長さに整然と立て並べられ、原位置を保つ本主体石室石材の一部と推定された。そしてまた、東端石材の南に接して完形の須恵器壺1点と、西端石材の南 $1.3m$ の同レベルに、一括投棄された形態を示す土師質陶棺片約30片が検出された。

石材採取の目的で掘られたと伝えられる盗掘坑や残存石材の形状、壺および陶棺片の出土状況から、本主体はもと横穴式石室であったと推定される。残存する石材が北側壁部最下段の4個のみで、その他はすべて持ち去られ、床面および石室構築時の掘り方も含めて掘り崩されて、石室の規模や形態についての詳細は全く不明である。石室の主軸方位は尾根走向に斜交する東13度北を指し、前章で述べた周溝西端部に埋積する須恵器等の多種多量の遺物からみて、西方に開口する横穴式石室で、その規模は盗掘溝の長さや墳丘の大きさ、あるいは陶棺の存在などから、奥行7~8m、巾 $1.6\sim 1.8m$ 程度であったと推察される。

陶棺は、石室部の一括破片のほか、墳丘外方に堆積した盗掘溝の堆土中や丘陵斜面においても散

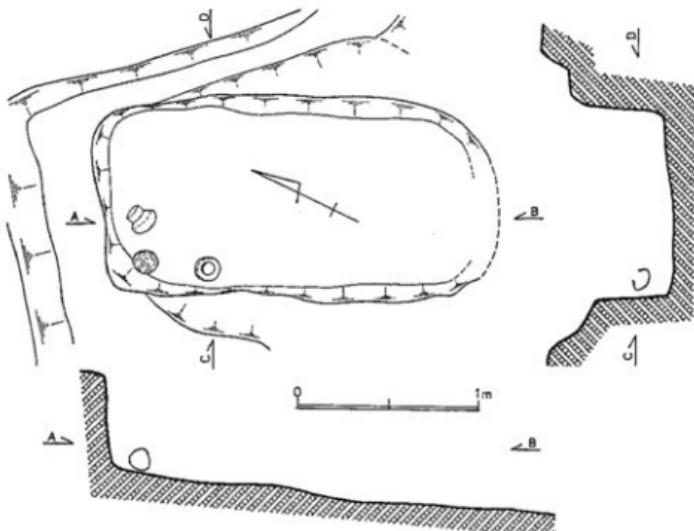


第16図 岩田第1号墳出土陶棺片実測図

見され、総数 131片、39.7kgを採集したが、いずれも小さく破損した断片で、同一個体のものと推察されるほか、接合による復元も不可能で、その原形は知ることはできない。採集した破片の観察ならびに当地方における既存陶棺との対比から、しっかりした造りの土師質亀甲型陶棺であったと考えられる。身部の器壁厚4.2cm～4.5cm、貼り付け突帯は扁平な台形状に貼られ稜線はシャープである。底面巾6.2cm～6.7cm、上辺巾5.2cm～5.6cm、突帯厚0.8cm～1.2cm、脚は円筒形につくられ推徑18.2cm、脚部厚2.65cm～2.9cm、高さは14.5cm以上である。明るい赤褐色を呈し、胎土に多量の砂礫粒を含むが焼成は良好である。器壁部は輪積み手法を見せるもその段数等については不明である。

## 2. 第2主体(図17、図版8)

周溝の尾根稜線近くに、周溝内から一部周溝外縁にかけて掘り込まれた、長方形の素掘り土塙墓



第17図 岩田第1号墳第2主体実測図

である(図9)。墳丘の長軸中心線すなわち丘陵尾根走向に沿って、周溝に対しては直交する向きに掘られている。周溝外縁の丘陵尾根に北小口部において、現地表下約15cmの地山生き土上面で土壤掘り込みが認められるが、南半部は周溝埋積土層のため掘り込み壁面および南小口床面は判然としない。本古墳周溝がある程度埋積した状況で本墓域が掘られた形跡を示している。

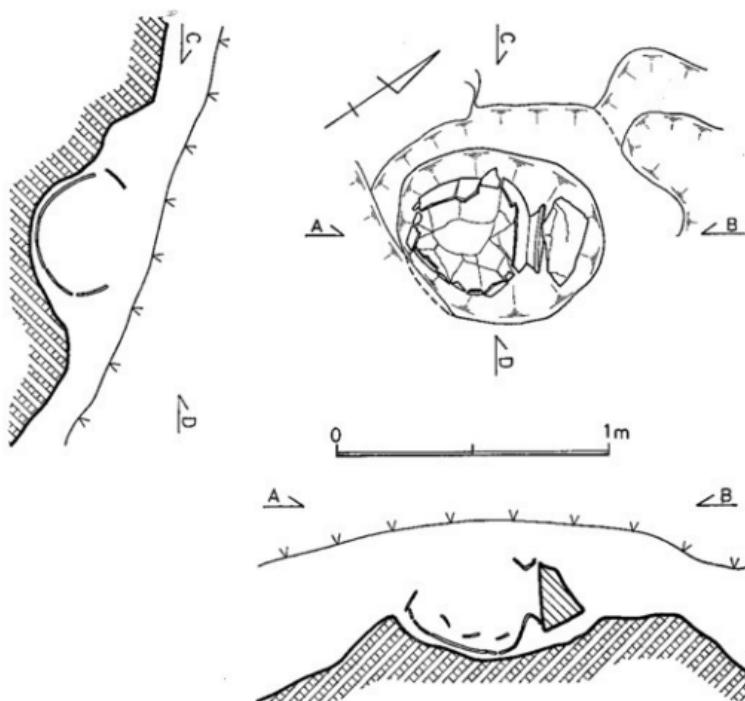
本墓域の掘り込みは、上端および床面共に隅丸長方形プランを示し、掘り込み壁面は上端部が少し広いが垂直に近い。床面はほぼ平らな面を保ち横断面は水平であるが、縱断面形は地形傾斜の影響か地形の低い南小口が北小口に比べて、約20cm低く下傾している。本土擴の規模は、掘り込み上端のわかる現地山生き土上面での長さ220cm、巾110cm、床面の長さ200cm、同巾95cm、深さは最もよく遺存し深く掘り込まれている北小口部で52cmを測り、主軸方位は北24度西を示す。

床面北小口に近い西側壁部に沿って、土器直口壺、須恵器壺、同窓各1の3点が、墓域内棺外供獻の形状で発見されたほかは、棺の痕跡とか赤色顔料の広がりや枕石などの埋葬施設物は何も認められなかった。

### 3. 第3主体(図18、図版9)

円弧状に掘られた周溝の北東端に近い外縁部丘陵上に、一部周溝掘り込みにかかるようにして所在する、須恵器大壺を棺に用いた埋葬施設である(図9)。

当該地が傾斜面にあるためか、あらかじめ地形の高い北西部の丘陵を約20cmの深さで切り込み、その下方を削平して巾約1.3mの平坦面を造り出し、そこに本主体を埋葬していた。墓域は棺に用

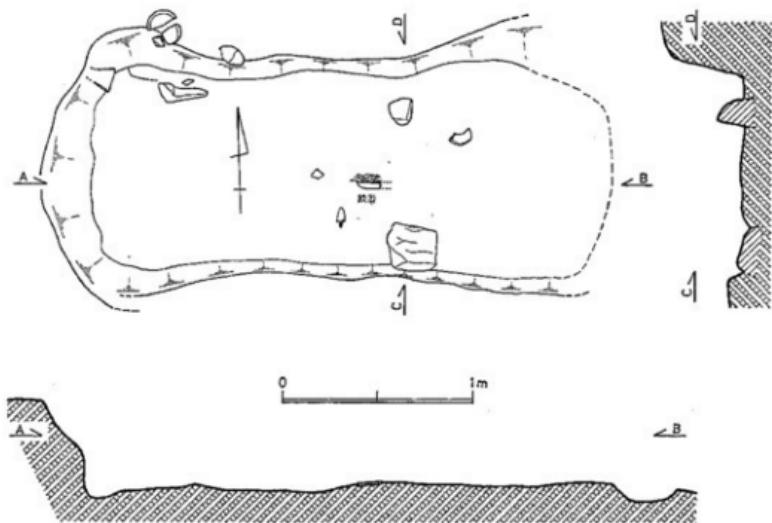


第18図 岩田第1号墳第3主体実測図

いた壺の大きさと形状に合せた楕円形プランで底面を円弧状に掘り、その中に壺を横臥した形に納めて、花崗岩割り石を口縁部に立てかけて蓋としたものである。壺はすでに土圧のためか破碎し、現丘陵表土下約12cm掘りさげたところで、一括破片の形状で検出されたが、後の接合によってほぼ完形に復元できた。墓壙の規模は丘陵地山生き土上面の風化が著しく、正確には検出できなかったが、掘り込み上端がわかる現地山生き土上面で長径76cm、短径62cm、深さは中心部で26cm、現地表面までの深さ46cmを測る。墓壙主軸方位は当該地の等高線に平行して、北40度東を指す。土器棺は墓壙主軸に沿って北東に口縁部を向いているが、器高約45cmの大きさからみて、嬰児または乳児を納めた棺と推察される。

#### 4. 第4主体(図19、図版9)

第1主体と平行してその南約4mの墳丘内に位置する、長方形素掘り土壙墓である。そこは墳丘築成前の削平整地面の南端となり、原地形が低いため盛り土による整地であるが、本土壙はその上方墳丘盛り土層から掘り込まれ、床面は整地面下にまで達している。墳丘上部が空洞や風化によっ



第19図 岩田第1号墳第4主体実測図

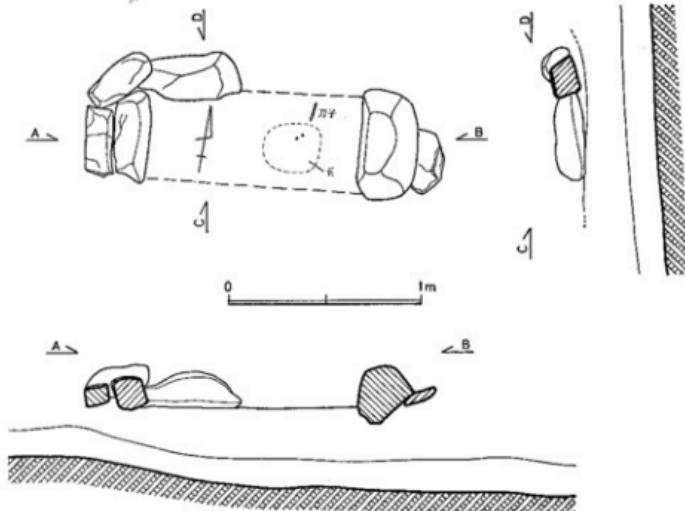
て大きく乱れ、本墓擴掘り込み上端部は確認できなかったが、第1主体構築の後掘られていた。

墓壇の形状は上端面および床面共に長方形プランを呈するが、その線はかなりの歪みをみせて整然とはしていない。床面はほぼ水平な面を保つが、東小口部は墳丘斜面に達し末端部が判然としない。そのため発見当初はその形状から、本古墳盗掘溝かも知れないとの疑いをもつ程度であったが、後の層序観察等から埋葬施設と認定した。第1主体との床面比高は、本主体が約60cm低位を示す。

墓擴掘り込みの確認できる現況上端での推長298cm、同巾116cm、床面長265cm、同巾100cm、深さは最もよく保存する西小口最深部で42cm、長軸中心線の方位は東3度南を示す。床面西小口から約140cmの長軸線を中心として、直刀および鉄鎌2個体分が折損はしているもの一括して検出されたほか、埋土および本墓擴掘周辺部において須恵器片數個体分が散見された。また床面西北小口部と、西小口から約165cm付近に数個の花崗岩礫が発見されたが、本主体と直接的な関係は明確にできなかった。その他、棺の痕跡や赤色顔料の広がり等の施設は何も検出されなかった。

##### 5. 第5主体(図20、図版10)

第4主体の西方約1mの間隔をおいて、それと直列状に連なるようにして第5主体が所在する。本主体は弥生式土器片を含む有機土を盛りあげた封土中に床面をおき、その東小口に2個、西小口に4個の風化の進んだ花崗岩礫を置いた、木棺直葬の埋葬施設と推察される。そこは地山生き土面の上方16cmに削平整地面、さらに19cm上方に本主体床面があつて、第4主体床面との比高は本主体の方が15cm高い。したがって本主体の埋葬は第1号墳築成に遅れるが、当該地の調査を上方か



第20図 岩田第1号墳第5主体実測図

ら一枚削りに振りおろしたにもかかわらず、両小口石材に当るまで墓壙掘り込み線等を検出できなかつた。私たちの不注意によるかも知れないが、あるいは墳丘築成の過程における埋葬の可能性も考えられる。

本主体は両小口石材と、床面に供献された玉類や鉄器の存在によって、やつと主体床面が確認できる状態であった。石材を含む外法長174cm、内法長108cm、床面巾49cmを測るが、棺高というか主体高は不明である。また小口石材も東石材は床面下約7cmにいけ込んだ形態を示すが、西石材は同レベルにあって棺小口に立てかけたものか、棺小口上方に置いたものがその腐朽陥没とともに崩落したものか不明の状態である。主体長軸中心線の方位は東4度南を示す。

床面の東小口寄りに刀子状の小鉄器1と、埋もれ木製玉2、土製練り玉約70が検出された。なかでも土製練り玉は後述の周溝低出土の練り玉と判別できないほどよく類似するものである。

#### 6. その他

以上が本古墳発掘によって確認された内部主体の概要であるが、それとは別に、第1主体西端石材の南西約2mの削平整地面のやや下方から、破碎されて遊離した状態の須恵器大壺の一括破片が検出された。そこは本来第1主体石室内にもあたり、盗掘者によって攪乱された痕跡もあることから、第1主体副葬遺物の残存品として取りあげたが、後の接合整理によって第26図-2のようにはほぼ完形に復元できる同一個体の一括破片であった。第3主体土器棺および第4・5主体のような封土内埋葬施設の存在から、一概に副葬遺物と断定できない点もあるのでここに参考例として付記し

ておきたい。

## 第6章 出土遺物

本古墳の出土遺物は、前述の埴輪および陶棺のほかは表11に示したとおりである。すでに全壇していた第1主体は別としても、各主体とも伴出遺物が少なく、大半は馬廻内に遊離埋破片として

表11 第1号墳各区分出土遺物個体数一覧

遺物名		第2主体	第3主体	第4主体	第5主体	墳丘内	周溝内	計
須 惠 器	环(身)	1	—	—	—	3	28	32 (4)
	坏(蓋)	—	—	—	—	2	27	29 (29)
	合付坏(蓋)	—	—	—	—	—	2	2 (2)
	高环	—	—	—	—	—	10	10 (5)
器	縁	—	—	—	—	—	4	4 (1)
	提瓶	—	—	—	—	—	4	4 (1)
	埴	1	—	—	—	—	2	3 (3)
	大盛	—	1	—	—	1	2	4 (4)
装 飾 土 器	装飾土器	—	—	—	—	—	2	2 (4)
	その他の器種不明片	—	—	—	—	4	12以上	16以上
土箇器埴		1	—	—	—	—	—	1 (1)
銅鏡		—	—	—	—	—	1	1 (1)
裝 身 具 類	金環	—	—	—	—	—	3	3 (3)
	勾玉	—	—	—	—	—	2	2 (2)
	管玉	—	—	—	—	—	3	3 (2)
	切子玉	—	—	—	2	—	—	2 (2)
	小玉	—	—	—	—	—	73	70 (40)
鉄 器	土製練玉	—	—	—	69	—	60	125 (40)
	直刀	—	—	1	—	—	—	1 (1)
器	刀子	—	—	—	1	—	1	2 (2)
	鐵鎌(平)	—	—	1	—	—	3	4 (3)
	鐵鎌(尖)	—	—	5	—	—	8	13 (10)
	その他の鐵器片	—	—	—	—	—	約 25	25以上
馬具		—	—	—	—	—	1式部分片	1式部分片(同)

( ) 内数字は実測図示個体数

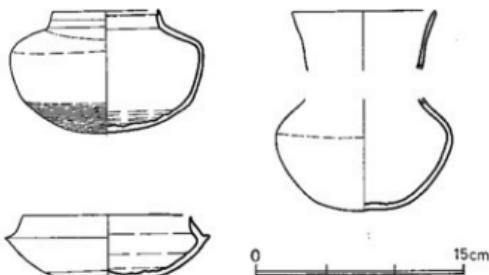
発見された。したがって表示の遺物数は接合復元等の整理検討による推定個体数である。実測可能なものは極力図示に努めたが、細片および類形の多い玉類については、その一部を省略した。本項では原則として器形ごとにまとめ、計測値等を表示しながら記述を進めたい。

なお今まで殆んど触れなかったが、本古墳が弥生時代集落址と同一立地に複合することもあって、墳丘にその包含土が利用され、多数の弥生式土器片も採集したが、この集落址は本調査概報第5集に「さくら山遺跡」として報告するので、ここでの記述は割愛した。

## 第1節 土 器

### 1. 第2主体出土の土器 (図21, 図版11)

第2主体墓壙床面出土の須恵器短頸壙、同坏身、土師器直口壙の各1である。短頸壙は口縁を一部欠損するがほぼ完形で、やや肩の張った器胴に内傾する短頸がつく。口縁部に焼歪みがある他は均整がとれ、器表上半は横なで、下半はへら削り、内面は横なで調整である。蓋をした状態で焼成されたらしく、肩部に径10.3cmの灰をかぶらない円形斑をみ



第21図 第1号墳第2主体出土土器実測図

表12 第1号墳第2主体出土の土器

(単位cm・( )内推定値)

番号	器種	口縁径	頸部径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	備考
1	短頸壙	8.2	8.4	14.1	8.9	灰白色	砂粒を含む	普通	ほぼ完形
2	坏身	12.2	—	14.9	4.86	灰青色	砂礫を含む	良好	完形
3	直口壙	10.2	(6.5)	12.6	(14.2)	赤褐色	砂礫を含む	普通	(土師器)

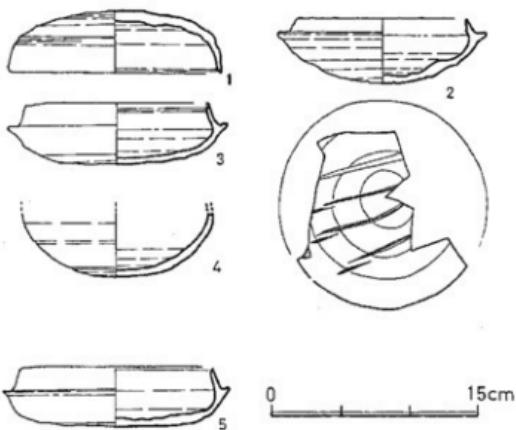
表13 第1号墳墳丘内出土の須恵器

(単位cm・( )内推定値)

番号	器形	口縁径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	備考
1	坏蓋	14.8	15.0	4.5	灰青～暗灰色	砂礫を含む	普通	破片復元、約80%
2	坏身	12.3	15.1	4.7	暗灰色	砂礫を含む	普通	破片復元、約60%
3	坏身	13.0	15.7	4.5	灰青色	細砂を多く含む	普通	破片復元、約70%
4	壙底部(?)	—	—	—	灰白色	砂粒を含む	軟質	底部片のみ
5	坏身	13.6	16.1	4.5	灰青色	細砂を含む	普通	第1主体完形

せる。坏身は整形良好な完形で、立ちあがり 1.2cm とかなり高くシャープである。内面は横なで、外表はへら削りと横なで調整である。

直口壺は本古墳発見の唯一の土師器である。土壺のため一括破片となり、接合復元で大要を知り得たが、頭部の保存状態が不良で完全形は不明。丸底ながら底部を径 5.6cm の円形に平らにつくり安定がよい。器表が荒れて整形手法は判然とせず、横なで調整と思われる。



2. 墳丘内出土の土器(図22、図版11)

第22図 第1号墳墳丘内出土土器実測図

計10個体分を発見したが、大形壺と壺の各1のはかは坏で、第1主体内の1個体の他はすべて第4主体の蓋或上端付近の検出である。大形壺については便宜上後にまとめて記述する。坏はいずれも内面横なで、外表はへら削りおよび横なで調整である。

(1)の蓋と(3)の身は共に破碎片となっていたが、ほぼ完形復元できた。上下に対となる可能性が強い。(1)は若干焼歪みをみせるが整形は良好、外面肩部に稜をもち、口縁端は内側に低く斜傾し稜をもつ。(3)の立ちあがりは 1.6cm と高くシャープである。本古墳出土の土器の中では上限を示す類に属す。(2)の坏身は立ちあがりも低く器壁も厚い。底部に図示したようなへら描き4条の沈線が認められる。(4)は短頸壺等の底部片と思われるが原形は不明。(5)は第1主体石材に接して発見された完形坏である。立ちあがりも比較的高くシャープであるが、底部がやや扁平である。

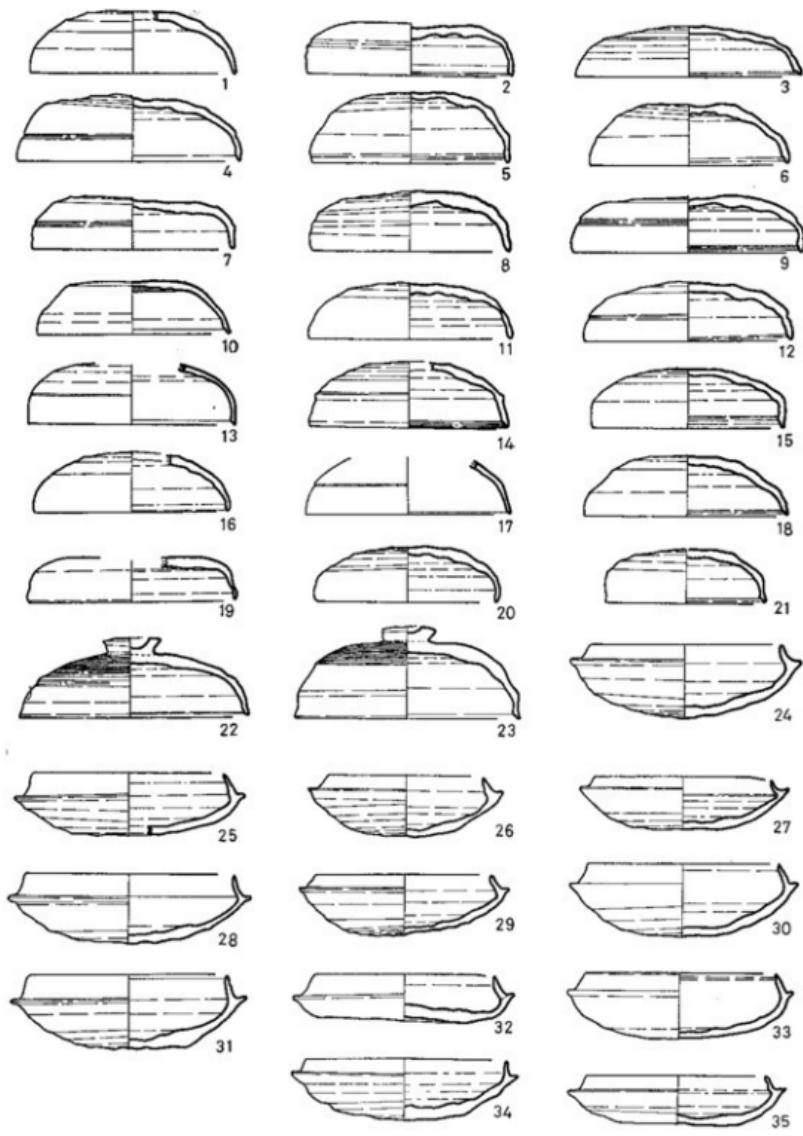
### 3. 周溝内出土の須恵器

周溝内出土の須恵器は破片等の分類検討の結果、少なくとも93個体分以上におよぶことがわかった。いずれも周溝掘り込み斜面から周溝底にかけて、埴輪片などと共に混在した状態での遺物出土である。実測可能のものについて器形ごとにまとめて概述する。

#### 坏壺(図23、図版12)

計27個体分を検出したが実測可能のものは21個体である。径13.4cm~14.4cm、器高3.5cm~4.3cm のものが多く、肩に稜をもつものと持たないもの、口縁端部を丸くおさめるものと内側に低く傾斜させたものがある。整形仕上げは、内面横なで、外表は横なでおよびへら削り調整である。

(1)は4片約50%の遺存。体部は椀状に丸味をもち、口縁端もまるくおさめている。(2)4片約75%を復元。天部がくぼみ扁平、肩に弱い稜をもつ。(3)3片約40%遺存。口縁端は斜傾し内側に稜をもつ。(4)2片約40%の遺存。口縁端の斜傾はシャープである。(5)6片約80%復元。径の割に器高が高



第23図 岩田第1号墳周辺底出土土器(I)

表14 第1号墳周辺底出土の壺蓋

(単位cm・( )内推定値)

土器番号	口 径	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	14.2	4.2	灰 白 色	細砂を多く含む	やや不良	約50%遺存
2	14.3	3.2	暗 灰 青 色	細砂を含む	普 通	約75%遺存
3	(15.3)	4.3	灰 白 色	小 石 を 含 む	やや不良	約40%遺存
4	15.2	4.2	灰白色～灰青色	微 砂 を 含 む	普 通	約40%遺存
5	13.7	4.9	灰 青 色	砂 蘆 を 含 む	"	約80%遺存
6	13.9	4.1	灰青色～灰褐色	小 石 を 含 む	"	破碎完形復元
7	13.8	3.5	灰 青 色	微 砂 を 含 む	堅 級	ほぼ完形
8	13.3	4.2	"	小石を少量含む	普 通	ほぼ完形
9	15.6	3.8	"	細 砂 を 含 む	"	ほぼ完形復元
10	(13.4)	(4.3)	"	砂 蘆 を 含 む	"	破片、約20%遺存
11	14.4	3.7	"	小 石 を 含 む	"	破片、完形復元
12	14.2	3.9	"	チャート等の小石を含む	"	完形復元
13	(14.4)	(4.2)	"	砂 蘆 を 含 む	"	破片、約15%遺存
14	(13.6)	(3.5)	"	石英質の小石を含む	やや堅 級	約30%遺存
15	13.6	4.3	"	小 石 を 含 む	普 通	破片、ほぼ完形復元
16	(13.4)	(4.1)	灰青色～暗灰色	細砂を多く含む	"	單片約15%遺存
17	(14.1)	(4.4)	灰 青 色	砂 蘆 を 含 む	"	單片約20%遺存
18	13.8	4.2	"	細砂を少量含む	"	破片、ほぼ完形復元
19	(14.2)	(3.0)	内 面、灰 青 色 外 面、暗 福 色	雲母粒を多く含む	"	破片、約30%遺存
20	12.1	3.6	灰青色～暗青色	細 砂 を 含 む	"	ほぼ完形復元
21	11.0	3.6	灰青色～灰 色	細砂を多く含む	"	ほぼ完形復元
22	(15.7)	5.4	灰 青 色	砂 蘆 を 多く 含 む	やや軟質	約80%遺存
23	(15.4)	6.3	内 面、茶 灰 色 外 面、灰 綠 色	砂 蘆 を 多く 含 む	やや軟質	約80%遺存

い。口縁部が内湾し胴部に最大径をもつ。口縁端は薄く内側に沈線状の稜を有し、内面底に青海波状の圧痕がみられる。(6)3片完形復元。やや歪みをみせ口縁端はまるくおさめ内側に段をもつ。内面中央に青海波状の施文がある。(7)4片約80%復元。天部は扁平で肩に稜をもつ。内面中央に螺旋状のなでの後、それを切る形の強い指圧条痕をみせる。(8)一部を欠損するもほぼ完形。均整のとれた良品で外表の一部に指紋を残す。(9)2片をほぼ完形復元。径15.6cmは本古墳発見壺蓋中最大。口縁端はまるくおさめるが部分的に内側に段をもち、内面中央に青海波状の施文がある。(10)2片約

20%遺存、外表に弱い稜をもつ。図15片を完形復元。胎土に0.5cm大の礫を含み、内外面共横なで調整時の引き回し痕が目立つ。図6片完形復元。図約15%大の單片。外表横なで調整時の指圧による凹凸が目立つ。図2片約30%の遺存。整形はていねいで外表肩部にシャープな稜をもつ。口縁端部のつまみも強く内側に稜をもつ。図15片をほぼ完形復元。口径13.6cm、胴部径13.9cmの太鼓型となる。内面口縁端より0.7cm下方に突出した稜をもつ。図約15%大の單片。図單片約20%の遺存。外表肩部にシャープな稜をもち、口縁端は斜傾面を有する。図3片をほぼ完形復元。全体として丸味のあるつくりで内面中央に青海波、外表中央に格子の叩き目をもつ。図2片約30%遺存。自然釉が外表一面に認められる。図2片ではほぼ完形復元。口径12.1cmと小形であるが口縁が内湾しているため、最大径12.7cmは中間にある。図6片をほぼ完形復元。口径11cmは本古墳最小、短頸壺の蓋と思われ、若干の焼歪みをみせる。

#### 台付坏蓋（図23、図版12）

蓋部のみ2個体分の検出である。坏部については細片すら発見できなかった。図は約80%、図は約60%の遺存ではほぼ同巧同大のつくりである。天部は渦巻状の5条櫛目による描き目、肩に弱い稜をもち口縁部へかけては横なで調整、つまみは描き目の上から貼り付けなでによる調整、内面は横なで調整である。後述の岩田14号墳出土の台付坏に酷似する。

#### 坏身（図23・24、図版13）

計28個体分を検出したが実測可能のものは24個体である。口径10.8cm～14.3cm、最大径13.8cm～16.7cm、器高2.7cm～5.0cmとかなりばらつきがある。器壁が薄くて立ちあがりのシャープなものと、器壁が厚く受部が外方に高く斜傾する2種がある。底部はすべてへら削り、体部および内面は横なで調整である。

図は口縁の一部を欠くがほぼ完形で、歪みのない良品。図4片約60%遺存。底部が歪んで凹面となり扁平。完形を保ち均整のとれたつくりで、径13.8cmは本古墳出土坏身では最少。図16片を完形復元。内面底部に重ね焼きと思われる径6.6cmの円形痕がある。図6片約70%の復元。径16.3cmの大形で立ちあがりも1.45cmと高くシャープ。図2片約80%の復元。0.3cm大の礫の突出と焼歪みがある。図13片を完形復元。内面底部に青海波と1cm大の扁平な粘土塊の付着がある。外面体部のへら削りはシャープな渦巻状の稜をみせ、図示したように一条のへら描き沈線が走る。図一部欠損するがほぼ完形。整形良好で真円に近く、立ちあがりも1.7cmと高くシャープ。器壁内に空気泡のためか数か所にふくらみをもつ。図6片完形復元。底部が大きく歪み扁平な皿状を呈する。図10片約80%復元。立ちあがりはシャープ。図完形で外表に自然釉の斑文がある。図約50%大の單片。焼歪みと外表に窓斑をみせる。図2片をほぼ完形復元。外面に指頭圧凹線を部分的にみせる。図2片ほぼ完形復元。図7片ほぼ完形復元。口縁部を含めて大きく焼歪みをみせる。図3片で約80%復元。径16.7cmは本古墳出土坏中最大で、立ちあがりもほぼ完形。体部に歪みがあり扁平。図3片約75%復元。内面中央付近に青海波状の圧痕あり。図單片約20%遺存。内面の一部に青海波あり。図單片約15%遺存。図3片約70%の復元。整形良好で立ちあがり1.6cmと高くシャープ。図一部を欠

表15 第1号墳周辺底出土の坏身

(単位cm・( )は推定値)

土器番号	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	備考
24	13.2	15.7	5.0	灰青色	細砂を含む	普通	ほぼ完形
25	13.3	15.8	4.8	"	細砂を多く含む	"	約60%遺存
26	10.8	13.8	4.2	"	細砂を少量含む	"	完形品
27	12.0	14.3	3.7	灰白色	細砂を多量に含む	やや不良	完形復元
28	14.3	16.3	4.8	灰青色	微砂を含む	普通	約70%遺存
29	11.8	14.5	4.2	"	砂礫を多く含む	"	約90%遺存
30	13.0	15.5	5.2	"	微砂を多量に含む	"	完形復元
31	13.2	15.8	5.1	"	細砂を多量に含む	"	ほぼ完形
32	11.9	14.4	3.2	暗灰色	細砂を含む	"	完形復元
33	12.5	15.6	4.7	灰青色	細砂を含む	"	約80%遺存
34	13.6	15.6	4.3	"	細砂を含む	"	完形品
35	12.2	14.8	3.3	灰青色・暗灰色(外縁)	細砂を多く含む	"	約50%の大單片
36	12.0	15.0	4.4	灰色～暗灰色	小石を含む	"	ほぼ完形復元
37	11.8	14.4	4.0	灰青色	細砂を多く含む	"	ほぼ完形復元
38	12.5	14.8	4.3	"	細砂を含む	"	ほぼ完形復元
39	11.0	14.1	4.2	暗灰青色～灰青色	細砂を含む	"	ほぼ完形復元
40	14.2	16.7	4.8	灰青色	細砂を多く含む	"	約80%の遺存
41	13.1	15.6	3.5	"	小石を含む	"	ほぼ完形
42	12.2	14.7	5.0	灰青色～暗灰色	小石を多く含む	"	約75%遺存
43	13.4	15.7	5.1	灰青色	小石を多く含む	"	單片約20%の遺存
44	(13.5)	15.0	2.7	"	細砂を含む	"	單片約15%遺存
45	12.9	15.7	4.4	"	小砾を多量に含む	良	約70%の遺存
46	12.7	15.0	4.0	"	細砂を多く含む	普通	約90%の遺存
47	(12.8)	(15.1)	(3.2)	灰白色	細砂を含む	"	單片約30%の遺存

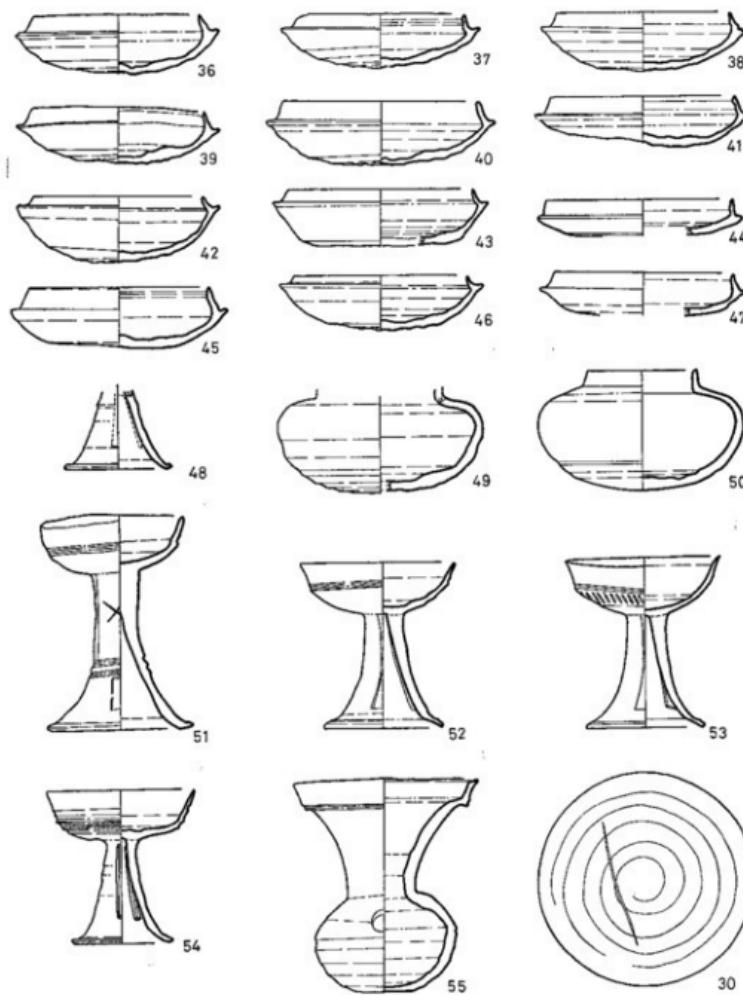
扣するがほぼ完形。立ちあがり 0.6cmと低く体部の歪みをみせる。細单片約30%遺存。

## 高坏(図24、図版11)

計10個体分の検出であるが図示できるのは5個体である。総じて焼歪みの著しい長脚高坏で、いずれも脚柱部を縱に3等分する形の長方形透孔をもつ。整形仕あげは内外面ともおおむね横なで調

整が施され、坏部下半にへら削りの跡を残す。

個は脚下半部のみ遺存するが1段透孔である。即ち脚裾の一部を欠損するもほぼ完形復元できた。坏部は焼歪みによりいびつとなり、外面体部に稜をもつ。脚柱に2条の凹線を続らせ一応2段



0 20cm

第24図 岩田第1号墳周辺底出土土器(2)

表16 第1号墳周溝底出土の高环

(単位cm)

土器番号	口 径	脚底径	脚 高	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
49	?	7.9	?	?	灰青色	細砂を含む	普通	脚部片のみ、1段透し
51	11.2	10.2	11.6	15.2	灰色～暗灰色	細砂を含む	普通	ほぼ完形復元、2段透し
52	10.3	9.2	9.2	13.2	暗灰色～灰青色	細砂を含む	普通	ほぼ完形復元、1段透し
53	11.7	8.5	8.4	12.5	灰褐 色	砂礫を含む	普通	ほぼ完形復元、1段透し
54	10.8	7.5			暗灰色～灰青色	細砂を含む	普通	推定復元・1段透し

表17 第1号墳周溝底出土の坏

(単位cm)

土器番号	口 径	最大径	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
49	?	14.8	?	灰青色	細砂を含む	普通	約50%大單片
50	8.3	14.9	8.6	灰青色	細砂を含む	普通	完形

表18 第1号墳周溝底出土の螺

(単位cm)

土器番号	口径	頭部径	最大径	脚部高	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
55	13.0	4.4	10.4	7.4	15.4	暗灰色～灰青色	細砂を含む	やや堅板	約90%の復元

表19 第1号墳周溝底出土の提瓶

(単位cm)

土器番号	口径	頭部径	最大径	脚部径	器高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
56	8.8	6.3	24.3	16.6	29.9	灰青色～暗灰色	細砂を含む	普通	ほぼ完形復元

表20 第1号墳出土の大壺

(単位cm)

土器番号	口 径	頭部径	最大径	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
57	25.0	18.0	43.0	47.2	灰青色	砂粒を含む	普通	第3主体土器
58	18.0	18.1	47.9	50.6	灰褐 色	細砂を含む	やや堅板	填丘内出土底部復元
59	25.6	17.4	48.2	49.2	灰青色 自然釉流出	砂粒を含む	普通	推定復元
60	?	33.4	?	?	灰青色 部分的に暗灰色	細砂を含む	やや堅板	約1300片復元できず

表21 第1号墳出土装飾付須恵器

(単位cm)

土器番号	口 径	器頭径	器底部径	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
61	17.7	18.3	24.9	49.7	灰青色	砂粒を含む	やや軟質	燒むら盛みあり
62	17.8	17.0	23.8	50.0	灰青色	砂粒を含む	やや軟質	燒むら盛みあり

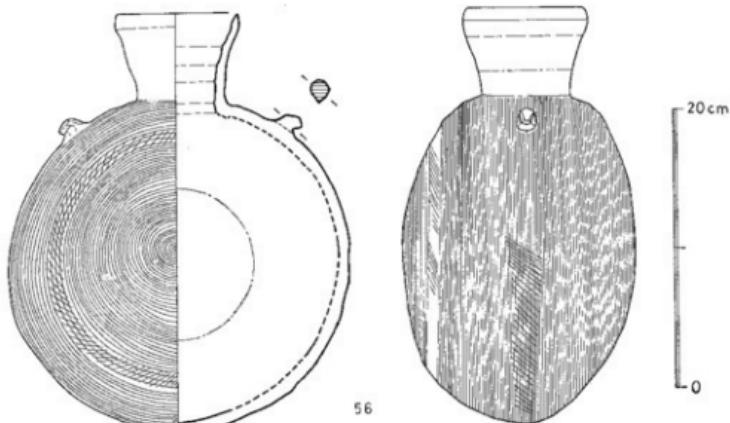
透孔の形状をみせるが、下段は透孔となるものの、上段はそれを模した一条のへら描き沈線で貫通していない。上段沈線の間にへらによる×印が1か所認められる。脚内面上端は左上方への絞り目がみられる。図15片を接合して約70%復元である。坏外表体部に一条の回線と稜をもち、口縁端は丸くおさめている。脚端に一条の回線をもち、脚部透孔は1段3方向であるが、透孔上端は坏底部面にまで切り込んでいる。図10片を接合して約80%の復元。焼成により全体がいびつとなる。坏部稜線の下に接して櫛状施文具による刺突文が斜傾平行して続るほか、坏底部から脚部全体に横方向への櫛描き目が施されている。透孔は1段3方向である。図6片約40%の遺存で脚上端は推定復元である。坏部下半に2条の回線を繞らせ、その間に斜線状の粗雑な施文を刻んでいる。透孔は1段3方向である。

#### 短頸壺(図24、図版12)

2個体分の検出で、壺は單片約50%大、図は完形である。どちらもほぼ同巧同大のつくりで、やや肩の張った扁平な器軸に短頸がつく。口縁から肩へかけては横なので、腹部上半は櫛状工具による横方向描き目、下半はへら削り調整である。頸は蓋をした状態での焼成か、頸部周辺に径10.75cmの灰をかぶらない円形斑をみせる。

#### 壺(図24、)

計4個体分の検出であるが、細片が多く図示できるのは1個体である。図約20片を接合復元したものである。口縁は鋭い段状の稜をもって拡張され、口径13.2cmに比して、頸部径4.4cmと細い。器表は無文で横なので調整の後へら磨きが施され、焼成が堅緻なことと相まって光沢をもつ。口縁内面全体に自然勧がかかっている。



第25図 岩田第1号墳周邊底出土土器(3)

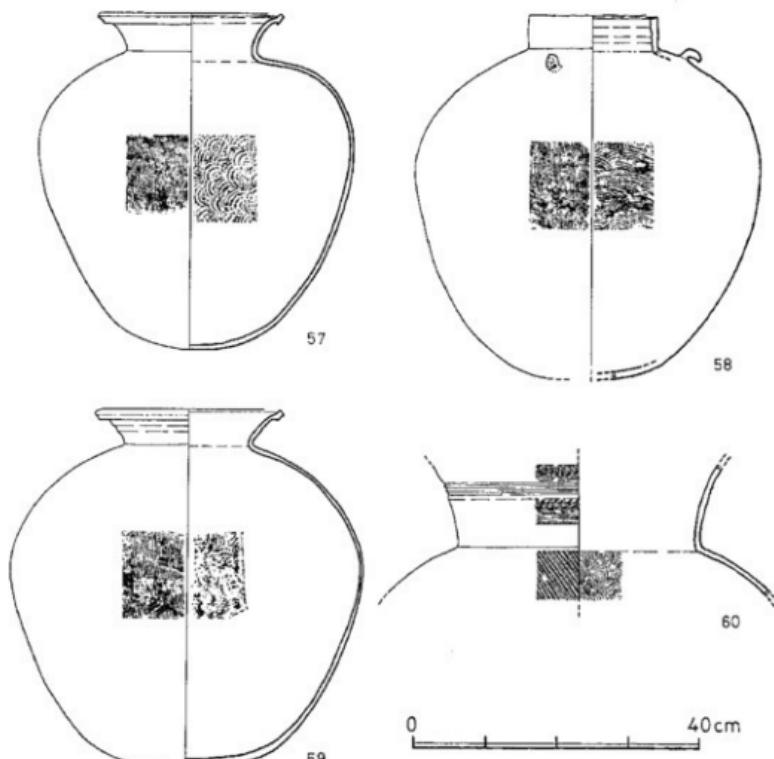
提瓶(図25, )

4個体分を検出したが図示できるのは磁の大形提瓶1個体のみで、それも約70片を接合して約90%の復元である。最大径24.3cm、厚さ16.5cm、器高30cmの大形で、内面は不定方向へのなで、外表は口縁部横なで、体部は全面同心円状のきめの細かい刷毛目調査で、部分的にへら削りおよび叩き目が施されている。体部中央を径10.9cmの粘土円板で塞ぎ、つまみも貼り付けである。頸部のさしこみは、腹部壁厚より深く入って段状を呈する。

大形壺(図26, 図版14)

周辺出土は2個体分の破碎片であるが、記述の都合上、第3主体および墳丘内出土の各1を加えて一括して概述する。

◎第3主体土器棺に利用され、墓室内で一括破片となって検出した。134片を接合してほぼ完形



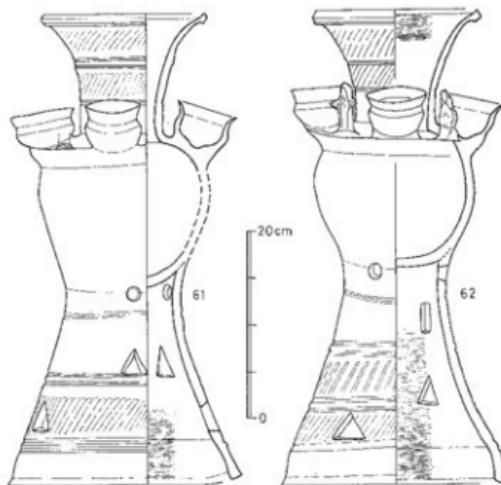
第26図 岩田第1号墳出土大形須恵器

復元できた。最大径が上位にくるいちぢく形の器胴に、口縁部が拡張され鋭い稜をもって外反する短頸がつく。胴下半に若干焼垂みをみせるが均整のとれた壺である。口縁部は内外面とも横なで、器胴外表は全面縦に強い格子目、同内面は同心円状の青海波が施され、外表では部分的に横方向へのへら削りが認められる。壺は第1主体と第5主体間の、埴輪造成時の削平整地面付近で、逆離一括片となって発見された。169片を接合して一部欠損はあるがほぼ完形復元できた。直口する短頸をもち口縁端は平坦に抑え稜もシャープである。頸に近い肩部に小突起を3か所に貼りつけ、底部には焼成後と思われる径7.5cmの円形貫孔が穿たれている。一度動かされ集めた形跡があって詳細は不明であるが、土器棺として利用された可能性もある。口縁部は横なで、器胴部外表は縦方向への板目の叩き、同内面は波状青海波である。壺は周辺内遊離の同一個体と思われる77片を接合したが、約50%の復元である。したがって実測図は推定復元図である。球形に近い器胴に外反する短頸がつく。口縁部は内外面共横なで、器胴外面は板目状の叩き、同内面は波状青海波の上からのなで調整である。緑色の自然釉の流れ出しが多く認められる。壺は周辺中央約3mの範囲に破碎遊離していた同一個体と思われる約1,300片である。接合復元はできなかったが、頸部付根径34cmおよび破片の量から推して大形のものであろう。現存頸高11.8cmは上から2条凹線、櫛描き波状文、3条凹線、櫛描き波状文、横刷毛目が施され、器胴外表は斜格子、同内面は同心円青海波文が強く叩きだされている。全体として灰白色を呈するが、焼成が堅緻で口縁から肩にかけての一部に黒色の光沢をもつ。

#### 装飾付土器（図27、図版14）

地形の高い側の尾根稜線部にあたる周溝掘り込み斜面に、埴輪片と共に崩落した状態で遊離検出された2個体分の破片である。ほぼ完形に近く復元でき、その大要を知り得たが、出土状況からみて埴輪と同様埴輪供獻と考えられる。

两者共ほぼ同巧同大のつくりで、広口壺の底部に器台円筒部を直接貼りつけて一体化し、壺の肩に粘土帯を貼りつけて棚をつくり、直交対角線上に4個の子壺と、その間に手づくねの小人形を立てたものである。部分によって焼斑があり器台裾部に垂みをみせるが、器表は壺胴部にへら削りのほかは横なで、内面は壺胴部に青海波のほかは横なで調整である。



第27図 岩田第1号墳出土装飾付須恵器

る。

鋤壺部口縁に2条と1条の2段に回線を繞らせて口縁部を3区分し、上方2段には不整然ながら斜傾回線をつけている。器台部も上から、1条、1条、2条の3段に回線を繞らせ4区分し、上から4方向小円孔、3方向三角透孔、同三角透孔と3段に透孔と、下段透孔区に斜傾回線文を施している。壺肩部の4個の子母の間の人形は台座しか検出できないが、なかに1か所2人を並立させた跡が認められる。鋤壺口縁の施文は鋤と同様であるが、回線は上下共1条である。器台部は4段の回線を繞らせ5区分するが、最下段のみ1条で他は各2条である。透孔は上から円孔、長方形、三角形、三角形と四段に穿たれているが、いずれも三方に向3個である。斜傾回線文は三角通しのある2段に施されている。壺肩の子母と人形は各4である。

## 第2節 銅 鏡 (図28、図版16)

周辺底南西部に他の遺物と共に混在していた一括破片と、2cm大ほどの单片出土の2個体分である。

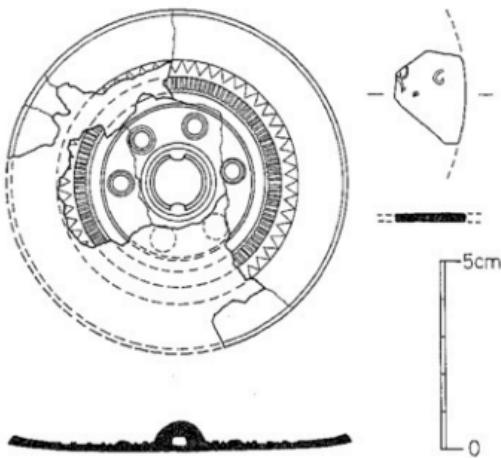
一括破片分は図示したように接合により約70%程度復元できたが、保存状態が悪いうえに縁背銹化が著しくて、背面の文様構成も判然としないが、径9.3cmの平縁の彷彿鏡である。縁部は僅かななりをもち無文である。縁端は台形状に稜をもち厚さ0.25cm、平縁巾1.3cmを測る。内区は外方から縦齒文帯、直行横齒文帯・無文帯の3圈を繞らせるが、内側の無文帯には、あるいは結節状の陽鉄出し文があるのかも知れない。鉋は円形座鉋で径2.1cmの円座に径1.4cmの素円鉋が載るが、鉋通しの穴は横に長径をもつ梢円貫穿である。鉋と文様帯の間に巾0.9cmには、6乳を配しその間に唐草文状の陽出がみられるが判然としない。乳はいずれも円座乳で径0.7cmの円座に径0.45cmの円乳が載っている。

今1片の鏡片は、内区部の破片で一端に鋸齒文状の文様と、部分的に唐草文をみせるが、細片のため詳細については一切不明である。前者に比して銅質がよく、0.2cmと厚いところから、別個体鏡片と推定できる程度である。

## 第3節 装身具類

### 1. 金環 (図29、図版16)

周辺底南西部において、土器片や玉類と共に遊離検出した3個体である。いずれも太さ0.25cmの針金を環状にまるめ、その両端をつ

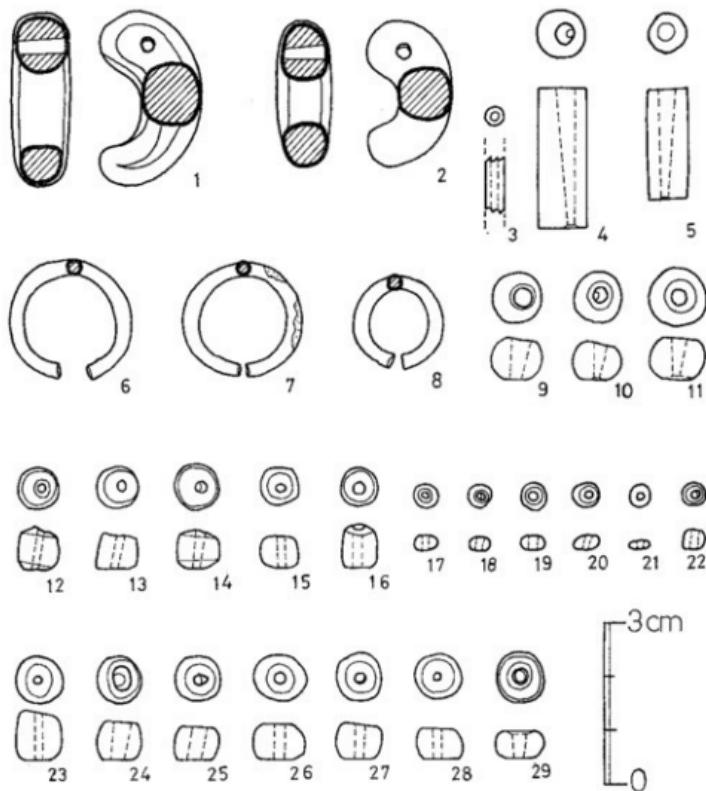


第28図 岩田第1号墳周辺出土銅鏡

き合せたものである。(6), (7)は共に銀製で、(6)の外径 2.18cm, 内径1.6cm, (7)の外径2.25cm, 内径1.78cmを測るが、(7)の切り口両端が 0.5cm開いていることから推して、もとはほぼ同巧同大のものと思われる。現在は銘化して共に灰紫色を呈する。(8)は金製で今も黃金色の光沢を呈する。若干の垂みをみせるが外径1.7cm, 内径1.1cmを測る。

## 2. 勾玉 (図29, 図版16)

前記の金環と同様、周溝底南西部で逆離検出の2個体である。(1)はガラス製で均整のとれたC字形を呈する。乳緑色半透明で光沢を放つ。頭部から脇部にかけての側面に平滑面をもち、弱い稜を有するが全体としては柔らかみのあるつくりである。縦とおしの貫孔は逆C字形に置いた一方からなされているが上下端の径差はない。器高3.1cm, 幅1.9cm, 頭部厚1.05cm, 尾部厚0.9cm, 貫孔径0.2cmを測る。(2)は硬玉製で灰青色に部分的に白斑をもつが、よく研磨されて光沢を放ち、滑らか



第29図 岩田第1号墳周溝出土装身具類

なつくりである。やや頭部の大きいC字形で均整のとれた形をしている。貫孔は逆C字形に置いた一方からなされている。器高2.64cm, 幅1.56cm, 頭部厚0.95cm, 尾部厚0.87cm, 円孔上方径0.22cm下径0.2cmを測る。

### 3. 管玉(図29, 図版16)

周辺底面西部検出の3個体で、いずれも碧玉製である。(3)は細形で風化の著しい乳白色を呈し、両端を折損して中間部のみの検出である。貫孔は中央部を平均した径で一方からなされ、現存高1.05cm、径0.35cm、孔径0.11cmを測る。(4)は濃緑色の太形。よく研磨され滑らかな光沢をもつ。両端後部は使用のための磨耗の跡を示す。貫孔は一方からであるが、先端は中心をかなりずれ、迎え穿ちされている。高さ2.65cm、径0.9cm、上端孔径0.35cm、下端孔径0.1cmを測る。(5)は灰緑色の中

表22 第1号墳周辺出土小玉計測値

(単位mm)

番号	材質	色調	直径	厚さ	番号	材質	色調	直径	厚さ	番号	材質	色調	直径	厚さ
1	珊瑚	赤褐色	11.0	7.9	24	ガラス	青	6.9	3.0	47	ガラス	青	4.5	2.5
2	水晶	乳白色	9.5	7.8	25	"	"	5.5	2.2	48	"	"	4.5	2.3
3	"	"	9.0	7.0	26	"	"	5.2	2.5	49	"	"	4.5	2.1
4	ガラス	緑	10.1	5.3	27	"	"	5.0	3.1	50	"	"	4.5	1.4
5	"	"	10.0	5.1	28	"	"	5.0	2.8	51	"	"	4.3	2.0
6	"	"	9.7	7.0	29	"	"	5.0	2.7	52	"	"	4.2	2.4
7	"	"	9.0	7.0	30	"	"	5.0	2.6	53	"	"	4.2	2.2
8	"	"	9.0	6.1	31	"	"	5.0	2.6	54	"	"	4.2	2.1
9	"	"	9.0	5.1	32	"	"	5.0	2.3	55	"	"	4.2	2.0
10	"	"	8.9	9.1	33	"	"	4.9	3.6	56	"	"	4.2	1.9
11	"	"	8.9	6.6	34	"	"	4.9	2.9	57	"	"	4.1	2.1
12	"	"	8.8	6.9	35	"	"	4.8	2.9	58	"	"	4.1	1.9
13	"	"	8.8	5.8	36	"	"	4.8	2.7	59	"	"	4.0	2.5
14	"	"	8.5	7.4	37	"	"	4.7	2.5	60	"	"	4.0	2.3
15	"	"	8.0	7.1	38	"	"	4.6	2.9	61	"	"	4.0	2.2
16	"	"	8.0	6.0	39	"	"	4.6	2.8	62	"	"	4.0	2.0
17	"	"	8.0	5.6	40	"	"	4.6	2.5	63	"	"	4.0	2.0
18	"	"	7.8	6.0	41	"	"	4.6	2.3	64	"	"	4.0	2.0
19	"	"	7.8	5.2	42	"	"	4.5	3.6	65	"	"	4.0	2.0
20	"	"	7.3	5.0	43	"	"	4.5	2.9	66	"	"	4.0	2.0
21	"	"	7.1	7.0	44	"	"	4.5	2.8	67	"	"	4.0	1.2
22	"	"	6.0	4.1	45	"	"	4.5	2.6	68	"	"	3.8	1.8
23	"	黄	4.9	3.5	46	"	"	4.5	2.6	69	"	"	3.1	1.9

に乳白色の鎮目をみせる。両端径 0.7cmに対し、胸部中央径 0.76cm とやや膨張形を示す、両端角部に磨耗跡、孔は一方貫孔である。高さ 2.08cm、上端孔径 0.3cm、下端孔径 0.1cm を測る。

#### 4. 小玉(図29、図版16)

周溝底南西部において、他の遺物類とともに遊離混在した小玉は、破碎片の推定個体数も含めると、石製 3、ガラス製約 73、土製約 60 の計 133 個である。実測例を図29、計測可能のものの個体別計測値を表22・23 に示し、素材ごとにまとめて概述する。

石製小玉は水晶(9~10) 2 個、瑪瑙 1 個である。共にやや扁平な球形で両端に平坦面を有しない。使用によるためか器内に若干の亀裂痕をみせる。貫孔はいずれも一方からなされている。

ガラス製小玉は紺色(23~29) 21 個、黄色 1 個、青色(17~22) 48 個の検出である。総体的に紺色玉が大きく、青および黄色玉が小形である。紺色のものは径 10.1mm~6.0mm、厚さ 9.1mm~4.1mm とかなりばらつきがあるが、平均値は径 8.5mm、厚さ 6.2mm である。径に対して厚さが大きいものや逆に扁平なものなど形もまちまちであり、歪みをみせ形がいびつとなるものが多い。本来は両端に平坦面をもち、胸部縦断面形は太鼓型となるものである。青および黄色の玉は、径 5.9mm~3.1mm、厚さ 3.6mm~1.2mm までの間に分布するが、平均径 4.5mm、厚さ 2.4mm に集中するほぼ粒の崩った扁平な小形玉である。黄色は不透明青色は半透明である。

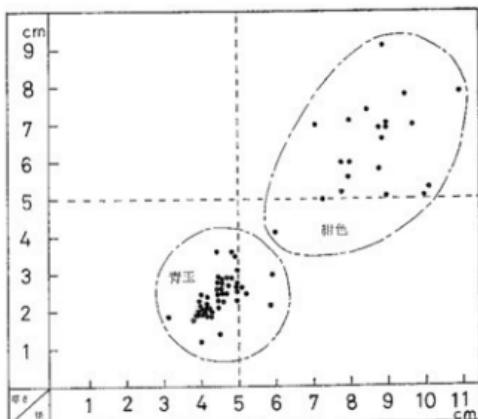
土製練玉は粘土をまるめて焼成したつくりである。焼成はやや軟質で大半は暗灰色を呈するが、中に灰白色のものが認められる。整形はやや粗雑で、球体に近いものから円筒形あるいは臼形と形状も一定せず、均整のとれたものよりもいびつのものの方が多い位である。大きさも径 8.8mm~6.2mm、厚さ 8.0mm~4.0mm に分布し、かなりのばらつきがあるが平均径は 7.45mm、厚さ 6.5mm である。

以上の中玉を糸に通して連にすれば、その長さはガラス小玉の大は 13.7cm、小 11.3cm 計 25cm、土製練玉 60 個として 37.05cm となる。

#### 5. 第5主体出土の玉(図32、図版16)

第5主体床面一括出土の木製切子玉 2 個と土製練り玉約 70 個である。

土製練り玉は前述の周溝出土のものと同巧手法だが、個体差が少なくていねいなつくりである。焼成もよく黒色に近い光沢をもち、両端部は玉ずれのためか、暗灰色となり磨きがはげている。径 7.5mm~5.7mm、厚さ 7.0mm~5.0mm に分布するが、平均径 6.05mm、厚さ 6.1mm に集中し、ほぼ球体に近い均整のとれたものが多い。破碎片も推定復元しての連に

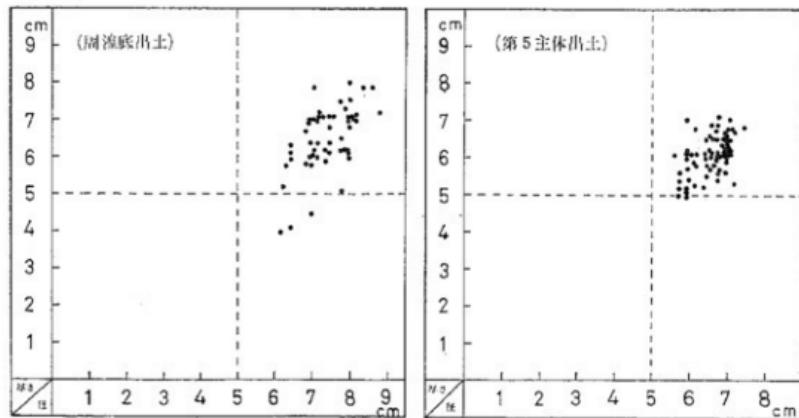


第30図 岩田第1号墳出土ガラス小玉計測値分布図

表23 第1号墳周溝出土土製練玉計測値

(単位mm)

番号	色調	直徑	厚さ	番号	色調	直徑	厚さ	番号	色調	直徑	厚さ
1	暗灰色	8.8	7.2	19	暗灰色	7.8	6.5	37	灰色	7.1	6.2
2	"	8.6	7.9	20	"	7.8	6.2	38	暗灰色	7.0	7.0
3	"	8.4	7.9	21	"	7.8	5.1	39	"	7.0	7.0
4	"	8.2	7.1	22	"	7.7	7.1	40	"	7.0	6.4
5	"	8.1	7.0	23	"	7.5	7.1	41	灰色	7.0	6.0
6	灰白色	8.1	7.0	24	"	7.5	6.8	42	灰白色	7.0	6.0
7	暗灰色	8.0	8.0	25	"	7.5	6.4	43	"	7.0	6.0
8	"	8.0	7.5	26	灰色	7.5	6.1	44	"	7.0	5.8
9	"	8.0	7.0	27	暗灰色	7.4	7.1	45	灰色	7.0	4.5
10	"	8.0	7.0	28	"	7.4	6.2	46	暗灰色	6.9	6.7
11	"	8.0	7.0	29	"	7.4	5.9	47	"	6.9	5.8
12	"	8.0	6.8	30	"	7.3	7.2	48	"	6.5	6.3
13	"	8.0	6.2	31	"	7.3	7.0	49	灰色	6.5	6.0
14	灰色	8.0	6.1	32	"	7.2	7.0	50	暗灰色	6.5	6.1
15	暗灰色	8.0	6.0	33	"	7.2	6.4	51	灰白色	6.5	4.1
16	"	7.9	7.3	34	"	7.2	6.0	52	灰色	6.4	5.8
17	"	7.9	6.2	35	"	7.1	7.9	53	"	6.3	5.2
18	"	7.8	7.5	36	"	7.1	7.0	54	"	6.2	4.0

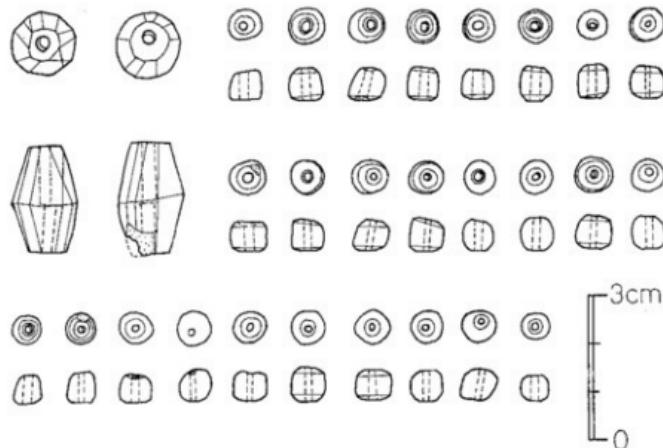


第31図 岩田第1号墳出土土製練玉計測値分布図

表24 第1号墳第5主体出土土製練玉計測値

(単位mm)

番号	直 径	厚 さ									
1	7.5	6.8	18	7.0	6.1	35	6.7	6.5	52	6.2	5.8
2	7.2	6.8	19	7.0	6.1	36	6.7	6.5	53	6.2	5.3
3	7.2	6.8	20	7.0	6.1	37	6.7	6.0	54	6.1	6.1
4	7.2	5.3	21	7.0	6.0	38	6.7	6.0	55	6.0	7.0
5	7.1	7.0	22	7.0	5.9	39	6.7	5.8	56	6.0	6.2
6	7.1	6.8	23	7.0	5.6	40	6.6	6.6	57	6.0	6.1
7	7.1	6.3	24	6.8	7.1	41	6.6	6.2	58	6.0	6.0
8	7.1	6.3	25	6.8	6.9	42	6.6	5.7	59	6.0	5.7
9	7.1	6.2	26	6.8	6.8	43	6.5	6.5	60	6.0	5.4
10	7.0	6.7	27	6.8	6.2	44	6.5	6.0	61	6.0	5.2
11	7.0	6.5	28	6.8	6.1	45	6.5	6.0	62	6.0	5.1
12	7.0	6.5	29	6.8	6.0	46	6.5	5.8	63	6.0	5.0
13	7.0	6.5	30	6.8	6.0	47	6.5	5.5	64	5.8	5.6
14	7.0	6.5	31	6.8	5.7	48	6.4	6.2	65	5.8	5.4
15	7.0	6.4	32	6.8	5.6	49	6.2	6.8	66	5.8	5.2
16	7.0	6.4	33	6.8	5.4	50	6.2	6.1	67	5.8	5.0
17	7.0	6.2	34	6.7	6.8	51	6.2	5.8	68	5.7	6.1



第32図 岩田第1号墳第5主体出土玉類

した70個分の長さは約42cm、木製切子玉を加えると約46.5cmとなり、首飾りとして充分な長さである。

木製切子玉は黒色をした埋もれ木の製品と思われ、造存状態は良好である。胴部中央に最大径と稜をもち、両端にせばまって平坦面を有するいわゆる切子玉の形状を示す。本来は円錐台形を合せた形のつくりであるが、縦方向への削りあとを残し、それが弱い稜線となるため、やや不定形な稜をもつ形ともなっている。(1)の最大径1.3cm、高さ2.2cm、頭端平坦面径0.7cm、貫孔径0.2cm。(2)の最大径1.31cm、高さ2.32cm、両端平坦部径0.8cm・0.9cm、貫孔径0.21cmを測る。

#### 第4節 鉄 器

第4主体床面出土の一括鉄器片、第5主体床面出土の刀子、周辺底面西側で逆離検出の馬具を含む鉄器片である。いずれも保存状態が悪く、銹化が著しいうえに折損した断片検出で、詳細については不明である。出土別にまとめて概述する。

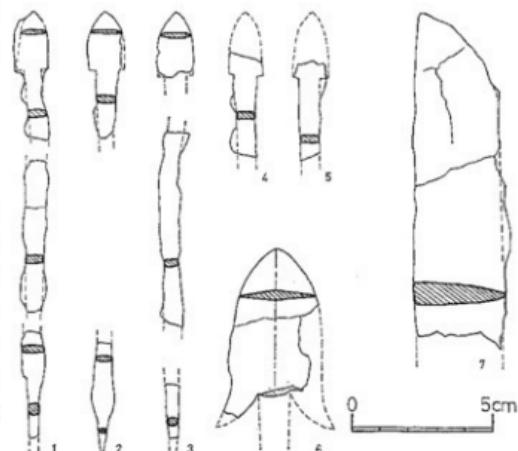
##### 1. 第4主体出土の鉄器

第4主体床面から一括出土した22片の断片である。整理の結果、少なくとも直刀1、尖根式鉄鎌6、平根式鉄鎌1の計8個体はあることが確認できた。

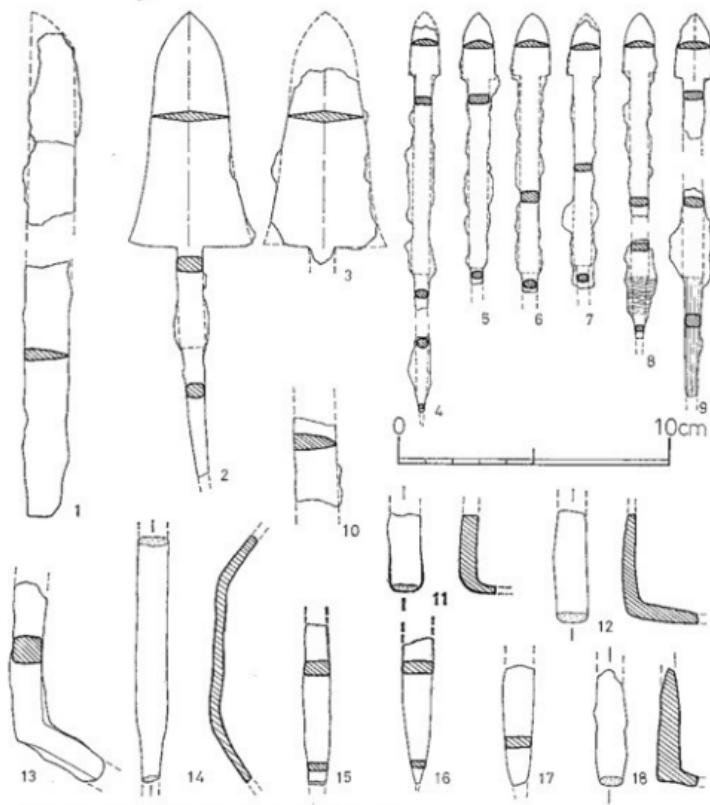
直刀は切先部のみの検出である。断面が二等辺三角形を呈し鍔邊であることから、直刀と推定できる程度である。尖根式鉄鎌は三角形の矢先に長茎のつくるものである。刃部断面は凸レンズ形を示すが稜やかえりの有無は不明、現況巾1.3cm、厚さ0.2cmである。茎断面は長方形、両根部は円形を示すが断片のため全長は不明で、推定長15cm～16cm程度と思われる。平根式鉄鎌は刃部のみ1片である。扁平巾広で中心に稜と端部にかえりをもつ。刃部の断面は菱形を呈し、最大巾4.2cm、厚さ0.3cmを測る。

##### 2. 第5主体出土の刀子(図34、図版16)

第5主体床面に玉類とともに供獻されていた刀子(1)である。断片3個で完形にはならないが、現存全長16cmからみて、元は18cm程度のものと推定される。鍛造によるつくりで刃巾1.6cm、背厚0.3cmを測るが、闇および茎については不詳である。



第33図 岩田第1号墳第4主体出土鉄器

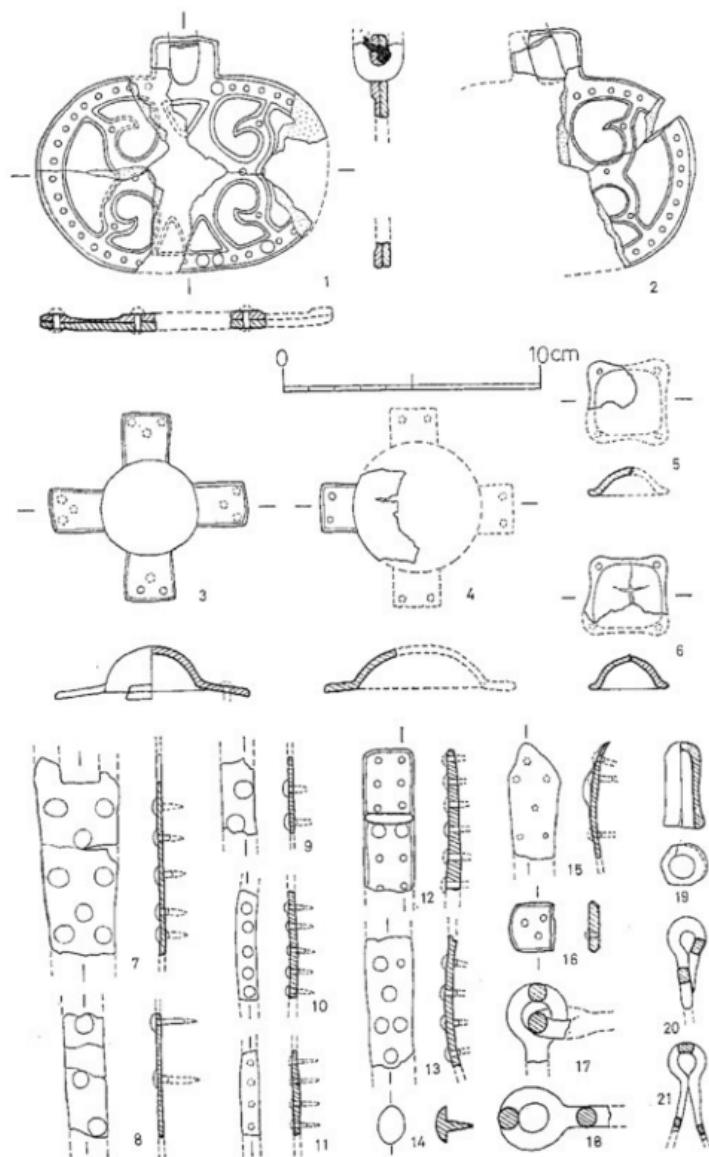


第34図 岩田第1号墳出土鉄器類

### 3. 周辺出土の鉄器（図版17）

遊離検出の約140片であるが、整理によって図示したごとく、鉄鎌、刀子、馬具等のほか使途不明のものも多い。

平根式鉄鎌は2本検出された。共にはぼ同巧同大である。(2)は茎根を一部欠損するが、ほぼ完形復元できた。刃部にそりをもった巾広扁平のものでかえりをもたない。現存長17cm、刃部長8.6cm、刃巾4.5cm、同厚0.6cmで茎根部に矢柄材の残痕をとどめる。尖根式鉄鎌は8個体分検出するも図示できるものは(4)～(9)の6本で、ほぼ同巧同大であるが、刃巾が1.1cmと細身のものと、1.4cmとやや広いものとがある。刃部の一面は平板で、片面のみが円弧状となる。茎は長方形断面、根部になるとつれて細まる円形を示し、矢柄材の付着を残すものもある。刀子頭は約3cm大の單片で、二等辺三角形の断面と鍛造であることから、刀子と推定できる程度である。刃巾1.5cm、背厚0.6cmを



第35図 岩田第1号墳周出土馬具

測る。その他の鉄器片は後述の馬具を除いては、銹化が著しいうえに小片のため原形は明確でない。刀子またはのみ等工具類の柄を思わせるもの圓，鉗，釘（16～18），鍵（11・12）などを想起させる程度である。

馬具（図33）も折損しての断片出土であるが、一応各部片が検出されるところから、少くとも一式をセットとしての供献と考えられる。

杏葉（1・2）は一対の出土であるが、破片を合成復元した。扁円形杏葉で中央に菱形の小透孔をもち、まわりに唐草文を配している。縁に1列に連続した鋸が並べて打たれているが、裏面の銹化のためその先端の突出は明確でない。銹化はしているが部分的に金張りの面影を残す。中央部が欠損しているため、あるいは鏡板の可能性もある。長径10.9cm、短径7.5cm、縁部厚0.4cmを測る。辻金具（3・4）は共に鉄地金張りで、半球形の体に4方向への突帯をもつ。突出部には夫々（3）に3本、（4）に2本の鉄鋸が打たれ、裏面に僅かではあるが皮を留めた跡が残る。（4）に比べて（3）はやや小づくりであるが、全長7.5cm、円部径3.7cm、器高1.8cmを測る。（5・6）は鉄地金張りの飾り金具である。1辻2.8cmの方形座の中に半球状の飾りがつく。方形座の四隅をやや突出させて各1本打ち込んでいる。器高は1.3cmである。

（7）～（9）は板状の鉄地に鋸を打った破片である。その形状から（7）（8）（9）等は壺蓋、（10）～（11）は鞍の一部片と考えられる。ともに頭のまるい鋸で、裏面突出部には縦または横方向への木目痕が見受けられる。（10）（11）は径2.3cm～2.5cmの遊環が連結し、断面円形の棒鉄がつき、轡または引き手の一部、即ち即は鞍具の残欠である。

## 第7章 まとめ

1. 本古墳は、盆地縁辺に張り出した低丘陵尾根上に単独所在する径17m、墳高約4mの円墳である。そこは眼下の平地との比高約30mで、眺望視野の広い立地を占める。
2. 古墳は石材採取の目的ですでに盜掘され、墳丘は中心主体も含めて大きく損なわれていたが、地形の高い側の墳端外方に円弧状の周溝と、墳郭部に円筒埴輪列を有する。また具体的な配置や樹立の様子は不詳であるが、人物埴輪を含む形象埴輪と装飾付須恵器を、墳外施設として有している。
3. 本古墳の埋葬施設は、すでに破壊されて僅かな石材の遺存する中心主体と、墳丘内2主体、墳丘外2主体の計5主体を確認した。
4. 中心主体は、残存石材と土師質亀甲形陶棺片、また周溝底遊離発見の遺物等から、元は横穴式石室と推定されるが、その構造や規模については不明である。周溝底出土の遺物を本石室葬送に直接関係あるとするならば、須恵器壺の特徴などから、6世紀後半を中心とした3時期のものを含み、少くとも数次にわたっての追葬が推定される。
5. 墳丘内発見の他の2主体は、第4主体が木棺直葬の長方形土壙、直刀1、鐵鋸數本の副葬、第5主体が小口部のみに石材を用いた木棺直葬、約70の玉類と刀子1の副葬で、供獻遺物は共に簡素である。いずれも墳丘盛り土に先行した削平整地面の施かず上位に床面を置き、中心主体床面と比高差はあまりない。各主体間の先後関係は明らかにできなかったが、層序的に見て第5主体の

埋葬が中心主体埋葬に先行する感じが強い。しかしいずれも墳丘盛りあげが開始されて後の埋葬である。本古墳の埋葬は単なる一墳多数埋葬というよりも、葬送の過程における横穴式石室採用による改築、あるいは、かっての古墳立地を利用しての、同一立地複合築成の可能性も考えられる。

6. 墳丘外内部主体は、第2主体が周溝内木棺直葬長方形土壙で土器3点の副葬、第3主体が周溝外縁部須恵器大壺を用いた石蓋土器棺である。当丘陵地には須恵器數個を副葬する封土をもたない土埴墓が、他にも數例検出され、一概に本古墳葬送に直接関係するかどうかは明確ではないが、第2主体は周溝がある程度埋没した時点で埋葬され、しかも副葬土器が本古墳出土の土器と編年観を共通することから、ほぼ併行する時期での葬送と考えられる。
7. 墳丘築成の方法については、墳形が大きき掘なわれ明確でない。古墳が緩傾斜地に立地するためか、地形の高い側の尾根部を約80cmの深さに掘り込み、下方へ削平整地して、径約12mの円形で水平な整地面をつくる。この際地形の低い部分は埋め出しとなり、丘陵部はその墳傾斜角度に合わせて整形して墳端部を整えている。墳丘はこの整地面を基準にして盛りあげられているが、中心主体構築と墳丘築成の関係は、盃擲の際の破壊のため、主体床面を整地面に置くことのほかは残念ながら何も確認できなかった。墳丘内部に有機土を集め、最後の仕あげに汚れのない地山生き土を周溝掘り土で整形完成させたものと推察される。  
当丘陵内所在の横穴式石室を内蔵する岩田古墳群第6～第14号墳のすべてが、丘陵傾斜面に長大な溝を掘り込み、その中に石材を落し込んで、半地下式の横穴式石室を構築しているとの大きな違いをみせる。また本古墳と同様の構築をしたものとして、山陽町尾谷所在の石山第6号墳が例示できるが、埴輪、装飾須恵器、馬具等伴出遺物も類似し興味深い。
8. 本古墳の副葬遺物は、中心主体が完全破壊されていたにわかわらず、周溝内に埋蔵するなどかなり豊富であった。しかし陶棺片の残存比率や、周溝内須恵器も復元できない單片個体も多く、また検出した壺も數の割には、上下セットとなる可能性のあるもの4例と少ない。したがって、本来はもっと多量の副葬品が供獻されていた古墳と考えられる。
9. 本古墳は、以上のようにすでに大破された小円墳であるが、6世紀後半を中心とする後期古墳の中にあって、人物埴輪を含む埴輪の圓鏡、装飾付須恵器の樹立、供獻遺物の鏡、盛裝用馬具一式などが示すように、当地域における有力家父長齋の奥津城と考えられる。

### III 岩田古墳群第6号墳

#### 第1節 序 説

岩田古墳群第6号墳（略記号E6）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字石江107番地の丘陵傾斜面に所在する。原形は横穴式石室を内部主体とする小円墳と推察されるが、すでに破壊されていて、現状では僅かにその痕跡をとどめる程度の遺存であった（図4）。

本古墳は事前の分布調査等による外表観察では、その存在を知ることができなかった。昭和46年7月6日締結の、山陽町地埋蔵文化財発掘調査第7次委託契約に基づく、悠國遺跡第2地点の発掘調査中に、古墳の残存石材を振り当て発見したものである。悠國遺跡第2地点の発掘調査は、昭和46年7月13日から同年10月9日まで実施したが、本古墳は7月20日発見、直ちに集落址と共に併行調査を行ない、同月26日に終了した。

本古墳および悠國遺跡第2地点は、発掘調査終了後の昭和46年11月30日に、開発工事によってその基盤である丘陵もろとも、約20mも削り降され消滅した。今は住宅団地中心施設用地として削平整地され、大きく変貌しているのである。

なお、昭和47年7月29日の夜、発掘調査事務所に賊が進入し、遺物庫ロッカー内に保管中の、本古墳出土の須恵器皮袋状提瓶1点を盗まれた。当時は調査期限に追われて発掘調査に明け暮れていたとはいえ、本古墳の築成年代を知るうえで貴重な手がかりとなる数少ない資料を、それも実測等未整理のうちに失ない、ここに提示できない不手際を深く反省するとともにお詫びしたい。

#### 第2節 立地と調査前の概況

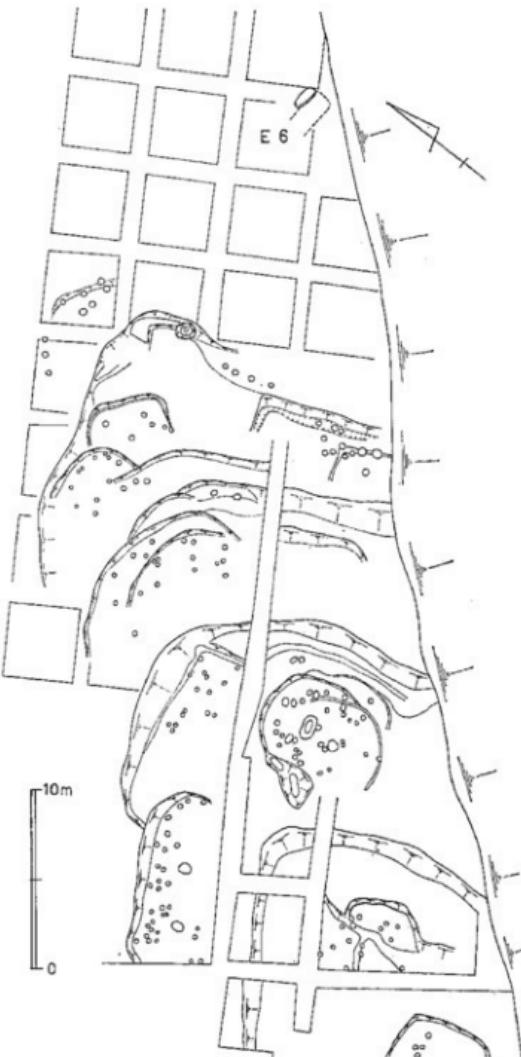
住宅団地開発事業用地となった東高月丘陵群の中ほどにあって、最高位でもある標高92mの用木山は、尾根主軸をほぼ東西におくなだらかな亀甲形の丘陵頂を形成している。この用木山一帯の丘陵地は、今次開発事業が始められるまでは自生の松林であったが、同時にまた用木山遺跡等の弥生時代集落址、当地域における初現的様相を示す用木古墳群、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群第6号墳～第14号墳9基など、多種多様の遺跡が数多く集中的に所在している。

岩田古墳群第6号墳～第14号墳は、用木山の南斜面の東西約300mの範囲に分布しているが、本古墳はその西端に位置する。すなわち、西に向かって緩やかに下降する用木尾根主脈は、標高83m付近で南へ向けて下降してのびる丘陵小支脈を分出するが、本古墳はその分岐点に近い谷ふところ状の傾斜面に築造されている。そこは尾根稜線の南15m、高さにして約3m降った標高80mにあって、眼下の埋積平地との比高約60mとかなり高い立地を占める。したがって本古墳からの眺望は、北から西へかけては尾根稜線によって視界を若干遮られるものの、東から南へかけては視界も開け、砂川流域にひらけた埋積平地南半を見渡すことができる。また周辺所在の古墳との関係は、南

南西約115mの同一尾根支脈上に岩田第5号墳、南東約65mに岩田第8号墳、東北東約115mの用木山頂に用木第1号墳、西へ小谷一つを隔てた約110mに野山第8号墳など、数多くの古墳をそれぞれ指揮の間に望見することができる。

当該地一帯は、風化の進んだ花崗岩塊乱土で形成され、その転石や露頭も多く、古くから村人たちの採石場として利用されてきたと伝えられている。事実本古墳の南東約150mには、丘陵を深く掘り込んだ石切場の跡が残り、また丘陵上のあちこちに転石を露天掘りで採石した跡らしい採掘坑の痕跡が見受けられる。本古墳をはじめ弥生時代集落遺跡の発掘調査によって発見された、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群のすべてが、大きく掘り崩され、石材を持ち去られていたのも、こうした採石を目的とした破壊によるものと考えられる。

本古墳は発掘調査の結果、すでに完全破壊と言ってよい程掘り崩され、やっとその痕跡をとどめる程度の遺存であったが、分布調査の時点では、その後の風化の進行や流土のためか封土は流失し、また採掘坑も埋没していく、自然地形と変わらない状態となり、古墳の存在については全く認知することができなかつたのである。本古墳の立地する丘陵尾根が工事区となり、ブルドーザによる丘陵表土層の剥土が行なわれている時、弥生式土器を含



第36図 岩田第6号墳周辺遺構配置図

む有機土が検出され、集落遺跡の存在する可能性が強いとして、開発工事を一時中断しての緊急発掘調査が実施された。これが前記の惣園遺跡第2地点であり、その調査中にたまたま本古墳残存石材を掘りあて、古墳の存在を知ったのである。したがって現地は発掘調査以前にすでに工事によって原地形は大きく損なわれており、調査前の外表観察とか地形測量等ができなかった。本書に使用した地形図は、事業主体者作成の工事用測量図を修正利用したものである。

また、惣園遺跡第2地点の発掘調査とそれにともなう本古墳の発見は、その後の当事業地においての埋蔵文化財の取り扱いについて大きな教訓と変化をもたらした。外面観察によって例え遺物や遺構が検出されなくとも、地形的にみて遺跡の可能性のある地域では、事前に丘陵地の削土による予備調査を実施してからでなくては、工事に取りかからることになった。その結果用木山遺跡13,000m<sup>2</sup>、さくら山遺跡18,000m<sup>2</sup>、愛宕山遺跡15,000m<sup>2</sup>などの大規模な集落遺跡が発見され、さらにその発掘調査にともなって、当岩田古墳群をはじめ、愛宕山方形台状墓群や土壙墓遺跡など、数多くの遺構や遺跡を次々に発見する動機となつたのである（図版18）。

岩田古墳群の多くはこのようにして発見されたのであるが、これらはすべて石室石材など遺構の残存を確認できたもののみである。不幸にして私たちの調査の力がおよばなかった地域や、すでに完全に掘り崩されて、石材や遺構の全てを失なった古墳もあるかも知れない。したがって本書に報告する古墳9基も、現実に遺構の残存が確認できた実数と理解していただきたい。

### 第3節 遺構の出土状況

本古墳は、すでに何回か繰り返して述べたとおり、埴輪に近い状態に破損され、封土の高まり等は全く認められなくて、発掘調査の結果、僅かにその痕跡を認知する程度の遺存であった。すなわち図36に示すように、石材1個と、それを取り囲む溝状遺構および主体床面を思わせる僅かな整地面のみの遺存である。石材および整地面周辺に逆難残存する少數の須恵器、装身具類、鉄器片などを合せて考えて、やっと古墳残骸と認定できる程度である。

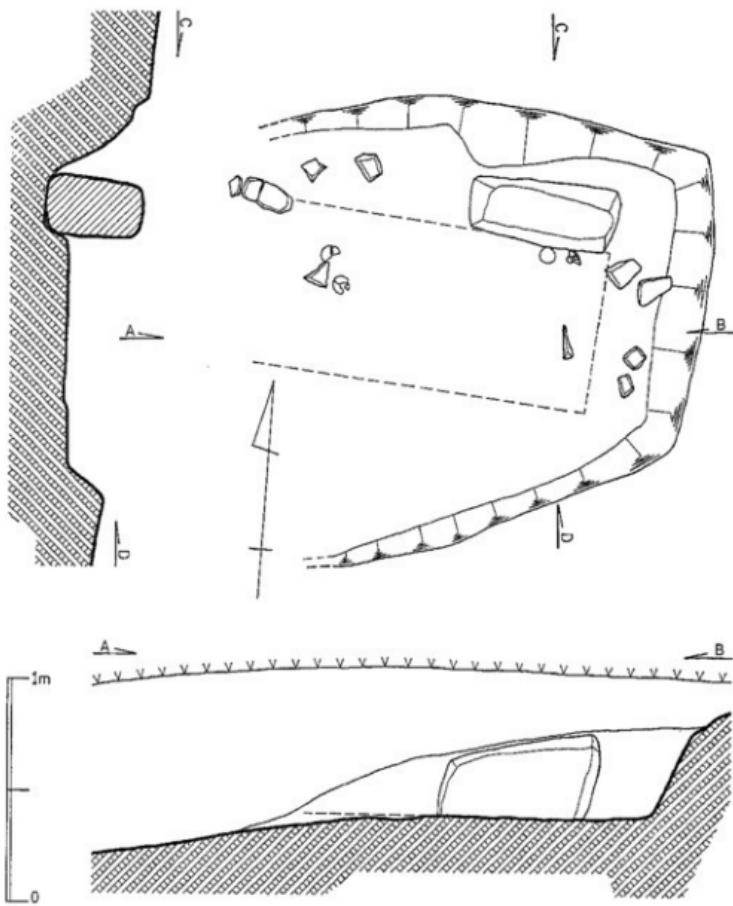
石材は当丘陵で散見できる花崗岩の自然石で長さ72cm、高さ45cm、巾27cmのやや扁平なものである。現表土下約30cmに上端部をおき、丘陵斜面に直交するように平を東に向けて立てられ、ほぼ原位置を保っている。溝遺構は石材をコの字形に囲むように、地形の高い北側で、現状約50cmの深さ、巾約170cm掘り込み、下方に削平整地している。主体床面と見られる整地面は、この溝状遺構の底面にもあたり、石材の東側約70cm×100cmの広がりをもつ。石材と溝部北壁の間隔43cmに奥壁が立てられるとすれば、当石材は奥壁に接した西側壁基段部と推察される。

以上のことから本古墳の内部主体は、丘陵斜面に直交する方位をもって溝を掘り込み、その下方へ削平整地して主体床面をつくり、溝を中心にして、高さや奥行きは不明ながら、内法巾90cm～100cm程度の小横穴式石室を構築したものと考えられる。残存石材が原位置を保つとすれば、この石室の主軸方位は東5度南を指し、ほぼ真西に開口部をもつものと思われる。

なお、本古墳の墳端施設や墳丘規模等を知るために、周辺丘陵上も含めて全面削土調査を試みたが、残念ながら周辺掘り跡はもとより、何の痕跡も認められなかった。したがって、本古墳の外形

や根  
境と

本  
くは  
状提



第37図 岩田第6号墳遺構出土状況

や規模について明らかにできなかった。主体構造ならびに伴出遺物の特徴から、後期後半の小形円墳と推定できる程度である。

#### 第4節 出土遺物

本古墳出土の残存遺物は表示のとおりである。すでに主体床面も大きく損なわれ、供獻遺物の多くはその際散逸されていると考えられ、発見個体数も僅かである。残存石材に接し検出された皮袋提瓶の他は、元石室内と推定できる付近の埋土中に、かなりの高低差をもって遊離散見されたも

である。ここでは、<sup>レ</sup>器材ごとにまとめて概述した  
い。

### 1. 土器(図38, 39, 図版19)

いずれも須恵器で、完形の皮袋状提瓶1と坏蓋3個  
体分の破片である。皮袋状提瓶(図38)は、計測や実  
測が未了のうちに盗難にあい、数値や実測図を示すこ  
とができるないが、底辺長約16cm、器高約12cm程度の小  
品である。通常の円形をした提瓶の両側を、左右対称  
の逆三角形状に切り残し、その切り口に円板状の粘土  
板を二つ折りにして貼りつけ、その接線となる貼り付  
け部と、平部片面に3条、他の片面に2条の帯状の突  
起部と、貼付部に沿う鋸目穴を想起させるような直列に  
並ぶ竹管文を施している。したがって正面から見た器  
胴部は底部を直径とした半円形、側面は二辺がやや外湾し  
た逆二等辺三角形を呈する。仕上げ調整はなで、胎土に砂  
粒を含み、焼成は良好で明るい灰白色を呈する。  
坏蓋(1)は、17片に破損して送難検出したが接合によりほぼ  
完形に復元できた。径14.6cm、器高4.4cmを測る。器外表は  
横なでおよびへら削り、内面は横なで調整が施されている  
が、全体的にみて丸味の強い整形で腹はもたず、口縁端部  
も丸くおさめている。胎土に砂粒を含むが、精選されたき  
めの細かい粘土が用いられ、暗灰色を呈し焼成は普通であ  
る。(2)は若干の欠損部はあるが、3片の接合で約95%の復  
元である。径15.5cm、器高4.0cmを測る。調整は(1)とはほ  
同巧であるが、外表のへら削りは鋭く段状の3条の稜をも  
ち、天部は平たくつくられ、内面口縁より約1cmに1条の  
沈線をもつ。胎土に砂粒を多く含み、器表はややざらっとした  
感じである。焼成は普通で灰白色を呈する。(3)は天部の  
み約40%大半片の出土である。したがって坏蓋および身の識別も定かではなく、また計測も不能である。調整、胎  
土、焼成、色調とも(2)に近いつくりである。

### 2. 装身具(図40, 図版19)

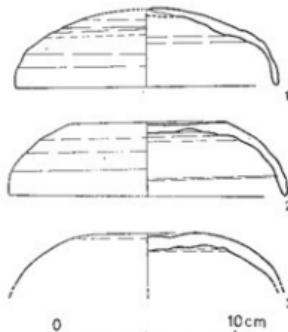
金環4、勾玉1、小玉11の出土である。いずれも奥壁か  
ら約125cm西方にあたる、石室床面長軸中心線部と推定さ

表25 第6号墳出土遺物一覧

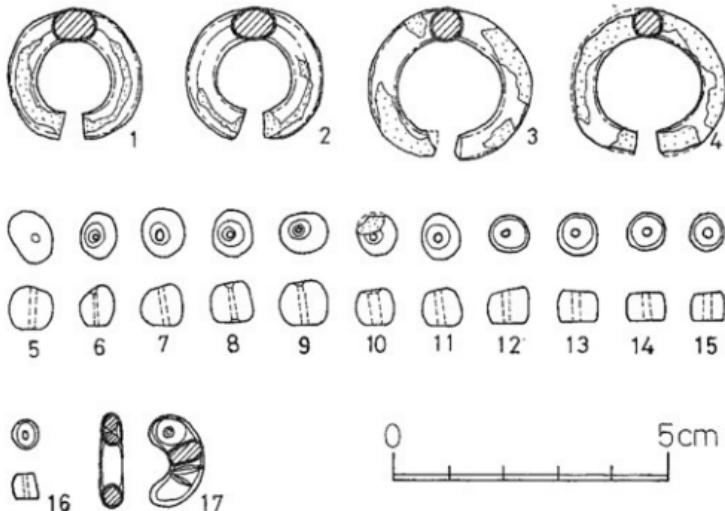
遺物	出土個体数
須恵器 皮袋状提瓶 坏蓋	1 3
金環	4
勾玉	1
ガラス製小玉	1
土製練玉	11
鉄器 直刀 刀子 平根式鉄鎌 尖根式鉄鎌 釘 鎌 その他不明断片	1 1 1 1 3 4 12片



第38図 第6号墳出土皮袋状提瓶



第39図 第6号墳出土土器



第40図 岩田第6号墳出土装身具類

れる周辺から、集中して搅乱遊離された状態で検出した。

金環は銅地金張り製2個、銅地銀張り製2個の2組である。各組はそれぞれ同巧同大のつくりで対となるものと考えられる。各部位の計測値は表示したとおりであるが、棒銅を円形に曲げ、切り口のつき合せ部を約0.4cm間隙をもたせたつくりである。(1)、(2)は金張り製でやや小形である。体部断面は楕円形を呈する。表面に張られた金は、若干の剥脱はあるものの比較的に遺存度がよく、今も黃金色の光沢を保つ。(3)(4)は銀張り製であるが、銀の剥脱と素地の綠化が著しく、保存状態は悪い。特に(4)は僅かに銀が遺存するのみで、やっとその痕跡をとどめる程度である。体部の断面形は円形を示す。

勾玉飾は、灰白色をした滑石製の、全長1.6cm、巾1.01cm、器厚0.4cmと、小形でやや扁平なつくりである。器側部に因示したような2条の刻文が認められるが、手ずれ等のため現況では、当初からの意識的な施文か、あるいは後の使用中の傷痕であるのかの判別は困難である。紐とおしの貫孔

表26 第6号墳出土金環計測値

(単位cm)

番号	外径		内径		体部径		突合せ部 間隙巾
	横	縦	横	縦	横	縦	
1	2.45	2.27	1.32	1.20	0.55	0.80	0.25
2	2.45	2.30	1.35	1.25	0.56	0.78	0.30
3	2.90	2.58	1.90	1.60	0.61	0.50	0.30
4	2.72	2.54	1.80	1.60	0.52	0.50	0.30

は両側から穿たれ、中心部で径が最小値を示す。中心部径0.1cm、両表面部径0.15cm～0.17cmを測る。

小玉は、ガラス製1、土製練玉11の計12個の検出である。ガラス製小玉即ちは、半透明の青色を呈し、管玉状のものを切断したつくりを想起させるように、両端部に鋭い稜と平滑な面をもつが、その切り口は斜傾し全体として歪みをみせている。土製練り玉は大きさ形状ともにかなりのばらつきをみせるが、全体として黒色から暗灰色を呈し、歪みの多いつくりである。(5)～(8)は指先で球形になるめて作ったもの(2)～(4)は管玉状につくったものを切断した感じのものである。

### 3. 鉄器 (図41、図版19)

銹化の著しい折損遊離片約40片の検出である。断片となっているものが多く大半は原形が不明であるが、概況は次のことおりである。

(1)は、銹化が著しく表面および接合部の剥離が進み、器表等の装飾の有無は不明である。9.8cm×8.6cm大の倒卵形をした平板で、まわりに合形状の透孔8個を配している。中央部に3.9cm×2.4cmの茎留孔があり、その上下端は刀身の形に合せた切り込みが見られる。現況での中央部厚0.4cm、縁端部厚0.9cmを測るが、原形は中央部まで厚さを保っていたものかどうかは不明である。縁部の離脱現象から、3枚の鉄板の合せづくりで、地金の中に細い銀線を筋として幾本も入れていることが認められる。(2)は図示したように折れ曲った現存長約9cm、巾1.82cm、厚さ0.3cmの薄い鉄板である。カーブの形態から、直刀の鞘金具と推定される。直刀の刀身は検出できないが、先の鐔および当金具の形状から推して、かなり長大な直刀の供献が想定されるのである。

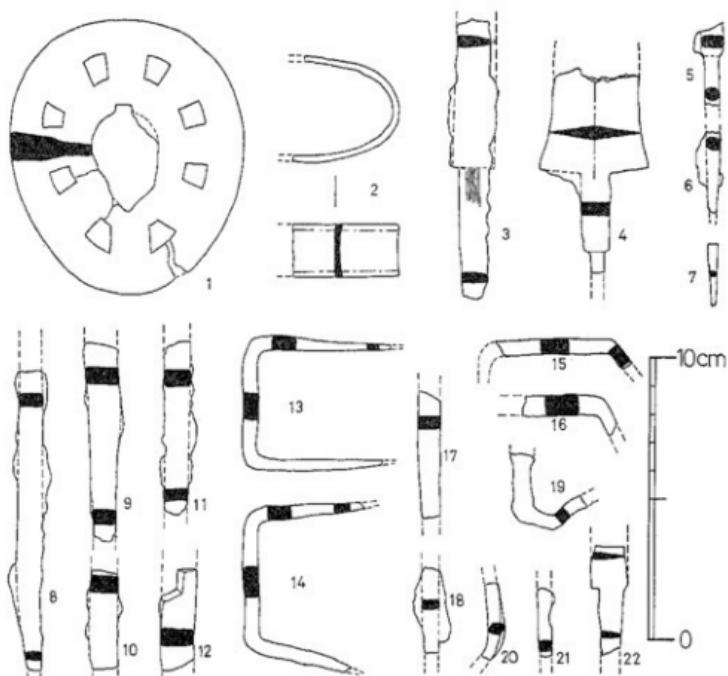
(3)は刃部断面が二等辺三角形を呈し、関部を認められるとこから、刀子片と推定される。現存長9.0cm、刃部最大巾1.5cm、最大厚0.6cm、茎部長4.5cmを測る。(4)は平根式鉄釘の部分片である。基部に最大巾3.9cmをもつ、刃部は平板のつくりで長軸中心線に鎧をもたない。また端部にかえりもなく茎からほぼ直角である。茎は2段づくりで上部は1.0cm×0.6cmで断面長方形、根部は矢柄内に挿入するためか、1辺0.5cm大の隅丸長方形の断面形をみせる。(5)～(7)は尖根式鉄釘の部分片と思われるが、詳細は不明である。

(8)～(12)は鉄釘である。(8)はほぼ原形を保ち、全長10.7cm、頭部付近での巾0.9cm、同厚さ0.75cmの断面長方形の棒鉄であるが、先になるにつれて薄くなるつくりである。平部のほぼ全面に横方向に木目の走る木質残痕が認められる。他の(9)～(12)についてもほぼ同様大である。(13)～(18)は鍔である。

鍔および(19)はほぼ原形を保つ。両端を薄く尖らせた、全長約15cmの平板をコの字形に折り曲げたものである。(20)は打ち込まれていたと思われる部分に横方向の木目を残している。釘および鍔の存

表27 第6号墳出土玉類計測値  
(単位mm)

種類	番号	径	高さ
土 製	1	95	72
	2	85	75
	3	82	71
	4	81	79
練	5	80	70
	6	78	70
	7	76	51
	8	72	71
玉	9	70	64
	10	68	48
	11	65	50
ガラス玉	12	47	40



第41図 岩田第6号墳出土鉄器

在から、板造りの木棺による埋葬が想定される。図～図は鉋具断片、図は刀子断片を想起するも、細片のため原形ならびに詳細については不明である。

## 第5節 まとめ

本古墳は丘陵尾根に近い傾斜面に築成された、横穴式石室を内蔵する小円墳と推定されるが、すでに墳滅に近いまで破壊されて、原形は不明である。丘陵斜面に直交して細長い溝を掘り、巾80cm～100cm程度の小横穴式石室を構築していたと考えられる。

釘および鉈の検出から、木棺に納めての埋葬と、金環2組の検出から、少なくとも2体以上の追葬が推察されるが、いずれも攢乱されての遺跡発見であり、原位置や葬送の具体的なようすは全く不明である。

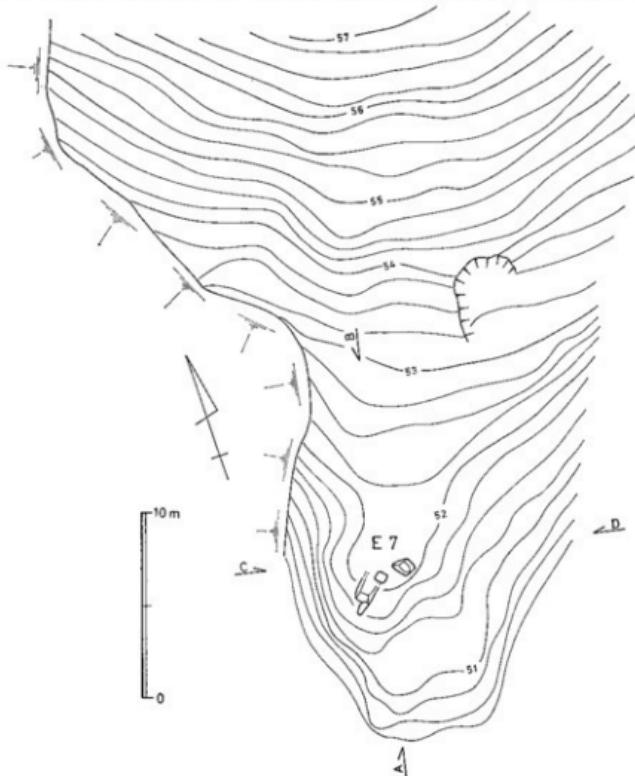
また本古墳の築成年代は、出土遺物の特徴から、6世紀終末頃と推定されるが、遺存度が極めて悪いため確実性に乏しい。

## IV 岩田古墳群第7号墳

### 第1節 序 説

岩田古墳群第7号墳（略記号E 7）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字石江 107番地の低丘陵上に所在する横穴式石室の残骸である。すでに大破され封土は流失し、盗掘坑も埋没していて、分布調査では発見できなかった。当該地がたまたま弥生時代の集落址あるいは墓地址の可能性があり、大久保遺跡（略記号Y 6）として発掘調査の対象となり、昭和46年10月1日締結の、山陽園地埋蔵文化財発掘調査第8次委託契約に基づき、山陽町教育委員会が発掘調査を実施中の昭和46年12月7日に、偶然に掘り当て発見した。直ちに引き続いての発掘調査を行ない、同月12月終了した。

本古墳は発掘調査終了後の昭和47年7月15日、住宅団地の造成工事によって丘陵もろとも削平さ



第42図 岩田第7号墳周辺地形図

れた。今は分譲住宅地として階段状に整地され、昔日の面影はどこにも見出せない。

## 第2節 立地と調査前の概況

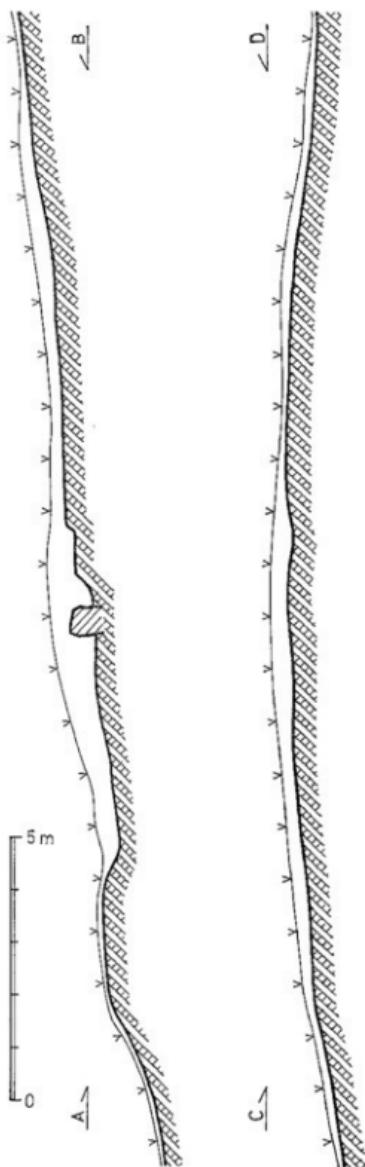
本古墳は用木山から南へ向けて分出する丘陵小支脈の、末端に近い尾根上に立地する。そこは巾の狭い馬の背尾根ながらも、穏やかな起伏をもって南下する、舌状にのびた丘陵尾根上で、標高52mの地点にある。眼下の谷水田との比高約25mとさして高くないが、谷に面して張り出しているため、東から南へかけての眺望はかなり開けている。

古墳の周辺は、調査が始まるまでは自生の松林であったが、すぐ南にあたる低丘頂平坦部は開墾されて、古墳から20mぐらいのところまで果樹園となっていた。また古墳の立地する尾根支脈の北へ約80mには、かって花崗岩を切り出した採石場の跡があり、崖状の深い掘り込み跡がある。そして本古墳付近が、その二次加工場あるいは集石場となっていたらしく、削平整地面や搬出道路が設けられ、残存石材や碎石屑が散在していて、原地形はかなり乱れていた(図4)。

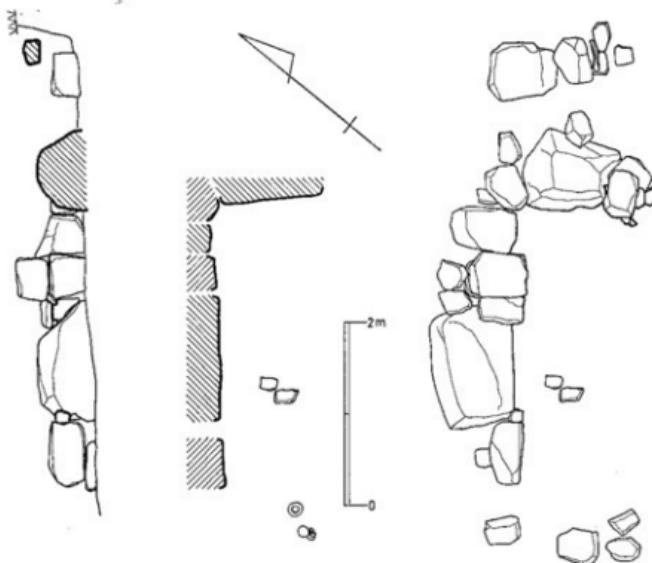
本古墳もこうした一連の採石作業によってすでに破壊されているらしく、封土は流失して認められず、石室も埋没して自然地形に近い状態となり、現況ではその存在はわからない状況となっていた。後の発掘調査によって石室の残骸が検出された地点は、尾根部を削平して6m×5mばかりの平坦地となっていたが、当該地が弥生時代の集落址の可能性が強かったことから、竪穴式住居址の埋没地あるいは、前述の集石場等の作業に関係ある遺構として認識していた程である。

## 第3節 遺構

発掘調査の結果、横穴式石室の残骸とわかつ



第43図 岩田第7号墳立地丘陵断面図



第44図 岩田第7号墳石室造構実測図

た。採石目的の破壊と伝えられるとおり、石室の石材は大半がすでに持ち去られ、ほぼ原位置を保つ側壁片面の最下段部約3.6mと、遊離石材数個のみの遺存である(図44)。残存石材はすべて当丘陵産出の花崗岩で、石面を東に揃え、丘陵尾根走向に沿った北51度東を示す。当該地は北東側に地形の高い尾根脈線のため、北東部に奥壁を置き、南西に開口部をもつ横穴式石室の西側壁の一部と考えられるが、規模および構造の詳細は不明である(図版20)。

墳丘築成時の整地跡や石室構築時の構状造構を確認するため、周辺部の精査を試みたが現地表と石室床面比高が平均70cmと、丘陵表土層も含めて封土が削平および流失し、さらに石材採取の際に掘り込みが不規則に乱れ、現況では明確にすることはできなかった。残存石材北東端からさらに北東約145cmに、丘陵地山を約50cmの深さ、推定床面レベルまで掘り込んだ跡があり、これを石室構築時の溝奥とすれば、奥壁石材厚を考慮に入れても、現存石室長は少なくとも4m以上となる。

石室床面も掘り乱されて副葬品は殆んど残されていない。現存側壁の南西端から南西約20cm、側壁延長線から南東へ約80cmの、床面推定高付近に遊離検出された土師器2個体分、須恵器坏1個体分の破片と、鉄錆1点のみである。

残存石室の石積みもかなり粗雑で、横穴式石室としては後出の感じが強く、丘陵尾根巾や傾斜度などの地形的な制約や、出土遺物の特徴から6世紀後半ないし、7世紀初頭の、袖をもたない石室と推察される。さらに大胆な推測が許されるならば、丘陵支脈の綫に尾根走向に沿って、石室規模に合せた細長い溝を掘って、石室の基盤を整地して、その中に奥行6m~7m、内法巾1m~

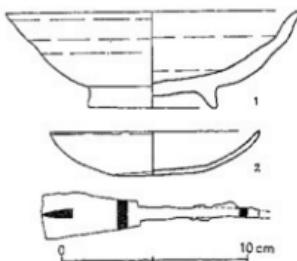
1.2m程度の横穴式石室を組み、地形の高い北東尾根部に墳壠カーブに合せた円弧状の周溝を掘りながら、その土を巻き返して墳形を整えたものと思われる。発掘調査開始前に削平整地平坦面と見えた北東部は、本古墳築成時の周溝掘り込みの外縁部であった可能性もある。

#### 第4節 遺 物

本古墳の出土遺物は前述もしたとおり極めて少なく、土師器壺2,須恵器壺1,鉄鎌1だけである(図45, 図版20)。

土器はいずれも破片となり、図示できるものは土師器のみである。(1)は碗状の壺に糸底を貼りつけたつくりで、口縁部径15.9cm, 壺高4.8cm, 壺部高4.2cmを測る。口縁部をやや外反させ、全体的に器壁の厚いものである。外面とも横なで調整が施され、指圧による凹みが見られる。胎土はきめの細かい粘土を用いているが、微砂を多く含む。焼成は良好で明るい褐色を呈するが、部分的に赤褐色の斑文がみられる。(2)は皿状の浅い壺である。口縁部径11.3cm, 器高1.4cmとやや小形である。内面は横なで、外面はへら削りの後に横なで調整が施され、底部は平底となって弱いながらも稜をもっている。胎土焼成はほぼ前者と同様である。どちらも器形の特徴から、奈良時代あるいは平安時代の所産と考えられるが、本古墳の石室がすでに大破され、しかも盗難検出のため、その時代までの追跡が行なわれたものか、または後世の流入によるものか判別は困難である。

鉄鎌は茎頭式のもので鎌身は台形状を呈し鏽や返刺はもたない。したがって刃先部縦断面は二等辺三角形、横断面は長方形を示す。鎌被はもたず直接細長い茎がつくつくりであるが、茎端部を一部欠損している。身部先端巾2.3cm, 間部巾1.3cm, 現存全長11.7cm, 鎌身長5.3cm, 身部厚0.55cm, 茎径平均0.7cmを測る。



第45図 第7号墳出土遺物

# V 岩田古墳群第8号墳

## 第1章 序 説

岩田古墳群第8号墳（略記号E8）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字石江107番地の丘陵上に所在する。すでに破壊され原形は大きく損なわれているが、右袖の横穴式石室を内部主体とする円墳である。本古墳と複合立地する弥生時代集落址用木山遺跡とともに、当山陽団地開発事業の犠牲となって発掘調査の対象とされた。

本古墳および用木山遺跡第1地点（山上部1,500m）の発掘調査は、岡山県教育委員会が直営で、昭和46年7月1日から同年12月末までの計画で実施する予定であったが、諸般の事情で遅延し、結果的には期限内に着手できなくなった。しかしその間も開発工事は進み、12月初頭には遺跡範囲ぎりぎりまで迫って、遺構は比高10数メートルの崖上となり、崩落の危険すら感じる程になった。同年12月6日、事業主体者の岡山県土木部をはじめ、岡山県教育委員会、山陽町教育委員会による三者協議の結果、当該遺跡の発掘調査を山陽町教育委員会は第8次委託契約に基づき、宮山古墳群第4号墳の発掘調査中であったが、工事工程や遺跡現況の緊急性から、宮山第4号墳の発掘調査を一時中断し、委託契約締結にも先行して、本古墳等の発掘調査に、急扱取りかからざるを得なかつた。

本古墳および用木山遺跡第1地点の発掘調査は、同一立地での複合遺跡のため、同時に併行して実施した。宮山第4号墳の発掘調査が一段落した12月25日から4日間をかけて、立木伐採と掃除および地形測量を行ない、昭和47年1月5日から同年27日までをかけて発掘調査を実施した。その後本古墳の発掘調査に要した期間は1月10日から3月31日であるが、実際には用木山遺跡の発掘調査や宮山第4号墳の実測等と重複して、調査活動が集中できず、日数的にはかなり長期となった。なお本古墳等の委託契約は、調査終了後の昭和47年7月14日付で、第8次委託契約への調査遺跡として追認された。

本古墳は発掘調査の過程で、天井石はすべて持ち去られているものの、石室の遺存状態が良好なことがわかり、当丘陵内に横穴式石室墳が現状保存されてないこともあって、保存協議の対象となつた。その結果現地保存は困難であるが、団地中央部に計画中の自然公園内への移築保存となり、調査終了後解体して搬送した。しかし、その後岩田古墳群第14号墳が発見され、本古墳よりも保存度がよく、しかも現地保存が可能なことから、本古墳の移築計画は解消された。古墳の移築計画や、墳丘下に複合する住居址の発掘調査のためといえ、結果的には私たち調査者の手によって、本古墳を解体消滅させたのである。また用木山遺跡第1地点も、発掘調査が終了するのを待ち兼ねるようにして、昭和47年4月27日、造成工事の重機械によって削滅した。今は住宅団地中央施設として整備され、その姿を再び見ることはできない。なお古墳石材は、当開発事業にともない発掘調査された58遺跡の合祀慰靈碑の礎石に活用され、移築予定地であった自然公園内に建立されている。

本古墳出土遺物を調査事務所のロッカー内に保管中、昭和47年8月1日と同月14日の2回にわたって盜難被害を蒙り、須恵器4点を失なった。二重の施設を破っての犯行とはいえ、貴重な調査資料をそれも計測や実測図作成も未了のうちに失ない、本報告書に提示できない失態は、私たち調査員の責任として強く反省するとともに、深くお詫びしたい。

## 第2章 調査経過の概要

- 昭和46年12月25日～12月28日、岩田第8号墳および用木山遺跡第1地点の発掘調査準備。官山第4号墳より調査器材搬入、作業小屋設営、立木伐採清掃、27日より発掘調査区設営および地形測量。
- 昭和47年1月5日、用木山遺跡発掘調査開始。
- 1月10日、岩田第8号墳発掘坑内清掃、横穴式石室残存石材検出。
- 1月11日～12日、雨天のため内業、惣図遺跡出土土器片水洗作業等。
- 1月13日、現存石室周辺部清掃、写真撮影。
- 1月14日、石室内埋積土排水作業、天井石はすべて持ち去られているが、現存石室長約10mの側壁残存度は良好、作業道路敷設。
- 1月15日～16日、祝日、日曜日連休。
- 1月17日、石室内掘りさげ、本日約50cm。
- 1月18日、石室内発掘、玄室右側壁に沿って破損した須恵質陶棺を検出。
- 1月19日、石室内発掘、奥部において鉄釘数点発見、攪乱されかなり上層から出土する。
- 1月20日玄室床面発掘、玉砂利が敷かれているもかなり乱れている。須恵器4、勾玉2、ガラス玉6を発見。
- 1月21日石室床面発掘、羨道床面より約20cm上位に木棺底の痕跡を検出。棺釘が原位置を保つて直立した状態で遺存。
- 1月22日、陶棺内発掘、攪乱されているもよう。追葬の過程で壊され、その一部は石室床面に散かれ次の棺台に転用されたり、側壁にもたせかけて、その陰に一括須恵器を置いている。玄室床面は全面玉砂利を敷きつめていたらしい。
- 1月23日、石室床面発掘、須恵器24個体分発見するも破碎遊離するものが多い。鉄器片も同様である。釘の散在のようすから、陶棺1、木棺3以上の埋葬と推定。
- 1月24日～25日、雨天のため全員内業、惣図遺跡出土遺物の整理作業。
- 1月26日、石室内の清掃、写真撮影。
- 1月27日、石室内実測準備、作業員の主力は用木山遺跡の発掘作業にまわる。
- 1月28日、陶棺出土状況プラン実測10分の1。
- 1月29日、石室床面および羨道木棺プラン実測各10分1。棺台となっていた陶棺片とりあげ、下より須恵器壊2点発見。
- 1月30日、石室床面遺物出土状況、陶棺セクション実測各10分の1。

- 1月31日、同上完。陶棺および玄室内遺物とりあげ、須恵器41個体分となる。
- 2月1日、石室床面玉砂利発掘清掃。
- 2月2日、石室床面玉砂利実測10分の1。
- 2月3日、同上。写真撮影。
- 2月4日、雨天全員内業。出土遺物整理等。
- 2月5日、第8号墳外形測量100分の1.25cmコンター。
- 2月6日、口堅日全休。
- 2月7日～14日、第8号墳墳丘断面観察のため、巾2mの十文字トレンチを設営発掘。封土内に弥生式土器片、石器を多量に含む。石室挖え積みはほとんどなく、丘陵地山に石室規模に合せた溝を掘り、その中に石室を構築したものである。この期間に調査員は手分けをして、用木山遺跡および宮山第4号墳の実測を行なう。
- 2月15日～22日、墳丘断面図50分の1、現存石室天部、石室壁面等の実測10分の1、写真撮影。
- 2月23日～2月4日、墳丘下に複合する用木山遺跡調査のため、墳丘盛り土の全面除去作業、その間に墳丘断面の観察および写真撮影。3月1日丘陵地山層に掘り込まれた竪穴式住居址を発見。漸次集落址の調査へ移行する。
- 3月13日、現存石室上面および石室構築時の溝遺構プラン全面露呈、実測10分の1、第8号墳最終写真撮影。本古墳発掘調査を終了する。
- 3月25日、本日まで用木山遺跡第1地点調査、中池遺跡の緊急調査のため一時中断となる。
- 3月27日、中池遺跡へ調査器材を搬入、中池遺跡発掘調査に着手。
- 4月12日、用木山遺跡第1地点発掘調査再開。
- 4月13日、三者協議会、岩田第8号墳石室を移築保存と決定。
- 4月20日～21日、石室移転準備。
- 4月25日～27日、石室解体、移転予定地へ石材搬送、本古墳消滅。

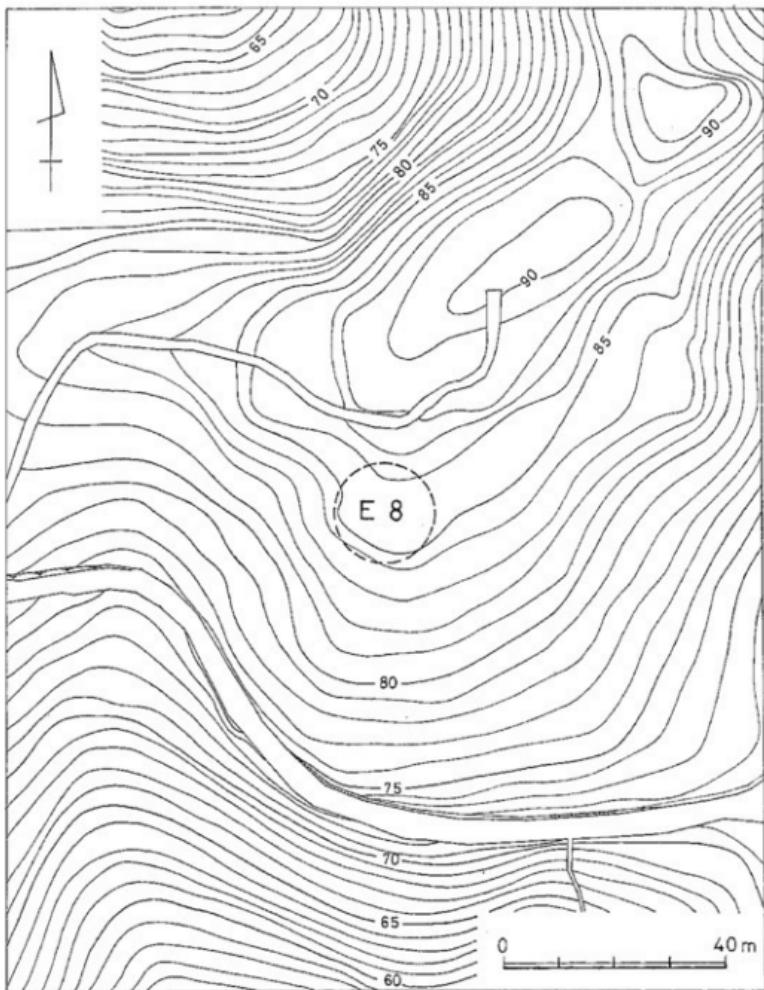
### 第3章 立地と調査前の概況

住宅団地開発事業用地となつた丘陵群の中ほどにあって、標高92mと最高位を占める用木山の、丘陵頂平坦部西肩から南へ緩やかに下降する尾根支脈稜線上の、それも山嶺部にほど近い標高82mに位置している。そこは丘陵平坦部の末端にあたり、稜線も舌状にのびこれから下降傾斜を増そうとする肩部である。この尾根支脈は標高71mあたりで鞍部となり、尾根走向を大きく東へ湾曲させながら再び高まりをみせて、標高81mのさくら山丘陵頂へと連なるため、巾狭ながらもなだらかな尾根稜線を形成している。標高平地の一角に張り出した丘陵上の、比高60mの高所に位置することもあって、平地の西半を一望できる立地を占めている(図4)。

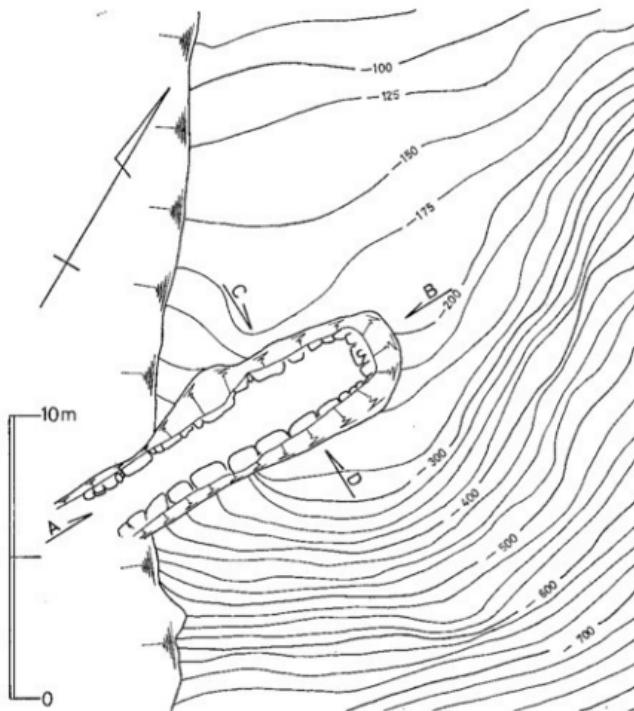
本古墳を含む丘陵一帯は、今次開発事業が行なわれるまでは自生の松林であった。当地は花崗岩の風化土で形成され、その転石や岩盤の露頭も多く、古くから採石山となっていた。したがって径約5m、深さ2mほどの摺鉤状の採掘坑址や、切石屑が散在して、丘陵表土層はかなりの乱れをみ

せていた。

本古墳もこうした採石作業によってすでに墳され、埴根走向に直交した長さ約13m、巾約5m、深さ2.7mの大きな掘り跡が認められるものの、二次埋積によって石材等も検出されず、また墳丘も採石時の振り込みや流土等によって変形され、自然地形に近い状態となっていて、当初の分布調査では認知できなかった。



第46図 岩田第8号墳周辺地形図



第47図 岩田第8号墳外形図

その後、当該地が工事区となって立木が伐採され、見通しがよくなった段階での分布調査や、岩田第6・7号墳の発掘調査の経験から、本古墳存在の可能性が強まり、採石溝内の清掃を行なったところ、横穴式石室の残存石材が検出され、改めて確認されたのである。開発工事を一時中断して、発掘調査されることになったが、すでに工事区であったために墳域の一部にブルドーザが立ち入り、また発掘調査の着手が遅れたこともあって、その間に隣接地の工事が進められ、尾根支脈稜線を境にその西半は掘り崩され、現存石室の淡道部西端は、比高18mの絶壁状の崖縁に直面していた。したがって本古墳および周辺の地形は大きく乱れ、発掘調査前の地形測量もできないありさまであった。現況における外面観察の限りでは、葺石および埴輪等の外部施設は何も認められなかった。

第46図は事業主体者作成の工事用地形測量図を参考資料として借用したため、採石溝等細部の記載ができていない。また第47図は今次開発工事にともなう搅乱土と、採石溝内の二次的堆積土を排除して、残存石材上面を露呈させた段階での外形測量図である。

## 第4章 遺構および遺物の出土状況

### 第1節 墳丘

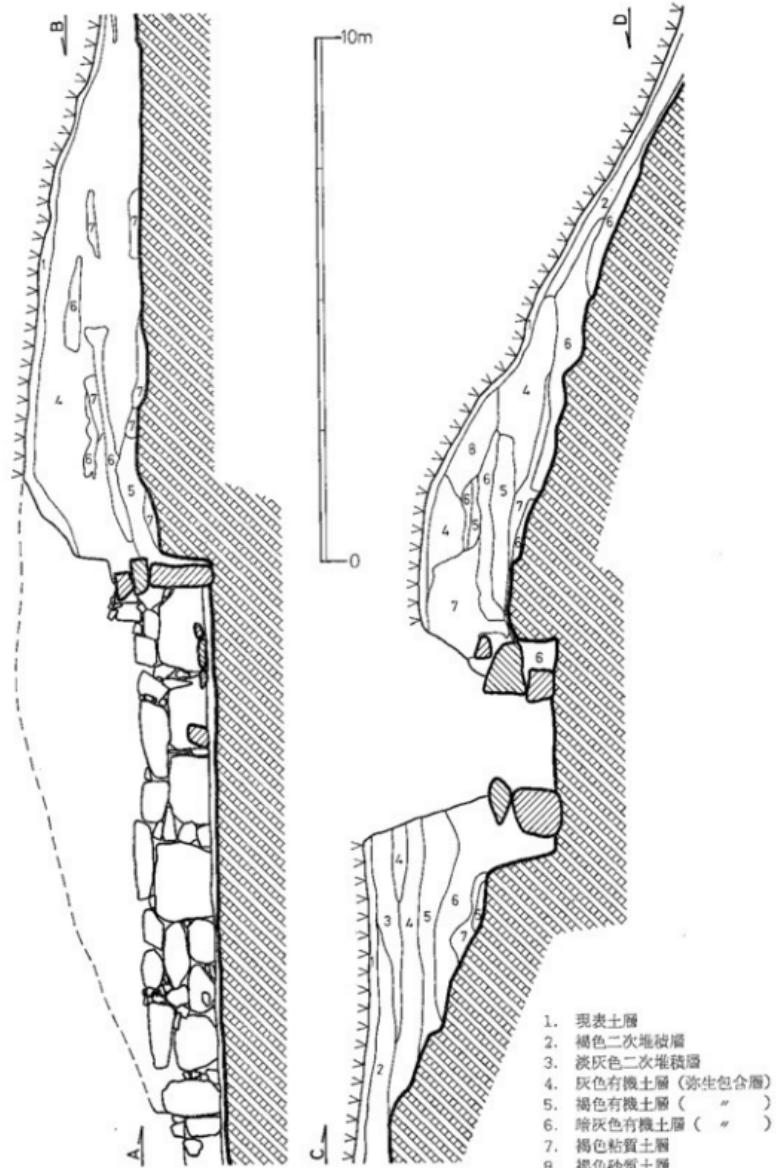
本古墳の墳丘は前述もしたように、すでに石材採掘溝によって墳域の一部を削平されたうえに、尾根巾の狭い下降稜線上に立地することもある、風化や流土の影響を受けて原形は大きく損なわれ、調査前の外観では、墳丘らしい形状は全くといってよいほど認められなかった。その後墳丘を十文字に切断するトレンチを設け、断面観察などによってやっとその概要を知る程度である。

発掘調査の結果、本古墳の築成過程は、①石室構築場所の選定と整地、②石室の規模に合せて掘り方を掘る、③石室を下段から築きながら掘り方を埋め戻す、④整地面より上位となる石室を築くとともに、それを包み込むように土を盛って叩きしめる、⑤地形の高い北側の丘陵尾根を掘って墳丘を盛りあげ、墳形を整えるという工程が考えられる。

石室の掘り方は、当該地の丘陵尾根支脈の走向に直交して、南西から北東に向けて掘り込まれているが、掘り込み面の整地は、本古墳の築造に先行して複合立地する、弥生集落址の生活面であった平坦地を利用しているようである。すなわち、堅穴式住居を建築するための、丘陵尾根部を棚田状に削平整地した造構を利用して、若干の拡張整地を施した面から掘り込まれている。石室掘り方が丘陵地山層に、平均約1.3mと深く掘り込まれ、石室がその中に半地下式に築かれ、整地面の上方への突出が少ないためか、墳丘の盛りあげには段築等の特別な配慮はあまり施されていない。強いて特徴をあげれば、掘り方内の埋め戻しの土層が、厚みの薄い水平層序を示し、一度に埋め戻すのではなくて、少しづつ叩きしめながら埋め戻されていることと、掘り方上端より上方の、天井石の高さと推定される付近までは、比較的粘質な土で石室を包み込むように盛りあげ叩きしめを行なっているため、その部分の層序は石室中心線に向って斜傾している。このことは、石室を補強すると同時に、墳丘を盛りあげる際の核となる形状を示している。その他の部分の盛り土は、ほぼ水平層序をみせて盛りあげられているが、本古墳が弥生集落址と複合し、その有機土層を利用しているため、現存封土の大半は弥生式土器片や石器類を多量に含む包含層で構成されている。そしてその採土場所や遺構の状態によって、色調や包含の濃淡がブロック状となって検出される。なおこれらの遺物については、別に箇を改めて用木山遺跡として、本報告書第4集に収録する予定であるので、ここでの記述は割愛する。

墳丘築成の最後の仕あげとして、その表面は汚れのない地山生き土を化粧土として盛って、墳形を整えたと考えられるが、現状では盗掘および風化流失等によって詳細は不明である。また墳端部も弥生集落址との重複や、その後の振壊によって判然とせず、明確にすることはできなかった。

現存する墳丘の規模は推定18m×30mを測り、石室の長軸方向に長径をもつ椭円形プランを示し、その奥壁が墳丘のほぼ中央に位置するように築かれている。したがって奥壁後方の丘陵削平整地面もさらに11mの広がりをもつ。また現存墳丘高は石室床面からの比高3.7mを測り、推定石室内法高1.8m、天井石上端までの高さを2.6m～2.8mと仮定しても、その上方の被覆土は少くとも1m以上施された、堂々とした古墳であったと考えられる。



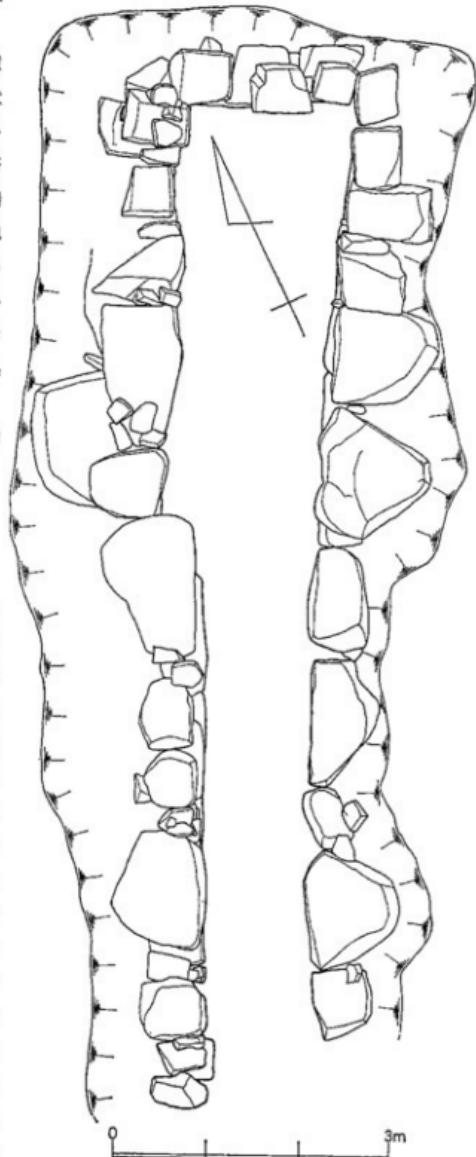
第48図 岩田第8号填塡丘断面図

1. 現表土層
2. 棕色二次堆積層
3. 淡灰色二次堆積層
4. 灰色有機土層(弥生包含層)
5. 棕色有機土層(“ ”)
6. 暗灰色有機土層(“ ”)
7. 棕色粘質土層
8. 棕色砂質土層

墳丘の盛り土は、地形の高い北側の丘陵尾根部を掘り込んで採土しているが、こうした傾斜地に築造された多くの古墳に見られる、地形の高い側だけの円弧状あるいは馬蹄形状の周溝とならず、むしろ丘陵尾根部を深く削平整地した周底帯状を呈している。これは石室掘り方上端の整地面と、北墳端部にあたる削平整地面の比高  $1.9m$  が示すとおり、かなりの傾斜面であるため、墳丘の幅員と見せかけの高さを増大させ、また長径  $30m$  におよぶ墳丘土量を得るために、必然的な処理と考えられる。削平地面の巾は  $12m$ 、北端の丘陵地山の掘り込みの深さは約  $1.8m$  である。

## 第2節 掘り方

南東方面に下降する丘陵尾根稜線上に、それと直交するように南西から北東に向けて、ほぼ長方形に近い形で掘られている（図49）。掘り方を掘る前に丘陵尾根部を削平整地しているためか、傾斜地に掘られている割りには安定した掘り方上面プラン示す。石室の右袖式に合せて掘り方の巾も、玄室部を広く狭道部を狭く掘っているが、その境はシャープな段状とならず漸移的に狭まる形を呈している。また狭門部にあたる掘り方の南西端の一部を、今次開発工事によって切斷され、掘り方の全長を知ることができないが、その形状からみて、石室全体が掘り方内に構築されていたものと考えられる。掘り込みの確認できる現存掘り方上端での玄室部巾  $4.2m$ 、狭道部平均巾  $3.7m$ 、現存掘り方長  $12m$ 、深さは最も深い



第49図 岩田第8号墳石室掘り方平面図

奥壁部で 1.4m を測るが、地形が南に下傾する尾根支脈上に位置する関係から、北壁に較べて南壁が浅く、また西方の羨門部になるにつれて浅くなっている。

掘り方壁面の角度は全体的にみてほぼ垂直に近いが、地形の高い側の北西側壁部と奥壁部は、上方にやや広がる外傾をみせ、地形が低く掘り込みの浅い南東側壁と、談道部にあたる北西側壁部ではほぼ垂直に掘り込まれ、いずれも整然とした掘り方となっている。また掘り方底面は、一見して水平な面に整然と削平されているが、厳密に見ると地形の低くなる丘陵尾根側斜面に開口する羨門部が、奥壁底面に較べて 28cm 低く、全体的には約 2 度の角度で傾斜している。底面の傾斜が意識的なものかどうかは不明であるが、結果的には排水施設的な機能を果たしたと思われる。そのためか、掘り方底面には排水溝等の特別な施設は何も認められなかった。石室構築後約 10cm の厚さにマサ土を入れて整地し、川原石の玉砂利を敷きつめて石室床面を仕あげている（図48）。

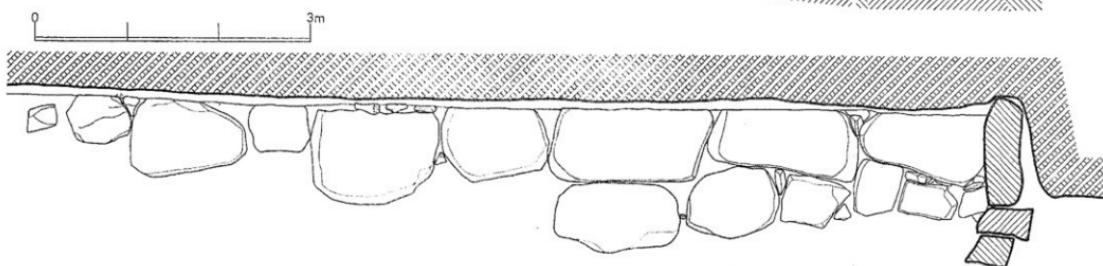
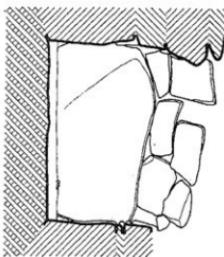
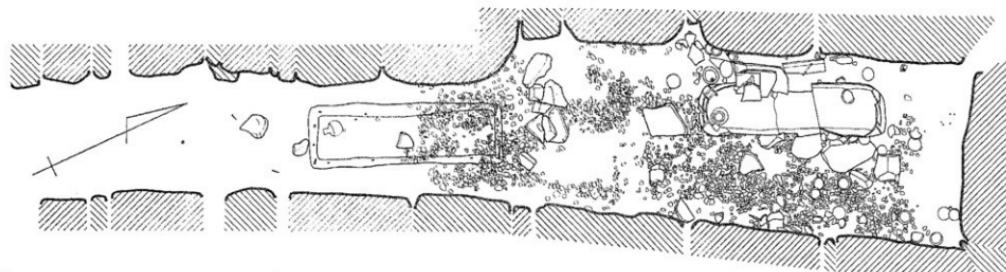
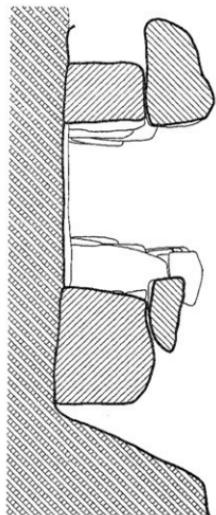
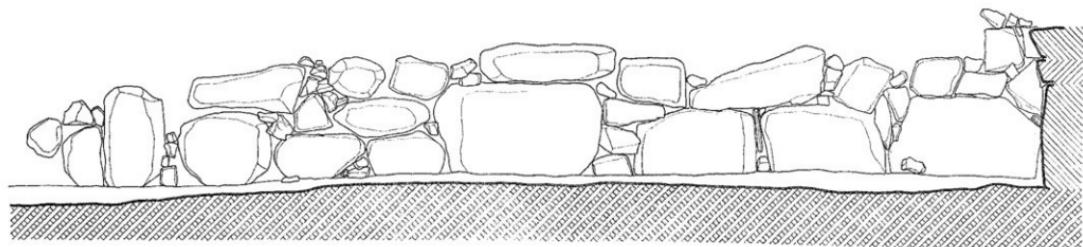
以上のように整然と掘られた掘り方も石室構築によってかなり変形されている。すなわち、石室最下段となる根石は、個々の石材に合せて穴を掘り、天を揃えるように設置しており、また上段の石材を築くとき、石材が掘り方の壁面にあたる場合には、その部分を掘って石材に合せている。そのため発掘調査時における石室の掘り方は、当初の掘り方と較べてかなりの乱れをみせていた。

### 第3節 石室

丘陵尾根支脈の走向に直交して、溝状に丘陵地山層を深く掘りこんだ掘り方内に、半地下式に構築された右袖の横穴式石室である（図50）。後世の石材採掘等によって盜掘され、天井石および羨門閉塞施設のすべてと、側壁上半部の大半の石材はすでに持ち去られ、原形は大きく損なわれ、残存石室もその後の自然流土によって完全に埋没していた。しかし、採石作業が墳丘上から露天掘りで、石材を上に引きあげる方法で行なわれ、石室部分の被覆土が、玄室側壁上端から約 1.8m と厚いことも幸いして、採掘坑もそれだけ深くなり、石材の引きあげ歩もかさみ、採算が合わなくなる等のためか、石材の採取は掘り込みの比較的浅い上半部に限られ、側壁下半部の残存比率や保存状態はかなり良好である。また奥壁とそれに接する現存側壁上端の一部には、天井石との間隙を開整するために詰められたと思われる小石材が、ほぼ原状を保って遺存していて、石室の内法高を知る手がかりとなるなど、その大要を知ることができた。

現存する石室の床面プランは、羨門部で若干の欠損が想定されるものの、ほぼ原形を保つと思われる。床面を基準とした現存石室全長 10.5m、玄室長 5.0m、羨道長 5.5m、玄室巾は奥壁部で 2.0m、羨道に近い部分で 1.8m、羨道巾は玄室に近い部分で 1.2m、入口付近で 1.27m、石室の高さは、原状を保つ奥壁部で 1.82m、羨道の現存最高側壁高 1.42m を測る。石室の長軸中心線の方位は北 26 度東を示し南南西に開口しているが、玄室と羨道の個々の長軸中心線の方位は、玄室 北 28 度東、羨道北 24 度東と約 4 度の開きをみせ、玄室に対して羨道がやや西に振った形状を呈する。

石室の構築に用いられた石材は、現存する限りでは、すべて当丘陵に数多く産出する花崗岩の自然転石である。原則として下段の根石に大きい石材を置き、上段になるにつれて小形の石材を使っ



第50図 岩田第8号填石室実測図

て、各段の高さを揃えながら直面に近い壁面を築いている。石材は計画に合った造材を選んで積み上げていると思われるが、角に丸味をもつた自然石であるため、石材間の隙間も多く、小石材を詰めてそれを埋め調整しているが、発掘調査時においては粘土等による目張りや、赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。

奥壁は、巾190cm、高さ130cm、厚さ約40cmの扁平で隅丸長方形の石材を、掘り方底面をさらに約12cm掘りくぼめて垂直に立て、その上方に石室内側での高さ約20cm、巾約60cm程度の割り石を、小口積みまたは横口積みで、2段ないし3段積みあげて構築している。上段の石積みは、部分的に持ち送り状を呈するところもあるが、天井石との調整上そうなったもので、本来は垂直な壁面と思われる。石室内側の掘り込みは埋め戻され、さらに約10cmの厚さのマサ土を入れて床面を整え、川石による玉砂利を敷いて仕上げている。天井石はすでに持ち去られているが、奥壁はほぼ原全高を保つものと推察され、その高さは182cmを測る。

奥壁と掘り方の関係は、掘り方底面の壁ぎりぎりに奥壁が立てられ、掘り方上端での間隙も25cmと僅かである。掘り方と奥壁中心線は合致し、石材の横巾も掘り方および石室巾に合っている。これはあらかじめ設計された規模と形状に合せて、計画的に掘り方が掘られ、石材が採集されたことを物語るものと思われる。石材と掘り方の間はすべて埋め戻し土で叩き締められ、裏込めの石材や積みなどは一切認められなかった。そしてこのことは、側壁部についても同様である。

側壁は、入り口付近が削平されて、根石も若干は持ち去られた可能性があり、また被覆土の薄い狭道左側壁では、最下段の石材だけを残して、他はすべて取られている等、全形は不明であるが、大要は次のとおりである。

玄室は左右両側壁とも同様の3段築成である。最下段の根石は、床面からの高さ70cm～90cm、巾140cm～170cm程度の大形石材各3個を、広口または横口に置いて組んでいる。中段は高さ45cm～60cm、上段は高さ30cm～45cm程度の扁平石材を、小口積みまたは横口積みにして、各段の高さをほぼ揃えながら積みあげ、石材間の隙間には小形の自然石や割り石を詰めて調整している。各段の平均高は下段約80cm、中段約55cm、上段約45cm、玄室の側壁高は183cmである。根石は広口積み、その上は小口積みが多い。石室内壁面を揃えて築くため、その裏側では下段に較べて上段石材が、著しいものでは約50cmも突出するものも見受けられるが、控え積み等は認められない。

石室が右袖のため、玄室に最も近い狭道右側壁の根石は、床からの高さ100cm、巾184cm、厚さ約60cmの扁平で隅丸長方形をした大形石材を、南へ約50cmずらして立てて区画している。石材の小口面が玄室と狭道の間仕切り壁、広口面が狭道側壁となるが、角のまるい自然石のため、その境はシャープな縁形とはならず、円弧状の平面形を示す。狭道の側壁は、玄室に近い部分の根石は大形の石材を用い、入口に近づくにつれて小形化する傾向をみせ、各段の高さも不揃いとなる。しかし、側壁の遺存が比較的良好な右側壁部では、床面からの高さ約130cmのレベルで、一応その高さを一定に揃えている。これを玄室高180cmと較べると約50cm低く、地形的条件等を加味して推考すると、天井石の高さを玄室と狭道とで、段違いに構築していたとも考えられるが、現状ではその確証はない。

羨門部は閉塞施設の石材を全く遺存せず、側壁端部もかなりの乱れを見せ、その構造は不明である。羨門部周辺の掘り方底面において、側壁端部を確認するため、根石の抜き取り穴等の痕跡の探査を試みたが検出できなかった。現存する右側壁の入口から二番目の根石は、床面からの高さ110cm、巾68cmの石材を立柱状に立てている。本石室の石材でこのような継長に築いているのは、当石材だけである。奥壁からの距離10mは、ちょうど玄室と羨道の長さを二等分する位置にあり、意識的に築いたものとすれば、羨門を表現する可能性が強い。現存する最下段の側壁は、ほぼ全原形を遺存すると考えられるのである。

石室の構築順序は、現況からは明確にできない。最下段の根石は、まず奥壁を立ててから、それに接する両側壁根石を置き、これを基準にして入口方向に築いていることと、上段部においても、奥壁が優先して築かれているらしいことを指すことができる程度である。

石室床面は、掘り方底面の上方に約10cmの厚さで地山マサ土を入れて、平らに整地しているが、厳密にみると玄室部はほぼ水平であるが、羨道部は入口に向って100分の3の勾配で下傾している。また玄室内に敷かれた玉砂利は、羨道の玄室寄り1mまで認められ、それより入口に近い床面ではほとんど認められなかった。そのことから本石室床面は、玄室部のみに一重並びに玉砂利が敷かれた砾床と考えられる。

#### 第4節 遺物の出土状況

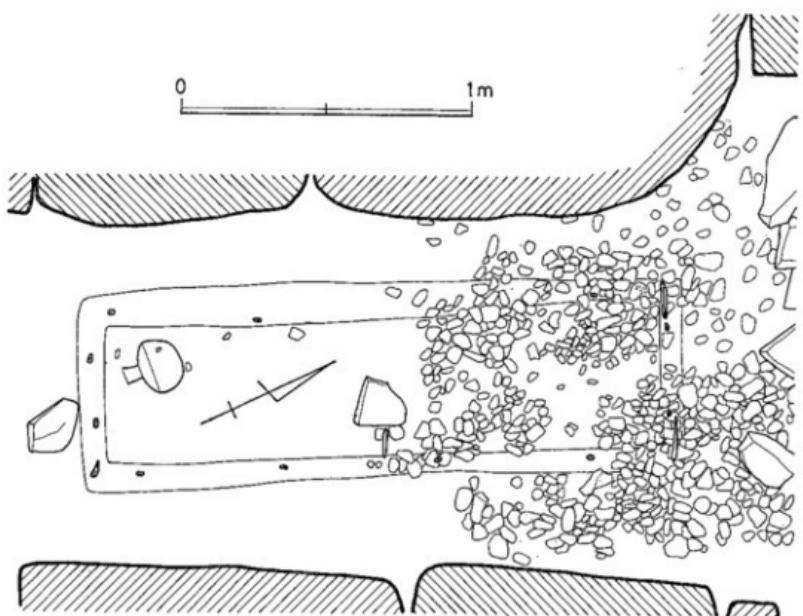
今回の発掘調査にともなう石室内の遺物は、ほとんどが玄室底部から出土した。石室内の埋積土を掘りおろす過程で、破損した須恵質陶棺の現在上端部を発見、次いで床面の上方約20cmぐらいの高さから、埋土中に逆離する土器片や鉄器片等が検出されはじめ、床面までのあいだではかなりの量におよんだ。多くは断片的な小片で二次的擾乱が想定される。床部においても完形を保つ遺物は少なく、第53図にも示したように、陶棺をはじめ副葬品の多くは破片となって、砾床面に十数個の石材とともに、遊離散在する形状をみせていた。

埋葬主体（棺）としてはほその全貌を確認できるのは、玄室の須恵質陶棺と、羨道部の木棺の痕跡の2主体だけである。須恵質陶棺は、身部の長さ211cm、巾57cm、高さ通常見られる脚をもたない。玄室の西側壁に沿って、側壁との間隔約30cm、奥壁からの距離95cmの位置に、床土を水平に整地して置いていた。したがって玄室内に敷き詰められている円砾は、陶棺の下には施されていない。陶棺は底部と両小口の壁を残す他は大きく壊され、蓋板は本棺北小口の東床面に敷き重ね、その上に鉄釘數本が検出された。棺身部の側板もほとんどが取り壊されて、石室の側壁と陶棺の間に立てかけた状態で集められていた。棺内床上に須恵器壺、同壺、刀子1が発見されたが、両小口の壺の他はいずれも遊離しており、後の混入とも考えられるので、本棺葬送に直接ともなう供獻物かどうかは不明である。

羨道部の木棺は、埋土中に遺存する長方形かつ水平な腐蝕土面の痕跡と、鉄釘の配置からその存在を確認できた。なかでも鉄釘のうち、底板に打ち込まれた釘は、原状のまま直立した状態で遺存し、その他の釘も棺の腐朽とともに、その形状のまま直下に落ちたものがかなりあり、その方向や



第51図 稲田第8号墳陶棺出土状況



第52図 岩田第8号墳羨道部木棺出土状況

形態から、本棺の規模と構造の大要を知ることができた。

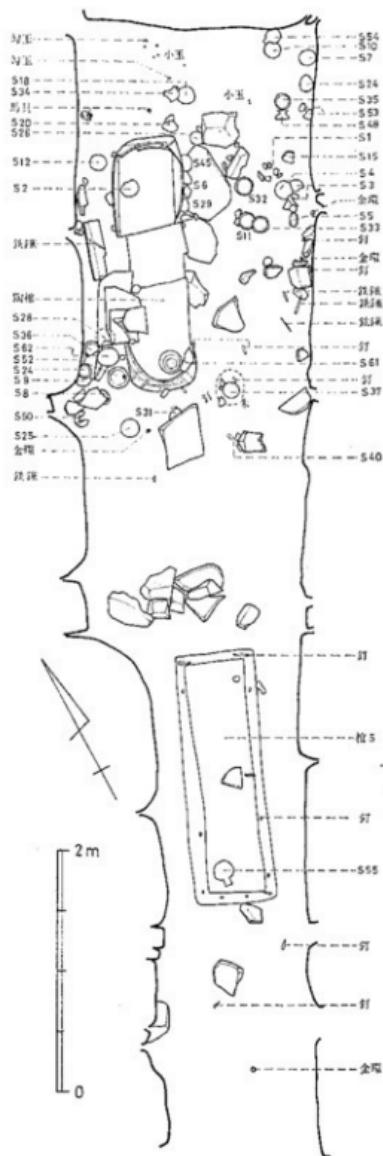
直立する釘は左右両側に各4本、両小口部に各2本の計12本が打たれ、側板はいずれも側板方向から小口へ向けて各2本が打ちこまれている。したがって棺の構造は底板が大きく、その上に妻板を両側板が挟むように組まれた、長方形箱形木棺と推定される。また側面中ほどに遊離釘が落下していることから、蓋板も釘止めされていたと考えられる。棺の大きさは、腐蝕土面での外法長207cm、同巾69cm、内法長191cm、同巾46cmを測り、直立する釘間での長さ199cm、同巾50cmを測る。釘の外表に銹化遺存する木目の走向から、板材の厚さを想定すると7cm～9cmの数値となる。したがって本棺は高さは不明ながら、およそ長さ205cm、巾55cm程度の規模であったろうと推定される。この木棺は、玄室から羨道へ約15cmのところに北小口をおき、羨道長軸線上に位置するが、棺の底面は砾床面よりも約20cm上位にある。棺南小口の床面下に須恵器長首壺が埋まっていたり、棺の南外方の羨道底部近くに、金環や鉄釘が遊離埋没していることから、本古墳への追葬過程の終末期に、石室内を埋め戻し整地をした後の埋葬と考えられる。なお木棺内にあたる腐蝕土面からは、副葬遺物および赤色顔料の痕跡等は何も検出されなかった。

石室床面において発見した土器のほとんどは須恵器である。玄室北東隅に提瓶1、高环1、坏4の計6個体、床面に敷かれた陶棺片の下およびその周辺に平瓶1、坏7の計8個体分、石室側壁と陶棺の間の南小口部に、陶棺の側板とともに置かれた壺1、平瓶1、高环1、坏5の計8個体がま

とまりを見せるほかは、陶棺の周辺に数個の坏と玉砂利間に散在する遺物片が認められる程度である。いずれも各主体に直接供獻した形態は示さず、二次的移動によるものと考えられる。しかも本古墳への追葬の過程で、意識的に片付けるとか集めて置いたとみられるのは、側壁と陶棺との間の一群のみである。また発見の土器類は、接合復元のできない欠損品が多く、その遺存度が低い。須恵器坏を例にとると、出土破片すべてについて検討した結果、少くとも総個体数は蓋31、身32の計63個体以上であるのに対して、完形品も含めて80個以上を復元できるものは、蓋17、身14計31個体と、総個数の半数に足らない。蓋と身が上下にセットとなるものについても、可能性も含めて8例に過ぎない。追葬の過程における整理、あるいは後世の盗掘時の攪乱かは別として、かなりの量の遺物が、すでに石室外へ散逸しているものと推察されるのである。

金環や玉類等の装身具類および鉄器についても、土器の場合とはほぼ同様の出土状況であった。その多くは床面上の埋土中に浮いたかたちか、砾床の間に混在するかたちで検出された。特に装身具については、被葬者への着装を想起させるような遺存例は皆無で、なかでも左右一对となる金環は計7個を検出したが、いずれもばらばらとなつて広い範囲に散在し、著しいものは淡道入口付近で発見された。

本石室内の遺物の出土状況は、上記のように大きく乱れ、石室の遺存状態等と合せて、当初は後世の盗掘または石材採掘時の破壊による攪乱と、簡単に考えていたほどである。しかし、石室床部の調査が進むにつれて、陶棺の出土状況および後の追葬者の棺台への転用、床面出土遺物の大半が陶棺と同時あるいは先行する形態を示すこと、淡道部木棺が石室内を一度整理した埋め戻し土の上に置かれていること、砾床面の遺存度などから、



第53図 岩田第8号墳石室内遺物出土状況

少くとも玄室を中心とした床面の、大部分における遺物の二次的移動は、後世のものとするよりも、本古墳追葬の過程でのものと考えた方が妥当のようである。石室床面に散在する石材についても、石材採掘時などの転落石ではなくて、棺台等本古墳葬送祭祀にともなう用材と理解した。

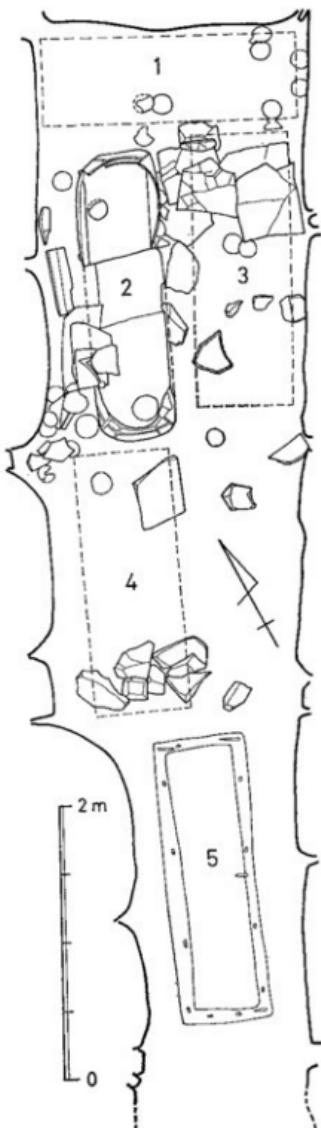
## 第5節 埋葬主体

木石室に葬られた被葬者の実数は不明であるが、前節で述べた2主体の他に、金環等の発見数および石室内のスペースや形状から推して、さらに數主体の葬送が考えられる。すでに破壊された石室で、部分的には後世の搅乱部や、羨道南半のように遺物等の空白となっているところもあるが、確実性に乏しい面もあるが、現状の中で若干の推考を試みたい（図54）。

まず陶棺に先行する主体の有無である。陶棺の下に砾床をともなわず、位置的にも陶棺はかなり早い時期での埋葬と考えられるが、石室の構造や遺物の配置等から、第1主体とは思われない。陶棺が奥壁から95cmの距離において納められ、奥壁に平行して棺を納める充分な余裕がある。そこは陶棺の下と同様砾床が施されず、勾玉2個を含む玉類と、小断片ながら馬具の一部が検出され、棺が置かれた可能性が大きい。

次に棺の東側である。陶棺の蓋板を取りはずして砾床の上に敷いているが、その南側にはレベルを揃えるようにして、扁平な石材が置かれ、その間には赤色顔料の遺存が認められる。金環一対や棺蓋板の上に鉄釘が散在することから、陶棺の蓋板を棺台として転用した木棺の存在が推察される。

陶棺の南、玄室の袖にあたる近くに、石材6個を組んだ巾95cmばかりの台部がある。陶棺の南小口にはそれとレベルを合せるように、上の平らな扁平な石材が置かれ、両者の外法距離は185cmを測る。ともに天部は砾床面から約15cm上方にあたるが、隣接する羨道部木棺底面が、砾床上面約20cmにあることからみて、棺台としての機能を果すものと考えられる。



第54図 岩田第8号墳埋葬主体配置図

以上が調査時点において、想定し得る主体の配置である。強いて埋葬順位をつけるとすれば、第54図のようになる。しかし他の遺物の出土状況や、床面の整理を行なった後の葬送を考慮すると、本古墳被葬者の実数はさらに増大すると考えられる。先に納められた陶棺を、後の被葬者の棺台に転用する問題についても、後に報告する岩田14号墳の例のように、玄室床面が被葬者の棺でいっぱいになった時点で、それらを取り片付けて整地しなおし、その上に重ねるようにして、次の埋葬を行なっていることを考えれば、理解できるのである。

## 第5章 出土遺物

石室内底部からの出土遺物は表示のとおりである。このほかにも、当該地が弥生時代集落址と複合し、また石材採掘等によって搅乱されているため、かなりの量の弥生式土器片や須恵器片などが、埴丘や石室内の埋積土の中に遺難片となって発見された。しかし弥生時代の遺物については、本調査概報第4集に「用木山遺跡」として報告の予定であり、また須恵器片についても、後に周辺からの混入のおそれもあるので、ここでは遺物が集中的に遺存し、本古墳葬送と直接関係深いと思われる、石室底部の遺物に限定して扱かった。

表28 第8号墳石室内出土遺物一覧

陶 棺	須恵質陶棺1
土 器	須恵器74個体分、土器器2個体分
装身具	金環7、勾玉2、平玉1、切子玉1、ガラス玉6、土製練玉11、埋れ木玉1
武 器	刀子1、平根式鉄鎌5、尖根式鉄鎌約10
馬 具	杏葉1、鞍具1、鞍金具片若干
釘・鍔	鉄釘約40、鍔2
その他	不明鉄器若干

### 第1節 陶 棺

灰白色をした大形の須恵質陶棺である。大破していたがほぼ完形に復元できた。丸味のある長方形箱型の棺身に平板3枚を載せた、当方出土の陶棺としては他に類例のない形態を示す。蓋板は並離していて配列や重なり等が明らかでなく、推察が加わるため実測図では蓋と棺身を分離して示した(図55、図版34)。

蓋板は、ほぼ長方形をした厚さ約2cmの平板3枚で構成される。実測図両端の蓋板は、大きさと文様の配置に若干の差がある他はほぼ同様で、水平な粘土板の器表に竹管文と、突帯および突起が施されている。中央の蓋板は無文で弓状のそりをもつ。

左蓋板は長さ80cm、右端巾57cm、左端巾50cmの台形である。厚さは1.8cm～2cmとほぼ一定した平板で、側縁部は平滑な面となり上下に稜をもつ。突帯は図示したように、割縁に沿った2条と、それを拠形につなぐ形の2条が貼りつけられている。突帯の巾と高さは場所によって若干の差があり、計測値も一定でないが、平均巾4.5cm、同高さ2cmを測る。断面形は扁平な弓弧状を呈する。

突起は丸味のある円錐台形で、突帯内の対角線上に4個がつく。いずれもほぼ同巧同大で、平均下底径10cm、上面径5cm、高さ4.5cmを測る。竹管文は縁端を除く器表全面に密に押されているが、これといった規則性は示さない。竹管文は径1.1cmの同大である。突起の裾部や突帶表面にも施されている。

右蓋板は長さ60cm、左端巾54.5cm、右端巾43cmの合形で、左蓋板より20cm短かい。コの字形の突端小口部に2個の突起がつけられている。突起の一つは剥脱して、剝離面にも竹管文が認められ、突起の貼りつけに先行して竹管文が施文されたことを示している。その他については左蓋板とほぼ同巧である。

中央蓋板は長さ68.5cm、巾69cmの長方形である。前記蓋板に較べてかなり巾が広く、平瓦状のそりをもつ。そりの最大巾は7cmを測るが、中軸線からかなりずれている。したがって製作時に意識的にそりをもたせたものか、あるいは焼成時等に歪んだものかは不明である。器表は刷毛目およびなでの調整痕が僅かに認められるほかは無文である。

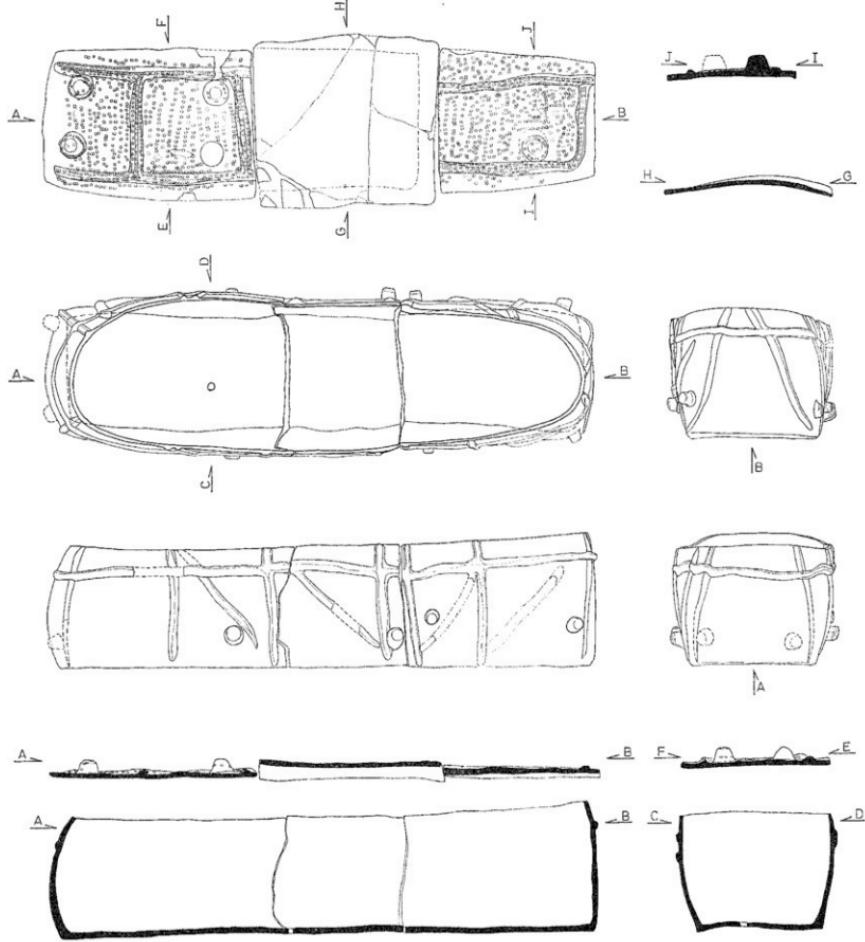
蓋板3枚の総延長は208.5cmで、棺の上縁長198cmに較べて約10cm長い。おそらく両端蓋板を棺の小口に合せて設せ、中央の蓋板を両側の蓋板の上に重ねて置いたと思われるが、その実際は明らかでない。

棺身部は、底部を隅丸長方形、上縁部を長楕円形に整形しているためか、側板は外ふくらみに外湾する面が多く、また若干の焼垂みも加わって、全体としては丸味の強い長方形箱形を呈する。したがって棺の断面形は縦横とも太鼓胴形を示す部分が多く、縦断面形と小口に近い横断面形は上の狭い内傾斜、中程になるにつれて上に開く外傾斜を示す。

棺底は平板である。左棺底の小口から63cm、長軸中心線から約3cmのところに径2.6cmの円孔1個が貫孔されている。棺側は帯状の粘土板を4枚積みあげて整形し、外面とも刷毛目およびなでによって、厚さ1.8cm～2cmのおおむね平滑な面にしあげられ、外表には図示したような突起と突帯が施されている。棺は整形後二つに分割して焼かれているが、切断部は中央ではなく大きく一方に片寄っている。実測図左棺は底面外法長131cm、右棺は同74cmとほぼ2対1の比率となる。棺身素形を整形後に切断して、あとから突帯と突起を貼りつけた形態をみせている。

棺側面の突帯は、ほぼ等間隔で縱向きに左棺側を4条3区分、右棺側を3条2区分する形に貼りつけ、それによってできた切断部側の2区画の条間に、切断部側に下傾する筋交い形の各1条と、棺の上縁から約8cm下に、鉢巻状にめぐるほぼ水平な1条を施している。棺側両端の縱向きの突帯が、小口部の湾曲に合せて立ちあがるため、両小口部ではハの字形の突帯となっている。突帯の平均巾約4cm、高さ約1.5cm、扁平な弓弧状を呈するが、高さや巾は一定でなくやや不整形である。また水平突帯はやや蛇行し、突帯の交点では山なりに盛りあがる部分も見受けられる。

突起は棺側の下方にはほぼ垂直に貼りつけている。左棺側は両端と中央の3個、右棺側は両端のみに2個、総計10個である。左小口では突帯の内側、右小口では突帯の外側につく形状をみせる。棺底から約12cm上方に位置するが、なかには若干上下にずれをみせるものもある。突起の形状は蓋の場合と同様に、原則としては丸味のある円錐台形を示すが、上面に稜をもたずまるめられたものもある。



第55図 第8号墳出土陶器実測図

陶棺の規模は、蓋の全長208.5cm、棺底外法長212cm、同巾52cm、上縁部長198cm、同巾56cm、床面内法長201cm、同平均巾43cm、棺外法高50cm、同内法高46cmを測る。胎土に砂礫粒を多量に含み、大きいものでは6mmの大礫を含む。焼成はやや軟質で瓦器に近い感じである。器表は内外とも灰白色を呈するが破損部の断面はおおむね暗赤褐色である。

本陶棺は当地方陶棺に通常見られる、円筒状の脚をもたない。突帯および突起は棺の素形を切断後に貼りついているが、貼りつけ面にへらきず、目張り、貫孔などの接着のため特別な処置はみられず、剝離している部分が多い。したがってこれらは、器壁の補強とか搬送時の掛取手などの、実用的機能としては疑問が大きく、装饰として形態化したものと思われる。当山陽町は土師質龟甲陶棺および須恵質家形陶棺など、土師質と須恵質の陶棺が併存する地域であるが、本陶棺は須恵質陶棺でありながら、突帯や突起さらには棺身部の形状などは、土師質龟甲形の影響を大きく受けていることを示している。

## 第2節 土 器

石室底部出土の土器は表29に示したとおりである。推定個体数は78以上とかなり豊富であったが、完形を保つものは少なく、その多くは断片となって欠損が著しい。すでに石室外への散逸が考えられる。実測可能なものについては極力図示に努め55個体を数えるが、すべて須恵器である。実測図の土器番号は便宜上遺物出土状況図、器形別出土土器一覧表と統一番号にした。なお出土土器のなかの須恵器壺類3点を、実測等未了のうちに盗難によって失ない、ここに提示できない不手際を深く反省するとともにお詫びしたい。

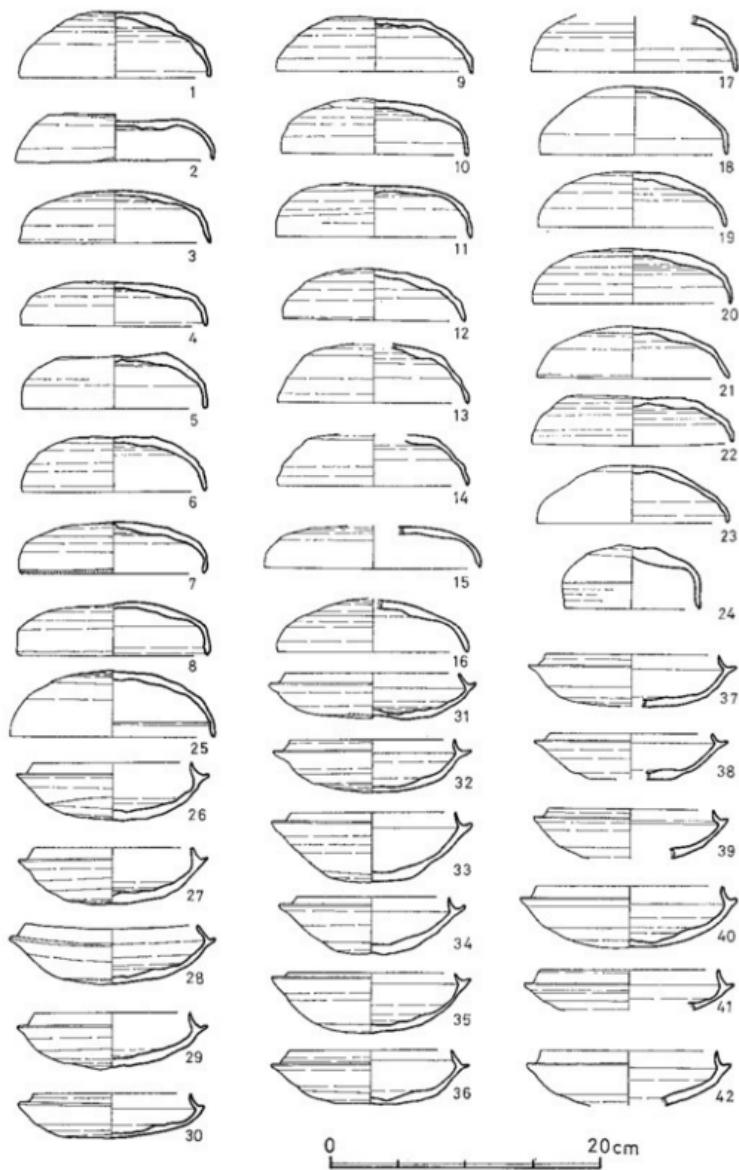
表29 第8号墳出土土器個体数一覧

器 種		完 形	復元可能	破 片	計
須 恵 器	壺	2	2	—	4(1)
	平 瓶	1	1	1	3(2)
	提 瓶	1	—	—	1(1)
	高 环	—	1	4	5(4)
	壺(蓋)	4	14	13	31(25)
	壺(身)	8	6	18	32(22)
土 師 器 壺		—	—	2	2(0)
計		16	24	38	78(55)

### 1. 壺蓋(図56、図32)

\*復元可能は80%以上( )数字は実測図示個数。

計31個体分検出したが図示できるものは25個体である。径13.5cm~14.5cm、器高3.6cm~4.2cmのものが多い。器胴に弱い稜をもちそこから口縁に向けて、やや内溝しながら丸味をもって立ちあがるものと、稜をもたないでそのまま自然に口縁端が開くものとがある。また胎土および焼成からも4種類に細分もできるが、形式的にはさして差異は認められず全体的にはほぼ同形式のものと考えられる。整形仕上げはいずれも内面は横なので、外表は横なでおよびへら削り調整が施されている。



第56図 岩田第8号墳出土須恵器実測図(1)

表30 第8号墳石室内出土の壺蓋一覧

(単位cm)

土器番号	口 径	器 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	14.2	4.7	灰 色	細砂粒を含む	やや軟質	約80%復元
2	14.5	3.6	青灰 色	2mm大までの砂粒を含む	堅 級	完形復元
3	14.0	3.7	青灰 色	細砂粒を含む	普 通	ほぼ完形復元
4	13.7	3.2	灰 色	細砂粒を含む	普 通	ほぼ完形復元
5	13.5	3.8	灰白 色	2mm大までの砂粒を含む	やや軟質	完形
6	13.8	3.9	暗灰 色	2mm大までの砂粒を含む	やや軟質	約90%復元
7	13.6	3.8	灰 色	2mm大までの砂粒を含む	普 通	完形
8	14.0	3.8	暗青灰色	2mm大までの砂粒を含む	普 通	ほぼ完形復元
9	14.4	3.9	灰白 色	5mm大までの砂粒を含む	軟 質	完形復元
10	13.8	4.0	灰 色	細砂粒を含む	普 通	ほぼ完形
11	14.4	3.9	暗青灰色	細砂粒を含む	普 通	ほぼ完形
12	13.4	3.7	暗青灰色	細砂粒を含む	普 通	完形
13	(14.1)	(4.2)	青灰 色	細砂粒を含む	堅 級	单片約30%大
14	(14.0)	(3.8)	青灰 色	3mm大の砂礫を含む	堅 級	約30%遺存
15	(16.0)	(3.1)	暗青灰色	3mm大までの砂礫を含む	普 通	单片約15%大
16	(13.9)	(4.0)	暗青灰色	3~4mmまでの礫を含む	普 通	約40%遺存
17	(15.2)	(4.2)	灰白 色	2mm大までの砂礫を含む	軟 質	約30%遺存
18	13.7	5.0	灰白 色	細砂粒を含む	軟 質	ほぼ完形復元
19	13.7	4.0	灰白 色	細砂粒を含む	軟 質	約90%復元
20	14.4	4.0	灰白 色	細砂粒を含む	軟 質	約80%遺存
21	(14.2)	3.6	灰白 色	細砂粒を含む	堅 級	約60%遺存
22	14.6	3.6	青灰 色	細砂粒を含む	堅 級	ほぼ完形復元
23	14.2	4.2	灰白 色	細砂粒を含む	軟 質	約80%復元
24	9.8	4.5	灰白 色	1~2mm大の砂礫を含む	やや軟質	ほぼ完形
25	14.8	4.7	青灰 色	砂粒を多く含む	普 通	完形

()内数値は推定値を示す。

個々の計測値や胎土・焼成などについては表示したのでここでは重複をさけ、その他の特徴についてだけ記述した。

(1)13片約80%の遺存である。体部外表面に螺旋状の指圧条痕が目立ち、器形もかなり変形してい

る。(2)4片を接合してほぼ完形に復元できた。天部のへら削りが荒く焼歪みをみせるが、側の坏身と上下にセットとなる可能性が強い。(3)13片をほぼ完形復元。器軸に弱い稜をもち均整のとれた良品である。(4)とセットの可能性がある。(4)5片をほぼ完形復元。皿状にやや扁平であるが、圓と対となる。(5)完形品。僅かに焼歪みをみせ口縁部が内湾している。器表の一部に緑色の自然釉がかかっている。(6)7片約90%の復元。内面に鉄錆の付着がある。(7)完形品。口縁部が内湾し、口縁端部外表に斜行櫛齒文状の刻文がめぐっている。(8)4片をほぼ完形復元。器表肩部に弱い稜をもち、口縁はほぼ垂直に立ちあがる。口縁端外表をへら削りで斜傾させ、内側に弱い段をもつ。(9)9片を完形復元。器表天部をへら削りの後なでによって、径6cmの平滑な面としている。器軸外表面に弱い稜をもつ。(10)ほぼ完形。丸味のある均整のとれた良品である。(11)ほぼ完形。ロクロ目を中心と土器の中心がかなりずれをみせ、僅かに焼歪みがあるが焼成は堅敏である。(12)完形品。径12.4cmとやや小形なのに較べて器壁が厚く重い感じがする。(13)30%大の單片。焼成堅敏で器表に指圧条痕が目立つ。(14)4片約30%の遺存。口縁端を指でつまんで薄く仕あげている。胎土に3mm大の石英粒を多く含みロクロによる引き廻し痕が目立つ。(15)約15%大の單片。皿状に浅い整形である。焼成堅敏で器表全面に灰釉をかぶっている。(16)4片約40%の遺存。(17)と対となる可能性がある。(18)11片約30%の遺存。焼成が軟質で器表も荒れてざらつとしていて瓦器に近い。(19)10片をほぼ完形復元。径13.7cmに對して器高5cmと深い。肩に弱い稜をもって口縁にやや内湾し、輪に近い形態を示す。焼成は軟質で器表はもろく荒れている。(20)11片約90%の復元。焼成はやや軟質だが均整のとれた良品で(18)と対となる。(21)8片約50%の遺存。やや浅いつくりだが口縁部は若干内湾し、内面の一部に鉄錆の付着がある。(22)9片約60%の遺存。器表全面に灰釉を受け、数か所に不定形な粘土塊が付着する。(23)5片をほぼ完形復元。焼歪みによって器形もいびつなっているが側と対となる。内面の指圧条痕が著しく、また外表天部をへら削りで径8cmの半坦面にしている。(24)3片約80%の遺存。焼成軟質で器表はもろく荒れている。全体的にまるく半球状の形状を示し(17)と対となる。(25)ほぼ完形。短径9.2cm、長径9.7cmと焼歪みによるゆがみが大きい。器軸に弱い稜をもって約2cm立ちあがり、器高4.7cmと深い。直口短頸咲の蓋と思われる。(26)大きく1条のひびが入るも均整のとれた完形品である。内面口縁部に弱い段をもつ。側と対となる可能性がある。

## 2. 坏身(図版56・57、図版33)

計32個体分を検出したが図示できるのは22個体である。受部径14.2cm~15.4cm、口縁径11.5cm~13.0cm、器高3.7cm~4.4cmのものが多い。総体的に器高は低い。立ちあがりも大きく内傾して短かくほぼ同形式であるが、立ちあがりにそりをもつものともらないもの、内面のそりと体部の境に稜のあるものとの二種がある。仕上げは底部はすべてへら削り、体部と内面は横なで調整である。(27)焼成はやや軟質だが均整のとれた完形で(4)と対になる。立ちあがりは若干のそりをもって内傾し0.8cmと低い。器表の一部に鉄錆が付着する。(28)均整のとれた完形。立ちあがりは薄く続い。側と対となる。(29)焼成は堅敏だが焼歪みをみせる。(30)完形。立ちあがりは厚く内部に鉄錆が付着する。(31)10片をほぼ完形復元。器高3.3cmと扁平で立ちあがりも0.3cmと低く、内面体部との境に稜をもつ。器表は暗青灰色、内面は暗赤褐色を呈し、外表の一部に鉄錆が付着する。(32)完形。(2)と対とな

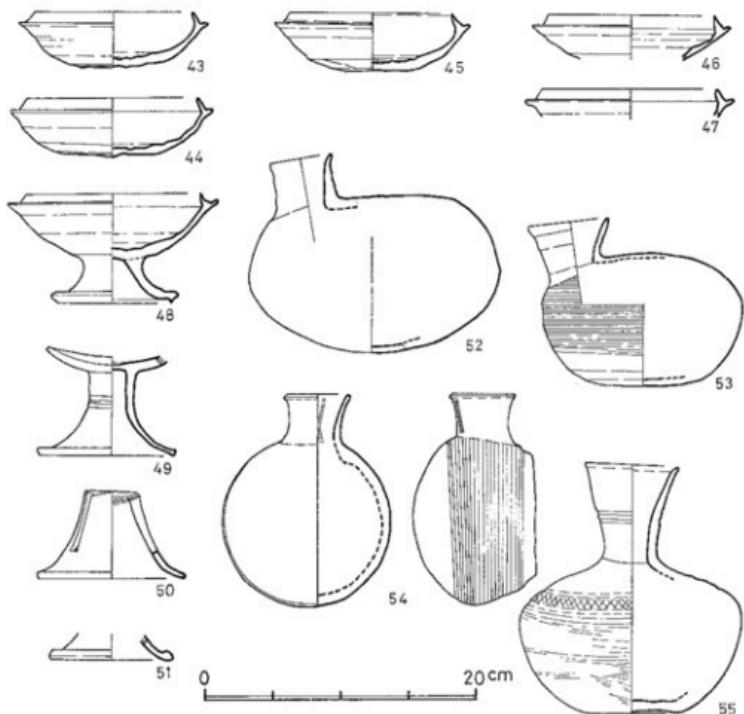
表31 第3号墳石室内出土の壺身一覧

(単位cm)

土器番号	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	備考
26	11.9	14.4	4.2	灰色	2mm大までの礫を含む	やや軟質	完形
27	11.8	14.2	4.1	灰色	3mm大礫を稀に含む	やや軟質	完形
28	12.9	15.4	4.4	青灰色	細砂粒を含む	堅緻	ほぼ完形
29	11.5	14.2	4.0	灰色	細砂粒を含む	普通	完形
30	11.6	14.1	3.3	外面青灰色 内面淡赤褐色	稀に5mm大礫を含む	軟質	ほぼ完形復元
31	13.0	15.4	3.4	青灰色	細砂粒を含む	堅緻	完形
32	12.3	14.8	3.8	青灰色	稀に7mm大礫を含む	堅緻	完形
33	12.3	15.0	5.2	青灰色	細砂粒を含む	普通	完形
34	11.3	13.9	4.2	灰色	良質	やや軟質	ほぼ完形
35	12.4	14.7	4.4	灰白色	細砂粒を含む	軟質	ほぼ完形
36	12.0	14.9	4.1	青灰色	2mm大までの礫多く含む	堅緻	完形復元
37	(12.8)	(15.4)	(3.6)	暗青灰色	2mm大までの礫を含む	普通	約40%遺存
38	(12.0)	(14.4)	(3.6)	暗青灰色	細砂粒かなり多く含む	普通	約25%遺存
39	(12.1)	(14.4)	(3.7)	青灰色	3mm大までの礫を含む	普通	約20%遺存
40	13.8	16.1	4.5	灰白色	3mm大までの礫を含む	軟質	約50%復元
41	(13.2)	(15.6)	(3.0)	灰色	2mm大までの礫を含む	普通	約10%大單片
42	(13.0)	(15.2)	(4.1)	青白色	2mm大までの礫を含む	堅緻	約10%大單片
43	11.8	14.3	4.1	暗青灰色	2mm大までの礫を含む	普通	完形
44	12.5	14.8	4.1	青灰色	良質	堅緻	ほぼ完形復元
45	12.2	14.7	4.2	灰白色	細砂粒を含む	軟質	ほぼ完形復元
46	(12.3)	(14.6)	(3.2)	青白色	稀に5mm大の礫を含む	普通	約10%大單片
47	(12.9)	(15.6)	—	青灰色	細砂粒を含む	普通	約8%大單片

( ) 内数値は推定値を示す。

る可能性が強い。底部が焼歪みで若干窪んでいるが、器表全面に灰釉をかぶる。口径13.0cm、受部径15.4cm、立ちあがり高0.6cmが示すように、立ちあがりの内傾が強い。<sup>2</sup>均整のとれた完形。受け部は指圧で外反し立ちあがりのそりが強い。<sup>2</sup>完形。径15cmに対し器高5.2cmと深い。受け部は外傾し、立ちあがりは直線的内傾、内面体部との境に稜線がある。<sup>2</sup>ほぼ完形。焼成が軟質で器表はもろく荒れ、弱い螺旋状の指圧痕がある。受部端はまるく外方にやや斜傾して受け溝状を呈する。<sup>2</sup>ほぼ完形で<sup>2</sup>と対になる。椀状の器胴を呈して立ちあがりは0.3cmと低い。<sup>2</sup>2片を完形復元。



第57図 岩田第8号墳出土須恵器実測図(2)

元。均整がとれ匂と対となる。立ちあがりは直線的に内傾するが1.2cmと高く、口縁端は薄くて鋭い。器表全面に灰釉をかぶる。匂4片約40%の遺存。受け部はまるく水平、立ちあがりはそりをもち内傾するが薄い。匂3片約25%の遺存。立ちあがりは0.5cmと低く内面に稜線をもつ。匂3片約20%の遺存。(3)と対となる可能性がある。匂9片約50%復元。径16.1cmは本古墳壙身中最大で匂と対となる可能性がある。立ちあがりも0.9cmと高い。受け部は抛物線上に外反する。立ちあがりの一部に鉄鏽が付着する。匂約10%大の單片。外表へら削りは受け部近くまである。匂約10%大の單片。立ちあがりは0.15cmと極めて薄い。焼成は堅緻で現存器表の全面に灰釉をかぶる。匂均整のとれた完形。受け溝状の凹線をもつ。器表底部に鉄鏽が付着する。匂10片をほぼ完形復元。底部のへら削りと内外面の指圧条痕が目立つ。受け部は水平で端部はまるい。匂と対となる。匂9片をほぼ完形復元。焼成が軟質で器表はもろく荒れているが、匂と対である。匂約10%大の單片。立ちあがりが厚い。匂約8%大の單片。立ちあがりに段状のそりをもち、端部は薄く鋭い。

### 3. 有蓋台付壙(図57、図版31)

表32 第8号墳出土台付坏

(単位cm)

土器番号	口 径	受部径	脚 墓径	器 高	脚 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
48	12.9	15.4	8.0	8.0	3.4	灰白色	細砂粒を含む	やや軟質	蓋なし

表33 第8号墳出土高坏

(単位cm)

土器番号	口 径	脚 墓径	器 高	脚 高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
48	?	10.2	?	6.1	黄褐色	細砂粒を含む	やや軟質	脚部片
50	?	11.0	?	?	淡青灰色	細砂粒を含む(良質)	堅 織	脚下半のみ
51	?	9.0	?	?	暗青灰色	細砂粒を含む(良質)	堅 織	裾部細片

表34 第8号墳出土平瓶

(単位cm)

土器番号	最大径	口縁径	器 高	脚部高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
52	18.5	4.6	14.8	11.6	灰白色	5mm大までの隙を多く含む	軟質	完形
53	14.6	6.8	12.3	9.7	灰白色	細砂粒を含む	普通	完形復元

表35 第8号墳出土提瓶

(単位cm)

土器番号	最大径	口縁径	器 高	器 厚	色 調	胎 土	焼 成	備 考
54	12.5	4.75	15.0	9.0	暗赤褐色	砂粒を多く含む	普通	完形

表36 第8号墳出土壺

(単位cm)

土器番号	最大径	口縁径	器 高	脚部高	色 調	胎 土	焼 成	備 考
55	16.5	6.8	18.4	11.3	暗青灰色	砂粒を含む	普通	ほぼ完形

壺部および台部片であるがほぼ全形を知る程度の復元ができた。壺部と台部を別々に製作後接合している。壺部は前述の壺身と類似し、受け部は緩い上向き抛物線、立ちあがりは低く内傾する。台部は3.4cmと低脚でラッパ状を呈する。壺底外表に同心円状の描き目7条のはかは無文である。内外面とも横なで調整が施され、壺部下半から台部にかけての外表に、黄緑色の自然釉がかかる。

#### 4. 高坏(図57)

すべて脚部のみの破片である。壺部下半の一部と脚部片である。短い柱状脚部中央に、おぼろながら3条の凹線と、壺部下底外表に数条の描き目が認められる。現存部は灰白色を呈し、壺部内面に灰釉をかぶる。頸は脚下半のみの破片である。長方形透し穴が3方向に施されているが、形状から推察して2段透しの長脚と思われる。頸は脚部のみの小断片で詳細は不明である。器表は黒灰色を呈し焼成は堅緻である。いずれの高坏も現存部は内外面ともていねいな横なで調整が施されている。

### 5. 平瓶(図57、図版31)

陶焼成は軟質で灰白色を呈し、器表は荒れてざらざらとしているもほぼ完形を保つ。器胴の最大径が下半にあるうえに、上面に径約10cmの平坦面、底面はとフレンズ状に球面を呈し、上下を逆に口を取りつけた感じが強い。口は上面肩部に片寄って付けられているが、口縁部径4.5cm、頸部下端径4.45cm、高さ3.3cmと直口形を示す。蓋や小形ながら均整のとれた形を示す。16片の一括破片となっていたが、ほぼ完形復元できた。胴部底面は径5.5cmの平坦面にへら削りされ無文である。上面から側面にかけては横なのでうえから、同心円状の描き目が施されている。口縁部は上面肩部にラッパ状の短頸がつくが、頸部の付け根径は3.9~4.27cmと指圧によって、扁橢円形に歪みをみせている。

### 6. 提瓶(図57、図版31)

器胴最大径が12.5cmの小形品である。50口縁端の一部を欠損するがほぼ完形を保つ。裏側にあたる片面に径8.5cmの円板を貼りつけ、平坦面をつくりだしているが、その貼りつけおよび調整はかなり粗雑で、目張り跡の凹凸や一部に指紋が残る。側面は縦方向へのへら削りの後なで調整、器表面は中心から巾1cm程の螺旋状へら削り仕上げとなっている。このへら削り面に斜傾刻文が施されているようであるが、器表の磨耗が著しく詳細は不明である。頸部は口縁径4.75cm、高さ3.4cmを測るが、中央部が径3.6cmとややくびれている。頸部に図示したような2条のへらによる刻線がつけられている。

### 7. 壺(図57、図版31)

壺長首壺である。口縁の一部を欠損するが完形に近い。最大径を上位にもつやや肩の張った丸底の器胴に高さ7cm、口縁径6.5cmの長首がつく。器胴肩部に1条の凹線とそれに沿った上方に、鋸いへら先で刻まれた巾1cm程の斜行格歛文がめぐらされ、頸部中央付近に鉢巻状に2条の凹線が施されている。頸部付根径は4cmを測り、口縁に向けて僅かに外傾を示す。このほか陶棺内に壺1個体、陶棺と側壁の間にいちぢく形の器胴にラッパ状に大きく口縁が開く広口壺1個体、陶棺の西床面にやや肩の張った器胴に短頸のつく壺1個体を検出したが、盗難のため失なった。図版27,28の出土状況写真でしか今は見ることができない。

## 第3節 装身具

### 1. 金環(図58、図版31)

計7個を検出したが、いずれも石室内床面に遊離散在していて、その組み合せ等は不詳である。環の太さや大きさに差があるが、いずれも断面が円形の錫銅または棒鉄を環状に曲げ、切り口の突き合せ部に0.1cm~0.3cm程度の間隙をもたせたつくりである。また重量測定の結果から中空のものは存在しない。各個体別の計測値は表示のとおりである。

(1)は太く大形の銅地銀張り製である。銀の剥脱と素地の錫銅が著しく保存状態は悪い。特に体部外側は鏽化によって大きくやせ、環内側面に僅かに銀が遺存する程度である。(2)全面素地の錫銅で

表37 第8号墳出土金環計測値一覧

番号	外法径		内法径		直径		中央部 間隙巾	重量	備考
	長径	短径	長径	短径	長径	短径			
1	3.25cm	2.78cm	1.65cm	1.32cm	0.80cm	0.70cm	0.20cm	14.1g	銅地銀張り
2	2.80	2.56	1.65	1.42	0.60	0.52	2.20	10.7	銅環？
3	2.48	2.20	1.78	1.52	0.31	0.30	2.10	4.8	鉄地銅張り
4	2.60	2.31	1.90	1.61	0.50	0.42	0.35	6.7	鉄地銅張り
5	2.75	2.44	1.92	1.60	0.51	0.40	0.10	5.7	銅地銀張り
6	2.70	2.33	1.48	1.30	0.61	0.58	0.25	10.9	銅地銀張り
7	3.26	2.88	1.58	1.30	0.86	0.82	0.22	28.3	銅地銀張り

おおわれ器表も荒れている。単なる銅環かあるいは金銀等の張り付けがあったものかは、現況からは不明である。(3)径 0.3cm の細形の鉄地銅張りである。現況は全面黒色に変色している。(4)鉄地銅張りと思われるが、器表の剥脱が著しく、鉄素地の外周に部分的に銅の線錆が付着する程度の遺存である。(5)(6)はともに銅地銀張り製である。保存度が良好で現在も器表のはば全面で銀色の光沢を保つ。(7)重さ 28.3g と重量感のある太く大形の銅地銀張り製である。器表の一筋で頗る剥脱と素地の線錆が認められるほかは、保存状態は良好で現在も銀色の光沢を保つ。

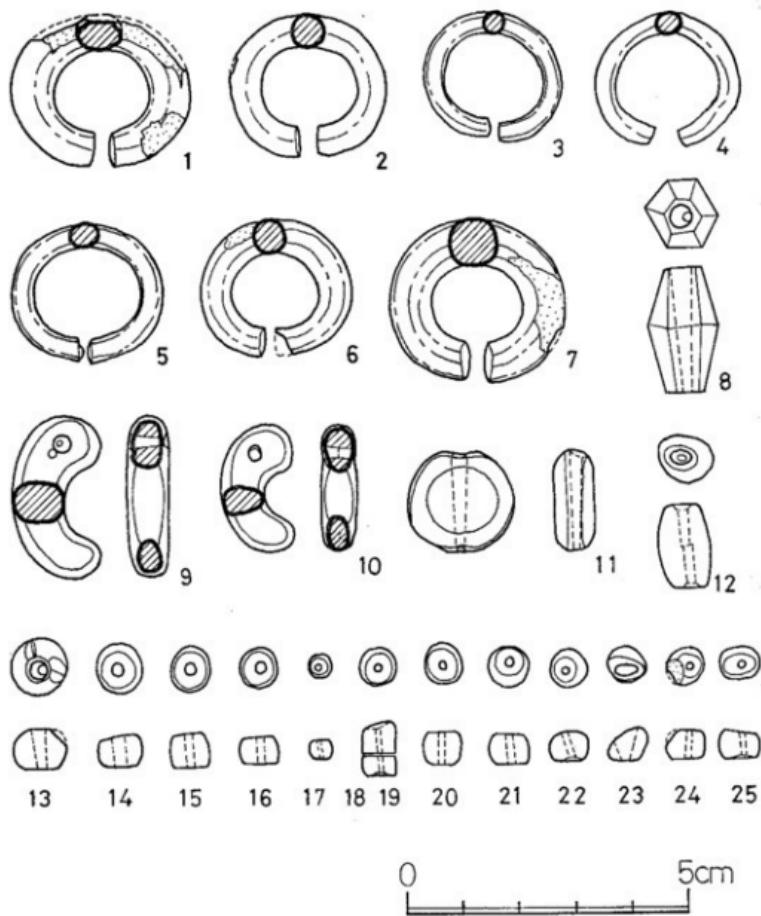
以上の金環を同巧同大を基準として、2個1対の組み合せを考えると、厳密には(1)と(7)の1対しかできない。一步をゆずって類似物を加えて、(5)と(6)あるいは(2)と(6)の組み合せだけである。したがって現存金環による対の組み合せは、單純計算で4組以上、厳密には6組以上となる。

## 2. 玉類(図版58、図版31)

勾玉2、切子玉1、平玉1、木製玉1、ガラス小玉6、土製線玉11の計22の出土である。いずれも玄室内床面に遊離散在していた。種類的にはかなりパライティに富むものの、数量的には石室の規模や被葬者数と対比して貧弱である。疊床の一つ一つをすべて取り除いての精査にもかかわらず、この出土数は器種の豊富さからみても、後の散逸と考えるのが妥当と思われる。

### 勾玉

瑪瑙製および滑石製各1個である。ともに玄室奥壁近くの床面に約37cmの距離をおいて、平玉を含む6個の玉類といっしょに遊離散在していた。(9)は半透明の赤褐色を呈する瑪瑙製で、器高2.8cm、巾1.6cm、頭部厚0.7cm、尾部厚0.65cm、貫孔部上面径0.2cmのやや小形品である。よく研磨されて光沢をはなつ。外側線は滑らかな曲線、内側線は心もちコの字形を示している。紐とおしの貫孔はC字形に置いて上側から穿かれているが、裏面に迎え穿ちの跡がある。紐とおし孔の近くに今一つ、貫孔をかけた上面径0.15cm、深さ約0.1cmの痕跡がある。(10)は乳白色をした滑石製で器高2.15cm、巾1.3cm、頭部厚0.55cm、尾部厚0.5cmの小形品である。やや扁平なつくりで、貫孔部は厚



第58図 岩田第8号墳出土装身具類実測図

さ 0.48cmと薄くなっている。貫孔は一方から穿たれているが、紐ずれによって角がとれ、0.2cm×0.25cmの梢円状となっている。

#### 切子玉

六角錐合の底面を上下に重ねた形の水晶製切子玉(8)である。半透明の乳白色を呈し器高 2.2cm、胴部最大対角線巾 1.4cm、同対面巾 1.35cm、上下面平坦部対角線巾 0.78cm を測る。正六角形でなくして、胴部縁線巾も 0.9cm～0.6cm と開きがあり、稜線もさしてシャープとはいえないが、全体的にみ

て均整はとれている。貫孔は一方からなされ、上面孔径0.42cm、下面孔径0.16cmを測る。

#### 平玉

深緑色をした碧玉製の扁平な平玉である。直径1.9cm、厚さ0.72cmの円板状の側面に、直径となる形に一方から貫孔したものである。円周部にあたる側面に巾0.3cmの稜線と、胴張りの左右両面には径1.3cmの円形平滑面をもつ。よく研磨されて光沢を放つ。

#### 木製玉

黒茶色をした木製の玉である。木質は不明であるが比重は軽い。器高1.42cm、胴部最大巾1.09cm、同最小巾0.85cm、上下平坦面径0.6cm×0.7cmのナツメ形で、縱断面形は太鼓胴形を示すが、ややいびつなつくりである。貫孔は両端からなされ中央部で若干の喰い違いの段差をみせる。貫孔上面径0.2cm～0.28cmを測る。

#### ガラス玉

総数値かに5個である。<sup>(1)</sup>は淡緑色をした丸玉である。胴部は均整のとれた胴張りの球弧状を呈し、上下面に平滑面をもたない。貫孔は整形後に一方からなされ、その径は上面0.3cm、下面0.2cmを測る。<sup>(2)～(7)</sup>は大小の差はあるものの、紺色をした同巧の小玉である。いずれも上下面に平滑面をもち、胴部縦断面は太鼓胴形を呈するものである。貫孔はほぼ中央部に垂直に穿たれ、平均径約0.2cmを測る。<sup>(7)</sup>は青色をした小粒のものであるが、形状および製作手法は前記紺色玉と同巧である。

#### 土製縫玉

表38 第8号墳出土玉類計測値一覧

番号	種類	材質	色調	直徑	厚さ
8	切子玉	水晶	乳白色	1.40cm	2.21cm
11	平玉	碧玉	深緑色	1.90	0.72
12	木製玉	木	黒茶色	1.09	1.42
13	丸玉	ガラス	淡緑色	1.04	0.73
14	小玉	"	淡紺色	0.90	0.54
15	"	"	紺色	0.80	0.61
16	"	"	"	0.70	0.50
17	"	"	青色	0.41	0.30
18	土製縫玉	土	黒茶色	0.66	0.58
19	"	"	"	0.61	0.40
20	"	"	"	0.75	0.59
21	"	"	"	0.72	0.50
22	"	"	"	0.67	0.49
23	"	"	"	0.65	0.50
24	"	"	"	0.75	0.50
25	"	"	"	0.71	0.46
26	"	"	"	0.70	0.49
27	"	"	"	—	0.61

土製練玉（18～25）は計11個体分を検出したが、破損品もあって図示できるのは8個である。粘土をまるめて焼成したつくりである。焼成は軟質で黒茶色を呈しもろい。整形はやや粗雑で、球体に近いものから白形あるいは円筒形と形状も一定せず、歪みをもつものが多い。したがって大きさも径0.61cm～0.75cm、器高0.4cm～0.61cmに分布し、かなりのばらつきを示す。

#### 第4節 鉄器

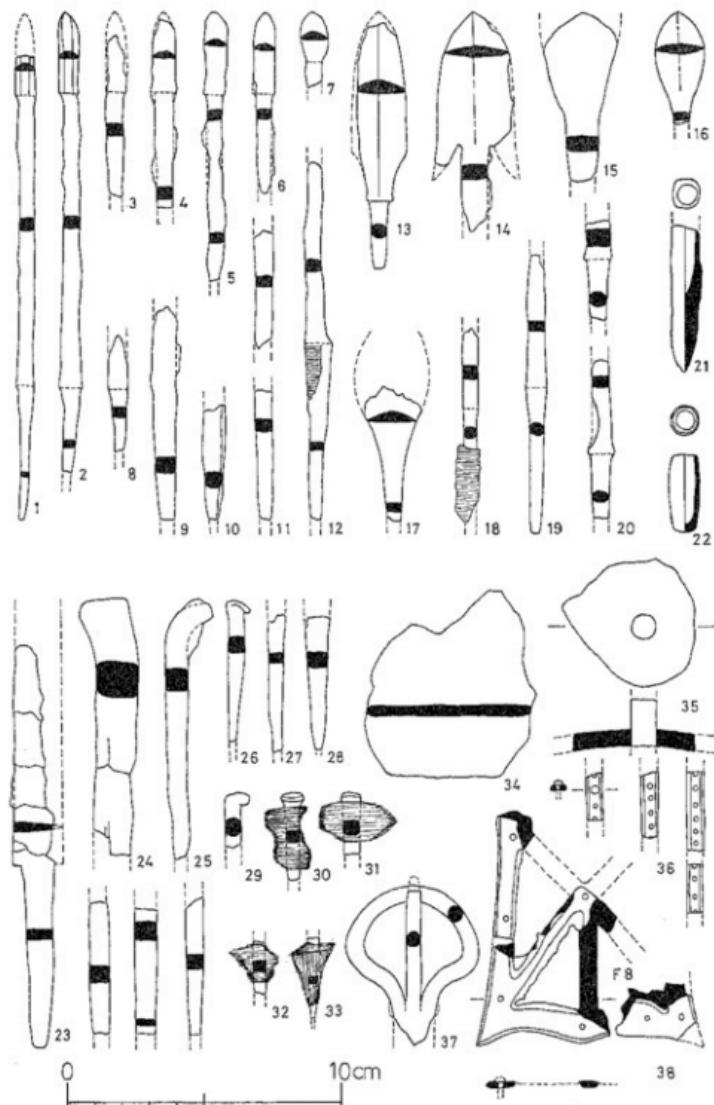
石室内出土の鉄器は、鉄鎌約15本分、刀子1振、杏葉、鉗具等馬具断片若干、鉄釘56本以上、鋸4本以上のほか、使途不明鉄器片少數である。羨道部発見の木棺釘のほかは、ほとんどが玄室内床面に遊離散在していた。いずれも保存状態が悪く、錆化が著しいうえに折損断片となって、個々の詳細も明らかでないものが多い。したがってここでは、出土地点にはあまりこだわらず、器材別にまとめて概述したい。

##### 1. 鉄鎌

完形を保つものは皆無である。鉄鎌片と思われる破片を約60片検出したが、鎌茎と細形鉄釘等の識別が困難で、鎌身と矢柄根部を目安として、類別と個体数を推定したところ、尖根式鉄鎌10本以上、平根式鉄鎌5本以上という結果となった。

尖根式鉄鎌（図59左上、図版35）は、検出した限りではほぼ同一形式のもので、刃巾が狭くて鋭い。推定全長約18cmと細長の鍛造である。刃先は薄くて鋭い抛物線、両側は平行直線を示し、横断面がかまぼこ形の片刃で鎌をもたない。鎌部の長さ2.9cm、闊巾0.8cm、同厚0.25cmを測る。茎部の長さは15.6cmを測るが、鎌と矢柄の間の10.4cmは、横断面が一辺4cmの正方形をした角柱状、矢柄に挿入される根部4.7cmは、そのまま端部へ鋭く細まる角錐形を呈する。矢柄の外表面に固く巻きつけた糸の条痕を残す黒ウルンが膜状となって、矢柄材とともに鎌根部に付着して遺存するもの数例が認められた。

平根式鉄鎌（図59右上）は5例を検出したが、いずれも異なった形態を示す。形式の判別ができる3例について概述したい。I3は柳葉式鉄鎌である。切先と刃部の一部を欠損するが、ほぼ全形をとどめている。現存長は8.8cmを測るが、原形を推定すると全長9.2cm、鎌部長6.7cm、茎長2.5cmとなり、返刺や麓被をもたない短茎である。鎌部の片面は平坦で横断面は低二等辺三角形を呈し、鎌を片面にのみもつ片刃のつくりである。鎌部最大巾2.0cm、闊部巾1.0cm、張りだし部での厚さ0.5cmを測る。茎は断面円形を呈し端部になるにつれてやや細まる形式である。茎中央部での径は0.6cmを測る。I4は巾広の両返刺を有する鉄鎌である。茎部は欠損して麓被と鎌部の大要しか明らかでない。現存全長7.9cm、鎌部長4.8cm、麓被長2.7cmを測る。返刺の先端を欠損するため、最大巾は計測できないが、推定3.2cm程度と思われる。鎌部断面は低菱形を呈し、両面に弱い筋線をもつ。麓被部は横断面0.9cm×0.55cmの長方形を呈する平角のつくりである。I5は梢円形の鎌部に短茎のつく形式であるが、錆化が著しく鎌の有無等明確でない。現存長3.1cm、最大巾1.8cm、同厚さ0.3cmを測る。



第59図 岩田第8号墳出土鉄器類実測図

## 2. 刀子 (図59, 図版35)

玄室の陶棺内に遊離していた刀子片である。銹化欠損が著しく現存長14.3cmを測るが、柄のほかは原形不明である。刀部の断面が二等辺三角形を呈す鍛造であることから、刀子と推定できる程度である。柄の長さ6.6cm, 間に近い断面が 1.1cm × 0.4cm の長方形をして平鉄で、端になるにつれて巾と厚さが狭まるが、末端部はまるくおさめている。

## 3. 馬具 (図59, 図版35)

玄室奥壁近くの床面を中心に、馬具片と推察される小断片が遊離散在していた。鐘形杏葉片12片、鞍の縁金具7片、鞍具1がそれである。

鐘形杏葉はいずれも小断片であったが、類似する岩田第14号墳出土の杏葉を参考に、比較的大きい断片を合成して、第59図のように推定復元してみた。底辺に波形2つを形づくる鐘形で、巾約0.6cmの帯状に、四隅をつなぐ対角線と、その交点と底辺中央を結ぶ部分を格子状に残し、他を三角形状の透しとしたつくりと思われる。杏葉の表面は全面金で覆われていたらしく、帶状格子および縁部の表面やその周辺に、膜状に広がる金が遺存している。さらにその上から頭のまるい飾り紙が打たれているが、その配列の規則性は現状からは不詳である。この杏葉の台地となる平鉄は確認できなかった。図59-1に示した不定形な鉄板があることは可能性があるかも知れないが、現況は銹化も著しく折損品であるため確証はない。

鞍金具園と思われるものは、巾約0.5cm、厚さ約0.15cm～0.20cmの鉄板に金を貼り、その中央線上に一列に約0.5cmの間隔で、頭のまるい飾り紙を打ったもので、直線的なものと若干弧形をみせるものがある。紙の頭は直径約0.2cm、高さ約0.15cm程度の断面が半円形を呈するもので、裏側に約0.3cmほど突出るものもある。この鉄片は7片で総延長約13cmの検出である。

鞍具頭は、断面が円形の棒鉄をいちぢく形に曲げたつくりで、最大巾3.9cm、現存長5.7cm、留棒の長さは約4.6cm、太さはいずれの部位も径0.6cmを測る。

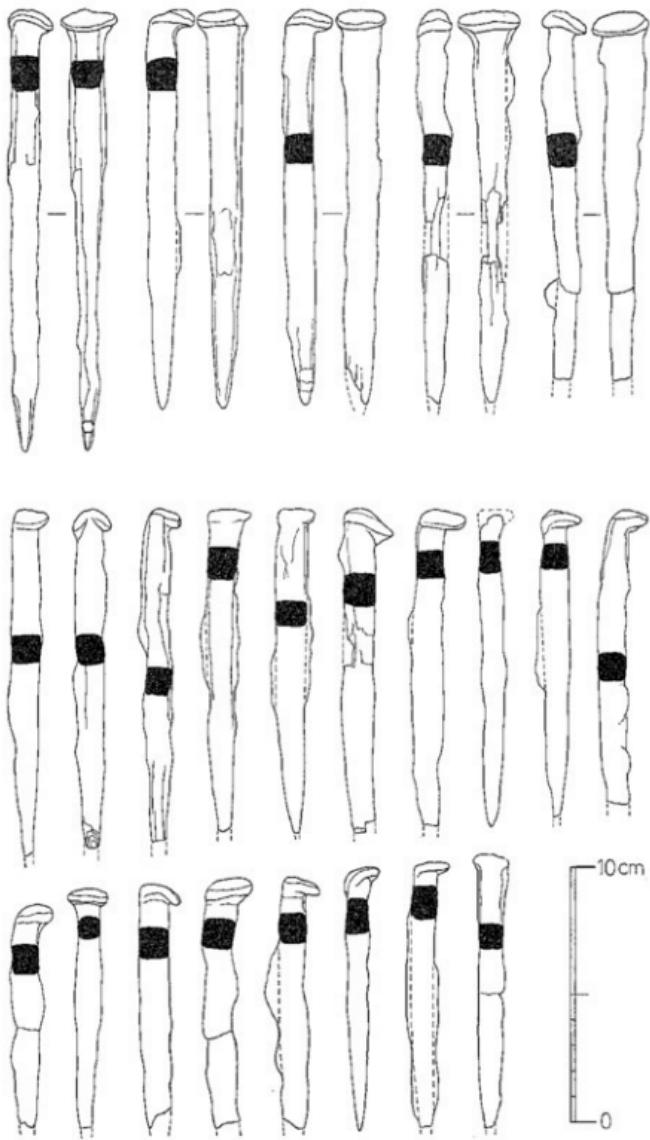
以上のごとく馬具としては僅かしか検出できなかったが、飾り金具を施した盛装用馬具を、少なくとも一式供獻していたことが想定できるのである。

## 4. 石突状鉄器 (図59)

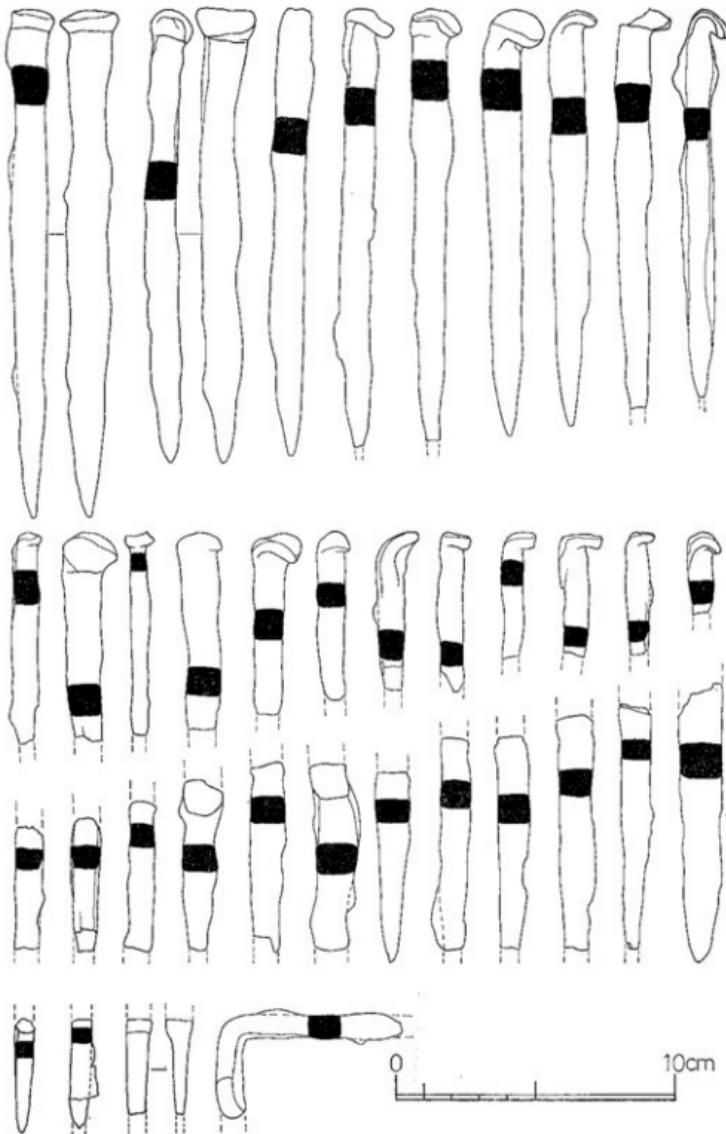
石突状の小鉄器2点である。図は現存長5.2cm、径1.1cmの先端が尖った円筒形で、一方の小口に径0.7cm、深さ2.4cmの円錐状の袋柄孔がつけられている。図は長さ2.7cm、径1.1cmの円筒形で、一方の小口に径0.7cm、深さ2.5cmの突合せ袋柄孔、一方の小口は円形平坦面となっている。ともに円柱状をした細い柄を挿入したものと考えられるが、外法径および孔部径が等しく、図の先端が尖り突くという機能を果すとすれば、両者は同一柄の両端に着装された1セットとも考えられる。

## 5. 鉄釘 (図60・61, 図版34)

完形品も含めて約140片を検出したが、接合復元および頭部を目安として個体数を推定すると、



第60図 岩田 第8号墳 美道部木椎釘実測図



第61図 岩田第8号墳出土釘・鍔実測図

表39 第8号墳出土鉄釘計測値一覧

(単位cm)

番号	長さ	巾		番号	長さ	巾		番号	長さ	巾	
		縦	横			縦	横			縦	横
1	17.3	1.4	1.2	20	(9.6)	1.2	1.0	39	(6.0)	0.9	1.0
2	15.6	1.3	1.2	21	10.4	1.4	0.9	40	(5.7)	1.1	1.0
3	15.6	1.2	1.1	22	(10.4)	1.3	1.0	41	(5.7)	0.9	0.9
4	(15.4)	1.2	1.1	23	(10.3)	1.0	1.0	42	(5.4)	1.0	0.8
5	(14.4)	1.3	1.2	24	(3.9)	0.8	0.7	43	(4.5)	0.7	0.9
6	13.8	1.1	1.2	25	18.2	1.4	1.3	44	(4.4)	0.8	0.8
7	(13.3)	1.3	1.15	26	16.1	1.4	1.2	45	(2.9)	0.8	0.9
8	(13.1)	1.0	1.0	27	15.9	1.3	1.3	46	9.0	1.0	0.9
9	(12.6)	1.3	1.2	28	(15.7)	1.3	1.1	47	(5.0)	0.7	0.7
10	12.8	1.2	1.0	29	(14.4)	1.4	1.3	48	(4.3)	0.7	0.7
11	(12.7)	1.3	1.3	30	15.2	1.5	1.4	49	(7.1)	0.6	0.55
12	(12.4)	1.1	1.2	31	14.8	1.3	1.3	50	(1.9)	0.7	0.6
13	12.4	0.8	1.3	32	(14.2)	1.4	1.3	51	(2.1)	0.7	0.5
14	(12.0)	1.1	1.0	33	13.9	1.2	1.0	52	2.3	0.6	0.55
15	(12.6)	1.1	1.1	34	(7.5)	1.2	0.9	53	(2.4)	0.5	0.45
16	(8.7)	1.1	1.2	35	(7.5)	1.1	1.2	54	3.1	0.6	0.5
17	(9.4)	0.9	0.9	36	(7.1)	0.6	0.5	55	(2.2)	0.6	0.6
18	(9.7)	1.3	1.2	37	(7.0)	1.0	1.2	56	2.9	0.5	0.5
19	(9.8)	1.2	1.3	38	(6.5)	1.1	1.0				

( ) 内数字は現存部計測値である。

少くとも65本以上となる。いずれも横断面が正方形ないし正方形に近い長方形を呈し、頭部を叩いて傘状に拡張して一方へ折り曲げた、鍛造によるつくりである。第60図に示した羨道部木棺に用いられた釘のように、鉄道犬釘状の長大なものが圧倒的に多いが、第59図のように長さ 6 cm ~ 8 cm、巾 0.6 cm 程度の細身のものや、同図の如く木質の残存付着の著しい、長さ 4 cm 前後巾 0.5程度の小形の釘も若干含まれる。類形別に個体数を示すと、長大形38本、太短形6本、細身形4本、小形8本となる。

長大な釘も折損品が多く精密な計測はできないが、長さ 13 cm ~ 18 cm、太さ 0.9 cm ~ 1.5 cm とかなりのばらつきをみせ一定ではない。羨道部木棺に使用された24本から考えて、第62図の長大釘もおそらく木棺用と考えられる。太短形および細身形もかなり計測値にばらつきが見られるが、その形状

から推しておそらく木棺釘と考えられる。ただ木質残痕の多い小形釘は、長さ3cm～4cmであり、また当石室内に馬具の鞍が供献されていること等から考えて、あるいは木棺以外の木製品に使われていた可能性も推察される。

#### 8. 錐(図62)

釘とともに鏡片も4個体分程度検出されたが、いずれも折損品で詳細については明らかでない。打ち込み部が釘にくらべて、巾0.8cmに対して厚さ0.5cmと扁平なつくりとなり、横目に走る木質痕が付着するもの多かった。

## 第6章 古墳の年代

本古墳の築造年代および追葬期間等については、本古墳がすでに石材採掘等によって大破され、石室床面も追葬の過程での擾乱や、部分的には後世の擾乱もあって明確にはできなかった。

本古墳は丘陵傾斜面を利用して石室規模に合せた溝状の掘り方を設け、その中に自然転石を用いた右袖構穴式石室を、半地下式に構築していることや石積みの手法、また出土した須恵器すがべて6世紀後半を盛期とするものであることなどから、本古墳の築成時期は早くも6世紀中葉、おそらくとも6世紀後半の築造と考えられる。

本古墳に葬られた被葬者数ならびにその期間については、第54図において第2号棺とした陶棺が、その形態からみて陶棺としてはかなり後世のものであり、出土遺物の多くは物理的にみても、また編年鑑からみても、陶棺と同時またはそれ以前の供獻物であることから、盛装用馬具の副葬と合せて、陶棺に先行する被葬者があったことを充分予想されるのである。また3号棺は陶棺の一部を棺台に転用、4号棺と5号棺は躰床面より約15cm上位に棺床を置き、その下方埋土中に遺物を含むことから、石室内を整理埋め戻した後の埋葬と考えられる。したがって3号棺～5号棺は少くとも陶棺の埋葬よりも後に追葬されたものである。

羨道部にあった5号棺は鉄釘24本が使用されていたが、その他の鉄釘の出土状況および分類から5号棺の他に少くとも3木棺の存在が考えられ、3・4号棺をあてはめて、さらにもう1棺の存在が想定される。また4号棺および5号棺は、発掘時に床部はほぼ原況を保って検出されたが、金環等の装身具を含めて、直接的な棺内副葬品を伴なわなかった。本古墳の金環は7個検出され、左右対称とすれば5組、少くとも4組分は確定である。1被葬者1対と仮定すれば、少くとも4号棺5号棺の他に4被葬者計6被葬者以上となる。そしてまた、本古墳追葬の過程で終末期には、それに納められる被葬者の性格にもよるであろうが、総体的には棺内はもちろん、被葬者個人に対する副葬品が、貧弱になるかまたは全くなされなくなるようである。

以上のことから本古墳への被葬者数は、私達の検出した棺の痕跡数4棺よりももっと多くの人、少くとも6～7棺以上の人の追葬が考えられ、また陶棺の後から葬られた3人以上の埋葬から、本古墳への追葬が行なわれた年代は、6世紀末ないし7世紀初頭ぐらいまで継続したものと推察されるのである。

## 第7章 まとめ

1. 本古墳は、緩やかに下降する丘陵尾根支脈稜線上に築造された、右袖横穴式石室を内部主体とする円墳である。
2. すでに石材を採取する目的で盜掘され、天井石のすべてと側壁上段部を持ち去られていて、墳丘もほとんど遺存しなかったが、推定長径約30m、標高1.25m～2.8m程度と考えられる。
3. 石室は尾根走向に直交して掘り込まれた長大な掘り方内に、自然転石を利用して半地下式に構築されている。破壊されている割りには、残存石室および床面の保存は良好で、ほぼ原況を保っていた。
4. 床面は玄室内だけに円礫を用いた砾床となっている。現存石室全長10.4m、玄室長5.0m、羨道長5.4m、玄室奥壁部巾2.0m、同袖部巾1.77m、羨道部巾1.25m、玄室内法高約1.8m、石室長軸中心線方位は北25度東を示し、ほぼ南南西に開口する。
5. 床部は遺物が搅乱散在の状況で検出されたが、奥壁寄りの一部と羨道南半を除いては、本古墳追葬過程での二次的搅乱と推定され、原況に近い形状を遺存するものと思われる。
6. 埋葬棺は須恵質陶棺1のほか、第54図に示したごとく、3木棺が検出された。なかでも陶棺は脚をもたず、平蓋3枚を並べる形式であること、羨道部木棺は釘が直立した状態で検出され、棺の構造を知る手がかりを得るなど注目された。
7. 副葬遺物は、須恵質土器をはじめ、盛装用馬具一式、装身具等、種類的にはかなり豊富であるが、欠損散失が多く数的には貧弱である。本古墳葬送の過程での墳外へのかきだし、および空掘時の搅乱散逸が予想される。
8. 本古墳の築成年代は、石室の構造および伴出遺物の編年観から、6世紀中葉または後半の時期と推定される。また被葬者数は調査によって棺が確認できたのは4体であるが、遺物のあり方や金環等の数からみて、少くとも6～7棺以上の埋葬が考えられ、6世紀末ないしは7世紀初頭までくらい追葬が行なわれたと考えられる。
9. 本古墳発掘調査において特に注目されたことは、先に葬られた被葬者の陶棺を打ち壊して、後の被葬者の棺台に転用していることである。木棺等の腐朽したものを取り片づけて、室内を整備し直して、次の埋葬を行なうことからすれば、同様のことかも知れないが、被葬者に対する思考や態度の一端がうかがえるものとして興味が深い。